

# 商品語の〈場〉は人間語の世界とどのように異なっているか(1)

——『資本論』冒頭商品論の構造と内容——

井 上 康  
崎 山 政 毅

はじめに

- 〈Ⅰ〉人間語の世界に対する限りでの商品語の〈場〉
- 〈Ⅱ〉『資本論』初版と第二版の位相（以上、本号）
- 〈Ⅲ〉人間語による分析世界としての『資本論』第二版第1章第1節および初版・フランス語版当該部分の比較対照による解説（以下、つづく）
  - (i) 〈富—価値—商品〉というトリアーデ
  - (ii) 『資本論』初版・第二版・フランス語版の対照
  - (iii) パラグラフ①および②の検討
  - (iv) パラグラフ③の検討
  - (v) パラグラフ④の検討
  - (vi) パラグラフ⑤の検討
  - (vii) 「共通なもの」= 価値、「第三のもの」= 商品に表わされた抽象的人間労働
  - (viii) 初版のパラグラフ⑥～⑨の検討
  - (ix) 第二版・フランス語版のパラグラフ⑥、⑦の検討
  - (x) 第二版・フランス語版のパラグラフ⑧の検討
  - (xi) 価値および価値実体の概念の一応の定立

〈Ⅳ〉商品語の〈場〉——価値形態

- (i) 商品をつくる労働の特殊歴史的規定性について
- (ii) 初版本文、その付録、および第二版のそれぞれの価値形態論
- (iii) 価値表現において諸商品は何をどんな風に語るか
- (iv) 〈自然的規定性の抽象化〉過程に関して
- (v) 〈私的労働の社会化〉過程に関して
- (vi) 価値の実体と等価形態の謎性
- (vii) 初版本文価値形態論の形態Ⅱに関して
- (viii) 初版本文価値形態論の形態Ⅲに関して
- (ix) 初版本文価値形態論の形態Ⅳに関して
- 〈Ⅴ〉価値形態論と交換過程論との関係について
  - (i) 価値形態論に対する交換過程論
  - (ii) なぜ、第二版は初版本文の形態Ⅳを捨て貨幣形態を形態Ⅳとしたのか
- 〈Ⅵ〉〈富—価値—商品〉への根源的批判について  
おわりに

はじめに

マルクス『資本論』について、とりわけその冒頭の商品論に関しては、過去歴大な議論と論争が積み重ねられてきた。日本においてはとくにその点が目立っており、きわめて細部にわたる検討・議論・論争が続けられてきた。だがその成果は、と言うと必ずしも豊かなものがもたらされたとは言えない。その最大の原因は、マルクスが言う“商品語”<sup>1)</sup> というものに対して真正面から取り組んでこなかったことにある。およそ比喩としてしか商品語というものについて捉えられてはこなかったのである<sup>2)</sup>。それゆえに冒頭商品論においてマルクスがいかに商品語の〈場〉と格闘したのかをきちんと捉えることができなかつたのである。マルクスは商品語ということを決して単なる比喩として述べたのではない。資本主義的生産様式が支配する諸社会においては、主体は他でもなく商品

(〈商品—貨幣—資本〉という三形態への相互転化を遂げつつ運動するもの)である。生きた人間たちそれ自身は決して主体ではない。主体として生きた人間は現われない。この社会の経済過程の担い手、この過程の中で自らを一層発展したものとして開き出すもの、過程に内在し過程を内的展開として現出させる実質・実有、——これは商品であってそれ以外ではない。商品はヘーゲルに倣って言えば理念としての存在、すなわち、概念と実在との統一であって、過程の中で、主体として自ら判断し推論するものである。そうである以上、商品が自ら「言語」をもち、商品相互の「意思疎通」をはかっていると考えることは、荒唐無稽ではなくてむしろ自然である。商品が、過程の中で構成し成就する諸事象が、ある「言語」——商品語——によってなされると考えることは自然である。だがもちろん、その「言語」=商品語は、あくまで人間語とは決定的に違っている。

マルクスは『資本論』においてこの商品語が交わされる〈場〉が一体何であるのかを追究し、すさまじい知的格闘を演じたと言っても過言ではない<sup>3)</sup>。とりわけ冒頭商品論においてその闘いはもっとも激しいものとしてあった。これを捉えることなくして『資本論』の理解はない。〈商品—商品世界〉の分析と把握は、人間語によって商品語の〈場〉とわたり合うことである。この点から『資本論』第二版にそくして言えば、第1節およびその補節としてある第2節においてマルクスは、パスカルの言う「幾何学的精神」を大いに発揮し駆使して商品进行分析し、商品に関する諸概念を別括し定立する、つまり人間語の世界の論理的概念的側面を緊張させ、分析的思惟の力を駆使し、これらの概念を定立する。この過程は徹底して人間語による論理的・分析的な世界のものである。これに対して第3節およびその補節としての第4節においては一転して商品語の〈場〉を相手とする。諸商品自身の運動と関係において商品語で「語られる」内容をマルクスは「聴き取り」、それを人間語に「翻訳」し註釈を加える。つまり第1節・第2節で定立された諸概念が単なる思惟の内にある観念像としてではなく、商品世界において諸商品自体の関係・運動によって現実に定立される過程を描き出す。ここでは、再度パスカルの言葉を借りれば、「幾何学的精神」ではなく、むしろ「繊細な精神」が重要となっている<sup>4)</sup>。かくて、「第1章 商品」は《第1節・第2節=人間語による分析世界》対《第3節・第4節=商品語の〈場〉の弁証法》という構造を持っているのだ。この対照的な構造について、マルクスは『資本論』初版「第1章(1)への付録 価値形態」の中で、次のように述べている。

もし私が、商品としてはリンネルは使用価値にして交換価値である、と言うならば、それは商品の性質について私が分析によって得た判断である。これに反して、20エレのリンネル=1着の上着または、20エレのリンネルは1着の上着に値する、という表現においては、リンネルそのものが、自分が(1)使用価値(リンネル)であり、(2)それとは区別される交換価値(上着と同じもの)であり、(3)これらの二つの別々なものの統一、つまり商品である、ということ語っているのである。<sup>5)</sup>

明らかに、一方の「私[すなわちマルクス(に代表される人間)]が分析によって得た判断」の世界と他方の「リンネルそのものが[...]語っている」商品語の〈場〉とが明確に対比されている。前者は人間の思惟が言語を用いて分析し抽象化し概念を立て範疇化し推論し判断する世界=歴史的・社会的空間、すなわち人間語の世界であるのに対して、後者は諸商品自体が、その運動それ自体が開き出し表現し実現する〈場〉、すなわち商品語の〈場〉なのである。このようにまったく異質の二

つの言葉が投げ立つところを、マルクスは対照させている。しかもこうした異質の二つの世界を対照させることを通じてこそ、そうすることによってはじめて、商品が何であるのかが明らかになるとマルクスは語っているのだ。いささか奇妙な言い方になるが、“きわめて精緻な荒業”をマルクスは強いられたとも言えよう。『資本論』はその結実である。まさにそうであるがゆえに、叙述上きわめて微妙な緊張と困難とをマルクスは背負い込むことになった。困難は次の事情にもっとも顕著に現われている。第1節・第2節においてマルクスは、価値、価値実体すなわち商品に表わされた抽象的人間労働、といった商品に関する諸概念を別決する。だが、実にこれらの概念は、この限りでは決して概念として確定されず、価値形態論における論述をまっしてはじめて確定されるものなのである。つまり、第1節・第2節の議論にある限りでは、価値や価値実体といった諸概念は十全な概念として定立することができないのであり、それにもかかわらず、推論過程から概念指定することが不可避・不可欠なものとなるのである。それゆえ、人間語による叙述は錯綜したものにならざるを得ず、従来から指摘されている価値形態論の難解さにとどまらず冒頭商品論全体の異様な難解さが結果することになった。後に詳細に検討するが、現に『資本論』冒頭商品論の叙述にはいくつかの叙述上の「混乱」がもたらされている。

本稿は、商品語に注目し、そこから『資本論』冒頭商品論の——ちなみに誤解が生じるのを防ぐため一言しておく、われわれが『資本論』冒頭商品論というのは、初版では第1章の「(1) 商品」および「第1章 (1) への付録 価値形態」において、第二版では「第1章 商品」において展開された内容を指している——の構造と内容を照射し、ひいてはマルクスさえも避け得なかった叙述上の「混乱」を指摘しその何たるかを明らかにしようとするものである。

## 〈I〉人間語の世界に対する限りでの商品語の〈場〉

ここではあらかじめ商品語の〈場〉というものについて、人間語の世界が有する諸特徴との対比において、ごく簡単に述べておきたい。

### (i)

人間の言語世界の特徴としてまず次の二つがあげられる。

- ①時間的にも空間的にも線状性＝線形性をなすこと。
- ②対象世界（－自然・社会）に対して「縁付ける (delineate)」あるいは「分節化する (articulate)」ものであること<sup>6)</sup>。

説明しよう。

#### ①について。

人間の言語世界は話し言葉にしても書き言葉にしても、線状的性質をもち、この限界を免れることはできない。フェルディナン・ド・ソシュールはこの点について次のように述べている。

言語学で記号の物質的手段を考えてみると、決定的なのはそれが人間の声であり、発声器官の産物だということだろうか。否。けれども、ここに、まだ誰も充分に引きだしたことがない音的素材の重要な性格がひとつある。それは、音連鎖として現出するという性格だ。これは、た

だちに、ある時間的な性格を、ひとつの次元しか持たないという性格を引きおこす。それを線状的性格とってみてもいい。言葉の連鎖は、いやおうなく一本の線となって私たちに現われる。〔…〕さまざまな質の差異（母音間の、あるいはアクセントの差異）は、ただ継起的にのみ現われるにいたる。〔…〕すべては一本の線を成す〔以下略〕<sup>7)</sup>

ここでソシュールは、自らの立場上、話し言葉に限定して述べているが、この「線状的性格」は話し言葉に限られたことではない。書き言葉もまた線状的性格をまぬかれない。むしろ、それは言葉の線状的性格＝線形性をより際立たせる。われわれ人間は、いくつもの言葉を同時並行的に、話したり・聴いたり・書いたり・読んだりすることはできない。たった二つでさえ、基本的には不可能である。図式化した図表、文章等を一挙に視覚的にとらえたりすることは可能だが、すなわち、パターン認識ということは可能だが、しかし、この場合でさえパターン認識されたものを言語化しなければならないときには、つまりそれを今一度対象化しなければならないときには（その内容を分析したり、検討したり、あるいはそれを誰かに伝えたり等々する場合）、それを言葉化し、線状的に並べ替えるなければならない。人間はそうする以外にないのである。このように人間語の世界は時間的にも空間的にも線状性＝線形性を一特徴とする。

②について。

①の条件の下で、人間の言語世界には語があり句があり文があり、つまり語と、語の連鎖がある。これは人間語世界が、対象世界（－自然・社会）を「縁付ける」あるいは「分節化する」ということを物語っている。つまり、人間の言語は、対象世界の不断の運動に停止と切断を入れ、それをいわば静的なものとして言語化・概念化するのである。かくして人間語の世界は否応なく、1、2、3、…と数えていくことのできる世界、しかもその有限な世界、つまり可算有限な世界を形づくる。つまり人間（思惟）は、対象世界（－自然・社会）に対して、人間語世界という可算有限世界でもって対し、絶えず運動する対象世界を分析し分節し推論し判断し、概念・範疇をたて、対象世界に停止と切断を入れ、認識作業を遂行する。かくして逆にこのことを対象世界の方から言えば、対象世界（－自然・社会）は人間の言語世界が可算有限であるということの対極として、非可算無限世界をなすと取り敢えず措定することができる。

このような人間語の世界の特質、その絶対的な限界（Grenze）について、ヘーゲルは『哲学史講義』で、ゼノンについて次のように指摘している。

ゼノンは空間と時間の限界、分割、或いは断絶の契機が、ただ単独で十分に妥当する規定だとする。そこから矛盾が生ずるのである。思惟を克服することは困難である。というのは、困難を作るものは常に思惟にほかならないからである。思惟こそ、対象の結合している諸契機の現実の中において、それらを強いて互いに分離し、そうして困難を作り出すものなのである。原罪をもたらしたものは思惟である。人間は善と悪とを認識する知恵の木の実を食べたからである。けれども、この罪を癒やすものもまた思惟なのである。<sup>8)</sup>

対象の内で結合し運動している諸契機を「強いて互いに分離」する思惟、つまり対象世界の運動を停止させ、縁付け・分節化する思惟、こうして自ら「困難を作り出す」思惟、——人間の思惟が言語と不可分に結びついたものである以上、このことは絶対に避けられない。対象の内でも有機的に



結合し（実はこの表現自体が致命的に可算化であり、対象を粗大化し、生気を失わせ、打ち砕くものである）、  
 不断に運動しているもの総体を、そのまま・丸ごととらえることは、人間の思惟には不可能なのである。

## (ii)

だがしかし、人間の言語世界は対象世界（-自然・社会）を単に縁付け・分節化するだけの平板な可算有限世界をなすわけではない。それはあくまで自然としての人間が生み出す世界、すなわち自然に支えられた世界である。だから人間の言語世界を一つのモデルとして描き出せば、一方に論理的概念的側面の極、他方に超論理的詩的側面の極という二つの極をもち、それら二つの極によって張られた宇宙をなすものとみなすことができる。しかも後者すなわち超論理的詩的側面の極に設えられた、対象世界（-自然・社会）に向けて開かれた〈口〉を通じて対象世界の非可算無限性を〈呼吸〉し、そのことによってはじめて生きたものとなり不断により豊かな、つまりより一層対象世界にそくしたものとなる世界であると考えられる<sup>9)</sup>。これは人間の言語世界全体についてだけ言えることではなく、個々の言葉・語・記号、諸々の概念等についてもそれぞれこうした構造と内的運動をもつものであると考えられるのである。更に言えば、普通の言語の世界だけではなく、人間が対象世界との間に交わす諸々の表現形態、すなわち音楽、絵画、舞踏・舞踊、演劇、数学等々をそれぞれ特有な言語世界とみなせば、それらもまた上に述べたような構造をもって生きたものとして運動していると考えられ得る。それゆえ、先に述べた人間の言語世界の特徴をなす①、②の二つは、非可算無限性をもつ対象世界への〈呼吸〉によって支えられて内的に運動する言語宇宙を、一方の論理的概念的側面の極から捉えたときの在り様に他ならない。

## (iii)

以上のわれわれの言語観からすれば、分析哲学的な言語観とそれに対する違和や批判として位置づけられる言語観とを区分しうる。前者は、フレーゲ、ラッセル、クリプキ、クワイン等の言明や著作に表われており、後者は、ソシュール、カントール、ルベーグ等のそれに表われている。前者の言語観は、上に述べた言語宇宙モデルから言えば、対象世界との界面に成り立つ超論理的詩的側面の極、とりわけそこにある〈口〉とその〈呼吸〉に無自覚なものであり、それゆえ一方の論理的概念的側面の極に偏したものであるとすることができる。この言語観によれば、対象世界もまた可算な世界をなすと考えられているように思われるのであり、つまり、可算有限な人間の言語世界と非可算無限な対象世界との間の絶対に相対化され得ない隔絶に無自覚であると思われる。

今述べた分析哲学派言語観の精神様式、すなわち、概念化・可算化・分節化に対する無批判的な思い入れについて、バートランド・ラッセルの『数理哲学入門 *Introduction to Mathematical Philosophy*』（1920年、第二版）の主張に即して少し述べておく。

バートランド・ラッセルは「解析幾何学をも含めたすべての伝統的な純粋数学は自然数論に還元される」<sup>10)</sup>として自然数論を厳密に確立しようとする。彼は自然数を公理体系化したジュゼッペ・ペアノの公理系を取り上げ、その五つの公理が三つの概念：0、数、後者によって構成されているとし、その極度の抽象性、例えば「0」が必ずしも普通の意味での0である必要がなく、最初の数という意味以上ではないこと、それゆえ、きちんと定義された数列  $\{x_n\}$  ( $n \geq 0$ ) はすべてペアノの公理を満たし、また逆にペアノの公理を満たすものはすべて数列であることに不満を表明して言う。

この0、数、後者という概念がペアノの五つの公理だけでは定義できないで、むしろそれらと独立に意味づけられるべきものであるということは、非常に重要なことである。吾々の数は単に数学の公式を満足するだけでなく、日常の物にも正しく使いうるようなものであって欲しい。すなわち人間は十本の指、二つの眼、一つの鼻をもつと言いうるように数を定義したい。〔…〕吾々は0や数や後者などが、吾々の指や眼や鼻の数を表すために使われるようなものであることを希望する。〔…〕しかしペアノの方法では、数が上の要求にそうように使われているかどうかは明かでない。<sup>11)</sup>

数は通常の事物を数えるのに役立つものであって欲しい。従って吾々の数は単に形式的な性質を満足するものであるばかりでなく、それは一定の意味をもっていなければならない。この一定の意味こそ算術の論理的基礎づけによって始めて与えられるものである。<sup>12)</sup>

このラッセルの言明は、数学を狭隘な「学」のイメージに閉じ込めることなく人々の生活世界へ向けて開かれたものにする、と一般には受け取られるかもしれない。だが果してそうか？問題はラッセルの言う「意味」である。そこには彼独特の「意味」が込められている。彼は次のように述べている。論理学は命題を扱うが、「命題はそれ自身真であるか偽であるかで、それ以外の場合は考えられ<sup>13)</sup>ず、従って「命題の分析の場合に、非実在的な何ものをも許すべきではないと主張しなければならない」<sup>14)</sup>、つまり、ハムレットや「一本角の獣、黄金の山、円い四角などのような擬似対象」<sup>15)</sup>を命題分析に混入させてはならない、と。彼は総括的に言う。

私は動物学が許さないような一本角の獣の存在を、論理学でも許してはならないと主張したい。何となれば論理学は動物学より、より抽象的な、より一般的な性質を対象としているとはいえ、動物学と同じように実在の世界をありのままに取扱うものであるからである。<sup>16)</sup>

この主張に見られる強い調子にはいささか奇異な感じを抱かざるを得ないが、まさしくここにラッセルの言語観とその精神様式が集約的に現われている。それはどういうことなのか。

ラッセルは彼の「実在世界」(これはわれわれの言う対象世界とは明らかに異なっているが)を可算な世界と考え、その各々の要素から論理の世界の諸要素への単一の対応<sup>17)</sup>があると考えている。その対応の中には未だ発見されていない対応があるとして、それ(予見された未発見の対応)を発見することが論理学の課題であると考えているように見える。つまり、「実在世界」はそれ自体が論理的であり、それゆえ論理学が自らを厳密に創り上げること、すなわち、いま述べた対応を見出すことが「実在世界」を捉えることであり、また論理(学)によって「実在世界」を説くことができる(「日常のものにも正しく使いうる」)こととなると考えているのである。こうした対応関係が創りだされることが彼の言う「意味」が与えられるということなのだ。非実在を論理学に持ち込むことに強い拒否を示すのはこのためにほかならない。このような限定によって初めて、論理学は純粹な形式に還元されると彼は主張するのである<sup>18)</sup>。彼にとって論理学はあくまでそして徹底して「実在」の学なのである。だがこうしたラッセルの思考はこの現実世界にあっては転倒している。彼のペアノの公理への不満とあるべきものと彼が考える数の概念への思いは空回りせざるをえないものである。なぜそうではないかについては彼の数概念の規定を検討した上で述べることにする。

ラッセルは数について「数とはある集合の数である」<sup>19)</sup>と定義し、ここから「0とは空集合だけを要素としている集合の」<sup>20)</sup>数だと概念「数0」を導く。ところがこの空集合に関してラッセルは「一つも要素を含まない集合」<sup>21)</sup>と定義している。つまり数1を用いている。たとえ「一つも」という言葉を用いない「要素を含まない集合」と定義したとしても数1を用いていることに変わりはない。なぜなら「要素」が前提されそれが否定されることによって定義がなされているからである。否定されるものとしての存在=有である要素は数を問題にしている以上、厳密に論理的に突き詰めれば数1以外にあり得ないからである。

このようにラッセルは、数1を用いて数0を導き、その上で「後者」を定義し、これによって数1を導こうとする。すなわち循環論である。ところがこの循環論は見かけであって、じつはトートロジーなのである。つまり、数1によって数1を「導く」のである。「後者」についてラッセルは次のように定義している。

今任意の自然数  $n$  に対して、 $n$  個の要素をもつ一つの集合  $a$  と、 $a$  の中に含まれない一つの項  $x$  とをとれ。 $a$  に  $x$  を加えた集合は丁度  $n + 1$  個の要素を含む。従って次の定義を下すことができる。／集合  $a$  の要素の数の後者とは、 $a$  の要素と  $a$  に属していない任意の項  $x$  とからなる集合の要素の数のことである。<sup>22)</sup>

「一つの集合」、「一つの項」、「 $n + 1$  個の要素」という具合に数「1」を用いている。これは単に説明だからそれ=数1を使ったというようなものではなく、「項  $x$ 」自体が数1以外ではないからである。つまり「1個の  $x$ 」ということだからである。だが実は、数1はもっと以前に前提され用いられていた。ラッセルは、「数とはある集合の数である」(数の定義)を導くために「集合の相似」という概念を規定しているのだが、その相似な集合の定義を「1対1対応」(誤解なきように付け加えると、ここで言う「1対1対応」は「全・単射」のこと、つまり「1対1かつ上への写像」のことである)を用いて行なっているのだ。ここにそもそも数1が用いられていたのである<sup>23)</sup>。なぜこういうことになってしまうかと言うと、数の概念はそれがどのようなもので、またどのような言語で語られているとしても、必ずその内に数1を含むからである。概念としての数1を含まない数概念系は決してありえない。これに対して数0の概念はきわめて高度な・反省された概念であり、名著『零の発見』<sup>24)</sup>を持ち出すまでもなく、人間の歴史上、人々の多大の営為と時間とが必要だったものである。有=1抜きに無=0はありえない。数1があり一定の数概念系があり、そこから反省的に数0が措定される。かくして数1の概念が、更に数概念系自体が、概念として圧倒的に飛躍するのである。ラッセルは自然数列について、「この数列を1でなく0から始める人は、多少とも数学的教養の高い人である」<sup>25)</sup>と述べているが、「数学的教養が高い」とは一体何を意味するか、またなぜそのように言い得るのかについて突き詰めて考えてはいないように思われる。

ところで、この循環論・トートロジーということでは、F.L.G. フレーゲの『算術の基礎 *Grundlagen der Arithmetik*』(1884年)にもほぼ同様の循環論・トートロジーがある<sup>26)</sup>。

このように見てくれば、先に保留しておいたラッセルの思考の間違い・転倒も、それがどのような間違い・転倒であるのかが解るようになる。ラッセルは数概念(=自然数概念)を論理的に厳密に定立することを目指し、しかもその数概念が日常生活にも用いられるようなものになりたいと述べていた。しかし彼は、彼の言う「実在世界」、あるいは日常の生活世界にいわば「逆らって」論理的に



〈先〉であるべきだとする数0から出発し、それゆえ不可避に数1によってそれを導いたにもかかわらずそのことを隠蔽し、その数0から数1を導くという推論過程を辿ろうとしつつも実際は数1から数1を導き、その後はこの1によって2、3、…、n、…を導くことで自然数体系を導出したのであった。しかもその上に彼は、この自然数体系をもって「実在世界」に臨もうとするのである。対象世界、彼の言う「実在世界」でさえ、それと論理の世界との間には絶対的な隔絶があり、ラッセルが想定するような対応関係はあり得ない。この点に無自覚な、可算化・概念化への過信がある。これが転倒でなくして何であろうか。

そもそもここで取り上げているラッセルの著書は、広い意味での数学の世界から社会に向かって、従って数学あるいは論理数学を学び・目指しそれについて何らかの思考を試みようとする人々に向かって書かれたものである。つまり彼は広い意味での数学の世界に何らかの関心を持つ人々を数学世界に招くために、まさしく数学の世界において数概念について説いているのだ。だとすれば、彼が提示する数概念を日常生活の世界に用いるなどということは、はなから問題にならない。そもそも人間のどのような集団・共同体等においても日常生活の世界に数の概念系は存在し、そこには必ず数1に当たるものがある<sup>27)</sup>。また今日ではどんな数概念系にも数0が存在すると言って良い。各々の集団・共同体において数概念系は十全に機能しているのであって、ラッセルがあらためて言うべき「何か」があるわけではないのである。彼に求められていたのは、このような種々様々な数の概念系に分析を加え、それらを一般化し総括し、概念としてより広くより深いもの、つまりより豊かなものへと鍛え上げていくという数学世界に固有の作業であった。この意味でペアノの方がラッセルよりも正しいのであり、ラッセルのペアノへの不満に問題とすべき根はない。たしかにペアノの公理にいう「数0」は普通の意味での数0に限定されないが、しかし日常生活上の数0を包含しているのであって、普通の意味での数0と理解しても何ら差し支えはないのである。むしろ、ペアノの公理が画期的であったのは、それが自然数全体という無限集合（可算無限集合）概念を明確に定立したことであり、無限を扱う一つの方法を定式化したことであった。これは数学世界に固有な・偉大な貢献であったのである。この対比から言えば、ラッセルがなすべきであったのは、彼の議論がある種の循環論・トートロジーに陥っているのは何ゆえであるのか、そしてまたその循環論・トートロジーは一体何であるのかを、論理学（数学）の世界のあくまで内部において、徹底してその内部において根源的に問うことであった。学問の世界はどのようなものであれ対象世界（-自然・社会）に接する界面をもつ。そこにそれぞれの学的世界固有の〈口〉があり対象世界の非可算無限性を〈呼吸〉する。その〈呼吸〉の在り様として、かの循環論・トートロジーについて考察を加えるべきであった。このような理路に進み得ないところにラッセルの言語観とその精神様式が現われている<sup>28)</sup>。

では、こうした分析哲学派の言語観に対して後者の言語観はどうであろうか。それらは、超論理的詩的側面の極の存在を直観しておりそこに前者への違和や批判を読み取ることができる。だがしかし、後者の人々は人間の言語世界が否応もなく可算有限な世界をなすという絶対的限界について明確な態度をとることができない。したがって人間の言語世界がどのようにして生きたものとなることができるか、そのために対象世界に対してどのような〈対話〉の在り様をもたねばならないかについて明確な態度をとることができてはいないと言うことができる。結局、いずれの言語観も、新しく生み出され形成される言葉や概念、あるいは詩の言葉等に対して、それこそ明確な説明の言語を持ってはいないのである<sup>29)</sup>。



(iv)

このような特質と限界とをもった人間の言語世界に対して、では商品語の〈場〉はどのようなものだろうか。商品の使用価値と価値との統一物である。つまりそれは自然物であるとともに極度に抽象的で純粋に社会的なものである。諸商品は単に諸物(Dinge)であるのではなくて諸物象(Sachen)であり、類としての人間の創造的諸力の結実が転倒し主体化して現われ出たものである。資本主義的生産様式が支配する社会においては、主体はあくまで商品である。個々の人間の自然のおよび社会的諸力の単なる算術和ではない、いわば積分された力の結実として商品はあり、しかもそれが主体として人々に対して君臨している。主体である商品という諸物象の、複雑な運動と諸関係そのものとしてある商品語の〈場〉は、だから人間語世界の諸限界を超え出ていると考えられる。「ひとたたきでいくつもの蠅を打つ」<sup>30)</sup>とマルクスが言った商品語の〈場〉は、決して人間語の世界のように線形ではなく可算ともいえない。「無限」に多重多様な関係のうちに「同時」にひとしく諸事象が生じ、それが示されるというのが商品語の〈場〉だからである。

ところでなぜ、われわれは商品語を問題にするといいながら、商品語の〈場〉という言い方をするのか。その理由は以下である。物(Ding)としての労働生産物は、徹底して抽象的で純粋に社会的な価値を属性とすることによって、商品という物象(Sache)になる。これは、あくまで具体的で自然的な物としての労働生産物が、まさしく抽象的社会的な独特の関係・運動の〈場〉に入ることによってである。ここで重要なのはこの特有の関係・運動の〈場〉が個々の労働生産物よりも〈先〉にあるということである。あらかじめ在るものとして〈場〉を措かなければならない。資本主義的生産様式が支配する社会を対象とする限りこのことは不可避・不可欠であり、ここで商品〈場〉の起源を問うことは無意味である。そのためにマルクスは、『資本論』冒頭商品論の核をなす価値形態論において「単純な価値形態」を単なる物々交換とは違ったものとしてはっきり区別し、この価値形態も商品〈場〉におけるものとして議論しているのである<sup>31)</sup>。個々の労働生産物が一体どのようにして現実的に商品になるのかが問題であり、このことが可能なのは、個々の労働生産物があらかじめ存在する商品〈場〉に投げ込まれることによってである(ここで一言注意。われわれが言う商品〈場〉とは商品流通の場という意味ではまったくくない。資本主義的工場生産される労働生産物は、その工場の資本主義的生産過程において時々刻々商品〈場〉に投げ込まれているのである)。個々の商品が過程の主体になり得るのはこの〈場〉すなわち商品〈場〉に組み込まれ支えられるがゆえである。労働生産物という単なる自然物から商品という社会的な物象へのすさまじい変換の〈場〉があるのだ。このことは、商品が必ず・いつも固い・手で触れるような対象物であるわけではなく、人間の活動のあらゆる所産・結実あるいはその発露そのものが商品になり得ることを考えれば良く理解できることである。例えば、非物的な労働生産物である商品が存在する。種々の芸術行為・活動や医者が行なう医療行為そのものや教師が行なう教育活動そのものといった諸商品であり、こうした諸商品の存在は、多くの抗議や憤激あるいは自己陶醉を呼び起こす、あるいは詐欺や欺瞞の手段になる、等々にもかかわらず厳然たる現実であり、この現実はまさしく商品〈場〉というものがあってはじめて可能なのである<sup>32)</sup>。かくして、この商品〈場〉に照応し・付属したものとして商品語の〈場〉なるものを考えることができるし考えざるを得ない。過程の主体たる諸商品の運動、すなわち主体としての「判断」・「推論」等々としてあるもの、そうしたものとしてしか捉えられない諸商品の関係・運動を述べるものとして商品語を措くしかない以上、それはある何らかの〈場〉としてしか人間語には捉えられないものだからである。そもそも商品語に語や句それらの連鎖や、また節や文章といっ

た分節化された・可算化されたもの・諸範疇を考えるいわれはまったくない。語や句などといったものを想定する人間語世界の呪縛から自由でなければならない。そうした呪縛から解かれた思考が必要であり、取り敢えず商品語の〈場〉というものを措き、その〈場〉の固有の運動として、あるいはその〈場〉の〈励起〉として商品語を捉える必要があるのである。もちろん、場 (field; Feld) という言い方は、電磁場とか場の量子論といった自然科学における場の概念のアナロジーであるが、しかし単にアナロジーにつけるものではない。なぜなら《商品〈場〉－商品語の〈場〉》という対象は自然としての対象ではなく、人間社会としてのそれだからである。そこには〈意識－無意識〉からはじまる人間精神の特有のエネルギーが渦巻き・横溢しているからである。

ところで、商品語の〈場〉が可算ではないとしても、その非・可算性の度合い・水準を問題にすることは可能である。マルクスは商品たちの語るところを聴き取る形で次のように『資本論』に書いている。

もし諸商品がものをいうことができるとすれば、彼らはこう言うであろう。われわれの使用価値は人間の関心をひくかもしれない。使用価値は物 (Ding) としてのわれわれにそなわっているものではない。だが物的に [dinglich] われわれにそなわっているものは、われわれの価値である。われわれ自身の商品物 [Waarendinge] としての交わりがそのことを証明している。われわれはただ交換価値として互いに関係し合うだけだ、と。<sup>33)</sup>

商品はあくまで使用価値と価値との統一物であり、必ず使用価値という〈体〉をもち、それなしではあり得ない。だがしかし、商品は自らのこの〈体〉を〈忘れてしまう〉ということだ。使用価値は物としての自分に備わっているものではない、と言うのだから。自然物としての労働生産物は、商品〈場〉という変換〈場〉に投げ込まれることによって社会的な物象たる商品になる。だが商品になるや否や、諸商品は自らの〈体〉つまり自然的諸規定性を〈忘れてしまう〉というわけだ。つまり、諸商品は、使用価値に現われる自然、その諸規定性から剥がれ、まったくの抽象的な社会性としていわば宙に浮き上がってしまうということだ。このことこそが、《商品〈場〉－商品語の〈場〉》のもつ抽象的普遍としての猛烈な力と決定的な限界とを示しているのである。その抽象的普遍としての力は個々の生身の人間を圧倒し翻弄し引き裂き食い殺す等々するのであるが、しかしそれが抽象的普遍であるということによって、その限界 (Grenze) が制限 (Schranke) へと転化する可能性を示してもいるのである<sup>34)</sup>。言い換えれば、商品語の〈場〉の非・可算性はきわめて抽象的な水準のものでしかないことが予想され、自然そのものの非可算性に比してそれは底の浅いものでしかないと想定される。まさしくここに、類としての人間が、すなわち自然の不可分な一部でもある類としての人間が、《商品〈場〉－商品語の〈場〉》として転倒して立ち現われている自らの類としての在り様をまさしく内在的に超克していくことができる物的な根拠もまた示されているということなのである。

『資本論』は、商品とは一体何であるのかを問いそれを解き明かすことを通じて、商品語の〈場〉のこの特質、つまり人間語の世界を超え出た水準をもつものであることを明らかにすると共に、それが超克され得ることを示したのではないだろうか。すなわち、人間の類的性格が《商品－商品語の〈場〉》として完全に転倒して現われている現実を、自然に支えられ、かつ自然の不可分な一環として存在する人間、この類としての人間が、自らの自然的社会的な創造的諸力によって超克し得ることを

も明らかにしたのではないか。このような可能性を念頭におきつつ、われわれは上に述べた人間語世界の特徴を導きの糸として『資本論』が説いた商品語の〈場〉を考察していくことにしよう<sup>35)</sup>。

## 〈Ⅱ〉『資本論』初版と同第二版の冒頭商品論の位相

本稿の主たる目的は『資本論』冒頭商品論の構造と内容が何であるのか明らかにすることにある。この作業はもちろん同書の初版と第二版を中心のテキストとしてなされねばならない。とりわけ次の三点にわたる作業をきちんと行なう必要がある。第一は、言うまでもなく『資本論』初版(1867年9月)から第二版(1872年7月—1873年6月)への書き換えがどのような目的をもってどのようになされたのかをフランス語版(1872年9月—1875年11月)をも参照しつつ綿密に検討することである。このために第二に、『資本論』のための直接の・本格的な草稿の最初のものである「1857—1858年草稿」(『経済学批判要綱』)から『経済学批判』第1分冊(1859年)、および「1861—1863年草稿」を踏まえ、『資本論』に到るまでにどのような課題があり、それがどのように解決されていったのか、また残された課題はなかったのかを確認することである。そして第三に、マルクスが死んだ1883年中にエンゲルスの手によって出された『資本論』第三版(1883年末)における第二版からの変更がどのようなものであり、それがマルクス自身の指示によるものであるのかどうかを可能な限り正確に同定することである。

先ず第一の点であるが、初版から第二版への書き換えについてマルクスは第二版の後記に次のように書いている。

第1章第1節では、それぞれの交換価値が表現される諸等式の分析による価値の導出が、科学的にいっそう厳密になされている。また、第一版ではただ暗示されているだけの、価値実体と社会的必要労働時間による価値量の規定との関連も、明確に述べてある。第1章第3節(価値形態)は全部書き換えたが、これはすでに第一版の二重の記述から見ても必要なことだった。——ついでに言えば、あの二重の記述は、私の友人ハノーファーのドクトル・L・クーゲルマンにすすめられて書いたものである。1867年の春、私が彼のもとを訪れていたとき、最初の校正刷がハンブルクからきた。そして、彼は、大多数の読者にとっては価値形態の補足的な、もっと教師的な説明が必要だということを、私に納得させたのである。<sup>36)</sup>

初版から第二版への冒頭商品論に関する書き換えの目的の中の二つに、交換価値から価値を概念的に明確に区分すること、および価値形態論があることが述べられている。この内の価値形態論に関する書き換えについては従来から注目され多くの言及・議論がなされてきたが、交換価値から価値を概念的に明確に区分するための書き換えについてはきちんと検討されてきたとは言い難い。実にこの書き換えをマルクスは徹底して行なわず、それゆえにこの部分で叙述上の混乱が生じたとわれわれは考えており、〈Ⅲ〉で詳しく検討する。

また、価値形態論の書き換えについては、初版本文の価値形態Ⅳが削除され、形態Ⅳとして貨幣形態が取り入れられたことによって、きわめて大きな負の問題を引き起こすことになったとわれわれは判断しており、これについては本稿後段の〈Ⅳ〉および〈Ⅵ〉で詳しく検討することになる。



次に第二の点である。「1857-1858年草稿」から『資本論』初版および同第二版、またその改訂作業の中で主に三つの課題があった。第一は、商品に表わされた労働を二重性において・二重の労働として把握すること（あくまで商品に表わされた労働の二重性であって、決して生きた・流動状態にある労働の、ではない。後者は二重性としてあるのではなく、商品に表わされた二重の労働から反省的に捉え返されることによって二面性として把握されるものである）、第二に、価値を交換価値から概念的に区分し、交換価値を価値の表現様式・現象形態として把握すること、第三に、交換価値、すなわち価値の現象形態について価値形態論として展開すること（労働生産物がどのようにして現実的に商品になるのかを説くこと、別言すれば「すべての商品の貨幣存在」<sup>37)</sup>を説くこと）、以上であった。第一の課題を基礎に、これを解決する作業が第二・第三の課題を鮮明にし、それらの課題の解決を促進することとなる。第一・第二の課題の解決は、商品論の諸概念——価値、価値の実体（＝商品に表わされた抽象的・人間労働）、価値の形態たる交換価値、価値を形成する労働等——をとりあえず人間語によって分析的に定立することである。だが、第三の課題の解決とは、それらの概念が諸商品自身の実際の交換関係・価値関係において現実的に定立される在り様を人間語によって翻訳的に叙述し註釈することである。

第一の課題は、「1857-1858年草稿」では未だ萌芽的に取り扱われているだけで、解決されたとは言えない。この課題は『経済学批判』第1分冊においてようやく解決されると言って良い。第二の課題は『資本論』初版によって一応解決される。一応、と言うのは、初版では価値自体を分析的思惟によって導出することがなされ得ておらず、価値が議論の前提として、もしくは仮言的に措かれてしまっているからである。つまり、価値自体を分析的に導出する課題が残されてしまったのである。この課題の解決が『資本論』第二版で図られるが、完璧にそれがなされたとは言いがたいし、第三版のための改訂作業においても克服されたとは言えない。なぜならば、叙述上のある種の「混乱」が第二版には生じているからであり、これが第三版でも克服されてはいないからである。次に、第三の課題の解決であるが、それは『資本論』初本文で果たされたと言ってよい。ただ、初版では価値を分析的に導出せずいわば仮言的に前提して議論しているので、その影響が初本文の価値形態論にも明らかに露出している。ところで、この初本文の価値形態論は、理解するのが極めて困難だとマルクス自身が述べたものであり、それゆえ、意欲ある読者、とりわけ意欲ある労働者の読者のために「初版付録」が書かれ、それに基づいて第二版の価値形態論があるわけであるが、この書き換えは論理展開上の新たな問題を生じさせることとなった。またフランス語版は第二版の到達地平と新たな問題点を同じくしている。

最後に第三の点、すなわち、第二版から第三版への書き換えの点である。どこが書き換えられたのかはもちろん第二版と第三版とを比較対照すればすぐにわかるわけだが、問題は書き換えがマルクス自身の指示によるものなのかどうかということである。第三版はマルクス死後、エンゲルスの手によって刊行されたものなので、これは重要な問題なのだが、事実を確定するには相当の困難がある。資料としては、MEGA, II/6に収録された草稿「『資本論』第1巻にたいする補足と変更」や、MEGA, II/8に収録された第二版のマルクス自用本への書き込みがきわめて重要なものであるが、これらだけでは不明な点が残らざるを得ない。今後なお少なくない時間と多くの研究者の努力が必要であろう<sup>38)</sup>。

以上の点はともかく、われわれにとって重要なのは、冒頭商品論における書き換えである。従来第二版から第三版への書き換え問題に関しては、フランス語版に基づく書き換え（蓄積論の部分が中

心) が主に問題にされ研究されてきたのであって、冒頭商品論に関してはほぼまったくと言って良いほど目を向けられてこなかった。それゆえわれわれは、上記の資料を最大限利用しつつ、今日なしうる限りの作業を行うことになる。

こうした厳密なテキスト批判が必要である。その点からすれば、第四版(1890年12月、いわゆるエンゲルス版)のテキストとしての意義は大きくはない。先に触れた『『資本論』第1巻にたいする補足と変更』や第二版自用本への書き込み等を含めてマルクス自身による改訂作業の全容が明らかになれば、第四版についてはエンゲルス編集版という独立の著作としてその歴史的意義が確定するであろう。この意味では、われわれの目的からすれば、1865年6月のマルクスの講演記録『価値・価格および利潤』(1897年英語版、1898年ドイツ語版)<sup>39)</sup>、そしてマルクス自身によってほぼ全面的に改定された、ヨハン・モストによる「入門書」である『資本と労働——カール・マルクス著『資本論』のやさしいダイジェスト』第二版(1876年)のそれぞれ当該部分もまた参考文献としては重要である。前者が『資本論』初版に、後者が同第二版に対応する文献であり、初版から第二版への書き換え問題に関して無視できないものである。

ともあれ、本稿の目指すところからすれば、初版および第二版、さらにフランス語版という確定したテキストを綿密に検討することをいくつかの参考文献・資料で補うことによって目的は十分に達せられるであろう。

(以下次号)

## 註

以下では、Marx Engels Gesamtausgabe を MEGA と略し、たとえば MEGA, II /1 は、同全集の第 II 部第 1 巻を指すものとする。訳文については、現行版(第四版)『資本論』は資本論翻訳委員会訳の新日本出版社版(1997年)を、『経済学批判 第1分冊』(1859年)をはじめとする資本論草稿については資本論草稿集翻訳委員会訳『資本論草稿集』(全9巻、1981-1997年、大月書店)を、初版については岡崎次郎訳『資本論第1巻初版——第1章および付録「価値形態」』(国民文庫、1976年)および江夏美千穂訳『初版 資本論』(幻燈社書店、1983年)を、第二版は江夏美千穂訳『第二版 資本論』(幻燈社書店、1985年)を、フランス語版については江夏美千穂・上杉聰彦訳『フランス語版 資本論(上)』(法政大学出版局、1979年)を、それぞれファクシミリ復刻された原テキストおよび MEGA 当該巻にあたり、必要に応じて改訳しつつ用いた。上記以外のマルクスおよびエンゲルスのテキストは Marx Engels Werke (MEW と略)にあたり、大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス=エンゲルス全集』(大月書店、1959-1977年)を適宜改訳して用いた。

- 1) マルクスは商品語について『資本論』第二版第1章第3節つまり価値形態論の中で次のように述べている。「商品価値の分析がさきにわれわれに語ったいっさいのことを、リンネルが他の商品、上着と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語るのである。ただ、リンネルは、自分だけに通じる言葉で、商品語で、その思いを打ち明ける。労働は人間的労働という抽象的属性においてリンネル自身の価値を形成するということを言うために、リンネルは、上着がリンネルに等しいものとして通用する限り、したがって価値であるかぎり、上着はリンネルと同じ労働から成り立っていると言う。リンネルの高尚な価値対象性は糊でござわしたリンネルの肉体とは違っているということを言うために、リンネルは、価値は上着に見え、したがって、リンネル自身も価値物としては上着と瓜二つであると言う。ついでに言えば、商品語も、ヘブライ語のほかに、もっと多くの、あるいはより正確な、あるいはより不正確な、方言をもっている。たとえば、ドイツ語の Werthsein は、ロマンス語系の動詞、valere, valer, valoir に比べると、商品 B の商品 A との等置が商品 A 自身の価値表現であることを言い表わすには不適切である。」(MEGA, II /6, S. 85.)。引用中の「ついでに言えば」以下の文言、とくに「方言」というのは、これこそある種の比喩と捉えるべきものである。商品語を比喩と捉える立場からすれば、二重の比喩ということになるが、マルクスは商品

語を単なる比喩と考えていなかったため、「方言」という言葉を用いているのである。資本主義的生産様式が支配的な社会の主体は商品であり、具体的な個人に対して君臨している。したがって、商品語は主体の「正統」な言葉であり、それに対する個人（商品所有者）の言葉は「通俗的」で「なまった」、さらに往々にして不正確で曖昧なものでしかない、ということなのであろう。ここには商品の（世界的な）権力性も示されている。マルクスはこうした事態を「方言」という比喩で示したとわれわれは考えている。さらに商品が運動する〈場〉は貨幣とそれ以外の商品とに分裂・二重化するが、貨幣による価格表現のうち、一切の地域性からの超脱・異なる国同士の交易に伴う国際性が示される。そして世界資本主義の成立によって世界貨幣が生み出され、商品の価値に表わされる抽象的普遍性は最高の形態を獲得する。生きた個人があくまで国や地域といった諸条件に規定・束縛されつづけることとの隔絶が、こうして比喩的に示唆される。ただ、マルクスの時代におけるこの隔絶の水準は、今日のそれと比べると、なお低い段階にあった。それゆえ、マルクスの比喩をわれわれが十全に受けとめるためには、商品語の世界性に反射する「方言」の様態について、注意深い比較・測定がぜひとも不可欠である。ところで、この部分にはユダヤ系であったマルクスのユダヤ人とその歴史、またユダヤ教とキリスト教への痛烈な皮肉や嘲笑が込められているに違いないが、その問題には本稿ではふれないこととする。

2) 商品語という言葉に注意を向けた数少ない一人である廣松渉は次のように述べている。「マルクスは『価値形態論』の内部では、殆んどもっぱら『商品語』で語って」（『資本論の哲学』、現代評論社、1974年、p.131.）いる、と。このように廣松は、価値形態論が商品語の〈場〉であることを明確に把握しているかにみえる。だがこの廣松の言明は、彼の哲学の根幹である「四肢的構造論」を価値形態論に適用しようとするなかでのものなのである。彼は価値関係の中に宇野弘蔵と同様に商品所有者を導き入れ、しかもそれを当事主体として捉えようとする。廣松は言う。「価値形態論におけるマルクスは『商品語』で論じているとはいえ、行文のなかに、当事主体を全然登場させないわけではない。[...] マルクスは、当事主体の対自的な意識を捨象しうるかぎり、『商品語』をリンネルに語らせる。そこには、当事主体の意識事態を勘案すれば、行論に無用の錯綜を持ち込みかねないという配慮があったのではないかと思われる。リンネルが『商品語』を語るということは、実際には、学知がフュア・ウンスな立場から“聴取”*vernehmen* することであり、しかも、語るのがリンネルであるということにおいて、視座がリンネル所有者の側に構えられているわけである。マルクスとしては、リンネルに商品語を語らせるという手法をとることによって、実はこのような方法論的地歩を確保している次第なのである。／これはまことに巧みな手法ではある。しかし、そこでは商品（リンネルおよび上衣）が擬人化され、当事主体の視座・視角が後景に退いてしまうため、論理の立体的な構造が見えにくくなるという憾みを反面では禁じえない」（同、pp.131-134、／は原文改行箇所）。このように見てくると、廣松にとって商品語というものは商品を「擬人化」し当事主体を後景化するための叙述上の「技巧」にすぎないことになる。彼もまた商品語をある種の比喩としてしか捉えてはいないことがわかる。なお、彼の商品所有者—当事主体に関する議論については機会をあらためて批判したい。

ところで、商品語を単なる比喩の次元にとどめることなく、真正面から取り上げて考察を試みようとした著作が公刊された。佐々木隆治『マルクスの物象化論——資本主義批判としての素材の思想』（社会評論社、2011年）である。われわれは彼の努力を多とせざるをえないが、佐々木もまた商品語を本質的に論ずる場面にあつて基本的に比喩という表現で語っており、比喩として捉える制約から自由ではない。そのため商品語それ自体を独特な対象として明確に措くことができず、人間語の世界に引き寄せて、あるいは人間語の世界に従属的なものとして商品語を扱っている。佐々木は「商品語はマルクスの価値形態論の到達点であり、その核心をなすものだと言って良い」（p.184.）との認識を示しつつも、商品語の把握に成功してはいない。佐々木によれば、等置関係〈リンネル＝上着〉において、相対的価値形態にあるリンネルが等価形態にある上着に対して語るのではなく、「むしろ、リンネルは上着によって語るのである」と言う（p.174.）。そしてこの内容を「つまり、リンネルが自らの価値表現のために能動的に上着に関係することで、上着はリンネルにとって自らの価値存在を表現するための『言語』となる。リンネルは自らの『思い』を『思い』のままに表出することはできない。あくまで上着と関係し、上着を『言語』にすることによってしかそれを語れないのである」と説明しようとする（同上）。だが、「上着が言語になる」あるいは「上着を言語にする」というこの命題はまったく説明とは言えず、むしろこれをこそ説明すべきであり、その



説明抜きには理解ができない。まさしくここに、商品語を捉え損なったことが端的に示されている。

- 3) マルクスは『資本論』第1巻、そして第2巻、第3巻のための草稿全体を通じて、商品、すなわち〈商品-貨幣-資本〉というトリアーデをなして運動する商品が、資本主義的生産様式が支配する社会の社会・経済過程において、商品〈場〉の位相の転位・高度化に伴いますます主体としての力能を強め深化させていくことを、徹底的に解き明かしている。冒頭商品論以降、商品語という言葉は直接には用いていないが、商品〈場〉の転位・高度化に伴う商品語の〈場〉の在り様もまた転位していくことを示している。これを具体的に説くことは残された課題である。この点で、Marazzi, Christian, *Capitale & linguaggio: Ciclo e crisi della new economy*, Soveria Mannelli, Rubbettino Editore, 2001. という興味深い書名の本がある(邦訳は、水嶋一憲監修、柱本元彦訳『資本と言語——ニューエコノミーのサイクルと危機』(人文書院、2010年)、ただし2002年以降に再版されたイタリア語ペーパーバック版の一部では、副題が“Ciclo e crisi della new economy all'economia di Guerra”、すなわち「ニューエコノミーから戦争経済への循環と危機」となっている)。同書は、今日の資本、とりわけ金融経済を中心として資本主義の在り様を言語ということから説明しようとしたものである。だが残念ながら根底的に間違った貨幣論と、それに照応した「貨幣」を「言語」=自然言語に対応させる、よくある皮相な議論をベースにしたものでしかない。しかもマラツィの議論は、利子生み資本形態をとって運動する龐大な架空資本に基づく今日の資本主義の現状報告にすぎない。その意味で資本主義に拝跪したものであって、とても批判とはいえないものである。マルクスが『資本論』第三部草稿で駆使した利子生み資本の在り様を表わす *monied Capital* という概念(エンゲルスによってこの概念は事実上「抹殺」されてしまっていたのだが)を復権させ、〈利子生み資本-架空資本〉概念を用いた今日の資本主義にたいする根底的な批判が必要である。われわれは本稿の作業の上に、〈貨幣-資本〉における商品語の〈場〉、そして更には〈利子生み資本-架空資本〉における商品語の〈場〉を取り上げ、今日の資本主義への根本的批判を目指したいと考えている。
- 4) プレーズ・パスカル『パンセ』冒頭の断章「一」を参照のこと(前田陽一・由木康訳、中公文庫版、1973年、pp.7-10.; Pascal, Blaise, *Œuvres complètes II*; édition présentée, établie et annotée par Michel Le Guern, Paris, Gallimard [Bibliothèque de la Pléiade], 2000, pp.742-744.)。言うまでもないことだが、パスカルの時代にあっては「幾何学」とは論理学(現在の数学基礎論)を含めた「数学」総体を指しており、本文下段において分析哲学派の言語観に批判のページを割いたのはそのためである。
- 5) MEGA, II/5, S.639.
- 6) 「分節化する articulate」が音による区分、「縁付ける delineate」が線による区分として、前者が話し言葉の世界におけるものであるのに対して、後者は書き言葉におけるものと受け取られるかもしれない。かかる「理解」にあっては、後者の方がより概念化・論理化、したがって可算化の度合いが強いのとされる。しかしわれわれは対象(一自然・社会)に対する人間の実践として、単層的・線形(線状)的な「分節化する」よりも、「縁付ける」の方を多層的・非線形的に深化した、より豊かで奥行きをそなえた動詞としてとらえたいと考える。この考えをわれわれは、武満徹が自作『Marginalia』に寄せた次の一文から受け取った。武満は言う。「作曲という行為は、音にかりそめの形をあたえる、縁づける、ということではないでしょう。(…)縁づける、という私の行為の根底にある欲求が水のイメージと Marginalia という言葉を結んだのかもしれませんが。\*たとえば、あるひとつの文章<sup>パラグラフ</sup>にしても、また単語にしても、それらは自分の内面にまず現れるある形をもたないもの、つまり何かを見たときに自分の内面に反射してきて知覚される映像<sup>イメージ</sup>に対して、自分がなんとかその縁を明確にしたいという気持ちのひとつの表れなのです。そのときに自分の内面に出てきたその不定形なモヤッとしたものにある方向を与えたり、明瞭な縁<sup>へり</sup>をつけていくものというのは、単一のものじゃなくて、つねに多義的な多層なものである」(武満『音楽を呼びさますもの』新潮社、1985年、p.24.、原文中で\*より前の部分は二字下ゲの形式で書かれている)。なお、delineate という語は放送大学教授・滝浦真人氏から教示を受けた。ここに記して感謝する。
- 7) フェルディナン・ド・ソシュール、前田英樹訳・注『ソシュール講義録注解』法政大学出版局、1991年、p.58。また、ソシュールの時間性と線状性、さらに言語をつらぬく同一性をめぐる思考とその「破綻」については、互盛央『フェルディナン・ド・ソシュール——〈言語学〉の孤独、「一般言語学」の夢』(2009年、作品社、pp.487-515.)を見よ。
- 8) G.W.F. ヘーゲル、武市健人訳『ヘーゲル全集 11 哲学史(上)改訳版』岩波書店、1974年、p.356。

- 9) われわれが人間の言語世界について述べたものはもちろん単なるモデルでしかない。それはいかなるモデルもそうであるように粗さや乱暴さに満ちている。ただわれわれがこのモデルで強調したかったのは、人間の言語が対象世界を否定もなく縁付け・分節化するという可算化を遂行し、かくして対象世界の運動を切断し停止させ打ち砕き粗大化するものであるにもかかわらず、個々の語や句や概念等々自体も含めてそれらが生きたものである限り、そうした可算化と一体のものとして、その可算化の水準を超えていく運動すなわち対象世界を特徴づける非可算性を、自らの内に取り込むという点である。また、ここで述べる「詩的」とは、人間の言語の限界に向かって実験を繰り返してきた20世紀の諸表現運動を踏まえての謂いであり、たんなる喩ではないことを強調しておきたい。
- 10) パートランド・ラッセル、平野智治訳『数理哲学序説』岩波文庫、1954年、p.12。
- 11) 同上、p.19。
- 12) 同上、pp.20-21。
- 13) 同上、p.206。
- 14) 同上、p.222。
- 15) 同上、p.222。
- 16) 同上、p.221。
- 17) この対応を数学の言葉を用いて言えば、「実在世界から論理の世界への上への写像（全射）」という。
- 18) ラッセルは言う。「論理学（または数学）は形式だけの論究をするもので、しかもそれらが常に真であるとか、または時には真であるとか、あるいはまた常にはと時にはとをいろいろの順に排列し、その順序に真であることを主張したものについて論究するものである」（同上、p.261.）。
- 19) 同上、p.31。
- 20) 同上、p.37。
- 21) 同上、p.37。
- 22) 同上、p.37。／は原文改行箇所。
- 23) 1対1対応について、林晋と八杉真理子は「 $B$ の各要素 $b$ に、 $A$ のある要素が写像され、 $b$ に $A$ の要素 $x$ と $y$ が同時に写像されていたら、 $x$ と $y$ は同じものである。（…）『一つ』という言葉が、『同じ』という言葉に置き換えられたのである」（ケルト・ゲーデル、林・八杉訳／解説『ゲーデル 不完全性定理』岩波文庫、2006年、解説p.111.）と述べ、「数1」の概念を用いずにその概念規定が可能だとする。しかしこれでは「数1」を用いていないことにはならない。なぜなら、 $b$ 、 $x$ 、 $y$ が各々1個の $b$ 、 $x$ 、 $y$ であり、「数1」の概念が措かれて初めて単独なものと規定しうる $b$ 、 $x$ 、 $y$ だからである。そうでなければ、「 $x$ と $y$ は同じものである」という言明は、 $x$ と $y$ とがそれぞれ、あらかじめ無前提に1個でない限り（そしてここにも「数1」がある！）不可能である。
- 24) 吉田洋一『零の発見——数学の生いたち——』岩波新書、1939年。吉田は、数0の「発見」について敢えてその思想的哲学的方面を問題とせず、「技術的な方面から眺め」（p.22.）ることに徹しているが、しかしそこで「形式主義的数学思想」（同上）という抽象性という思想上の根本問題を取り上げることで、数0の深い反省的性質を吟味している。
- 25) 前掲『数理哲学序説』、p.11。
- 26) F.L.G. フレーゲ、野本和幸・土屋俊訳『フレーゲ著作集2 算術の基礎』、勁草書房 2001年、pp.133-140. を参照のこと。フレーゲの議論は本稿で取り上げたラッセルの著のそれよりも論理的に精緻であるが、しかしやはりラッセルと同様の循環論・トートロジーに陥っている。フレーゲは数0を同一律：「 $A$ は $A$ である」の否定：「 $A$ は $A$ でない」を用いて、「ゼロとは、「自己自身に等しくない」という概念に帰属する基数である」（p.136.）と定義する。これは結局、その推論過程がどのようなものであれ、あらゆる〈有〉の、だから〈有〉なるものの否定として〈無〉である数0を導出したということである。そしてこれを〈無〉＝数0の有化、すなわち数1化とする。フレーゲは言う。「1とは、『0と等しい』という概念に帰属する基数である」（p.140.）と。このようなフレーゲの議論には二つの極によって張られた人間語世界の内的運動が良く出ているが、それはともかく、彼もまたこの議論の前提として「1対1対応」概念を用いているのであって、やはり循環論・トートロジーに陥っているのである。
- 27) Ascher, Marcia, *Ethnomathematics: A Multicultural View of Mathematics*, New York, Chapman &

Hall, 1995. がその好例を多々示している。同時にその対照例として、オーストラリアの数学者／SF作家であるグレッグ・イーガンの「ルミナス Liminous」(1998;2003 山岸真編訳『しあわせの理由』、ハヤカワ SF 文庫、2003 年所収) とその続編「暗黒整数 Dark Integers」(2008;2012 山岸編訳『プランク・ダイヴ』、ハヤカワ SF 文庫、2012 年所収) を参照せよ。ラッセル以上に数学の一般的妥当性に〈信〉をおいた場合の思考様式の代表的な姿を看取することができよう。

28) ラッセル等の分析哲学派言語観の精神様式は、自然数論の〈完全性－無矛盾性〉へのきわめて強い〈信〉として現われているが、クルト・ゲーデル (1906－1978) の不完全性定理 (1931 年) はまさしくこれを根底から打ち崩したものであった。この定理を示した論文タイトルが「Über formal unentscheidbare Sätze der *Principia Mathematica* und verwandter Systeme I

«, in *Monatshefte für Mathematik und Physik*, Band 38, S.173-98, 1931 (前掲『ゲーデル 不完全性定理』岩波文庫, 2006 年, pp. 15-62.) というようにラッセルとホワイトヘッドが著した『プリンキピア・マテマティカ』を直接の対象として取り上げ、定理が「自然数論を含む公理系 (= 述語論理体系)  $P$  は、無矛盾ならば、形式上不完全である、すなわち、その証明もその否定の証明も可能ではない論理式が存在する」という意味のものであることはきわめて深い意味をもっている。つまり、「自然数論を含む」ということの意味である。しかもこのことに根源的に関連したきわめて重要な点は、ラッセルもその代表であるが、従来、命題の〈真－偽〉を問題にしていたのに対して、ゲーデルは証明可能かどうかを問題にしかの定理を導いたという点である。〈証明可能－証明不可能〉を問題にすることによって、明確に数学世界の内部においてこの定理を証明したのである。〈真－偽〉を問題にする以上この点が明確にはならないからである。まさしくだからこそラッセルは実在性にこだわり、非実在を論理学に導きいれることを峻拒したのである。〈真－偽〉を定める必要があり、その基準を論理学 (数学) 内部に据えることができず、その外部にある「実在世界」に求めざるを得なかったからである。こうした経緯を考えれば、人間の言語が可算である (可算でしかありえない)、という事態を深く考えるための最良・最高の素材が、論理学・数学基礎論における種々の議論・論争とそしてそれを決定的な地平へと開き出したゲーデルの業績にはあると言えよう。

29) 言語を論ずるにあたって、避けて通れないのは、ルートウィヒ・ウィトゲンシュタインの言語哲学、『『幾何学の起源』序説』(エトムント・フッサール／ジャック・デリダ (仏訳・序文)、田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳『幾何学の起源 (新版)』、青土社、2003 年) を出発点とする J. デリダの言語観、および「言語一般および人間の言語について」における W. ベンヤミンの言語論 (細見和之『ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」を読む』、岩波書店、2009 年所収の訳を参照した) である。それぞれの哲学・思想を本稿で全面的に論ずることは不可能なため、あくまで本稿でのわれわれの姿勢に即した批判のエッセンスのみを述べると、次のようなものとなる。①ウィトゲンシュタインの言語観 (= 言語哲学) の逢着点は、日常性への転換・自然史的観点への転換・「言語ゲーム」における機能主義的意味概念への転換、の三つの契機に基づく「人間における言語と生の不可分性」なる概念だが、この点において、ウィトゲンシュタインの言語観は、人間語の世界と対象世界 (一自然・社会) との隔絶を直観しつつも、前者から後者の〈呼吸〉の様態に無自覚であること (鬼界彰夫『ウィトゲンシュタインが考えたこと』講談社現代新書、2003 年、第 4 部とくに pp.227-256. を参照のこと)、②デリダはパラダイムの象徴例としてフッサールの「幾何学」をとりあつかっており、理念的客観性が伝承される体系、すなわちパラダイム化されることで対象性を獲得した「幾何学」に対する人間の思惟は、ウィトゲンシュタインと同様に、人間語の世界と対象世界 (一自然・社会) との隔絶を直観したところに滞留し、人間語の世界の「内部」に「差異の戯れ」を見出すにとどまっていること、③ベンヤミンの作品は後の論文「翻訳者の使命」と共鳴しあう「完全なる言語」への昇華を含み込むメシアニズムの美しい結晶として読み解きうる点で、人間語のもつ〈自然－社会〉へ開かれた超論理的詩的側面の極と結びつくとも言えるが、それでもなお「完全なる言語」という視座と志向は、人間語の世界から対象世界に対する〈呼吸〉についてあまりにも素朴な人間主義的態度を示すものであること。

30) MEGA, II /5, S.29.

31) 『資本論』初版で言えば第 1 章の「(2) 諸商品の交換過程」で次のようにマルクスは書いている (これはほぼそのまま第二版にもある)。「直接的な生産物交換は、一面では単純な相対的な価値表現の形態をもっているが、他面ではまだそれをもっていない。かの形態は、 $x$  量の商品 A =  $y$  量の商品 B であった。



直接的な生産物交換の形態は、 $x$  量の使用対象  $A = y$  量の使用対象  $B$  である」(MEGA, II /5, S.54.; MEGA, II /6, S.116.)。

- 32) ここでは、資本主義的な価値物（商品）であるものだけを対象とし、そうでないものは対象外とする。たとえば、あれこれの名誉や地位などが売買されることがあるが、そのような価格のみを有する本来的に商品ではないものはあつかわれない。また、それとは別の次元で、今日グローバルにかつ大量に存在し運動している利子生み資本形態を取る架空資本（株式、国際、金融デリヴァティブ等）も本稿ではとりあげない。しかし架空資本は、現下の資本主義を分析する上で不可欠な対象であり、機会を改めて論じることとする。
- 33) MEGA, II /5, S.50. この文章も第二版にそのまま受け継がれている (MEGA, II /6, S.112.)。なお、引用文中の〔 〕内は引用者による。以下同様。
- 34) ここで用いている「限界 (Grenze)」と「制限 (Schranke)」は、ヘーゲルがいわゆる『大論理学』・『小論理学』において述べたものである（「第1部 存在」の「第2章 定在」の項を見よ）。許萬元はこの二者について、ヘーゲル弁証法の特徴の一つである歴史主義の問題とし、以下のように言う。「ところで、有限なもの内在的限界は、まさにあるもののあるものたらしめるところのものであり、あるもの自身の質的規定そのものをなすものである。つまり、ヘーゲルによれば、『あるものは、その限界内でのみ、また限界によってのみ、現にそれがあるようなものである』。したがって、注意されなければならないことは、あるもの内在的限界は、まだそれだけでは、それ自身にとってはなんら『制限 (Schranke)』とはならないということである。つまり、ヘーゲルはここで、『限界 (Grenze)』と『制限 (Schranke)』とを使いわけているのである。ある『限界』が『制限』となるためには、その『限界』を超出するもの、『無制限なもの』、つまり『限界』を否定するものが出現しそれに対置させられなければならない」（許萬元『弁証法の論理 上巻 ヘーゲル弁証法の本質』創風社、1988年、p.79.）。この書のなかで許萬元はわれわれと同じく、『資本論』初版における商品語の問題を「唯物論的抽象法」と名付けて把握しているが（同書、p.57.）、人間語との対比としてそれ以上の展開を見せてはいない。さて、上記の論点をマルクスは資本の運動総体においてとらえ、『経済学批判要綱』で次のように述べる。「自由競争が以前の生産諸関係および生産諸様式の諸制限を解体させたのではあるが、なによりもまず考察されなければならないのは、自由競争によって制限であるものが以前の生産諸様式にとっては内在的限界 [immanente Grenze] であったのであって、以前の生産諸様式はこの限界のなかでごく自然に発展し運動していたのだ、ということである。これらの限界は、生産諸力と交易諸関係とが十分に発展し、したがって資本そのものが生産の規制的原理として登場しはじめることができるようになったのちに、はじめて制限となるのである。資本が取り払った諸限界は、資本の運動、発展、実現にとっての諸制限であった。資本はそれによって、けっしていっさいの限界を止揚したのでも、いっさいの制限を止揚したのでもなく、ただ、資本にとって諸制限となっていた、資本に照応していない諸限界を止揚しただけであった。資本は、それ自身の諸限界の内部では——これらの限界は、より高度の見地から見れば生産の諸制限として現われ、また資本自体の歴史的発展によってそのようなものとして措定されるものであるにせよ——、自己が、自由なもの、制限をもたないもの [schränkenlos]、すなわち自己自身によってだけ、自己自身の生活諸条件によってだけ限界づけられたものだと感じる」(MEGA, II /1-2, S. 533.)。このマルクスからの引用については、許の指摘（前掲書、p. 220.）も併せて参照せよ。
- 35) 人間語世界の特徴に関して可算有限ということ述べたが、〈可算—非可算〉という概念対は数学世界のものであり、ゲオルク・カントール (1845–1918) によって概念として定立された (»Beiträge zur Begründung der transfiniten Mengenlehre«, in *Mathematische Annalen*, Band 46, S. 481-512; Band 49, S. 207-246, Berlin/Heidelberg, Springer-Verlag, 1895, 1897.)。可算世界には有限のものと無限のものとがあり、1、2、3、…と番号を付け得るものの世界であるが、これに対して非可算世界はそもそも無限であり番号を付すことのできないものの世界である。ただ非可算という概念は可算ではない、つまり可算の否定として概念規定されたものでしかない。ところで、カントールは、無限集合の無限性の度合を示す「濃度 (基数)」というものを考え、可算無限集合の濃度を  $\aleph_0$  とし、以下、 $\aleph_1$ 、 $\aleph_2$ 、 $\aleph_3$ 、……という具合に無限世界の無限の階層性を定式化した。つまり、カントールは非可算無限世界を可算無限階層化したわけである。この点から言えば、非可算無限世界の非可算無限階層化が考え得るのかどうか、それが可能だと

してどのようにそれをなすのかは今後の課題であろう。そしてこれは実数というもの、ひいては数というものをいま一度考え直し、新しい数概念を創り出すことでもあるだろう。またこれはおそらく自然に対する新たな理解の地平を開き出すであろう。

36) MEGA, II /6, S. 700.

37) MEGA, II /2, S. 128. 本稿注記にしたがって、改訳した。原文は“das Geldsein Aller Waaren”であり、“Geldsein”という語は“Werthsein”との対比としての表現であろう。

38) われわれは当然 MEGA, II のテキスト群およびそれらについての研究と論争およびその進展・深化に注目し期待している。ただし、本稿が対象とする冒頭商品論に関して言えば、今までのところ多くの成果があげられたとは言えない。注目すべき大村泉・宮川彰編著『メガ (MEGA) の継続のために マルクスの現代的探求』(八朔社、1992年)、大村泉『新 MEGA と《資本論》の成立』(八朔社、1998年)でも、冒頭商品論に関して十分な探究がなされているとは言い難い。だが、MEGA, II のテキスト群を丹念に検証すれば、マルクス自身が、さらにはエンゲルスが、たんに価値形態論の箇所だけでなく実に多くの部分に改定のための手を入れていることが判る。われわれは本稿の〈Ⅲ〉において、われわれ自身の解析結果を示す予定である。

39) 現在、『賃金、価格、利潤』として知られるこのテキストの原題は、本文中にあるように「価値・価格および利潤」であった。このテキストは1865年6月20日および27日の国際労働者協会中央評議会において、オーウェン主義者のジョン・ウェストンの経済主義に対する批判として用意され口頭で報告された。マルクスの生前には公刊されなかったが、『資本論』第一巻初版の前半部の要約としてとらえることができる。

井上 康 (京都精華大学非常勤講師)

崎山 政毅 (本学国際文化学域文化芸術専攻教授)

# 商品語の〈場〉は人間語の世界とどのように異なっているか(2)

——『資本論』冒頭商品論の構造と内容——

井 上 康  
崎 山 政 毅

はじめに

- 〈I〉人間語の世界に対する限りでの商品語の〈場〉
- 〈II〉『資本論』初版と第二版の位相（以上 632 号）
- 〈III〉人間語による分析世界としての『資本論』第二版第 1 章第 1 節および初版・フランス語版当該部分の比較対照による解説（以下本号）
  - (i) 〈富—価値—商品〉というトリアーデ
  - (ii) 『資本論』初版、第二版、およびフランス語版の対照
  - (iii) パラグラフ①および②の検討
  - (iv) パラグラフ③の検討
  - (v) パラグラフ④の検討
  - (vi) パラグラフ⑤の検討
  - (vii) 「共通なもの」= 価値、「第三のもの」= 商品に表わされた抽象的人間労働
  - (viii) 初版のパラグラフ⑥～⑨の検討
  - (ix) 第二版・フランス語版のパラグラフ⑥、⑦の検討
  - (x) 第二版・フランス語版のパラグラフ⑧、⑨の検討

- (xi) 価値および価値実体の概念の一応の定立
- 〈IV〉商品語の〈場〉—価値形態（以下つづく）
  - (i) 商品をつくる労働の特殊歴史的規定性について
  - (ii) 初版本文、その付録、および第二版のそれぞれの価値形態論
  - (iii) 価値表現において諸商品は何をどんな風に語るか
  - (iv) 〈自然的規定性の抽象化〉過程に関して
  - (v) 〈私的労働の社会化〉過程に関して
  - (vi) 価値の実体と等価形態の謎性
  - (vii) 初版本文価値形態論の形態Ⅱに関して
  - (viii) 初版本文価値形態論の形態Ⅲに関して
  - (ix) 初版本文価値形態論の形態Ⅳに関して
- 〈V〉価値形態論と交換過程論との関係について
  - (i) 価値形態論に対する交換過程論
  - (ii) なぜ、第二版は初版本文の形態Ⅳを捨て貨幣形態を形態Ⅳとしたのか
- 〈VI〉〈富—価値—商品〉への根源的批判について  
おわりに

(承前)

〈III〉人間語による分析世界としての『資本論』第二版第 1 章第 1 節  
および初版・フランス語版当該部分の比較対照による解説

- (i) 〈富—価値—商品〉というトリアーデ  
マルクスは『資本論』初版を次の言葉で始めている。

資本主義的生産様式が支配的に行なわれている諸社会の富は、一つの「巨大な商品の集まり」と



して現われ、一つ一つの商品は、その富の基本形態として現われる。それゆえ、われわれの研究は商品の分析から始まる<sup>40)</sup>。

ここでは〈富—商品〉という範式が立てられている。そして冒頭商品論において概念化される価値が加えられ、〈富—価値—商品〉というトリアーデをなす範式が立てられることになる。つまりマルクスは、〈富—価値〉概念の根源的な批判的措定を商品に対する批判を通じて行なおうとするのである<sup>41)</sup>。この点が冒頭商品論ではとくに、そしてそれのみならず『資本論』全体を通しての核心をなすテーマであり、本稿の最後でこの点に立ち返った総括的議論をすることになるが、議論の主脈をあらかじめはっきりとさせておく。

分析に入ろう。商品とは何かということを人間語によって分析的に明らかにしていくことになる。

まず商品の使用価値に関する分析があるが、この点では各版の比較検討は不要である。三つの版は基本的に異なるところがないからである。この使用価値概念から交換価値の概念へと分析をすすめる。

われわれが考察しようとする社会形態にあっては、それ〔使用価値〕は同時に素材的な担い手になっている——交換価値の。<sup>42)</sup>

商品はまずなによりも何らかの有用物—使用価値であるが、同時に商品はある価格に示される交換価値をもっている。この交換価値を使用価値が素材的に担っているというのである。交換価値とは何か、それはどのようにして使用価値に担われているのか。

ここからは初版、第二版、フランス語版を対照させながら作業をしていかなければならない。

#### (ii) 『資本論』初版、第二版、フランス語版の対照

以下に三つの版をそれぞれ原文で掲げる。初版原文はMEGA, II/5. から、第二版はMEGA, II/6. から、また、フランス語版原文はMEGA, II/7. から採録した<sup>43)</sup>。

また、原文および邦訳には各パラグラフ毎に①、②、…と通し番号を付した。訳文に関しては前号注記の通りであるが、初版と第二版の文章が同一の場合、邦訳も統一した。

- ① Der Tauschwerth erscheint zunächst als das *quantitative Verhältniß*, die Proportion, worin sich Gebrauchswerthe einer Art gegen [3] Gebrauchswerthe anderer Art austauschen, ein Verhältniß, das beständig mit Zeit und Ort wechselt. Der Tauschwerth scheint daher etwas Zufälliges und rein *Relatives*, ein der Waare innerlicher, immanenter Tauschwerth (valeur intrinsèque) also eine *contradictio in adjecto*. Betrachten wir die Sache näher.
- ② Eine einzelne Waare, ein Quarter Weizen z. B. tauscht sich in den *verschiedensten Proportionen* mit andern Artikeln aus. Dennoch bleibt sein Tauschwerth *unverändert*, ob in x Stiefelwiche, y Seide, z Gold u. s. w. ausgedrückt. Er muß also von diesen seinen verschiedenen *Ausdrucksweisen* unterscheidbar sein.
- ③ Nehmen wir ferner zwei Waaren, z. B. Weizen und Eisen. Welches immer ihr Austauschverhältniß, es ist stets darstellbar in einer Gleichung, worin ein gegebenes Quantum Weizen irgend einem Quantum Eisen gleichgesetzt wird, z. B. 1 Quarter Weizen = a Ctr. Eisen. Was besagt diese Gleichung? Daß *derselbe Werth* in *zwei verschiedenen Dingen*, in 1 Qtr. Weizen und ebenfalls in a Ctr. Eisen existirt. Beide sind also gleich einem *Dritten*, das an und für sich weder das eine, noch das andere ist. Jedes der beiden, soweit es Tauschwerth, muß also, unabhängig von dem andern, auf dieß Dritte reducirt sein.
- ④ Ein einfaches geometrisches Beispiel veranschauliche dieß. Um den Flächeninhalt aller gradlinigen Figuren zu bestimmen und zu vergleichen, löst man sie in Dreiecke auf. Das Dreieck selbst reducirt man auf einen von seiner sichtbaren Figur ganz verschiedenen Ausdruck – das halbe Produkt seiner Grundlinie mit seiner Höhe. Ebenso sind die Tauschwerthe der Waaren zu reduciren auf ein *Gemeinsames*, wovon sie ein Mehr oder Minder darstellen.
- ⑤ Daß die Substanz des Tauschwerths ein von der physisch-handgreiflichen Existenz der Waare oder ihrem Dasein als *Gebrauchswerth* [4] durchaus Verschiedenes und Unabhängiges, zeigt ihr Austauschverhältniß auf den ersten Blick. Es ist charakterisirt eben durch die *Abstraktion vom Gebrauchswerth*. Dem Tauschwerth nach betrachtet ist nämlich eine Waare grade so gut als jede andre, wenn sie nur in richtiger Proportion vorhanden ist).
- ⑥ Unabhängig von ihrem Austauschverhältniß oder von der *Form*, worin sie als *Tausch-Werthe* erscheinen, sind die Waaren daher zunächst als *Werthe* schlechthin zu betrachten).
- ⑦ Als Gebrauchsgegenstände oder Güter sind die Waaren *körperlich verschiedene* Dinge. Ihr *Werthsein* bildet dagegen ihre *Einheit*. Diese Einheit entspringt nicht aus der Natur, sondern aus der Gesellschaft. Die *gemeinsame gesellschaftliche Substanz*, die sich in verschiedenen Gebrauchswerthen nur verschieden darstellt, ist – *die Arbeit*.
- ⑧ Als *Werthe* sind die Waaren nichts als *krystallisirte Arbeit*. Die Maßeinheit der Arbeit selbst ist die *einfache Durchschnittsarbeit*, deren Charakter zwar in verschiedenen Ländern und Kulturepochen wechselt, aber in einer vorhandenen Gesellschaft gegeben ist. Komplirtere Arbeit gilt nur als *potenzirte* oder vielmehr *multiplirte* einfache Arbeit, so daß z. B. ein kleineres Quantum komplirter Arbeit gleich einem größeren Quantum einfacher Arbeit. Wie diese Reduktion geregelt wird, ist hier gleichgültig. Daß sie beständig vorgeht, zeigt die Erfahrung. Eine Waare mag das Produkt der komplirtesten Arbeit sein. Ihr *Werth* setzt sie dem Produkt einfacher Arbeit gleich und stellt daher selbst nur ein bestimmtes Quantum einfacher Arbeit dar.
- ⑨ Ein Gebrauchswerth oder Gut hat also nur einen *Werth*, weil *Arbeit* in ihm *vergegenständlicht* oder *materialisirt* ist. Wie nun die *Größe* seines Werthes messen? Durch das *Quantum* der [5] in ihm enthaltenen „werthbildenden Substanz“, der Arbeit. Die Quantität der Arbeit selbst mißt sich an ihrer *Zeitdauer* und die *Arbeitszeit* besitzt wieder ihren Maßstab an *bestimmten Zeittheilen*, wie Stunde, Tag u. s. w.
- ① Der Tauschwerth erscheint zunächst als das *quantitative Verhältniß*, die Proportion, worin sich Gebrauchswerthe einer Art gegen Gebrauchswerthe anderer Art austauschen, ein Verhältniß, das beständig mit Zeit und Ort wechselt. Der Tauschwerth scheint daher etwas Zufälliges und rein *Relatives*, ein der Waare innerlicher, immanenter Tauschwerth (valeur intrinsèque) also eine *contradictio in adjecto*). Betrachten wir die Sache näher.
- ② Eine einzelne Waare, ein Quarter Weizen z. B. tauscht sich in den *verschiedensten Proportionen* mit andern Artikeln aus. Dennoch bleibt sein Tauschwerth *unverändert*, ob in x Stiefelwiche, y Seide, z Gold u. s. w. ausgedrückt. Er muß also einen von diesen verschiedenen *Ausdrucksweisen* unterscheidbaren Gehalt haben.
- ③ Nehmen wir ferner zwei Waaren, z. B. Weizen und Eisen. Welches immer ihr Austauschverhältniß, es ist stets darstellbar in einer Gleichung, worin ein gegebenes Quantum Weizen irgend einem Quantum Eisen gleichgesetzt wird, z. B. 1 Quarter Weizen = a Ctr. Eisen. Was besagt diese Gleichung? Daß ein *Gemeinsames* von derselben Größe in zwei verschiedenen Dingen existirt, in 1 Quarter Weizen und ebenfalls in a Ctr. Eisen. Beide sind also gleich einem *Dritten*, das an und für sich weder das eine, noch das andere ist. Jedes der beiden, soweit es Tauschwerth, muß also auf dieß Dritte reducirt sein.
- ④ Ein einfaches geometrisches Beispiel veranschauliche dieß. Um den Flächeninhalt aller gradlinigen Figuren zu bestimmen und zu vergleichen, löst man sie in Dreiecke auf. Das Dreieck selbst reducirt man auf einen [12] von seiner sichtbaren Figur ganz verschiedenen Ausdruck – das halbe Produkt seiner Grundlinie mit seiner Höhe. Ebenso sind die Tauschwerthe der Waaren zu reduciren auf ein *Gemeinsames*, wovon sie ein Mehr oder Minder darstellen.
- ⑤ Dieß *Gemeinsame* kann nicht eine geometrische, physische, chemische oder sonstige natürliche Eigenschaft der Waaren sein. Ihre körperlichen Eigenschaften kommen überhaupt nur in Betracht, soweit selbe sie nutzbar machen, also zu Gebrauchswerthen. Andererseits ist aber das Austauschverhältniß der Waaren augenscheinlich charakterisirt durch die Abstraktion von ihren Gebrauchswerthen. Innerhalb desselben gilt ein Gebrauchswerth grade so viel wie jeder andre, wenn er nur in gehöriger Proportion vorhanden ist. Oder, wie der alte *Barbon* sagt: „Die eine Waarensorte ist so gut wie die andre, wenn ihr Tauschwerth gleich groß ist. Da existirt keine Verschiedenheit oder Unterscheidbarkeit zwischen Dingen von gleich großem Tauschwerth“. Als Gebrauchswerthe sind die Waaren vor allem *verschiedner Qualität*, als Tauschwerthe können sie nur *verschiedner Quantität* sein, enthalten also kein Atom Gebrauchswerth.
- ⑥ Sieht man nun vom Gebrauchswerth der Waarenkörper ab, so bleibt ihnen nur noch eine Eigenschaft, die von Arbeitsprodukten. Jedoch ist uns auch das Arbeitsprodukt bereits in der Hand verwandelt. Abstrahiren wir von seinem Gebrauchswerth, so abstrahiren wir auch von den körperlichen Bestandtheilen und Formen, die es zum Gebrauchswerth machen. Es ist nicht länger Tisch oder Haus oder Garn oder sonst ein nützlich Ding. Alle seine sinnlichen Beschaffenheiten sind ausgelöscht. Es ist auch nicht länger das Produkt der Tischlerarbeit oder der Bauarbeit oder der Spinnarbeit oder sonst einer bestimmten produktiven Arbeit. Mit dem nützlichen Charakter der Arbeitsprodukte verschwindet der nützliche Charakter der in ihnen dargestellten Arbeiten, es verschwinden also auch die verschiedenen konkreten Formen dieser Arbeiten, sie unterscheiden sich nicht länger, sondern sind allzusammnt reducirt auf gleiche menschliche Arbeit, abstrakt menschliche Arbeit.]
- ⑦ [13] Betrachten wir nun das Residuum der Arbeitsprodukte. Es ist nichts von ihnen übrig geblieben als dieselbe gespenstige Gegenständlichkeit, eine bloße Gallerte unterschiedsloser menschlicher Arbeit, d. h. der Verausgabung menschlicher Arbeitskraft ohne Rücksicht auf die Form ihrer Verausgabung. Diese Dinge stellen nur noch dar, daß in ihrer Produktion menschliche Arbeitskraft verausgabt, menschliche Arbeit aufgehäuft ist. Als Krystalle dieser ihnen gemeinschaftlichen gesellschaftlichen Substanz sind sie – *Werthe*.
- ⑧ Im Austauschverhältniß der Waaren selbst erschien uns ihr Tauschwerth als etwas von ihren Gebrauchswerthen durchaus Unabhängiges. Abstrahirt man nun wirklich vom Gebrauchswerth der Arbeitsprodukte, so erhält man ihren Werth wie er eben bestimmt ward. Das *Gemeinsame* was sich im Austauschverhältniß oder Tauschwerth der Waaren darstellt, ist also ihr Werth. Der Fortgang der Untersuchung wird uns zurückführen zum Tauschwerth als der nothwendigen Ausdrucksweise oder Erscheinungsform des Werths, welcher zunächst jedoch unabhängig von dieser Form zu betrachten ist.
- ⑨ Ein Gebrauchswerth oder Gut hat also nur einen Werth, weil ab menschliche Arbeit in ihm vergegenständlicht oder materialisirt ist nun die Größe seines Werths messen? Durch das Quantum der in ihm gehaltenen „werthbildenden Substanz“, der Arbeit. Die Quantität der selbst mißt sich an ihrer Zeitdauer und die Arbeitszeit besitzt wieder Maßstab an bestimmten Zeittheilen, wie Stunde, Tag u. s. w.



- ① La valeur d'échange apparaît d'abord comme le rapport *quantitatif*, comme la proportion dans laquelle des valeurs d'usage d'espèce différente s'échangent l'une contre l'autre, rapport qui change constamment avec le temps et le lieu. La valeur d'échange semble donc quelque chose d'arbitraire et de purement relatif; une valeur d'échange intrinsèque, immanente à la marchandise, paraît être, comme dit l'école, une *contradictio in adjecto*<sup>7</sup>. Considérons la chose de plus près.
- ② Une marchandise particulière, un quarteron de froment, par exemple, s'échange dans les proportions les plus diverses avec d'autres articles. Cependant sa valeur d'échange reste immuable, de quelque manière qu'on l'exprime, en x cirage, y soie, z or, et ainsi de suite. Elle doit donc avoir un contenu distinct de ces expressions diverses.
- ③ Prenons encore deux marchandises, soit du froment et du fer. Quel que soit leur rapport d'échange, il peut toujours être représenté par une équation dans laquelle une quantité donnée de froment est réputée égale à une quantité quelconque de fer, par exemple: 1 quarteron de froment = a kilogramme de fer. Que signifie cette équation? C'est que dans deux objets différents, dans 1 quarteron de froment et dans a kilogramme de fer, il existe quelque chose de commun. Les deux objets sont donc égaux à un *troisième* qui par lui-même n'est ni l'un ni l'autre. Chacun des deux doit, en tant que valeur d'échange, être réductible au troisième, indépendamment de l'autre.
- ④ Un exemple emprunté à la géométrie élémentaire va nous mettre cela sous les yeux. Pour mesurer et comparer les surfaces de toutes les figures rectilignes, on les décompose en triangles. On ramène le triangle lui-même à une expression tout à fait différente de son aspect visible, — au demi-produit de sa base par sa hauteur. — De même les valeurs d'échange des marchandises doivent être ramenées à quelque chose qui leur est commun et dont elles représentent un plus ou un moins.
- ⑤ Ce quelque chose de commun ne peut être une propriété naturelle quelconque, géométrique, physique, chimique, etc., des marchandises. Leurs qualités naturelles n'entrent en considération qu'autant qu'elles leur donnent une utilité qui en fait des valeurs d'usage. Mais d'un autre côté il est évident que l'on fait abstraction de la valeur d'usage des marchandises quand on les échange et que tout rapport d'échange est même caractérisé par cette abstraction. Dans l'échange, une valeur d'utilité vaut précisément autant que toute autre, pourvu qu'elle se trouve en proportion convenable. Ou bien, comme dit le vieux Barbon: «Une espèce de marchandise est aussi bonne qu'une autre, quand sa valeur d'échange est égale; il n'y a aucune différence, aucune distinction dans les choses chez lesquelles cette valeur est la même<sup>8</sup>.» Comme valeurs d'usage, les marchandises sont avant tout de qualité différente; comme valeurs d'échange, elles ne peuvent être que de différente quantité.
- ⑥ La valeur d'usage des marchandises une fois mise de côté, il ne leur reste plus qu'une qualité, celle d'être des produits du travail. Mais déjà le produit du travail lui-même est métamorphosé à notre insu. Si nous faisons abstraction de sa valeur d'usage, tous les éléments matériels et formels qui lui donnaient cette valeur disparaissent à la fois. Ce n'est plus, par exemple, une table, ou une maison, ou du fil, ou un objet utile quelconque; ce n'est pas non plus le produit du travail du tourneur, du maçon, de n'importe quel travail productif déterminé. Avec les caractères utiles particuliers des produits du travail disparaissent en même temps, et le caractère utile des travaux qui y sont contenus, et les formes concrètes diverses qui distinguent une espèce de travail d'une autre espèce. Il ne reste donc plus que le caractère commun de ces travaux; ils sont tous ramenés au même travail humain, à une dépense de force humaine de travail sans égard à la forme particulière sous laquelle cette force a été dépensée.
- ⑦ Considérons maintenant le résidu des produits du travail. Chacun d'eux ressemble complètement à l'autre. Ils ont tous une même réalité fantomatique. Métamorphosés en *sublimés* identiques, échan||15|tillons du même travail indistinct, tous ces objets ne manifestent plus qu'une chose, c'est que dans leur production une force de travail humaine a été dépensée, que du travail humain y est accumulé. En tant que cristaux de cette substance sociale commune, ils sont réputés valeurs.
- ⑧ Le quelque chose de commun qui se montre dans le rapport d'échange ou dans la valeur d'échange des marchandises est par conséquent leur valeur; et une valeur d'usage, ou un article quelconque, n'a une valeur qu'autant que du travail humain est matérialisé en lui.
- ⑨ Comment mesurer maintenant la grandeur de sa valeur? Par le *quantum* de la substance «créatrice de valeur» contenue en lui, du travail. La quantité de travail elle-même a pour mesure sa durée dans le temps, et le temps de travail possède de nouveau sa mesure dans des parties du temps telles que l'heure, le jour, etc.



## 初版

①交換価値は、まず第一に、ある一つの種類の諸使用価値が他の種類の諸使用価値と交換される量的な関係、すなわち割合として現われるのであって、それは、時と所とによって絶えず変動する関係である。それゆえ、交換価値は、偶然的なもの、純粹に相対的なものであるように見え、したがって、商品に内生的な、内生的な交換価値 (valeur intrinsèque) というものは、一つの形容矛盾であるように見える。このことをもっと詳しく考察してみよう。

②ある一つの商品、たとえば1クォーターの小麦は、他の諸物品ときわめてさまざまに違っている割合で交換される。それにもかかわらず、この小麦の交換価値は、x量の靴墨、y量の絹、z量の金などで表現されようと、不変のままである。だから、この交換価値は、その、このようないろいろな表現様式からは区別されるものでなければならない。

③あらためて、二つの商品、たとえば、小麦と鉄をとってみよう。それらの交換関係がどうであろうと、この関係は、つねに、ある与えられた量の小麦がどれだけかの量の鉄に等置される、という一つの等式で表わすことができる。たとえば、1クォーターの小麦 = a ツェントナーの鉄というように。この等式はなにを意味しているのだろうか？ 同じ価値が二つの違った物のうちに、すなわち1クォーターの小麦のなかにも a ツェントナーの鉄のなかにも、存在するということである。したがって、両方ともある一つの第三のものに等しいのであるが、この第三のものは、それ自体としては、その一方のものでもなければ他方のものでもない。だから、それらのうちのどちらも、それが交換価値であるかぎり、他方のものからは独立に、この第三のものに還元されるものでなければならないのである。

④簡単な幾何学上の一例が、このことをもっとわかりやすくするであろう。あらゆる直線図形の面積を確定し比較するためには、それらをいくつかの三角形に分解する。その三角形そのものを、目に見えるその形とはまったく違った一表現——その底辺と高さとの積の二分の一——に還元する。これと同様に、諸商品の諸交換価値は一つの共通なものに還元されるのであって、諸交換価値はこの共通なもの、あるいはより多くを、あるいはより少なくを、表わしているのである。

⑤交換価値の実体が商品の物理的な手をつかめる存在または使用価値としての商品の存在とはまったく違ったものであり独立なものであるということは、商品の交換関係がひと目でこれを示している。この交換関係は、まさに使用価値の捨象によって特徴づけられているのである。すなわち、交換価値から見れば、ある一つの商品は、それがただ正しい割合でそこにありさえすれば、どのほかの商品ともまったく同じなのである。

⑥それゆえ、諸商品は、それらの交換関係からは独立に、またそれらが諸交換価値として現われる場合の形態からは独立に、まず第一に、単なる諸価値として考察されるべきなのである。

## 第二版

①交換価値は、まず第一に、ある一つの種類の諸使用価値が他の種類の諸使用価値と交換される量的な関係、すなわち割合として現われるのであって、それは、時と所とによって絶えず変動する関係である。それゆえ、交換価値は、偶然的なもの、純粹に相対的なものであるように見え、したがって、商品に内生的な、内生的な交換価値 (valeur intrinsèque) というものは、一つの形容矛盾であるように見える。このことをもっと詳しく考察してみよう。

②ある一つの商品、たとえば1クォーターの小麦は、他の諸物品ときわめてさまざまに違っている割合で交換される。それにもかかわらず、この小麦の交換価値は、x量の靴墨、y量の絹、z量の金などで表現されようと、不変のままである。だから、この交換価値は、その、このようないろいろな表現様式とは違った内容をもっていなければならない。

③あらためて、二つの商品、たとえば、小麦と鉄をとってみよう。それらの交換関係がどうであろうと、この関係は、つねに、ある与えられた量の小麦がどれだけかの量の鉄に等置される、という一つの等式で表わすことができる。たとえば、1クォーターの小麦 = a ツェントナーの鉄というように。この等式はなにを意味しているのだろうか？ 同じ大きさの二つの共通なものが、二つの違った物のうちに、すなわち1クォーターの小麦のなかにも a ツェントナーの鉄のなかにも、存在するということである。したがって、両方ともある一つの第三のものに等しいのであるが、この第三のものは、それ自体としては、その一方でもなければ他方でもない。だから、それらのうちのどちらも、それが交換価値であるかぎり、この第三のものに還元できるものでなければならない。

④簡単な幾何学上の一例が、このことをもっとわかりやすくするであろう。あらゆる直線図形の面積を確定し比較するためには、それらをいくつかの三角形に分解する。その三角形そのものを、目に見えるその形とはまったく違った一表現——その底辺と高さとの積の二分の一——に還元する。これと同様に、諸商品の諸交換価値は一つの共通なものに還元されるのであって、諸交換価値はこの共通なもの、あるいはより多くを、あるいはより少なくを、表わしているのである。

⑤この共通なものは、商品の幾何学的とか物理学的とか化学的などというような自然的な属性ではありえない。およそ商品の物理的な属性は、ただそれらが商品を有用にし、したがって使用価値にするかぎりでしか問題にならないのである。ところが、他方、諸商品の交換関係は、まさに諸商品の使用価値の抽象に明白に特徴づけられているのである。この交換関係のなかでは、ある一つの使用価値は、それがただ適当な割合でそこにありさえすれば、ほかのどの使用価値ともちょうど同じだけのものと認められるのである。[邦訳中略] 使用価値としては、諸商品は、なによりもまず、いろいろに違った質であるが、交換価値としては、諸商品はただいろいろに違った量でしかありえないのであり、したがって一分子の使用価値も含んではいけないのである。

## フランス語版

①交換価値はまず、量的な関係として、相異なる種類の使用価値が相互に交換し合う割合、すなわち、時と所とともに不斷に変化する関係として、現われる。したがって、交換価値は、気まぐれで純粹に相対的なものであるかのように見える。すなわち、商品に固有で内生的な交換価値は、スコラ学派が言うように、一つの形容矛盾であるかのように見える。このことをいっそう詳細に考察しよう。

②特殊な一商品、たとえば一クォーターの小麦は、他の商品とこの上なくさまざまな割合で交換される。それにもかかわらず、その交換価値は、それがx量の靴墨、y量の絹、z量の金等々でどのよう表現されようとも、相変わらず不変である。だから、それは、これらのさまざまな表現とはちがった内容をもっていなければならない。

③あらためて、二つの商品、小麦と鉄をとってみよう。両者の交換関係がどうであろうと、その関係はつねに一つの等式で表わすことができるが、その等式では所与の量の小麦がなにがしかの量の鉄に等しいとみなされる。たとえば一クォーターの小麦 = a キログラムの鉄 というように。この等式はなにを意味するか？ それは、二つの相異なる物体、一クォーターの小麦と a キログラムの鉄のなかにも共通なあるものが存在している、ということである。したがって、これら二つの物体は第三の物体に等しいが、第三の物体はそれ自体としては両者のいずれでもない。両者はどちらも、交換価値として、相手の物体に關係なく第三の物体に還元できるものである。

④初等幾何学から借用する一例が、このことを明白にしてくれる。あらゆる直線形の面積を比較するためには、われわれはこれを三角形に分解する。われわれはこの三角形そのものを、目に見える外形とは全くちがった表現——底辺と高さの積の二分の一——に還元する。これと同様に、商品の交換価値も、それらに共通なあるものに還元されるはずであり、そのあるものが多いか少ないかを表わすものなのである。

⑤この共通なあるものは、商品の幾何学的、物理学的、化学的などといった、なにか自然的な属性ではありえない。商品の自然的な特性は、それがこの商品に、使用価値を産む有用性を与えるかぎりでのみ、考察されるものなのである。しかし、他方では、自明のことだが、商品が交換されるばあい、商品の使用価値は捨象されるし、どの交換価値もこの捨象によって特徴づけられてさえている。交換においては、ある使用価値は、それが適当な割合にありさえすれば、他のどの使用価値ともちょうど同じだけの価値がある。[邦訳中略] 使用価値としては、商品はまず相異なる質であるが、交換価値としては、相異なる量でしかありえない。

## 初 版

⑦使用対象または諸財貨としては、諸商品は物的に違っている諸物である。これに反して、諸商品の価値存在は諸商品の統一性をなしている。この統一性は、自然から生ずるのではなくて、社会から生ずるのである。いろいろに違う諸使用価値においてただ違って表わされるだけの、**共通な社会的実体**、それは——**労働**である。

⑧諸価値としては、諸商品は**結晶した労働**よりほかのなにものでもない。この労働そのものの度量単位は**単純な平均労働**であって、その性格は、国や文化が違っていれば違っているには違いないが、しかし、ある現在の社会においては与えられている。より複雑な労働は、ただ、単純な労働が**数乗されたもの**とみなされるだけであって、したがって、たとえば、より小さい量の複雑労働はより大きい量の単純労働に等しいのである。このような換算がどのようにして調整されるか、ということここでは問題ではない。それが絶えず行なわれているということは、経験の示すところである。ある商品はきわめて複雑な労働の生産物であるかもしれない。その**価値**は、その商品を単純労働の生産物に等置するのであって、したがって、それ自身はただ一定量の単純労働を表わしているだけなのである。

⑨こういうわけで、ある使用価値または財貨がある**価値**をもつのは、ただ、**労働**がそれに対象化されている、または物質化されているからにほかならない。では、それらの価値の大きさはどのようにして計られるのであろうか？ それらのなかに含まれている「**価値形成実体**」の、労働の、量によってである。労働の量そのものは労働の継続時間で計られ、労働時間はまた時間や日などというような一定の時間部分をその尺度としている。

## 第二版

⑥そこで商品体の使用価値を問題にしないことにすれば、商品体に残るものは、ただ**労働生産物**という属性だけである。しかし、この労働生産物も、われわれの気がつかないうちにすでに変えられている。労働生産物の使用価値を捨象するならば、それを使用価値にしている物的な諸成分や諸形態をも捨象することになる。それは、もはや机や家や糸やその他の有用物ではない。労働生産物の感覺的性状はすべて消し去られている。それはまた、もはや指物労働や建築労働や紡績労働やその他の一定の生産的労働の生産物でもない。労働生産物の有用性といっしょに、労働生産物に表わされている労働の有用性は消え去り、したがってまたこれらの労働のいろいろな具体的形態も消え去り、これらの労働はもはや互いに区別されることなく、すべてごとごとく同じ人間労働に、抽象的**人間労働**に、還元されているのである。

⑦そこで今度はこれらの労働生産物に残っているものを考察してみよう。それらに残っているものは、同じ幽霊のような対象性のほかにはなにもなく、無差別な人間労働の、すなわちその支出の形態にはかわりがない人間労働力の支出の、ただの凝固物のほかにはなにもない。これらの物が表わしているのは、ただ、その生産に人間労働力が支出されており、人間労働が積み上げられているということだけである。このようなそれらに共通な社会的実体の結晶として、これらのものは——**価値**なのである。

⑧諸商品の交換関係そのもののなかでは、商品の交換価値は、その使用価値にはまったくかわりがないものとしてわれわれの前に現われた。そこで、実際に労働生産物の使用価値を捨象してみれば、ちょうどいま規定されたおりの労働生産物の価値が得られる。だから、商品の交換関係または交換価値のうちに現われる共通なものは、商品の価値なのである。研究の進行は、われわれを、価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値につれもどすことになるであろう。しかし、この価値は、さしあたりまずこの形態にはかわりなしに考察されなければならない。

⑨こういうわけで、ある使用価値または財貨がある**価値**をもつのは、ただ、抽象的**人間労働**がそれに対象化されている、または物質化されているからにほかならない。では、それらの価値の大きさはどのようにして計られるのであろうか？ それらのなかに含まれている「**価値形成実体**」の、労働の、量によってである。労働の量そのものは労働の継続時間で計られ、労働時間はまた時間や日などというような一定の時間部分をその尺度としている。

## フランス語版

⑥商品の使用価値がひとたびわきに片づけられると、商品にはもはや一つの特性、労働生産物であるという特性しか残らない。しかし、すでに労働生産物そのものが、われわれの知らぬ間に変態されている。もしわれわれが労働生産物の使用価値を捨象するならば、労働生産物に使用価値を与えているあらゆる物質的ならびに形状的な要素も、同時に消滅する。それはもはや、たとえば机でも家でも糸でもないし、なんらかの有用物でもない。それはまた糸織り女工や石工の労働の生産物、すなわち、どんな特定の生産労働の生産物でもない。労働生産物の個々の有用性格と一緒に、そのうちに含まれている労働の有用性格も、ある種類の労働を他の種類の労働から区別するさまざまな具体的形態も、同時に消滅する。したがって、もはや、これらの労働に共通な性格しか残らない。これらの労働はすべて同じ人間労働に、人間労働力の支出に、人間労働力が支出された個々の形態にかかわりなく、還元される。

⑦さて、労働生産物の残留物を考察しよう。それぞれの労働生産物は、他の労働生産物に完全に類似している。どの労働生産物にも、幽霊のような同一の実在がある。これらすべての物体は同一の**昇華物**、同じ無差別な労働という原器に変態されて、もはや一つの物としか表わさない。すなわち、これらの物体の生産には人間労働力が支出されたということ、そこには人間労働が積み重ねられているという結晶点である。この共通な社会的実体の結晶として、これらの物体は**価値**とみなされる。

⑧したがって、交換関係のうちに、すなわち諸商品の交換価値のうちに現われる共通なものが、それら諸商品の**価値**なのである。そしてこういうわけで、使用価値あるいはなんらかの物品は、人間労働がそのうちに物質化されているかぎりでのみ、**価値**をもつのである。

⑨さて、商品の**価値**量をどのようにして測定するのか？ それに含まれている「**価値を創造する**」実体の分量、すなわち労働の分量によってである。労働の量そのものは、労働の継続時間を尺度とし、労働時間はまた、時間や日等のような時間部分をその尺度としている。

(ゴシック体部分は原文強調箇所)

## (iii) パラグラフ①および②の検討

パラグラフ①には問題にすべきところはない。初版と第二版とは強調箇所の有無以外完全に同一であり、フランス語版も内容上まったく同じである。使用価値をその素材的担い手とする交換価値とは何であるのかという分析の途に入っていく。ところが、交換価値は「時と所によって絶えず変動する関係」であり、「純粋に相対的なもの」に見え、したがって商品そのものの内的な社会的属性として交換価値があるようには見えないというわけである。

パラグラフ②に移ろう。ここは詳細に分析しなければならない。次の箇所が問題である。

初 版：Er muss also von diesen seinen verschiedenen *Ausdrucksweisen* unterscheidbar sein.

だから、それ [「一クォーターの小麦の交換価値」：引用者] は、その、このようないろいろな表現様式からは区別されうるものでなければならない。

第二版：Er muß also einen von diesen verschiedenen *Ausdrucksweisen* unterscheidbaren *Gehalt* haben.

だから、それ [「一クォーターの小麦の交換価値」：引用者] は、その、このようないろいろな表現様式とは違った内容をもっていなければならない。

仏語版：Elle doit donc avoir un contenu distinct de ces expressions diverses.

だから、それ [「一クォーターの小麦の交換価値」：引用者] は、これらのさまざまな表現とは違った内容をもっていなければならない。

三つの版でこのように文章表現が異なっているが、これらの文章が受ける内容は三つの版で相違はない。すなわち、1クォーターの小麦の交換価値は、x量の靴墨、y量の絹、z量の金等々で表現されうるが、この1クォーターの小麦の交換価値はそのようなさまざまな表現をもつとはいえ、いずれも1クォーターの小麦の交換価値であるかぎり同じである、という内容をうけての文章である。

まず初版であるが、第二版・フランス語版と比べて表現に論理上の難点がある。なぜなら、「それ」=「1クォーターの小麦の交換価値」は種々様々の交換価値としてある諸表現様式とは区別されなければならない、と言うのであるが、ここで例にあげられている種々の等置関係=諸表現形態から解るように、交換価値自体がある表現様式なのであるから、表現様式である交換価値がこれら種々の表現様式から区別されるものだというのは論理的に突き詰めが足りない言い方になってしまうからである。もちろんここでは、交換価値について「内的な、内在的な交換価値というものは、一つの形容矛盾であるように見える」として、交換価値なるものが単なる表現様式・現象形態としてあるのではなく、ある内容=内実としてある可能性をも残した上で上記の表現があるわけだが、にもかかわらず、表現様式から区別される表現様式、という叙述になってしまうことへの論理的な歯止めがなされてはいないのである。この点では第二版はより論理的な突き詰めがなされた表現になっている。1クォーターの小麦の交換価値は、x量の靴墨、y量の絹、z量の金等々といった「いろいろな表現様式とは違った内容〔einen von diesen verschiedenen *Ausdrucksweisen* unterscheidbaren *Gehalt*〕をもっている」と述べているからである。フランス語版もこれと同様の表現「さまざまな表現とは違った内容〔contenu distinct de ces expressions diverses〕をもっている」となっている。つまり、等式・等置が諸交換価値、そうした諸々の表現様式とは違った内容におけるものであることが示されているからである。



こうして初版の「区別されうるものである [unterscheidbar sein]」、第二版の「違った内容 [unterscheidbaren Gehalt]」、フランス語版の「違った内容 [contenu distinct]」が同一の内容を指すことになる。

ではこれらは何であろうか。1クォーターの小麦という商品の種々様々の交換価値に現われている同一の内容、当該商品の一社会的属性、しかもある同じ大きさをもつそれである。同じ大きさの価値であろうか？ それとも同じ量の労働 (= 同じ量の、対象化された抽象的人間労働) であろうか？ 決して労働ではありえない。価値、同じ大きさの価値である。種々様々な表現としてある一つの同じ大きさの交換価値に現われ出るものであり、感覚的に捉えられ得ない価値 (しかもある大きさを持ったそれ) 以外ではなく、それが交換価値としてわれわれの感覚に捉えられることになるのである。対象化された労働が価値を飛び越して交換価値に現われるということはない。諸商品が労働生産物であることは明らかに感覚的に捉えられるものであり、この対象化された労働を抽象的人間労働へと抽象することは、分析的思惟にとって困難なことではなく、もしそれが現われ出るとすれば、価値抜きで交換価値に、ではなく、直接に労働時間を尺度とした労働そのものとして現われ出るであろうし、いわゆる価値規定が問題になるだけであろう<sup>44)</sup>。つまり、労働生産物は商品として社会に登場することはなく、労働生産物として、ただし価値規定を受けるそれとして社会的に認められ扱われるであろう。

かくして、種々様々の表現をとる、同じ大きさの交換価値は、妥当な大きさをもった、超感覚的な価値が表れ出たものだということなのである。

ところで、パラグラフ②は第三版 (1883年) では大幅に書き換えられている。以下のように。

Eine gewisse Waare, ein Quarter Weizen z.B. tauscht sich mit x Stiefelwichse, oder mit y Seide, oder mit z Gold u.s.w., kurz mit andern Waaren in den verschiedensten Proportionen. Mannigfache Tauschwerthe also hat der Weizen statt eines einzigen. Aber da x Stiefelwichse, ebenso y Seide, ebenso z Gold u.s.w. der Tauschwerth von einem Quarter Weizen ist, müssen x Stiefelwichse, y Seide, z Gold u.s.w. durcheinander ersetzbare oder einander gleich große Tauschwerthe sein. Es folgt daher erstens: Die gültigen Tauschwerthe derselben Waare drücken ein Gleiches aus. Zweitens aber: Der Tauschwerth kann überhaupt nur die Ausdrucksweise, die „Erscheinungsform“ eines von ihm unterscheidbaren Gehalts sein.

ある特定の商品、たとえば1クォーターの小麦は、x量の靴墨、y量の絹、z量の金などと、要するにきわめてさまざまな比率で他の諸商品と交換される。だから、小麦は、ただ一つの交換価値をもっているのではなく、いろいろな交換価値をもっている。しかし、x量の靴墨もy量の絹もz量の金なども、どれも1クォーターの小麦の交換価値であるから、x量の靴墨、y量の絹、z量の金などは、互いに置き換えうる、または互いに等しい大きさの、諸交換価値でなければならない。それゆえ、こういうことになる。第一に、同じ商品の妥当な諸交換価値は一つの等しいものを表現する。しかし、第二に、交換価値は、一般にただ、それとは区別されうるある内容の表現様式、「現象形態」でしかありえない<sup>45)</sup>。

これは第四版 (1890年。いわゆるエンゲルス版で現行版と同じ) にそのまま継承されている。第三版

はマルクス死後すぐに出されたものだが、この書き換えはマルクスの指示によるものだろうか。MEGA, II/6には「『資本論』第一巻のための補足と改訂」と題する草稿が、またMEGA, II/8には、第二版のマルクス自用本への書き込みがわかる写真、およびそれらの書き込みが編集・収録されているが、それらを見る限り、後者に、このパラグラフ②の書き換えの指示がいくつかマルクス自身によってなされていることがわかる。だが、ここでわれわれが問題にしたい以下の部分についてはその指示を見出すことができない。

Es folgt daher erstens: Die gültigen Tauschwerthe derselben Waare drücken ein Gleiches aus. Zweitens aber: Der Tauschwerth kann überhaupt nur die Ausdrucksweise, die „Erscheinungsform“ eines von ihm unterscheidbaren Gehalts sein.

口頭による指示に基づくものとの可能性もありうるにせよ、表現の違いの微妙さからしてその可能性は小さいように思われる。だとすれば、この書き換えはエンゲルスによるものの可能性が大きいことになる。これを踏まえてこの書き換え部分をどのように解釈するかが問題となる。まず「第二に」として述べられている「ある内容〔ein Gehalt〕」が価値を指すことは明らかである。第二版で言えば、この少し後のパラグラフ⑧に、「価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値」と述べられていることからはっきりしている（これは第三版にもそのまま受け継がれている）。では「第一に」として述べられている「一つの等しいもの」とは何であろうか。これが先に検討した第二版の「いろいろな表現様式とは違った内容」のことであることもまた明らかである。すなわち「同じ大きさの価値」である。わざわざ「第一に」、「第二に」と区分した表現をしながら同じく価値について述べていることはいささか不自然な感じがしないではないが、この書き換えの理由についてわれわれは次のように考える。

初版では「価値」を厳密に論理的・分析的に導出せず、それを前提にもしくは仮言的に措いていたわけであるが、マルクスはこの点を第二版で書き換えようとした。このマルクスの目的を第三版においてエンゲルスがより鮮明にしようとした、と。つまり、「第一に」として具体的なある大きさをもった価値について述べた上で、「第二に」としてそもそも価値なるものは、という形で価値が交換価値から概念的に区分されるものであることを先取りして強調したわけである。

だが、このエンゲルスによる（とわれわれが考えるところの）書き換えによって、新たな誤読が生まれることにもなった。「第一に」として述べられた「一つの等しいもの」を二商品に表わされた抽象的人間労働だと捉える誤読、つまり、「第一に」で労働、「第二に」で価値、を述べていると考える誤読である<sup>46)</sup>。これは、量的規定性は別として「第一に」も「第二に」も共に価値について述べていることの不自然さに起因したものと言えるが、われわれが先に行なったように初版、第二版、フランス語版を比較検討すれば誤読であることが明確になる。

#### (iv) パラグラフ③の検討

パラグラフ③の解説にかかろう。初版と第二版の冒頭部分にある *ferner* だが、多くの邦訳では「さらに」と訳されたりしているが、この箇所の正確な意味は「あらためて」である。この直前のパラグラフ②で、数多くの交換関係・等式が取られ、例としての1クォーターの小麦の多くの諸交換価値が示されるが、しかしこの種々の交換価値も結局は1クォーターの小麦の交換価値を表わして

いるのだということが述べられており、これをうけてパラグラフ③であらためて代表として一つの交換関係・等置関係が取られることになるからである。この、あらためて代表として一つの交換関係・等置関係が取り出されているという点が重要である。歴大な等置関係をその背後に持つ代表としての等式〈1クォーターの小麦 = a ツェントナーの鉄〉が分析されることになる<sup>47)</sup>。

まず確認しておかなければならないことは、ある等置関係が問題となる以上、それがいかなる属性における等置であるのかが問われるという点である。異種の二つのものが等置される場合、それら二つのものに共通するいかなる自然的あるいは社会的属性における等置であるのかがまず明らかにされなければならない。体積、質量、熱容量、電気容量等々といった自然的属性、あるいは身分、学歴、価値等々といった社会的属性のいずれにおいて等しいとされているのかがまずもって明らかにされる必要がある。等式を見れば明らかのように、ここでは異種の二商品の等置である。それはまさしく価値における等置なのであるが、初版ではそのことが分析によって導出されること抜きに前提されている、もしくは仮言的に措かれてしまっている。これに対してマルクスは第二版ではこの等式がいかなる属性におけるものであるのかを、分析的に厳密に導出しようとしている。そのことが各版の対照からはっきりと読み取ることができる。三つの版ではそれぞれ次のように述べている。

初 版：Was besagt diese Gleichung? Daß derselbe Werth in zwei verschiednen Dingen in 1 Qtr. Weizen und ebenfalls in a Ctr. Eisen existirt.

この等式はなにを意味しているのでしょうか？ 同じ価値が二つの違った物のうちに、すなわち1クォーターの小麦のなかにも a ツェントナーの鉄のなかにも、存在するということである。

第二版：Was besagt diese Gleichung? Daß ein Gemeinsames von derselben Grösse in zwei verschiednen Dingen existirt [...].

この等式はなにを意味しているのでしょうか？ 同じ大きさの一つの共通なものが、二つの違った物のうちに、すなわち1クォーターの小麦のなかにも a ツェントナーの鉄のなかにも、存在するということである。

仏語版：Que signifie cette équation? C'est que dans deux objets différents, dans 1 quarteron de froment et dans a kilogramme de fer, il existe quelque chose de commun.

この等式はなにを意味するか？ それは、二つの相異なる物体、1クォーターの小麦と a キログラムの鉄のなかに共通なあるものが存在している、ということである。

マルクスはいずれの版においても「この等式の意味」と言っている。初版ではそれについて価値だということを述べてしまっているが、第二版およびフランス語版では「一つの共通なもの〔ein Gemeinsames〕」、「共通なあるもの〔quelque chose de commun〕」という言い方で等式がいかなる属性におけるものであるのかを問題にしている。これが価値であることは初版の言明からも明らかであるが、問題はその大きさである。第二版では「同じ大きさの一つの共通なもの〔ein Gemeinsames von derselben Grösse〕」と等式に示される社会的属性とその大きさとが明確に区分されているのに対して、初版とフランス語版ではこの区分が明確ではない。初版の「同じ価値」、フランス語版の「共通なあるもの」には等式に即した大きさあるいは量の規定が既に含まれている。だが、ある等式がいかなる属性におけるものであるのかということと、その大きさもしくは量の規定との間に



は概念上の厳然たる区別がある。ただ体積や質量などの自然的属性においては、量的規定性がその概念の契機として内在する。これに対して、いま問題にしている価値には、量の規定性が内的な契機としては存在しない。だからこそ、異種の二商品の等置関係においてはまず何よりもそれがいかなる属性におけるものであるのかが、その大きさもしくは量的規定性を規定するまえに概念的に確定されなければならない。価値には量的規定性が内在しないので、まず等式が社会的属性としての価値におけるものであることを明らかにし、その上でその大きさもしくは量的規定性を問題にしなければならないのである。線形時空をなす人間語にとってはそうする以外にはない。マルクスはこの冒頭商品論で、価値（商品価値）を、前資本制社会における諸々の価値の歴史的在り様を前提としそれらを総括するものとして捉え、それをまさしく根源的な価値批判として捉え返すことを目指しており、第二版ではこの点が明確になっている。ただ、人間語による分析としては、まず初めに「一つの共通なもの」における等式であることが述べられ、その上でそれが「同じ大きさ」であることが述べられる必要があり、だから上記に取り上げた文章は内容上、例えば次のように述べられるべきものであろう。

「この等式は何を意味しているのか？ 第一に、等式の両項に置かれた二商品に共通な、ある社会的属性における等置であること、そして第二に、その属性において同じ大きさをもつということである。」

こうして価値なるものは量的規定性を内的契機としないにもかかわらず、商品としての等置においては価値としての等置である以上、価値の大きさという量的規定性が要請され、かくして等式成立の物的な根拠が両項の二商品に内在するものとして社会的に規定されることになる。かくして「したがって [also; done]」という接続詞をもってこの物的根拠について述べていくことになる。等置・等式がある社会的属性におけるものである限り、等式の両項に置かれた二商品はある「第三のもの」に還元される、というのである。この「第三のもの」が等式を成立させている物的な根拠であり、この量の多少が両項に共通なある社会的属性の大きさを規定するということになる。

ここで、価値というものにそもそも量的規定性が契機として含まれないということについてあらためて確認しておきたい。マルクスは冒頭商品論で商品価値についてまずは分析的にその何たるかを明らかにしていこうとするわけだが、ほとんどの場合、商品価値とわざわざ言わずにただ価値と述べている。われわれの考えるに、こうしたマルクスの姿勢は、商品価値概念を従来の諸々の価値一切を歴史的に総括したものとして捉え、その根源的批判を目指していることを示している。だからマルクスは価値にはそもそも内的契機として量的規定性が存在しないことを踏まえ、商品価値には特殊に量を規定する物的な根拠が要請されることを述べるのである。それゆえにこそ等置された両項たる二商品が「第三のもの」に還元されるという表現を用いているのである。この点は、両項が種々の自然的属性において等置される場合と著しい対照をなす。自然的属性、例えば体積における等式を考えると、体積という概念は言うまでもなく物〔Ding〕の自然的属性に関する概念であるので、その内在的契機として量の規定が含まれるのであり、あらためてその量を規定する物的な「第三のもの」を要請することは不要である。価値における等式においてはそうではない。

ともあれ、初版では価値が前提され、もしくは仮言的に措かれ、異種の二商品の等置がこの価値におけるものであることが分析的な導出を抜きにして述べられた上で、この価値における等置が成

り立つ物的根拠＝「第三のもの」は何であるのかが分析的に追究されていく。これに対して、第二版およびフランス語版では価値自体を分析的に導出することが目指され、これを「共通なもの」と規定し、その上でこの「共通なもの」において等式が成り立つ物的根拠が初版と同じく追究される。

ところで、「同じ価値が」商品のなかに「存在する〔existieren〕」という初版の表現にはいささか問題が孕まれているように思われる。価値はそもそも商品の中に存在する (in…existieren) ものであるだろうか？ この表現によるかぎり、何かしら価値自体が物的なもの、それゆえ、価値自体に量の契機が内在しているかのように理解されかねない。価値自体は決して物的なものではない。それは極度に抽象的で純粋に社会的なものである。例えば近世などの前資本制生産社会において紫色のもの、例えば、紫衣が至上の価値をもつものだとされたわけだが、紫色のものそれ自体に自然的属性と同様のものとして価値が内在するわけでない。ある一定の社会が、その社会の社会的経済的諸関係が、それを価値とするだけである。商品の価値もまた同じく、歴史上もっとも抽象的でもっとも純粋に社会的なものである。先に強調したように価値それ自体に量的契機は内在しない。価値自体に量的契機が内在しているのであれば、価値そのものとは別に価値実体が必要になることはない。価値自体が自ら増減すれば良いからである。価値それ自体に量的契機が内在しないがゆえに、価値が量的規定を得るためには、外的に量を規定するもの、すなわち価値実体が必要になるのである。この点からすれば、価値が商品の内に存在する (価値が商品に内在する) という理解は、価値という抽象的で純粋に社会的な、量の契機を持たない属性をあたかも自然的属性と同様に捉えてしまう過誤を導かざるをえないように思われる。

初版の問題はこの一点にとどまらない。まさしく第二版への書き換えが必要になった根本の理由がある。もし商品交換関係において価値が前提されるとすれば、すなわち、人々が相異なる種類の労働生産物を単に商品としてではなく最初から価値として等置するとすれば、交換価値という現象形態を必要とはしないことになるであろう。つまり価値を量的に測る労働を最初から自覚的に取り出すであろう。しかしそのようには決してなっていない。この社会的現実こそがマルクスに商品の分析を強いるのである。なぜ資本主義的生産様式が支配する社会において人々は商品をあらかじめ価値として認めそれを価値として等置することができないのか？ なぜ等置を他でもなく交換価値としてしまうのか？ この現実が何であるのかをこそマルクスは解明しなければならなかった。価値はあくまで交換価値の「背後」に「隠れている」のだ。だからマルクスは「そこ〔「交換価値または交換関係」〕に隠されている価値」<sup>48)</sup> という言い方をしている。人々が価値それ自体ではなくその単なる表現様式・現象形態である交換価値において商品社会を思惟し認識し行動していること、この現実をまずは人間語によって暴き出すことがマルクスの課題であった。であるならば、初版における叙述のように仮言的にはあれ価値をあらかじめ措いてしまうことは別決すべき現実の深奥を逆に隠蔽することになってしまう。だからこそマルクスは初版の書き換えを不可避なものと考えたのだ。こうしてマルクスにとって『資本論』第二版への書き換えは、以下の点をもっとも重要な課題の一つとした。すなわち、彼以前の経済学における価値に関する用語、すなわち wert, worth あるいは valere, valer, valeur, valoir 等とそれらを用いた種々の表現、すなわち、効用価値、自然的価値、内的価値、絶対的価値と相対的価値、実質価値と名目価値等々についての混乱を一掃し、交換価値と価値とを概念的に明確に区別し、まったく新たに価値の概念を確立すること、しかもそれを価値批判として遂行すること、これである。マルクス以前においては価値という言葉 (商品価値に通じるラテン語の valere 系の言葉) が用いられていたとしても、それは実際のところ交換価値を指していたか

らである。このことはまさしく、『資本論』のための草稿群そして『資本論』そのものに数多く引用されている過去の経済学者たちの言明が如実に物語っている。

だがしかし、マルクスはこの書き換えを最後まで徹底して行なわなかった（行なうことができなかった）。先に検討した「existieren」という動詞を第二版でもそのままにしているところにもそれは現われているが、更に例えば、第二版第4節の次のような叙述にもそのことが現われているように思われる。

人間が彼らの諸労働生産物を互いに諸価値として関係させるのは、これらの諸物象〔Sachen〕が彼らにとっては一様な人間労働の単に物象的〔sachlich〕な外皮として認められるからではない。逆である。彼らは、彼らの異種の諸生産物を互いに交換において諸価値として等置することによって、彼らのいろいろにちがった労働を互いに人間労働として等置するのである。彼らはそれを知ってはいないがしかし、それを行なうのである。それゆえ、価値の額に価値とはなんであるかが書いてあるのではない<sup>49)</sup>。

これは初版では次のような叙述である。

人間たちが彼らの諸生産物を、これらの諸物象〔Sachen〕が同質の人間労働の単に物象的〔sachlich〕な外皮として認められるかぎりにおいて、諸価値として相互に関係させるのだとすれば、このことのうちには同時にそれとは逆に、彼らのいろいろに違った労働はただ物象的〔sachlich〕な外皮のなかの同質な人間労働としてのみ認められているのだ、ということが含まれている。彼らが彼らのいろいろな労働を相互に人間労働として関係させるのは、彼らが彼らの諸生産物を相互に諸価値として関係させるからである。人的な関係が物象的〔sachlich〕な形態によって隠されているのである。したがって、この価値の額には、それがなんであるか、は書かれていないのである。人間は、彼らの諸生産物を相互に諸商品として関係させるためには、彼らのいろいろに違った労働を抽象的な人間労働に等置することを強制されているのである。彼らはそれを知ってはいない。しかし、彼らは、物質的な物〔materielle Ding〕を抽象物たる価値に還元することによって、それを行なうのである<sup>50)</sup>。

この書き換えによってこの部分が理解しやすいものとなったことは明らかである。だが、双方とも、それらの叙述は誤解を与えかねない。人々は、「いろいろにちがった労働を互いに人間労働として等置すること」については無自覚だが、価値としての等置は自覚的に行なっているかのような誤解が生じかねないからである。人々は価値としての等置に関しても無自覚なのだ。人々は労働生産物を商品として等置し、そのことによってそれらの労働生産物に対象化された労働を単なる抽象的な人間労働として等置し、かくして価値として等置しているのである。人々の即自的な意識にとっては二商品の等置は価値としてのそれではなく、あくまで交換価値なのである。等置は何らかの価格表示されるもの以外ではない。価値という言葉が使われたとしてもそれは交換価値であり、商品として等置する、すなわち商品をただちに交換価値にするのだ。だから『資本論』において、人々が労働生産物である商品をはじめから「価値として等置する」という具合の表現が残されたままになっているところは、例えば、「人々はそれを意識してはいないが」といった限定句を付加するか、



あるいは「人々は相異なる種類の労働生産物を商品として等置する」とか「異種の商品を最初から交換価値とする」といった表現に書き換えなければならないだろう。価値としての等置ではなく、商品としての等置、つまり商品交換の方が先なのだ。価値ではなく交換価値にするのだ。商品として等置することを通じて、つまりただちに交換価値にすることによって、その現実によってそれらを価値として等置することになるのである。

大分先回りの議論をしてきたが、『資本論』各版の Paragraph ③に戻ろう。

まず初版であるが、異種の二商品の等置・等式の意味が価値におけるものであることが前提的にあるいは仮言的に述べられてしまう。価値を、つまり等置・等式の意味を分析的に導出する作業がなされることなくこれが語られてしまっている。その上で、「したがって [also]」として、二商品はそれら双方とは異なる「第三のもの」に還元されなければならないとされる。この「第三のもの」が後に別扱される「労働」すなわち、価値の実体である二商品に表わされる抽象的人間労働であることは明らかである。

これに対して、第二版とフランス語版では、等置・等式の意味、すなわち価値自体を分析的に導出することが目指され、これを〈共通なもの〉＝「一つの共通なもの [ein Gemeinsames]」・「共通なあるもの [quelque chose de commun]」と表現する。この上で初版と同様に、「だから [also; donc]」という接続詞をもって「1 クォーターの小麦も a ツェントナーの鉄も共にある一つの第三のものに等しい」と続けられ、かくして等置された二商品は、交換価値である限りその双方のいずれでもない「第三のもの [Dritte; troisième]」、すなわち等置・等式を可能にしている物的根拠であるそれに還元されなければならないと述べられる。

ここで三つの版に共通した「したがって [also; donc]」について一言述べておきたい。多くの論者が、「したがって」というこの接続を表わす言葉を無視してしまっているからである。異種の二商品が等置されているということは、これらの二商品が同じ大きさの「価値」(初版)、「同じ大きさの一つの共通なもの」(第二版)、「同じ大きさの「共通なあるもの」(フランス語版)として認められているということであり、したがって、これらの二商品は、一方でもなく他方でもない「ある一つの第三のもの」に、「交換価値である限り」還元されることになるわけなのであるが、この接続詞「したがって」を無視してしまう多くの論者は「共通のもの」と「第三のもの」とを混同し、あるいは同一視し、ひいては「共通の(な) 第三者」なるマルクスが『資本論』では用いていない用語を用いることになる(見田石介、廣松渉、吉原泰助、白須五男、日山紀彦、小幡道昭といった人々である<sup>51)</sup>)。論理的接続についてきちんと押さえておかなければ思いがけない誤解が生まれるものである。

このように見てくると、第二版とフランス語版では価値導出の論理過程がいささか錯綜したものとならざるを得ないことがわかる。つまり、異種の二商品の等置から価値を導き出したいのだが、それをストレートに行なうことができないことがわかる。価値より前に労働が導かれなければならないのだ。二商品の等置・等式は価値におけるそれである。このことを明らかにしなければならないのだが、そのために等置・等式がそもそも成り立つ根拠、等置・等式が可能となる物的な根拠が先に別扱されなければならないことになるわけだ。初版でのように価値を前提的にあるいは仮言的に措くことを避け、価値を分析的に導出することを目指したがゆえに叙述上の困難が生じたわけである。〈共通なもの〉＝価値と〈第三のもの〉＝労働(抽象的人間労働)とが混同される危険性がきわめて大きくなるからであり、実際に従来、この部分に対する『資本論』解釈のほとんどすべてがこの混同に陥っているのである<sup>52)</sup>。

## (v) パラグラフ④の検討

実に、パラグラフ④が最大の問題を抱えていると思われる。まず三つの版ともこのパラグラフ④は叙述が一致していることに注意しよう（初版と第二版とは強調箇所の有無を別としてまったく同一である）。マルクスはこの部分の書き換えの必要を認めなかったということになるのであろうが、本当にそうだろうか。そしてそもそも初版においても当パラグラフの叙述は適切なものだろうか。丁寧に見ていく必要がある。

幾何学上の一例が突然持ち出され、「このことをもっとわかりやすくするであろう」と述べられる。「このこと [diess; cela]」とは、それまでのパラグラフ①～③で述べられたこと、とりわけ直前のパラグラフ③で述べられたことと考えるべきである。つまり、異種の二商品の等置・等式が「価値」（初版）あるいは「共通なもの」（第二版、フランス語版）におけるものであること、そしてそれゆえに、二商品はそれら双方と異なる「第三のもの」に還元されなければならない、ということであろう。ポイントは、「価値」＝「共通なもの」と、「第三のもの」との関係と構造が、この幾何学上の一例によって解り易くなるということであろう。

ところが実際のところ、この幾何学上の一例は適切なものとは到底言えない。逆にかえって理解を妨げるものでしかない。だが、マルクスはこの例示をいたく気に入っていたようで、『資本論』の三つの版だけでなく、『価値、価格および利潤』（1865年の講演記録、出版は1897年英語版、1898年に『賃金・価格および利潤』としてドイツ語版）でも、ヨハン・モスト『資本と労働——カール・マルクス著『資本論』の平易なダイジェスト——』に対するマルクス自身による改訂（作業は1875年、出版は1876年）でもこの一例を持ち出している。ともあれこの一例を解析してみよう。

パラグラフ③では代表として採られた二商品（小麦と鉄）の等置・等式が分析された。他方、幾何学上の一例では「あらゆる直線図形」が取り上げられ、それらの「面積を確定し比較する」ことが問題となっている。かくしてパラグラフ③よりはむしろ同①および②で取り上げられた種々の龐大な諸商品の等置関係との対照がなされていることになる。なぜ、「形の異なった任意の二つの直線図形」としなかったのだろうか。

次に、二商品の等置・等式という純粋に社会的な属性におけるものに対して図形の面積という自然的属性における等式が例示として提示されている。こうして第三に、価値という量的規定性を内的契機として含まないものに、面積という量的規定性を内的契機とするものが対照として措かれる。更に第四に、価値にせよ、価値実体である商品に表わされた抽象的人間労働にせよ、きわめて抽象性の度合いが高いものに対して、抽象性の度合いがまったく比較することができないほど低い三角形やその面積の式が対照される。

そもそもこの幾何学上の一例では、平面上の直線図形、それらの自然的属性としての面積、三角形、その面積の式、面積の量という五つの要素があるわけだが、他方、異種の諸商品の等置においては、商品、その社会的属性としての価値、そして価値の実体（商品に表わされた抽象的人間労働）、その量という四つの要素である。この対応の齟齬をどうするのか。おそらくマルクスは、要素の数の対応をきちんと考えずにこの一例を持ち出しているのである<sup>53)</sup>。

このように幾何学上の一例はただただ混乱を持ち込むだけのものであり、不適切な例示である。このような大いに問題のある例の後に「これと同様に」とマルクスは言う。初版の文章を引こう（第二版の文章もまったく同一で、フランス語版のものも内容上同じ）。

Ebeso sind die Tauschwerthe der Warren zu reduciren auf ein Gemeinsames, wovon sie ein Merh oder Minder darstellen.

これと同様に、諸商品の諸交換価値は一つの共通なものに還元されるのであって、諸交換価値はこの共通なもの、あるいはより多くを、あるいはより少なくを、表わしているのである。

ここでは、「諸交換価値は一つの共通なものに還元される」と述べられている。最大の問題がこれだ。この文章と、直前のパラグラフ③末尾の文章とを対比させよう。そこではこうであった（初版から引くが、第二版でもほぼ同一の文章）。

Jedes der beiden, soweit es Tauschwerth, muß also, unabhängig von dem andern, auf die Dritte reducirt sein.

それらのうちのどちらも、それが交換価値であるかぎり、他方のものから独立に、この第三のものに還元されるものでなければならないのである。

こちらでは「それらのうちのどちらも」、つまり等置されている商品である二つの労働生産物（「1クォーターの小麦」と「aツェントナーの鉄」）の双方が「第三のもの」に還元される、と述べているのだが、パラグラフ④では、二商品の交換価値が「共通なもの」に還元される、と述べているのだ。一方では二商品の「第三のもの」への還元、他方では諸交換価値の「共通なもの」への還元、——これをどう考えれば良いだろうか。

ところで、商品はいくまで労働生産物であり、マルクスが言うように「いろいろな商品体は、自然素材と労働という二つの要素の結合物である<sup>54)</sup>」。したがって労働生産物である商品から自然素材と労働の自然的側面（具体的有用的側面）を捨象・抽象して、抽象的人間労働を析出させること、つまり商品を労働（抽象的人間労働）に還元する〔reduzieren〕ことは可能であり、この還元された労働こそが等置・等式を可能にしている物的な根拠、つまり「第三のもの」なのであるが、他方、諸交換価値は何か還元され得るであろうか。交換価値というある一つの表現様式・現象形態がある何か＝「共通なもの」に還元されるというようなことがあり得るだろうか。この表現様式・現象形態から何らかのものを捨象・抽象して何かあるものを析出させることが可能であるとはとても思われない。「還元する〔reduciren〕」という言葉を用いることの不自然さ・不適切さは明らかであると思われる。

ではマルクスはパラグラフ④で、諸交換価値の「一つの共通なもの」への還元という表現によって、共通な価値が種々の交換価値に表わされる、ということを書いたかったのだろうか。だがしかし、「還元」という言葉のそぐわなさを不問にするとしても、この理解では、まず文脈からしてきわめて大きな不自然さが、とりわけ初版では生まれる。

初版では直前のパラグラフ③で、二商品の等置が価値におけるものであることが述べられ、それゆえに二商品はそれら双方とは異なる「第三のもの」に還元される、とされた。この「第三のもの」が価値の実体たる労働であることは明白だが、このパラグラフ③で述べたことを幾何学上の例示さえ持ち出して言い換えることになるパラグラフ④が諸交換価値の価値への還元を言う、というのはあまりにも奇妙である。一体「第三のもの」はどうなったのか。しかも、次のパラグラフ⑤は「交換価値の実体が」と始められる。実体〔Substanz〕という以上、それは価値ではなく価値実体であ



る労働、つまり「第三のもの」である。初版ではこの後、一貫してこの価値の実体である「労働」を分析的に導出することが目指され、パラグラフ⑦でそれが果たされる。つまり初版は、パラグラフ④を取り除きさえすれば、きわめて首尾一貫した論理的流れがあるわけである。このように、初版ではパラグラフ④の「共通なもの」を価値とすると、文脈上きわめて大きな不自然さが生れる。

更に初版だけでなく三つの版に共通するが、パラグラフ④の「共通なもの」を価値だと考えると、次のような問題が生じる。もし「共通なもの」を価値だとすると、この「共通なもの、あるいはより多くを、あるいはより少なくを」、諸交換価値は表わす、ということになるわけだが、「交換価値が、～を表わす」という表現は良いとしても、この表現では価値それ自体に量の契機が含まれ、価値自体が増減して自らの大きさを定立するかのように理解されてしまうことになるのではないだろうか。

では、パラグラフ④の「共通なもの」は価値の実体である労働であろうか。もしそうだとすると、初版では文脈上の一貫性は保たれることになるが、しかしこれもあり得ないと考えられる。もし価値実体たる労働だとすると、諸交換価値が労働に還元され、その労働の多少を交換価値は表示することになる。だが、この見解に対してはマルクス自身の反論がある。『資本論』第二版への批判を含んだアードルフ・ヴァーグナーの『一般的または理論的経済学 第一部 原論』（改訂増補第二版、1879年）に対する「批判的傍注」（1879年から1880年11月までに執筆）でマルクスは、皮肉や嘲笑をこめて次のようにヴァーグナーを批判している。

[[ヴァーグナー氏によれば]] この理論 [マルクスの理論] によると、マルクスは、／「彼がここでもっぱら考えている交換価値 [単数] の共通の社会的実体を労働のうちに見いだし、交換価値の大きさの尺度を社会的に必要な労働時間のうちに見いだしている」うんぬん。／私はどこでも「交換価値の共通の社会的実体」について語っておらず、むしろ諸交換価値（すくなくともその二つがなければ交換価値は存在しない）は「それらの使用価値」[すなわち、ここではそれらの現物形態]「から」まったく独立した、それらに共通なあるもの、すなわち「価値」をあらわす、と言っているのである。たとえば、こう言っている。「だから、商品の交換関係または交換価値のうちに見られる共通物は、商品の価値なのである。研究の進行は、われわれを、価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値に連れもどすことになるであろう。しかし、この価値は、さしあたりまずこの形態にはかかわりなしに考察されなければならない。」（一三ページ）／それだから私は「交換価値の共通の社会的実体」は「労働」だとは言っていない。しかも私は特別の節で価値形態、すなわち交換価値の発展を詳しく扱っているのだから、この「形態」を「共通の社会的実体」、労働に還元するというのは奇妙であろう。またヴァーグナー氏は、「価値」も「交換価値」も私の場合には主体ではなく、商品が主体であることを忘れている<sup>55)</sup>。

このマルクスの言明は決定的であろう。諸交換価値を価値実体たる労働に還元する、つまり〈形態を実体に還元する〉などということはある得ないと言うのである。ヴァーグナーへの批判はそれ自体としてはきわめて説得的な言明である。だが、ではパラグラフ④の文章はどうなるのか。このヴァーグナー批判からすれば、パラグラフ④の「共通なもの」とは価値ということにならざるを得ない。だとすると、「還元する [reduciren]」という言葉の不適切さと共に、先に述べた難点、つまりそれにつづく「共通なもの」=価値の「あるいはより多くを、あるいはより少なくを」諸交換価値

値は表わしているという、価値自体が増減して自らの大きさを定立するような言明になってしまうという難点を抱えることになる。また、既に述べたが、初版では価値が仮言的にはあれ前提されていたので、パラグラフ③の「第三のもの」が価値であることはありえず、価値実体たる労働であることは明らかであり、このパラグラフ③からの文章上のつながりから言っても、「第三のもの」を価値だとするのはまったく不自然である。このパラグラフ③とのつながりの不自然さは、第二版やフランス語版では「第三のもの」も「共通なもの」もすべて価値だとすれば論理の上では消失する。だがそうすると、今度はパラグラフ③の文章がまったく不自然なものになってしまう。なぜならば「共通なもの」と「第三のもの」とわざわざ表現を変えているからである。更に、「第三のもの」についての叙述が初版と第二版とでは同じであることからしても、またその内容からしても一層大きな不自然さが生まれることになる。ここには「混乱」がある<sup>1)</sup>としか言いようがない。

このように、パラグラフ④には「混乱」があるわけだが、このパラグラフ④の目的は何であったのであろうか。いかに不適切なものであれ幾何学上の一例を出し、「このことをもっとわかりやすくする」と述べている以上、それまでの議論に一定の総括を与えるということであったと考えられる。この本来の目的からすれば、パラグラフ④では次のように述べられるべきであったのではなかろうか（第二版にそくして言い換えを行なうが、以下の「共通なもの」を「価値」と変えれば、初版でのものに対応する）。

「このように、種々様々な交換関係を示す諸等式において、各等式の両項つまり二つの異種の労働生産物である二商品が、同じ量の第三のものに還元されることによってこれらの商品は同じ大きさの共通なあるものと認められるのであり、かくして双方の交換価値はこの同じ大きさの共通なあるものを表わすことになる。そしてこの共通なものの大きさはかの第三のものの量の多少によることになるのである。」

#### (vi) パラグラフ⑤の検討

初 版：die Substanz des Tauschwerths … (交換価値の実体が…)

第二版：Dieß Gemeinsame … (この共通なものは…)

仏語版：Ce quelque chose de commun … (この共通なあるものは…)

この冒頭の違い、すなわち初版と第二版・フランス語版との相違は大変大きな問題を孕んでいるが、これ以下の文章でも初版と第二版とでは微妙な差異があり、実はこの差異が決定的なものなのである。また第二版とフランス語版とはほぼ同じであり、両者は同様の問題点を抱えている。

まず初版から検討しよう。初版の「交換価値の実体」という表現は明らかに間違いであって、これを書いたマルクス自身がヴァーグナー批判をするマルクスに噛みつかれなければならないことになる。正しくこの内容を言えば「交換価値に表わされる価値の実体」ということになる。だが、この間違いのゆえに、ここで問題になっているのが価値実体たる抽象的人間労働であることがはっきりする。少なくとも初版では、「実体〔Substanz〕」と書いている以上、これを価値だと考えるわけには絶対にかない。また、初版パラグラフ⑤の三つ目の文章中の「それ〔sie〕」は当然ながら冒頭の「実体〔die Substanz〕」である。

このように初版では、パラグラフ③の「第三のもの」を「交換価値の実体」という言葉で受けて、これが何であるのかが一貫して追究される。論理的には初版の叙述は一貫している。

これに対して第二版とフランス語版はどうだろうか。これら二つの版では直前のパラグラフ④の「一つの共通なもの」・「共通なあるもの」を直接にうけて、「この共通なものは〔dieß Gemeinsame〕」・「この共通な何かあるものは〔ce quelque chose de commun〕」としてパラグラフ⑤が始められている。この書き換えによってますます「混乱」が拡大される。どうということか。第二版の当パラグラフ四つ目の文章にある「それ〔er〕」がパラグラフ冒頭の「この共通なものは〔dieß Gemeinsame〕」を受けたものであることは明らかであるが、初版の「die」と違って「er」になっていることにも注意して当該パラグラフを検討していこう。

まず初版と第二版の冒頭の相違は別として、それにつづく文章を見てみよう。そこでは内容上、初版と第二版とはほとんど同一の内容を述べているように見えるのだが、両者の間には微妙ながらも決定的な差異がある。第二版では「この共通なものは〔…〕自然的な属性〔natürliche Eigenschaft〕ではありえない」と述べられている。「共通なもの」が自然的属性ではないとしても商品の属性として問題とされている以上、「この共通なもの」は価値の実体たる労働ではないことになる。商品は労働生産物であるという属性をもつが、この労働それ自体、商品に対象化された・表わされた労働それ自体が商品の属性であるわけではないからである。他方、価値は明らかに商品の属性、その純粋に社会的な属性である。結局マルクスは、第二版のパラグラフ⑤では価値について述べていることになるわけであり、「この共通なもの」は価値を指すことになる。したがって初版の「交換価値の実体」＝労働とは決定的に食い違ってしまふ。だが、そうすると第二版のパラグラフ④の「一つの共通なもの」も価値を指すこととなり、パラグラフ④は初版と第二版とでまったく同じ文章であるのだから初版の「一つの共通なもの」も価値ということになる。だがそうすると、既に指摘したように、初版には強い論理的一貫性があるのでかえって文脈上きわめて奇妙な文章になる。また、第二版では、パラグラフ⑤の四つ目の文章：「Innerhalb desselben gilt ein Gebrauchswerth grade so viel wie jeder andre, wenn er nur in gehöriger Proportion vorhanden ist. (この交換関係のなかでは、ある一つの使用価値は、それがただ適当な割合でそこにありさえすれば、ほかのどの使用価値ともちょうど同じだけのものと認められるのである)」という初版とほぼ同一のこの文章で、「それ〔er〕」が「価値〔Werth: 男性名詞〕」を指すことになり、初版での「それ〔sie〕」が「実体〔Substanz: 女性名詞〕」すなわち「労働〔Arbeit: 女性名詞〕」であることと食い違ってしまふことになる。だが、「er」が「Werth」を指すとするにせよ、もともと「er」は「Gemeinsame」を受けけるものであった。だが、「共通なもの〔Gemeinsame〕」が何であるのかがここでは未だ確定されていない以上、「er」で受けけることには無理がある。にもかかわらず「er」と書いているのは、あらかじめそれが「Werth」を指すものだという意識の下でマルクスはそう書いているということだろう。

微細に言えばこのような問題があるのだが、それとは別に決定的な問題として次のことがある、すなわち、第二版の「それ〔er〕」に「価値」を代入した文章：「この交換関係のなかでは、ある一つの使用価値は、価値がただ適当な割合でそこにありさえすれば、ほかのどの使用価値ともちょうど同じだけのものと認められるのである」という文章がきわめて奇妙なものになるという点である。「ちょうど同じだけのものと認められる」という句は gelten という動詞を用いているのだから、「ちょうど同じ大きさの価値であるものと認められる (ちょうど同じものに値する)」ということになり、この文章は結局、「この交換関係のなかでは、ある使用価値は、価値がただ適当な割合でそこにありさえすれば、ほかのどの使用価値ともちょうど同じ価値であるものと認められるのである」というまったく無意味な文章になるからである。



以上に述べた第二版の Paragraph ⑤ に表われた「混乱」は、フランス語版でも同様である。

交換においては、ある使用価値は、それが適当な割合にありさえすれば、他のどの使用価値ともちょうど同じだけの価値がある。

この文章中の「それ [elle]」は当然ながら冒頭の「この共通なあるもの [ce quelque chose de commun]」である。日本語訳で「価値がある」となっているところは「vaut (valoir)」であるから、「～に値する (英語で言えば to be worth)」ということである。valoir はラテン語の valere に由来するフランス語であり、マルクス自身がゲルマン語系の wert, worth よりもラテン語系の valere, Valer, valoir の方が価値 (商品価値) を表わすのには適切だと言っている言葉である<sup>56)</sup>。この点を考えると、日本語訳もあながち間違いではない。そうすると、「それ」=「共通なもの」を価値とすると、「価値が適当な割合にありさえすれば、他のどの使用価値ともちょうど同じだけの価値がある。」という先に第二版で見た無意味な文章がここでもまたよりはっきりと現われることになる。

このように、第二版とフランス語版では Paragraph ④ の「混乱」が Paragraph ⑤ で更に拡大されたことがわかる。明らかに書き換えを徹底して遂行せず、初版の文章を相当程度残したことによって、結果として価値と価値の実体たる労働とが混同されてしまっているのだ。

マルクスは第二版およびフランス語版では、Paragraph ⑤ で価値について述べているわけだが、しかし、Paragraph ⑤ は Paragraph ④ の一定の総括をうけて、あらためて異種の二商品の等置・等式が成り立つ物的な根拠の導出に向うというものでなければならぬと思われる。等式の両項にあるもの、労働生産物である二つの商品から使用価値を捨象・抽象すること、つまり自然素材と労働の自然的側面 (具体的有用的側面) を捨象・抽象し、純粋に社会的で抽象的な・質の限界にある労働 = 抽象的人間労働に、二つの労働生産物である商品を還元する作業に向うことになるのではないのか。下記のように Paragraph ⑤ は述べられるべきではないだろうか。先に示した Paragraph ④ の書き換えと共に示そう。

「このように、種々様々な交換関係を示す諸等式において、各等式の両項つまり二つの異種の労働生産物である二商品が、同じ量の第三のものに還元されることによってこれらの商品は同じ大きさのある共通のものと認められるのであり、かくして双方の交換価値はこの同じ大きさのある共通なものを表わすことになる。そしてこの共通なもの的大小はかの第三のもの量の多少によることになるのである。／では、種類の異なる二つの労働生産物が商品として等置されたときにこの等式を成り立たせる物的な根拠、すなわち等式の両項にある二商品が還元されるべき第三のものについてあらためて考察をつづけよう。この第三のものは商品の幾何学的とか物理学的とか化学的などというような自然的な属性をもつものではありえない。およそ商品の物的な属性は、ただそれらが商品を有用にし、したがって使用価値にするかぎりではしか問題にならないのである。ところが、他方、諸商品の交換関係を明白に特徴づけているものは、まさに諸商品の使用価値の捨象なのである。この交換関係のなかでは、ある一つの使用価値は、その第三のものがただ適当な割合でそこにありさえすれば、ほかのどの使用価値ともちょうど同じだけの共通のものと認められるのである [以下略]。』

(vii) 「共通なもの」 = 価値、「第三のもの」 = 商品に表わされた抽象的人間労働

以上の検討および書き換えにおいてわれわれは、「共通なもの」を価値を表わすもの、「第三のもの」を価値の実体である抽象的人間労働を表わすものと理解し表現することとし、マルクス自身に「混乱」があると判断した第二版の Paragraph ④および⑤ではわれわれのこのような意図に沿って書き換えを行なってみた。つまり諸商品の交換関係・等置関係が何における等式・等置であるのかを示すものとして「共通なもの」という表現を与え、これが価値を示すものとし、これらの等置・等式が成り立つ物的な根拠を表わすものとして「第三のもの」という表現を与え、これが価値の実体である抽象的人間労働を示すものとしたのである。そもそも質的に相異なるものが等置されるとすれば、その等置はそれらに共通な何らかの自然的属性もしくは社会的属性においてなされるのである。すなわち、体積とか質量とか熱容量とか学歴とか価値とか、等々において。同様に諸商品が交換関係・等置関係に置かれるのは、価値という純粋に社会的で抽象的な属性においてであり、その価値の大きさ、その比率・割合は、価値の実体であるそれらの商品に対象化された抽象的人間労働の量によるのであり、またそれ以外ではあり得ない。価値という属性の著しい特徴は、価値それ自体に量的契機を含まないということだからである。だからわれわれは、価値の大きさと言って価値の量とは言わず、また価値の大きさを規定するものとして商品に表わされた抽象的人間労働の量という言い方をしているのである。諸商品は価値として統一性をなし互いに等置されるのであるが、諸商品が価値という純粋に社会的で抽象的な属性を持つのは抽象的人間労働が商品に対象化されている限りでのことである。価値はあくまで商品の社会的属性であり、この属性において互いに等置される。他方、価値実体たる抽象的人間労働は商品に対象化されているがその抽象的人間労働それ自体は商品の属性ではない。だから抽象的人間労働において諸商品が等置されるということとはあり得ない。商品に対象化された抽象的人間労働はあくまで諸商品の等置・等式を成り立たせる物的な根拠なのである。

このような区分をきちんと行なうことがまさしくマルクスの意図を正確に把握し実現することであろう。冒頭商品論だけではなく、『資本論』全体、そして『経済学批判要綱』以来の草稿類等々を検討することから上記のようにわれわれは判断する。

ところで、「共通のもの」と「第三のもの」の双方を一括して価値とみたり抽象的人間労働とみたりする解釈が氾濫している。これらの誤った解釈は、『資本論』自体にある叙述上の「混乱」、とくに第二版の Paragraph ④および⑤に現われたそれ（この「混乱」は第二版と現行版との文章の相違にもかかわらず引き継がれてしまっている）にも影響されているが、われわれが行ってきたような初版、第二版、フランス語版相互の照合と批判的検討、およびそれをその他の諸文献の詳細な検討によって補い点検するという作業を行なってこなかったことに基づいているのである。いずれにしても、双方を共に価値と見たり、価値実体たる抽象的人間労働と見たりすることは、交換関係を表わす等式がそもそも何における等式であるのかということと、その等式が成り立つ物的な根拠は一体何であるのかということとを明確に区分し示すことができず、両者を混同し、また一方を無視するという結果をもたらすのである。

先ず、「共通なもの」も「第三のもの」も価値と見る解釈について言えば、価値自体が量の契機を含み込むものとなり、価値それ自身が増減することによって価値の大きさが規定されることになるであろう。つまり価値の実体を不要にすることになるであろう。またこの見解によれば、等置関係におかれた二つの異種の商品、これら異種の労働生産物は価値に還元されることになるが、しかし、純

粹に社会的で抽象的な、しかも量の契機を含まない属性である価値に等式の両項たる二商品が還元されるなどということは決してあり得ないことである。ただ、マルクスは初版の Paragraph ③ で見たように「同じ価値が二つの違った物のうちに、[...] 存在する」といった表現をしており、またこうした表現に照応していることになるが、先に引用した初版の文章で「[人々] は、物質的な物 [materielle Ding] を抽象物たる価値に還元する」とあからさまに言っている。これには理由があるとわれわれは考えるが<sup>57)</sup>、しかしやはり適切な表現とはいえない。等置された二商品はそれらに表わされた抽象的人間労働という物的なものに還元されるのであり、双方の労働生産物は抽象的人間労働の凝固体として価値なのである（価値として社会に認められるのである）。価値には、何度も繰り返すことになるが量的契機は含まれない。

他方、「共通なもの」も「第三のもの」も価値実体である抽象的人間労働だと考えてしまう誤読について言えば、諸商品の交換関係を表わす等式が価値におけるものではなく、結局は、労働生産物であるという属性における等式になってしまうことになり、等式の両項に置かれた労働生産物は商品という媒介を経ることなく労働生産物そのものとして交換されることになる。価値形態は不必要であり、労働生産物は商品に転化する必要がない。このような交換は『資本論』の商品物神について述べられた部分にある「共同の生産手段で労働し自分たちのたくさんの個人的労働力を自分で意識して一つの社会的労働力として支出する自由な人々の結合体<sup>58)</sup>」における諸労働生産物の交換であろう。これはまた『ゴータ綱領批判』にいう「生産手段の共有を土台とする協同組合的社會<sup>59)</sup>」＝「共産主義社會の第一段階<sup>60)</sup>」における諸労働生産物交換であろう。

ともあれ、交換関係を表わす等式が何における等式であるのかということと、その等式が成り立つための物的な根拠は何であるのかということとを明確に分けてそれぞれきちんと定立しなければならないのである。前者は価値であり、後者は価値の実体である商品に表わされた抽象的人間労働である。

#### (viii) 初版の Paragraph ⑥～⑨の検討

Paragraph ⑥以降では、初版の文章が第二版とフランス語版の文章と大きく異なっているので、これまで行ってきたように三つの版の文言を直接に比較・検討するのではなく、初版と第二版・フランス語版とを分けてそれぞれの内容を検討することが必要である。

ここでは初版の Paragraph ⑥～⑨の論理の基軸を検討しよう。マルクスはまず、Paragraph ⑥で、諸商品を交換価値・価値形態からは独立に諸価値として考察すべきだと言う。価値が前提されてしまっていること、あるいは仮言的に措かれていることがここでもはっきりと出ている。だが、これまでも述べてきたように論理的な筋道は明確であり、価値の内容はどういうものであるのかが追究されることになる。こうして Paragraph ⑦で、諸商品は価値において統一性をなすと述べられ、それを可能にしている根拠・内実として、「労働」が導出される。こうして結論として次のように規定される。

諸価値としては、諸商品は結晶した労働以外のなにものでもない。(Paragraph ⑧)

ある使用価値または財貨がある価値をもつのは、ただ、労働がそれに対象化されている、または物質化されているからにほかならない。(Paragraph ⑨)



ここでわれわれは、単純労働－複雑労働、価値の大きさを規定する「価値形成実体」の量を測る労働時間について述べられたことについては触れない。パラグラフ①からここまで、パラグラフ④を除いて非常に一貫した論理的な流れがあることを確認できれば良い。

(ix) 第二版・フランス語版のパラグラフ⑥、⑦の検討

第二版・フランス語版のパラグラフ⑥以下の文章はそのままで問題はないと思われる。交換関係を示す等式の両項を第三のもの、すなわち労働＝抽象的な人間労働一般へと還元し、それによって両項の労働生産物が、抽象的な人間労働の単なる凝固物、〈まぼろしのような・幽霊のような対象性〉でしかないものとなり、まさしくそのようなものとして商品は価値だ、ということが明確に示される。

では、第二版でパラグラフ⑥、⑦の内容を詳細に辿っておこう。だがこの作業に入る前に、一点注意すべきことがある。等置された二商品における「共通なもの」および「第三のもの」の量的規定性についてである。例として、ある二商品が取り上げられて等置・等式が考えられている以上、それらの二商品における「共通なもの」も「第三のもの」も具体的な量的規定を受けた「ある大きさの共通なもの」であり、「ある量の第三のもの」である。だが、問題にすべきことは、第一に、この等式が何における等式であるのか、つまり二商品のどのような社会的属性における等置・等式であるのか、ということであり、第二に、そのような社会的属性における等式が成り立つための物的な根拠は一体何であるのか、ということであった。だから、等式におけるあれこれの具体的な量的規定性は副次的な要素であり、それらを抽象化し、一般化する必要がある。それゆえわれわれは、「共通なもの」も「第三のもの」もそれ自体としては具体的な量的規定性を剥がれたもの、具体的な量的規定性が抽象化されて量一般に還元されたものとして扱ってきたのである。この点をあらためて確認して作業に入ろう。

等式の両項に置かれた商品の自然素材的側面とその商品に表わされた労働の自然的側面（具体的有用的側面）が捨象・抽象される。パラグラフ⑥に言う。

商品体の使用価値を問題にしないことにすれば、商品体に残るものは、ただ労働生産物という属性だけである。しかし、この労働生産物も、われわれの気がつかないうちにすでに変えられている。労働生産物の使用価値を捨象するならば、それを使用価値にしている物体的な諸成分や諸形態をも捨象することになる。それは、もはや机や家や糸やその他の有用物ではない。労働生産物の感覚的性状はすべて消し去られている。それはまた、もはや指物労働や建築労働や紡績労働やその他の一定の生産的労働の生産物でもない。労働生産物の有用性といっしょに、労働生産物に表わされている労働の有用性は消え去り、したがってまたこれらの労働のいろいろな具体的形態も消え去り、これらの労働はもはや互いに区別されることなく、すべてことごとく同じ人間労働に、抽象的な人間労働に、還元されているのである。

種類の異なる二つの労働生産物が商品として等置される。この等置・等式を成り立たせている物的な根拠を、量的規定性を抽象化・一般化してまず〈質〉において捉えることを目指す。すると、両者は「同じ人間労働に、抽象的な人間労働に、還元される」ことになる。労働の具体性・有用性が一切抽象され捨象された、ただ単に抽象的な人間労働力の支出である抽象的な人間労働が、〈質〉として

は限界にまで剥がれた〈質〉でしかない抽象的人間労働が、等置・等式成立の根拠として存在することが導かれる。ここからマルクスは、「そこで今度はこれらの労働生産物に残っているものを考察してみよう」と続けて、パラグラフ⑦で次のように言う。

それらに残っているものは、同じ幽霊のような対象性のほかにはなにもなく、無差別な人間労働の、すなわちその支出の形態にはかかわりのない人間労働力の支出の、ただの凝固物のほかにはなにもない。これらの物が表わしているのは、ただ、その生産に人間労働力が支出されており、人間労働が積み上げられているということだけである。このようなそれらに共通な社会的実体の結晶として、これらのものは——価値なのである<sup>61)</sup>。

ここで言われている内容の検討に入る前に、「そこで今度はこれらの労働生産物に残っているものを考察してみよう」という言葉で語られている論理上の手続きは一体何なのか、を検討しておく必要がある。ここは何気なく素通りしてしまいがちなところだが、こうした論理上の手続きのうちに唯物論に徹したマルクスの思考過程が鮮やかに現われているのであり、ここを厳密に捉えておかなければ、価値の実体たる抽象的人間労働と価値との関係、そして商品の価値ということがきちんと捉えられないことになる。

等式の根拠——等式の両項に置かれた労働生産物である二つの商品から自然素材と労働の自然的側面（具体的有用的側面）を捨象・抽象して得られるもの——は、〈質〉において究極にまで抽象化された人間労働である。労働の具体性・有用性が一切捨象され抽象された単なる抽象的な人間労働、〈質〉としては限界にまで抽象された抽象的人間労働であった。ところで、具体的な量的規定性を剥がれて量一般になった、その〈質〉において捉えられた、この抽象的人間労働なるものは、分析的思惟による抽象の結実として析出されたものであって、このままでは物的な対象ではない。だがそれは、単に思惟のうちに宿るだけのものでもない。それは確かに分析的思惟による抽象化の産物であるが、しかし思惟のうちにだけあるものではなくて、あくまで等式成立の根拠として、対象の規定である。対象の内から析出されたものであり、対象に内在する何ものか、つまり等式成立の根拠を、まずその〈質〉において捉えたものである。だからマルクスはそれを対象の現実の在り方へと返し、あくまで対象の規定性として、等式成立の物的根拠として、量一般を契機とする抽象的人間労働を確定するのである。つまり等式の両項に置かれた二つの労働生産物から分析的に導き出した抽象的人間労働という規定性を対象の規定性として捉え直し、抽象的人間労働が対象化・表わされたものという属性を担う基体として、二つの労働生産物をあらためて措定し直すのである。先のアードルフ・ヴァーグナーへの批判として語られていた「「価値」も「交換価値」も」更には価値の実体である抽象的人間労働もまた「私の場合には主体ではなく、商品が主体である」ということなのだ。このマルクスの論理的手続きをきちんと踏まえないのでスターリン主義派経済学に典型的な、抽象的人間労働を価値だと考える誤読が生じるのだ<sup>62)</sup>。

では、使用価値が捨象されたこれら二つの労働生産物は一体いかなる物として存在しているだろうか。自然的属性の一切を抽象され捨象されたそれらの二つの物は、かの抽象的人間労働が単なる量として、量一般として積み重なった物、抽象的人間労働の単なる堆積物・凝固物、すなわち、〈まぼろしのような・幽霊のような対象性〉でしかないものとしてだけ存在している。それらの物は確かに物的な対象性を持つてはいるが、しかし一切の自然的属性を失っているので〈まぼろしのよう

な・幽霊のような対象性)としか言いようのない物的対象である。このようなものとして、これらの二つの物はそれぞれ価値なのである。

ここで重要なことは、「幽霊のような対象性」というのは等式の両項に置かれた二つの労働生産物、ただし一切の自然的属性が捨象・抽象された結果としてのその対象的規定性だという点である。ところが、価値がまぼろしのような・幽霊のような対象性なのだとか、抽象的人間労働がまぼろしのような・幽霊のような対象性しかもたないものなのだとか捉えてしまう人々が少なからずいる。こうした誤読は主体、過程を担う実有・基体があくまで商品であるということをきちんと押さえないことから生まれるのである。

「幽霊のような対象性〔gespenstige Gegenständlichkeit〕」という規定性は、二つの「労働生産物に残っているもの〔das Residuum der Arbeitsprodukte〕」、すなわち、商品に表わされた労働の抽象化による残滓である凝固物の規定性であるから、抽象的人間労働が〈まぼろしのような・幽霊のような対象性〉しかもたないものだと考えることはまったく間違っているとは言えない、と思われるかもしれない。だがしかし、ここで問題となっている抽象的人間労働は一般的な意味でのそれではなく、あくまで二つの労働生産物に残った凝固物としての抽象的人間労働、即ち過程の主体たるそれらの労働生産物の在り様としての抽象的人間労働なのであるから、抽象的人間労働が〈まぼろしのような・幽霊のような対象性〉しかもたないと言うのはやはり間違いである。更に、〈まぼろしのような・幽霊のような対象性〉を価値の規定性だと考えることはまったく的外れであり、完全な誤謬である。価値それ自体はあくまで商品の社会的属性である。主体・基体は商品であり、商品が抽象的人間労働の凝固物である限りで、基体・主体たる商品が価値対象性をもつということなのである。〈まぼろしのような・幽霊のような対象性〉は、二つの労働生産物に残ったもの＝抽象的人間労働の凝固物の規定性であり、この抽象的人間労働の凝固物として、一切の自然属性を捨象・抽象された労働生産物があるのだから、その規定性は一切の自然的属性を捨象・抽象された労働生産物の規定性以外ではない。

この箇所を誤読した例をあげておこう。

ディヴィッド・ハーヴェイは「幽霊のような対象性」という句を含む先のマルクスの言明を引用した上で、次のように述べている。

何と簡明な一節であり、それでいて途方もなく圧縮された意味を持っていることだろう！抽象的人間労働が「幽霊のような対象性」であるとすれば、どうすればわれわれはそれを見たり測ったりすることができるのだろうか？〔…〕／〔…〕すべての商品を通約可能にしているのは商品の価値であり、この価値は「幽霊のような対象性」として隠されていると同時に商品交換の過程を通過していく。このことは一つの問題を提起する。価値は本当に「幽霊のような対象性」なのだろうか、それともそのように現われるだけなのだろうか？<sup>63)</sup>

ほんの数行のうちに、あちらでは抽象的人間労働が、こちらでは価値が「幽霊のような対象性」だと言われている。この「論理的瞬間移動」にはまったく驚くほかない。ハーヴェイは、価値として商品をつえた場合のその商品、労働生産物であるその商品の、概念の内容を規定するものとして〈まぼろしのような・幽霊のような対象性〉を捉えることができていない。言い換えれば、その概念を単なる気の効いた修飾的な用語としてしか捉え得ないのである。だからこういう学を装った似非論



理を弄することになるのである。このようなハーヴェイによる『資本論入門』がいかなる世界へと読者を誘うか言わずとも知れたことだろう。

次に廣松渉を取り上げよう。

「幽霊みたいな対象性」だから、そんなもの存在しないというのなら話が判るけれども、マルクスは「幽霊みたいな対象性」として価値が存在するというを肯定的・積極的に言うのだから、僕にはさっぱり判らんわけだ<sup>64</sup>。

博覧強記で知られ、ドイツ語にも深く通じている廣松が、なぜこのような道化た巽に陥るのだろうか。じつは廣松は「共通なもの」も「第三のもの」も共に価値だと捉えているのであり<sup>65</sup>、先に述べたが「共通の第三者」なるマルクスの用いていない用語を創りあげて持論を展開しているのであるが、そのぶれた視軸から見れば、「幽霊みたいな対象性」は価値であると共に抽象的人間労働のことでもあるのであろう。

#### (x) 第二版・フランス語版のパラグラフ⑧、⑨の検討

初版を書き換え、価値を交換価値から区分して厳密に導出する過程はここで終了する。結論として第二版のパラグラフ⑧でマルクスは次のように結論づける。

諸商品の交換関係そのもののなかでは、商品の交換価値は、その使用価値にまったくかわりのないものとしてわれわれの前に現われた。そこで、実際に労働生産物の使用価値を捨象してみれば、ちょうどいま規定されたとおりの労働生産物の価値が得られる。だから、商品の交換関係または交換価値のうちに現われる共通なものは、商品の価値なのである。

ところで、この言明に対して少し注釈を加えておきたい。先に述べた論理的手続きに関わることである。等置された、異種の二つの労働生産物である商品から使用価値を捨象・抽象すれば抽象的人間労働が得られる。つまり商品が労働に還元するわけである。その上で再び労働生産物である商品に立ち戻る。すると商品はかの還元で得られた抽象的人間労働の凝固物として価値である。この推論過程を結果において、商品が主語・基体として語れば、使用価値を捨象・抽象した商品は価値である、ということになる。マルクスがここで語っていることは還元過程についてではなく、その結果としての商品に関してなのである。いままで見てきたように、捨象・抽象の過程、つまり還元過程に則して言えば、価値を導出するためには、それより先に、その実体である労働＝抽象的人間労働を導き出す必要があった。したがって、商品から使用価値を捨象・抽象すると、まずは価値ではなく抽象的人間労働が導かれ、その上で価値が導出される。人間語による叙述はこうでしかあり得ない。人間語の世界の線形性が思考の論理的過程およびその叙述過程に時間順序＝前後関係を絶対的に要請するためである。だが、こうした要請に基づく論理的厳密さというのは人間語の世界の範囲内のことでしかない。商品語の〈場〉はこれを超えて動いている。価値形態論のところではこれが明らかになる。

ともあれ、何らかの労働生産物が価値であるのは、パラグラフ⑨にあるように、抽象的人間労働が対象化されている限りでのことである。抽象的人間労働の凝固であるかぎりにおいて、何らかの

労働生産物は価値であると社会に認められるのである。ただし、直接に、それ自体が価値として認められるのではない。交換関係において、交換を通じて、つまり交換価値として現われることを通じてはじめて認められるのである。

(xi) 価値および価値実体の概念の一応の定立

以上述べてきた過程を経て、価値の概念が定立された。価値はどこまでも抽象的な規定性であり、量の契機を含まない。価値の量はいくまで価値の実体である商品に表わされる抽象的人間労働の量によるのであり、そしてその量の〈尺度〉は社会的に必要な労働時間なのである。

価値としての商品は、抽象的人間労働の凝固物・「幽霊のような対象性」しかもたないもの以外ではないのであって、労働生産物としての商品は、抽象的人間労働が堆積したものとして、抽象的人間労働の単なる凝固物（「幽霊のような対象性」をもつもの）として、価値であった。この価値から抽象的人間労働が反省されると、抽象的人間労働は価値の実体である。

このようにして、価値、価値実体の概念が定立されたことになる。商品は価値実体である商品に表わされた抽象的人間労働に物的に支えられたかぎりでは価値対象性を持つことになるが、この商品の価値対象性に関してマルクスは第二版第1章第3節の価値形態論冒頭の第2パラグラフで次のように述べている。

商品の価値対象性は、どうにもつかまえないのわからないしろものだ〔…〕。商品体の感覚的に粗雑な対象性とは正反対に、商品の価値対象性には一分子も自然素材は入っていない。それゆえ、ある一つの商品をどんなにいじりまわしてみても、価値物としては相変わらずつかまえないのである。とはいえ、諸商品は、ただそれらが人間労働という同じ社会的な単位の諸表現であるかぎりでのみ価値対象性をもっているのだということ、したがって商品の価値対象性は純粋に社会的であるということをおぼえておけば、価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちにはしか現われえないということもまたおのずから明らかである。われわれも、じっさい、諸商品の交換価値または交換関係から出発して、そこに隠されている価値を追跡したのである<sup>66)</sup>。

ここでマルクスは、価値対象性について純粋に社会的であると述べているわけだが、この商品の社会性が重大問題なのである。ここで述べられている〈社会性〉は、「一分子も自然素材は入っていない」という具合に、〈自然的－社会的〉関係における社会性として明示的に述べられているわけであるが、しかしここでの〈社会性〉はそれだけではないのである。それは〈私的－社会的〉関係における社会性でもあり、まさしくそのことが価値形態論において明らかにされるのである。商品のもつ社会性、価値対象性のもつ社会性は実にこのような二重の社会性なのである。だが、本章〈Ⅲ〉でこれまで追究してきた〈商品－価値－価値実体〉のもつ社会性、すなわち、第二版で言えば第1章第1節で論理的分析によって導出された社会性は、厳密に言えばあくまで〈自然的－社会的〉関係におけるそれであったのである。異種の二商品の等置関係から自然的諸規定が抽象・捨象されることによって得られた社会性である。だが、価値としての商品は〈自然的－社会的〉関係における社会性だけでなく〈私的－社会的〉関係における社会性をもつ。価値実体としての商品に表わされた抽象的人間労働はこの二重の社会性をもつものであり、そうであってはじめて価値の実体であり、

かくして商品は価値対象性をもつ。だがこれまでの議論では、積極的な概念規定としては〈自然的—社会的〉関係における社会性だけが規定されているのであって〈私的—社会的〉関係における社会性については未だ明示的には規定されてはいないのである。〈私的—社会的〉関係における社会性は商品をつくる労働の特殊歴史的規定性から出てくるのであるが、これまでの議論においては私的諸労働が一体どのようにして社会的労働として認められるのかについて明確に説かれてはいないのである。

どういうことかと言えば、二商品の等置関係が取り上げられた限りにおいて、二商品は互いに交換されるものとして社会性を持ち、だからそれら二商品のそれぞれに表わされた・その限りでの私的な抽象的人間労働が社会的労働として認められていることが解るが、そのこと自体が分析的に概念として示されたわけではない。むしろ陰伏的・仮言的に示されているだけである。このことを積極的に示すためにはこの等置の表現そのもの・表現様式自体を捉える必要があり、これはまさしく価値形態論の課題なのだ。だから、価値も価値実体も未だ十全には概念規定されてはいないということになる。

〈自然的—社会的〉関係における社会性は、自然的諸規定を抽象し人間労働一般に還元することによって得られた。これに対してそもそも〈私的—社会的〉関係における社会性については抽象・還元によって得られるものではまったくない。私的諸規定が抽象され社会性に還元されるなどということは決してあり得ない。これまで検討してきた『資本論』各版の当該部分ではこの〈私的—社会的〉関係における社会性については概念規定を与えてはいないのであって、それはそもそもそれが論理的分析によって得られるものではないからである。

〈私的—社会的〉関係における社会性は実に価値形態論ではじめてきちんと規定される。商品語の〈場〉においてはじめて明らかになることである。この前提は商品をつくる労働の特殊歴史的規定性であり、これは第二版の第1章第2節によれば、「独立に行なわれていて互いに依存し合っていない私的諸労働<sup>67)</sup>」、——この特定の私的労働が社会的労働に転化するのである。この商品をつくる労働の特殊な歴史的規定をうけて価値形態論は展開され、〈私的—社会的〉関係における社会性が規定され、こうしてようやく価値も価値実体も十全に概念として定立されることになるのである。

『資本論』第二版において、異種の二商品の等置関係から価値を導出しなければならないのだが、それ以前に価値を物的に支える労働（商品に表わされた抽象的人間労働）を導出しなければならなかった。この錯綜した推論・判断過程において、かの等置関係から自然的諸規定を抽象して〈自然的—社会的〉関係における社会性を別扱したわけであるが、にもかかわらずこれによって規定された価値もまた価値実体も十全には概念規定されてはいなかった。まさしくこの二重の宙ぶらりん状態が『資本論』第二版の叙述上の「混乱」の基底にある。

それではつづいて価値形態論にうつり、価値、価値実体の概念がどのように確定されるのかを見よう。だがそこは、これまでの人間語の世界とはまったく異次元の商品語の〈場〉である。諸商品の語る商品語を聴き取りそれに註釈を加え人間語に〈翻訳〉するという、マルクスの行なった、困難に満ちた、しかし精妙で見事な作業をわれわれも辿ることになる。

## 註

40) MEGA, II/5, S.17, MEGA, II/6, S.69. この文章は強調箇所の有無を別として初版と第二版とでまったく同一である。



- 41) マルクスが価値概念の定立を根源的な価値批判として行なったことについてはほとんどの論者が無自覚である。こうした状況にあって少し古いところではハンナ・アーレント、最近ではモイシェ・ポストンがこの点に注目した数少ない例である。ハンナ・アーレントは草稿“Karl Marx and the Tradition of Western Political Thought” (1953)において、マルクスの価値—価値批判について真摯に対決しようとし、労働、労働価値説、商品の価値と使用価値等々のマルクスの諸概念と格闘している。だが、マルクスの〈批判〉を捉え損なっているために結局は使用価値を価値に対置するという従来ある俗流的批判に墮している（佐藤和夫編・アーレント研究会訳『カール・マルクスと西欧政治思想の伝統』大月書店、2002年、pp.144-145を参照のこと）。またモイシェ・ポストンはマルクスの価値批判を跡付け、今日の社会批判理論にそれを復権させようと努めている。彼は価値—労働の廃絶を目指すべきであると主張するのだが、資本主義的生産様式の諸過程の担い手・主体が商品であることを忘れて議論しているため彼の価値批判の深度は残念ながら浅いものでしかない。主体である商品を忘れていることは価値形態論を完全に無視しているところに集約して現われている。まさに諸商品が過程の主体として運動する〈場〉の解明としてある価値形態論においてこそ、価値も価値実体も概念として確定するものだからだ。ポストンは言う。「マルクスにとって価値というカテゴリーは、資本主義の基礎的な生産諸関係〔…〕を表現するものであり、同じく資本主義における生産は、価値に基礎を置くものであることを示している。別言すれば価値とは、マルクスの分析において『ブルジョア的生産の基礎』を構成するものなのである。／価値というカテゴリーの特異性は、それが社会的諸関係の規定された一形態だけでなく、富の特殊な一形態をも表すとされているところにある。」(Postone, Moishe, *Time, Labor, and Social Domination: A Reinterpretation of Marx's Critical Theory*, Cambridge, U. K., Cambridge University Press, 1993, p. 24. [モイシェ・ポストン、白井聡・野尻英一監訳『時間・労働・支配——マルクス理論の新地平』筑摩書房、2012年、p.54.))、「富の一形態としての価値〔…〕」(ibid. [同上、p.55.])。このようにポストンは、商品を完全に視野の外において、価値を資本主義的生産様式が支配する社会の富の基本形態と捉えてしまっている。その一方で、監訳者の一人で解説を書いている野尻英一は、ポストンが商品を主体として議論しているかのように述べている。だがこれは誤読である。しかも悪いことには、野尻は交換価値と価値との概念的区分を明確にしておらず、その結果せつかくのポストンによる価値批判もスポイルしてしまっている。
- 42) MEGA, II/5, S.18; MEGA, II/6, S.70. この文章は強調箇所の有無を別として、初版と第二版とで同一である。
- 43) 原文対照表は、MEGA, II/5, S. 18, l. 20-S. 20, l. 16.; MEGA, II/6, S. 70, l. 27-S. 72, l. 39.; MEGA, II/7, S. 20, l. 26-S. 22, l. 34. の複写である（註は省略した）。また、フランス語版の訳において、パラグラフ②における「これらのさまざまな表現 *ces expressions diverses*」は、ドイツ語初版の「それの、このようないろいろな表現様式 *diesen seinen verschiedenen Ausdrucksweisen*」、ドイツ語第二版の「このようないろいろな表現様式 *diesen verschiedenen Ausdrucksweisen*」と比べれば瞭然たるように、「(諸) 様式 *mode (s); forme (s)*」という語が欠落している。ちなみにエイヴリングとエリナー・マルクスらによる英語版第1巻(1887年)では *ways of expression* と「諸表現様式」となっている。この差異は、ラテン語族の特質によるものというよりも、フランス語版読者に出版者ラシャートル宛の手紙で書いたような精確さにもとづく煩雑な印象を避けた（「フランスの読者が〔…〕うんざりはしないか」(MEGA, II/7, S. 9.)) のではないか。ドイツ語をフランス語に逐語訳した初版序文がフランス語版本文の前に置かれているが、そこでは「様式 *forme*」という語が多出している。
- 44) 価値規定の概念に関して、マルクスは『ドイツ労働者党綱領評註』（いわゆる『ゴータ綱領批判』、1875年）の中で詳細に述べている（MEGA, I/25, S. 11-16. 山辺健太郎訳「ゴータ綱領批判」（大内兵衛／細川嘉六監訳『マルクス＝エンゲルス全集』第19巻、大月書店、1968年、pp.18-22を参照のこと）。価値規定は、いわゆる共産主義の第一段階において生産と労働の社会的分配を行なう際の基準を提供するものであり、直接的な労働時間によって計量化される直接的労働量を表わすものである。当書でマルクスは言う。「ここでは明らかに、商品交換が等価物の交換であるかぎりでのこの交換を規制するのと同じ原則が支配している。内容も形式も変化している。なぜなら、変化した事情のもとではだれも自分の労働のほかにはなにもあたえることができないし、また他方、個人的消費手段のほかにはなにも個人の所有に移りえないからである。しかし、個人的消費手段が個々の生産者のあいだに分配されるさいには、商品等価物の交換の

場合と同じ原則が支配し、一つのかたちの労働が別のかたちの等しい量の労働と交換されるのである」(p. 20.)。また、『資本論』第三部草稿の「生産過程の分析のために」と題された章の末尾で次のように書いている。「資本主義的生産様式が解消した後にも、社会的生産が保持されるかぎり、価値規定は、労働時間の規制やいろいろな生産部門のあいだへの社会的労働の配分、最後にそれに関する簿記が以前よりもいっそう重要になるという意味では、やはり有力に作用するのである」(MEGA, II/4-2, S. 871.)

- 45) MEGA, II/8, S. 69. この部分の第三版と第四版(現行版)とは綴りの違い(原文で Waare が現代正書法の Ware になっている、および、第三版の *durcheinander* という一語が第四版では *durch einander* と二語に変えられていること)以外は同じなので、邦訳は資本論翻訳委員会のものを用いた(新日本出版社、1997年、pp. 66-67. 訳は適宜改めた)。
- 46) 例えば、榎原均『「資本論」の復権——宇野経済学批判』(四季社発行・鹿砦社発売、1978年)に次の件がある。「マルクスが、一商品の諸交換価値が表現する「一つの同等なもの」を問題にする場合、諸商品が皆、一クォーターの小麦の交換価値であることから、小麦の多様な諸交換価値としての諸商品が、相互に同一の大いさをもつ交換価値であることを示すことによって、これらの諸商品が「一つの同等なもの」を表現しているとし、この「同等なもの」を、後で「同じ大いさをもつ或る共通者」=「第三者」、すなわち、同等な人間労働、いかえれば抽象的人間労働として分析し、結局、これを「価値の実体」として把握していること〔…〕」(p.107)。このような誤読があるが本書は宇野経済学批判としてはもちろん、『資本論』解釈の点でも抜きん出た水準にあるのであって、同『価値形態・物象化・物神性』(資本論研究会、1990年)と共に、われわれは当然これらを踏まえて新たな解釈を提示しているのである。
- 47) ここでの等値式と価値形態論における等値式との相違について一言述べておきたい。ここでの等値式は、二つの商品(例えば1クォーターの小麦とaツェントナーの鉄)が単に互いに交換される、というだけのものであって、式の両項を入れ替えても式としては同じ意義を持つ。つまり両項の役割に差異はないのである。これに対して、価値形態論における等値式は、両項の役割が異なっており、それゆえ両項を入れ替えると式の意味が根底から異なるものになってしまう。このように、冒頭商品論の出だしにおける(第二版でいえば第1章第1節)の等値式は、価値形態論におけるそれとは違い、ただ単に、異なる任意の二商品が相互に交換されるというだけのものだけという事実を的確に踏まえておくことは重要である。
- 48) MEGA, II/6, S.80.
- 49) MEGA, II/6, S.104-105.
- 50) MEGA, II/5, S.46.
- 51) 見田石介『資本論の方法 I 見田石介著作集 第三巻』大月書店、1976年、p.34; 前掲廣松『資本論の哲学』、p.50; 吉原泰助「第一編 商品・貨幣」、『講座 資本論の研究 2 資本論の分析 (I)』青木書店、1980年所収、pp.27-28.; 白須五男『マルクス価値論の地平と原理』広樹社、1991年、p.16.; 日山紀彦『「抽象的人間労働」の哲学——二一世紀・マルクス可能性の地平——』御茶ノ水書房、2006年、p. 98. (日山は「共通の第三者」でなく「共通の第三項」という用語を用いている)、などを参照のこと。
- さて、そもそも「共通な第三者」という概念は論理的に問題がある。なぜか。異種の二商品はそれらに「共通なもの」としての価値という社会的属性において等置される。つまり二商品に共通な社会的属性である価値という同一性が問題とされる。この「共通なもの」=価値における等置が可能になる物的根拠として、二商品のいずれでもない「第三のもの」として双方の商品に表わされた抽象的人間労働が導かれる。あくまで第三者という以上それは二つの商品と異なるもの・区別されるもの、という意味である。商品Dingは自然物であると共に社会的なものである。それは自然素材と労働からなっており、それに表わされた労働は具体的有用労働と抽象的人間労働との二重性をもつ。だから等置された二商品から自然的諸規定性を捨象・抽象すると両商品はそれらに表わされた抽象的人間労働に還元されるのであり、この対象化された抽象的人間労働は二商品のいずれでもない「第三のもの」ということなのである。同一性ではなく区別あるいは差異性が問題になっている。かくして「共通な第三者」というのは「同一なる区別・差異」とか「同一性としての区別あるいは差異性」とかいうような論理的にはなかなか微妙なもの言いとなる。とりわけ同一性と区別の基体、過程の主体・実有(ここではあくまでも商品)を問題にしなければならない以上この論理的な微妙さがより露わになる。とは言え、ヘーゲル論理学に即して言えば、こういうもの言いも可能であるようにも思われる。かくして同一性(=価値)と区別・差異性(=抽象的人間労働)との内在的な

関係と前者から後者への転化・移行が説かれなければならないわけである。だがそもそも価値から価値実体への内在的転化・移行を説くことなど不可能である。

又、ごく最近のものとしては、宇野派につらなる小幡道昭『価値論批判』（弘文堂、2013年）と廣松の誠実な弟子・熊野純彦による大部の『マルクス 資本論の思考』（せりか書房、2013年）とを挙げることができる。小幡は、「『第三のもの』は、等式の左辺にも右辺にも同等に実存する『共通物』 *Gemeinsames* なのである」（p.20.）とか、「共通の第三のものから、価値の実体としての抽象的人間労働にいたる一連の推論」（p.27.）などと、素朴な誤読の様態を開陳している。彼の著書では『資本論』はすべて現行版から引用しているにもかかわらず、「Marx [1867]」と表記し、加えて原著頁が MEW のものとなっている。このような姿勢は、MEGA の資本論労作諸篇を資料批判した *Zweite Abteilung*（本稿でわれわれが用いている諸テキスト）が刊行された後の学術書としてはあまりにテキストの取り扱い方が杜撰・粗雑である。一方、熊野はその著作において師・廣松とまったく同じ誤謬を犯している。熊野もまた MEGA の成果を十全に活かしておらず、結果、廣松流解釈の護教者として振る舞ってしまっている（pp.45-46.）。

ところでマルクスは、ヨハン・モスト『資本と労働——カール・マルクス著『資本論』のわかるダイジェスト——』（1874年）に対する改訂作業を自ら相当のエネルギーを注いで行なった（作業は1875年、改訂版の刊行は翌1876年）。今日、マルクス自身の手による部分は明確になっており、そこでマルクスは次のように書いている。

Der Tauschwerth ist das Größenverhältniß, worin nützliche Dinge einander gleichgelten und daher miteinander austauschbar sind, z.B. 20 Ellen Leinwand = (gleich) 1 Centner Eisen. Aber verschiedene Dinge sind nur vergleichbare Größen, wenn sie *gleichnamige* Größen sind, d.h. Vielfache oder Theile *derselben Einheit*, eines ihnen *Gemeinsamen*. Also können auch in unsrem Beispiel 20 Ellen Leinwand nur gleich 1 Centner Eisen sein, sofern Leinwand und Eisen etwas *Gemeinsames* darstellen, wovon gerade so viel in 20 Ellen Leinwand steckt als in 1 Centner Eisen. Dies Dritte, beiden *Gemeinsame*, ist ihr *Werth*, welchen jedes der beiden Dinge, unabhängig vom andern, besitzt. Es folgt daher, daß der *Tauschwerth* der Waren nur eine *Ausdrucksweise ihres Werthes* ist, nur die Form, die ihr *Werthsein* zum Vorschein bringt und so zur Vermittlung ihres wirklichen Austauschs dient.

交換価値は、有用な物がたがいに等しいものとして認められ、だからまたたがいに交換されることができるときの両者の量的な比率です。たとえば、20 エレのリンネル = 1 ツェントナーの鉄 というのがそうです。しかし、違った物どうしが比べられることのできる量であるのは、ただ、どちらも同じ名称の量である場合、つまり同じ単位の、両者に共通なあるものの倍数ないしは分数である場合だけです。ですから、いま挙げた例で二〇エレのリンネルが一ツェントナーの鉄に等しいと言うことができるのも、ただ、リンネルと鉄のどちらも、なにか共通のものを表わしていて、この共通なものが、二〇エレのリンネルにも一ツェントナーの鉄にも同じ量だけ潜<sup>ひそ</sup>んでいる場合だけです。両者に共通なこの第三者はそれらの価値ですが、両方の物はそれぞれ自分の価値をほかの物とは無関係にもっています。ですから、商品の交換価値は、商品の価値の表現様式でしかなく、商品が価値をもっていることを見えるようにし、そしてまた商品の実際の交換を仲立ちするのに役だつ形態でしかない、ということになります。（MEGA, II/8, S.739. ヨハン・モスト原著 カール・マルクス加筆・改訂、大谷禎之介訳『マルクス自身の手による資本論入門』大月書店、2009年、pp.33-34.）。

ここでマルクスは「Dies Dritte, beiden *Gemeinsame* [この第三者、両者に共通なもの]」と「第三のもの」と「共通なもの」とを同格にし並置している（大谷はこれを並置として訳出していない）。「共通な第三者」という表現と比べると、論理的問題は後景に退くが、等置表現としてはより強いものであると言える。この点はいま引用したところ全体に強く現われていて、「*gleichnamige Größen*（同じ名称の量）」とか「etwas *Gemeinsames*… gerade so viel in 20 Ellen Leinwand steckt als in 1 Centner Eisen（なにか共通のものが…二〇エレのリンネルにも一ツェントナーの鉄にも同じ量だけ潜<sup>ひそ</sup>んでいる）」といった表現にもそれを見て取ることができる。「同じ名称」すなわち価値が量の契機を内在させ、双方に「共通なもの」として両者の中に「潜んでいる」というわけであるから、『資本論』のための入門書であるという当書の性格がはっきりと出ている。マルクスはこの改訂で、論理の精確さを犠牲にしてでも平易化を追求



している。この改訂版のための作業をマルクスは1875年に行なったが、それは、『資本論』第二版の刊行(1872年～1873年)、同フランス語版(1872年～1875年)、同ロシア語版のための作業、同英語版のための準備作業、等々を受けて、あるいはそれらと並行してなされたわけであった。この時期はパリ・コミューンの成立と敗北という巨大な歴史的現実を背景とするが、『資本論』が徐々に先進的労働者、活動家に受け入れられていく時期であり、マルクスは「平易化」を強く意識して遂行したのだと考えられる。だが、そのことによって見失われたことも少なくはないと今日では考えることができる。ただ、本稿で詳細に検討してきた『資本論』の叙述上の「混乱」は単に「平易化」だけによるものではないと考えられる。これについては註57)を見よ。

- 52) 「共通なもの」も「第三のもの」も抽象的人間労働だと捉えるのはスターリン主義派のD. ローゼンベルグ(『資本論註解』第一巻、直井武夫／淡徳三郎訳、改造社、1933年)、見田石介(前掲『資本論の方法I 見田石介著作集 第三巻])等であり、逆に両者を共に価値だと考えるのは、ソ連内異端派であったイサーク・イリイチ・ルービン(『マルクス価値論概説』竹永進訳、法政大学出版局、1993年)や廣松渉(前掲『資本論の哲学])等である。また「共通なもの」と「第三のもの」を一方では共に価値、他方では共に抽象的人間労働と捉えるのはダンカン・K. フォーリー(竹田茂夫／原伸子訳『資本論を理解する——マルクスの経済理論』法政大学出版局、1990年)、種瀬茂(「第I部 原典解説 第一編 商品および貨幣 第1章 商品 1 商品の二つの要因——使用価値と価値(価値の実体、価値の大きさ)」『資本論体系2 商品・貨幣』有斐閣、1984年所収)等である。
- 53) 対応する要素の数を一致させるだけのことであれば、例えば次のようにすれば良いだろう。平面上の何らかの図形(ただし面積が定義されるもの)、その面積、何らかの測度(例えばジョルダン測度)、それに基づく積分表示。しかしこの例でも、量の契機の有無が大きな問題として残ることに変わりはなく、十分に適切な例とは言えない。いずれにしてもこのような「幾何学的」な例にこだわることは避けた方が良い。
- 54) MEGA, II/5, S. 23, MEGA, II/6, S. 76. 初版と第二版ではまったく同一の文章である。
- 55) MEW, Band 19, S.357-358. [アードルフ・ヴァーグナー著『経済学教科書』への傍注] 大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス＝エンゲルス全集』第19巻、大月書店、1968年、pp.356-357. 念の為、マルクスが引用しているヴァーグナーの著書から当該部分を引いておく。「Beider Werththeorien haben doch keine nachhaltige Bedeutung erlangt, —Ungleich bedeutender ist die Werththeorie von K.Marx,d. Kapital,S.1 ff.,der die gemeinsame gesellschaftliche Substanz des von ihm allein hier gemeinten Tauschwerths in der Arbeit,das Grössenmass des Tauschwerths in der gesellschaftlich nothwendigen Arbeitszeit findet.», in Adolph Wagner, *Allgemeine oder theoretische Volkswirtschaftslehre*, Erster Theil. Grundlegung, 1879, Leipzig und Heidelberg, S.45.
- 56) MEGA, II/6, S.85.
- 57) 価値が商品の中に「存在する〔existieren〕」、商品に「潜んでいる〔stecken〕」、あるいは商品を価値に「還元する〔reduciren〕」とマルクスが表現している事実には、いわゆる「平易化」とは別の理由があると思われる。一言でいえば、マルクスにとっての批判対象との関係である。1859年刊行の『経済学批判』第1分冊から『資本論』へは巨大な飛躍があり、それは価値形態論に集約的に示されている。これはサミュエル・ベールのリカードゥ批判との対質によって、一方でのリカードゥ、他方でのベールという両面批判を遂行できたことによる。リカードゥは労働価値説をもっとも首尾一貫して展開したが、しかしリカードゥは個々の商品に対象化された個々の労働、それゆえに私的な諸労働がどのようにして社会的労働として認められることになるのかを、したがって労働生産物が一体どのようにして商品となり価値(実際には交換価値)として社会的に認められるものになるのかを問うことさえなかった。ベールはこのリカードゥの欠陥につけ込み、〈相対的価値と絶対的価値〉の混乱としてリカードゥの労働価値説を批判し、価値はただ社会的関係にすぎないと主張した。この〈リカードゥーベール〉に対してマルクスは、まず労働が対象化される限りで労働生産物は価値になること、つまり労働の凝固として労働生産物は価値であるとして、個々の商品が価値であるとベールを批判する。価値は社会関係なのではなく、個々の商品自体、それぞれ労働が対象化されている限りで価値であり、この価値が社会関係＝交換関係において現われるものだというのである。その上で、価値がどのような形態で現われるのか、つまり交換価値という形態をもつのかを、個々の商品に対象化された私的な諸労働が社会的な諸労働として認められる仕組みとして価値形態

論を展開したのである。これがリカードゥへの根源的批判であった。こうした経緯と背景から、マルクスは個々の商品がそれ自体で価値であること、労働凝固体として交換関係に入る以前から価値であることを強調せざるをえなかった。これが先のような、概念としては問題のあるいくつかの表現をもたらしたのだと思われる。

58) MEGA, II/6, S. 109.

59) MEGA, I/25, S. 13. 山辺健太郎訳「ゴータ綱領批判」(大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス＝エンゲルス全集 第19巻』大月書店、1968年、p.19.)

60) MEGA, I/25, S.15. 同上、p.21。

61) 当パラグラフの最後の文章末尾「—Werthe」の後に第三版では、「— Waarenwerthe」が付加されている。MEGA, II/8によれば、第二版のマルクス自用本への書き込みにこれに関するものがあるので、マルクス自身による書き込みに基づいてエンゲルスが第三版で付加したということになる。概念を規定するものとしての「—Werthe」に対して、それを説明するものとして「—Waarenwerthe」が付加されたわけである。マルクスがほとんどの場合、単に Werth と言ひ、Waarenwerth という言葉をほとんど使っていないことにここでは注意しておく必要がある(これもきわめてまれにしか用いてはいないが、der Werth einer Waare とか、Waaren-Werth という表現がある)。資本主義的生産様式が支配する社会における価値は商品価値以外になく、この価値に従来の一切の価値が集約され、それゆえ商品価値は単なる諸価値の一つにすぎないのではないということ、しかもそれは徹底して転倒したものであること、このことがマルクスの念頭にある。それゆえ商品価値に対する批判が根源的な価値批判であり、しかも新たな価値を創造する運動への一条件でもあるということである。この価値批判という点でマルクスは一貫しているのであって、概念としての「Werth」に対する説明的用語としての「Waarenwerth」との区分を明確にしておかなければならない。「Waarenwerth」の方が「Werth」よりも精確な概念規定であるというわけではないのである。

62) ソヴェト同盟科学院経済学研究所、マルクス・レーニン主義普及協会訳『経済学教科書(第一分冊)』(合同出版社、1955年)は言う。「価値は、商品というかたちをとった、商品生産者の社会的労働である」(p.114)。また、スターリン主義派経済学を批判し粛清されたイサーク・イリイチ・ルービンはこうしたスターリン主義派の見解を批判して言う。「もっとも通説的でまた広く流布している見解をとってみれば、[...] 価値とは、ふつう、ある商品の生産に支出する必要のある労働と解される。[...] /このような通説的規定においては、ふつう、価値が労働によって規定されるのか、それとも、価値が労働それ自体なのか、必ずしも明らかではない。[...]中略[...] 労働は価値と同一視してはならない。労働はただ価値の実体であるにすぎない。(前掲『マルクス価値論概説』 pp.103-104.)」

63) Harvey, David, *A Companion to Marx's Capital*, London & New York, Verso, p. 18. (森田成也・中村好孝訳『資本論』入門 作品社 2011年、p.43。ただし部分的に改訳した。)

64) 前掲廣松渉『資本論の哲学』 p.53。

65) 同上、p.50。

66) MEGA, II/6, S.80.

67) MEGA, II/6, S.75. 当引用は第1章第2節からのものであるが、同章第4節には次のようなものがある。「およそ使用対象が商品になるのは、それらが互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからにはほかならない。」(MEGA, II/6, S.103.)、「互いに独立した私的諸労働の独自の社会的性格はそれらの労働の人間労働としての同等性にあるのであって、この社会的性格が労働生産物の価値性格の形態をとるのであるということが [...]」(MEGA, II/6, S.105.)、「互いに独立に営まれながらしかも社会的分業の自然発生的な諸環として全面的に互いに依存しあう私的諸労働が [...]」(MEGA, II/6, S.105-106.)。これらの引用からマルクスが、商品をつくる労働の特殊歴史的規定性を相互に独立して営まれる私的諸労働とし、その社会性が商品の価値性格として現われるとしていることがはっきりと解る。ところで、本文に引用したものと今引用した最後のものとを比べるとその相違の何たるかを考えざるを得ない。一方では「独立に行なわれていて互いに依存し合っていない私的労働」、他方は「互いに独立に営まれながらしかも社会的分業の自然発生的な諸環として全面的に互いに依存しあう私的諸労働」(引用での下線は引用者)となっているのであるから。これら双方は初版からそのまま第二版に移されたものであり(初版では、MEGA, II/5, S.22/

S.46.)、初版の書き換え問題との絡みで考察しておく必要が生じる。結論を先に言えば、誤解を与えかねない表現になってはいるが、双方ともこのままで良いとわれわれは考える。前者(第2節のもの)は社会的分業が商品生産の必要条件ではあるが十分条件ではないことが述べられた上でのもので、社会的分業体制に組み込まれたものである限りで相互に依存してはいるが、しかしあくまでも私的な労働として相互に独立していて直接的な・社会的意識的なものとしては依存関係にない労働、と言う具合に私的で共同的でない点を押し出しているわけである。他方の後者(第4節のもの)においては、相互に独立した私的労働でありながらも、その私的労働の社会性、つまり、価値法則が社会に貫徹することによって社会的分業体制の組み換えや変動が絶えず生み出されるという社会的総労働の在り様に主張の重点があるがゆえに、相互に依存しあった、という点が押し出されているのである。要するに重点の置き方に相違があるということにほかならない。

井上 康 (京都精華大学非常勤講師)

崎山 政毅 (本学国際文化学域文化芸術専攻教授)



# 商品語の〈場〉は人間語の世界とどのように異なっているか(3)

——『資本論』冒頭商品論の構造と内容——

井 上 康  
崎 山 政 毅

はじめに

- 〈I〉 人間語の世界に対する限りでの商品語の〈場〉
- 〈II〉 『資本論』初版と第二版の位相（以上、632号）
- 〈III〉 人間語による分析世界としての『資本論』第二版第1章第1節および初版・フランス語版当該部分の比較対照による解説
  - (i) 〈富—価値—商品〉というトリアーデ
  - (ii) 『資本論』初版、第二版、およびフランス語版の対照
  - (iii) パラグラフ①および②の検討
  - (iv) パラグラフ③の検討
  - (v) パラグラフ④の検討
  - (vi) パラグラフ⑤の検討
  - (vii) 「共通なもの」= 価値、「第三のもの」= 商品に表わされた抽象的人間労働
  - (viii) 初版のパラグラフ⑥～⑨の検討
  - (ix) 第二版・フランス語版のパラグラフ⑥、⑦の検討
  - (x) 第二版・フランス語版のパラグラフ⑧、⑨の検討
  - (xi) 価値および価値実体の概念の一応の定立（以

上、633号）

- 〈IV〉 商品語の〈場〉——価値形態（本号）
  - (i) 商品をつくる労働の特殊歴史的規定性について
  - (ii) 初版本文、初版付録、および第二版のそれぞれの価値形態論
  - (iii) 価値表現において諸商品は何をどんな風に語るか
  - (iv) 〈自然的規定性の抽象化〉過程に関して
  - (v) 〈私的労働の社会化〉過程に関して
  - (vi) 価値の実体と等価形態の謎性
  - (vii) 初版本文価値形態論の形態Ⅱに関して
  - (viii) 初版本文価値形態論の形態Ⅲに関して
  - (ix) 初版本文価値形態論の形態Ⅳに関して
- 〈V〉 価値形態論と交換過程論との関係について（以下、続く）
  - (i) 価値形態論に対する交換過程論
  - (ii) なぜ、第二版は初版本文の形態Ⅳを捨て貨幣形態を形態Ⅳとしたのか
- 〈VI〉 〈富—価値—商品〉への根源的批判について  
おわりに

（承前）

## 〈IV〉 商品語の〈場〉——価値形態

- (i) 商品をつくる労働の特殊歴史的規定性について

商品語の〈場〉に入る前に、特殊歴史的規定性を受けた、商品をつくる労働について少し述べておきたい。商品をつくる特殊歴史的な労働は、相互に独立して営まれる私的諸労働であった。この私的労働の特有の社会性が他でもなく諸商品の等置関係・価値関係・交換関係においてはじめて現

われ出てくる。だから私的労働が社会的労働として認められる過程は価値形態論がはじめてこれを示すのである。個々の商品をいくら分析してみてもそれに表わされた労働はあくまで私的労働であって決して社会的労働として認められることはない。だが、それがまさしく商品であるということはそれが他の商品と交換され得るということ、当該商品に表わされた私的労働が他の私的労働と交換され得るということであり、この交換関係においてはじめて商品に表わされた私的労働は社会的労働として認められることになるわけである。だからマルクスは人間語による分析世界においても用意周到に、代表としての異種の二商品の等置関係・交換関係を取り出して分析し、価値と価値実体の概念を一応定立していた。もちろん人間語による分析においては価値表現自体＝価値形態自身を問題にしたわけではない。だから分析的抽象によって導き出された抽象的人間労働はあくまで自然的諸規定・具体的有用的諸規定を抽象した限りでの社会性をもつものであって、それはそのままでは私的労働に対する社会的労働として認められたものとして把握されているわけではない。ただその分析的抽象化が二商品の等置関係から、すなわち相互に交換され得るという社会関係から導かれたことによって、陰伏的に (implicit) その社会性が語られていることになるのである。諸商品に表わされた私的諸労働がまさしく現実的に社会的な労働として、どのようにして認められることになるのかということは、だからこの等置関係・交換関係そのもの・その表現それ自体に立ち戻ることによってのみ示されることになる。

商品に表わされた労働は、あくまで相互に独立して営まれる私的諸労働、社会的分業の自然発生的諸環として全面的に依存し合っているものの、にもかかわらずただ交換によってはじめて実際に社会的総労働の諸環としてそれぞれが実証されるような、相互に独立しそれゆえ直接には依存関係にない私的諸労働である。だからこそ人々にとっては、異種の二商品の等置において、はじめから異種の労働を労働一般＝抽象的人間労働として等置するなどということは可能ではないのであって、二商品を直ちに交換価値にするのである。だから異種の二商品の等置は労働におけるそれではなく、きわめて抽象的な価値における等置であるのだが、しかし価値における等置ということさえ人々は無意識の内に行なうのであって、交換価値という具体的な量的関係に入るのである。

価値形態論が必要になるのは、商品をつくる労働のこのような特殊歴史的な在り様による。リカードゥをはじめとして古典派経済学はこの点をまったく把握してはいなかったのである。彼らは商品を分析して労働を見出し、それによって商品の価値 (実は商品の交換価値) を規定したが、その労働の特殊な在り様については探究することがなかった。相互に独立して営まれる私的諸労働の生産物だけが相互に商品として関係するのであり、この私的な諸労働がどのようにして社会的労働として認められるようになるのかを古典派経済学、そのもっとも優れた学者であるリカードゥでさえ問うことがなかったのである。個々の商品に表わされた労働はあくまで私的諸労働であり、それ自体はそうでしかなくそうであり続ける。ところが、そうした私的なものでしかない諸労働の投下物としての・その凝固としてのそれらの労働生産物が商品として、すなわち価値として認められるということは、それらの私的な労働が社会的な労働として認められるということ、他の様々な種類の労働とも交換可能な社会性をもった労働として認められるということの意味している。私的労働が社会的労働に転化することがいかにして可能であるのか、——この問いがリカードゥにあってさえ問われなかったということである。ところが一方、現実の商品世界にあっては貨幣が既に存在し、貨幣以外のすべての労働生産物が貨幣との交換関係に入ることによって商品として相互に交換されることとなっている。だから一見すると他でもなく貨幣によってこそ、あらゆる労働生産物は商品に転

化するかのように見える。しかし貨幣もまた一つの特定の労働生産物であり商品である。かくしてなぜ貨幣があるのかを問う必要があるのである。つまり、私的労働が一体いかにして社会的労働に転化されるのかを解き、この転化の形態の完成した姿として貨幣（貨幣形態）を捉えるということが問われるのである。任意の商品に表わされた私的労働が一体どのようにして社会的労働に転化するのか、すなわち、どのようにして他のどんな私的労働とも交換可能な形態を得るのか、そしてその転化の完成形態として貨幣形態を把握するということが問われるのである。こうして「すべての商品の貨幣存在」が十全に解かれることになり、貨幣の秘密が明らかになる。

私的労働の社会的労働への転化を解くためには、議論を諸商品が現実運動する〈場〉、すなわち、諸商品の交換関係の〈場〉において展開しなければならない。少なくとも二商品の交換関係・等置関係が対象として措定されなければならない。

では、リカードゥが行なったことは結局、どういうことであったのか。リカードゥは、商品の価値をそれに投下された労働によって規定されるものとして掴んだが、彼はその商品に投下された労働を、多くの商品の集合から、もしくはそれらの中から代表として取り出したただ一つの商品から分析的に抽象化して析出したのであって、だからリカードゥの価値（実際は交換価値）概念は、単なる分析的な抽象概念であり、しかも商品に投下された種々様々の具体的な私的諸労働を労働一般へと抽象化することで得られた抽象概念である。だからその抽象化は、マルクスの分析的抽象化とは決定的に異なっている。マルクスの場合、代表として採られた異種の二商品の等置関係から分析的抽象化が行なわれたのであり、だからそこで得られた抽象的人間労働は、労働の自然的諸規定・具体的有用的諸規定が抽象化されたものとして、明確に〈自然的－社会的〉関係における社会性への抽象化が遂行されたものとしてあった。かくしてそれは、〈私的－社会的〉関係における社会性をも陰伏的に（implicit）含み込んだものとしてあった。これに対してリカードゥの場合は、多くの商品もしくは単一の商品に投下された諸労働の労働一般への抽象化が思惟抽象によって遂行されただけであり、だからそれによって得られた労働一般は単なる抽象的な観念像でしかなく、〈自然的－社会的〉関係における社会性さえも明確には含み込んでいない抽象概念であり、ましてや〈私的－社会的〉関係における社会性からは切り離されたものであった。それゆえリカードゥの場合、そこから社会的労働へと至る理路は存在しない。マルクスの場合、再び異種の二商品の等置関係に立ち戻り、その価値表現・表現様式を問題とすることによって、〈私的－社会的〉関係における社会性を捉えることができたのであるが、リカードゥの場合はそこへ向かう理論的な道筋がないのである。このことは、古典派経済学のリカードゥたちが、商品に表わされた労働を二重性において捉えることができなかつたことと正確に照応している。

〈私的－社会的〉関係における社会性は、そもそも分析的抽象化によっては得られるものではない。人間語による思惟抽象によって得られるものではないのである。だから、マルクスが行なったように、最初から異種の二商品の等置関係を代表として措定し、それをまずは分析的に抽象化して抽象的人間労働を一旦導いた上で、改めてその等置関係に立ち戻り、その表現形態・表現様式自体を取り上げる必要があるのである。一旦分析的抽象化によって得られた抽象的概念を諸商品の等置関係・価値関係へと返し、諸商品の現実の運動においてその抽象化が実現される過程に立ち戻ることによってはじめて、私的諸労働の社会的労働への転化の過程を捉えることができるのである。なぜなら諸商品の等置関係そのものにおいて、したがって価値形態においてこそ、私的労働の社会的労働への転化が成し遂げられるからである。諸商品の運動自体がそれを成し遂げるのであって、だから



人間語による思惟は、商品語の〈場〉に立ち向かい、その〈場〉の運動を見・聴き取ることが求められるのである。しかも、この私的労働の社会的労働への転化は、議論の先取りになるが、形態Ⅱ（展開された価値形態）でも形態Ⅲ（一般的価値形態）でもなく、価値形態のもっとも原初的形態である形態Ⅰ（単純な価値形態）において解明されなければならない。なぜなら、どのような労働生産物でも商品になり得ること、どのような私的労働でも社会的労働に転化できること、すなわち、「すべての商品の貨幣存在」を解き明かすことが求められているからである。一般的価値形態における一般的等価形態にある一般的等価物はもちろん、形態Ⅱ（展開された価値形態）における相対的価値形態にある商品もすでに他のすべての商品と異なる特別な形態における商品になっているからである。形態Ⅰ（単純な価値形態）における等価形態にある商品、つまり相対的価値形態にある商品とだけ異なるものとして、どのような商品もその位置に座り得るその等価物こそが貨幣の原基的・原初的形態であることが明らかにされなければならないのである。これが明らかにされることによって、価値形態—貨幣形態の秘密を暴き出すことができる。『資本論』初版でそれはなされた。しかしそれは単純な思惟活動の結実ではない。人間の分析的思惟、その抽象作用の単純な適用・駆使によってそれはなしうることではないからである。

(ii) 初版本文、初版付録、および第二版のそれぞれの価値形態論

『資本論』の価値形態論には周知のように三つのバージョンがある。初版本文、初版付録、そして第二版の各価値形態論である。これら三つの価値形態論をどのように捉え扱ったら良いであろうか。

基本的に初版本文テキストを主テキストとし、第二版を比較対照テキスト、更に必要に応じて初版付録を参照テキストとすれば良いとわれわれは考えているが、三つの版の比較から以下のことが言える。

- (1) 初版本文には貨幣形態が含まれてはいないが、初版付録および第二版では形態Ⅳとして貨幣形態が論じられている。しかも共に一般的等価物としての完成形態である金を用いてそれが論じられている。
- (2) 初版本文の形態Ⅳは形態Ⅱ（展開された価値形態）における相対的価値形態の位置にあるリンネル、形態Ⅲ（一般的価値形態）における一般的等価形態の位置にあるリンネルに他のいかなる商品も代替し得ることを示したものであるが、この初版の形態Ⅳは初版付録および第二版では省略されている。
- (3) 初版本文は相対的価値形態から見た価値形態論となっているが（この点は形態Ⅰから形態Ⅲがすべて「相対的価値の〔…〕形態」となっているところに良く示されており、初版付録以降、これは継承されていない）、初版付録はその点が少し弱まっている。更に第二版では相対的価値形態と等価形態の双方を全体として見るものとなっている（ここで「見る」というのはマルクスの学的思惟が「見る」のである。というのは、価値形態論ではあくまで商品語の〈場〉が問題であって人間語の世界が問題ではないとはいえ、商品語を聴き取り・註釈・翻訳するマルクスの学的思惟が介在しているのは当然だからである）。
- (4) 初版付録は非常に細かな区分・項目が立てられ、しかもそれらにそれぞれの内容を示す見出し等が付せられており、マルクス自身も言うようにきわめて「学校教師的に説明する」体

裁のものになっている。それゆえ、もっとも弁証法が強く働く価値形態論であるにもかかわらず形式論的理解を許容する危険性を内包している。

以上三つの版の価値形態論の比較からわれわれは初版本文のものを主テキスト、第二版のものを比較対照テキスト、初版付録を補足・参照テキストとする<sup>68)</sup>。その理由は以下である。

価値形態論の課題は何よりも労働生産物がどのようにして現実的に商品になるのか（商品形態をとるのか）を示すことである。そしてこのことは「すべての商品の貨幣存在」を明らかにすることである。ある何らかの一労働生産物が現実的に商品になるのは、それと異なる種類の労働生産物たる商品との交換関係・価値関係・等置関係に入ることによってである。つまり、他の異種の商品を等価物として（等価形態として）自分に等置し、自らはこの関係の中で相対的価値形態を取ることであり得る。したがって、価値形態論の果たすべき課題からすれば、あくまで相対的価値形態の方から見て、まずは論理的にあり得るすべての価値形態について、商品形態としての社会性の水準の低いものから高いものへと見ていくことが求められるのである。だからこのことは、純論理的に言った場合の最高の価値形態である一般的価値形態における一般的等価物にあらゆる商品が位置できることを示すことなのである。このことが「すべての商品の貨幣存在」を解くことであることは言うまでもない。これらの点から言って、初版本文の価値形態論こそが、他の二つのもの——初版付録と第二版の価値形態論——に対する論理上の優位性を占めていることが判る。初版本文の価値形態論はあくまで相対的価値形態から見たものとなっており、また「形態Ⅳ」として一般的価値形態における一般的等価物の位置に任意の商品が位置し得ることが示されているからである。また更に、価値形態論で貨幣形態について解いていないことも初版本文の価値形態論が論理的に他の二つに対して優位にあることをはっきりと示している。三つの価値形態論のいずれも第三の価値形態として一般的価値形態を取り上げているわけだが、ここで一般的等価形態に位置する一般的等価物たる一商品が、貨幣商品としての金に転化・固定化する事態は、決して純粋に論理的に解き得ることではなく、現実的な歴史的諸過程に拠るものだからである。論理的に言って、あらゆる商品が一般的等価物になり得ること、このことを示すことこそが「すべての商品の貨幣存在」を明らかにすることであり、貨幣の秘密を解くことであり、初版本文はその課題を果しているのだが、他の二つのものはこのことを改めて確認しないままに貨幣形態について述べてしまっているからである。特定の商品である金に一般的等価物が固着する過程は、決して純論理的に解き得ることではなく、現実的な歴史過程によるのであって、これは交換過程論の課題なのである。初版本文は価値形態論から交換過程論への接続がきわめて論理的で無理なくなされているのに対して、初版付録および第二版では価値形態論で貨幣形態についても解いてしまっており、しかも貨幣形態を先に解いたにもかかわらず、交換過程論は初版からの書き換えをほとんど行なっておらず（核心部分ではまったく書き換えを行なっていないと言って良い）、その論理的接続に無理が生じているからである<sup>69)</sup>。

以上から、価値形態論については初版本文を主テキストとしなければならないことがわかる。ただ、初版本文の価値形態論にも欠陥がないわけではない。というのは、先に見たように、初版は価値を前提にして、あるいは仮言的に措いて論じていたのであり、このことが価値形態論においても影響しているからである。諸商品が商品語で語る事柄を聴き取りそれを人間語に翻訳した注釈するという面で、あくまで人間語の世界におけることではあるが、論理の緻密さに欠けるところがあるし、また叙述の丁寧さなどの点では明らかに第二版の方が優れているところがある。こうした初

本文の価値形態論の欠陥は、いわゆる「回り道」の議論（後に詳述）にはっきりと現われている。この点に留意しつつ初本文を主テキストとして考察していくことになる。

次いで、第二版と初版付録の扱いに関して述べる。両者は共に、初本文の価値形態Ⅳを捨て、形態Ⅳを貨幣形態としている。最後の形態である形態Ⅳを貨幣形態にすることによって、形態Ⅰ（単純な価値形態）から形態Ⅳ（貨幣形態）へと至る価値形態の発展という論理的筋道が敷かれたことになり、価値形態全体が貨幣の必然性とその創出を解くものとなった。この点では初版付録よりも第二版の方がはるかに徹底しており、形態Ⅰから形態Ⅳへの発展過程が歴史的過程として描き出されている。これに対して初版付録では歴史的発展過程という一貫した叙述にはなっていない。貨幣形態自体の扱いにそれ程の重点が置かれているとは言えない。またそもそも初版付録はあくまで本文に対する付録であり、何よりも重点は平易化にある（以上の詳細な分析は、次章〈Ⅴ〉の(ii)で行なう）。こうして、初本文と第二版とが対極的な位置にあり、初版付録がその中間に位置するということがわかる。

以上からわれわれは、第二版を初版に対する比較対照テキストとし、初版付録を参照テキストとする。

ではいよいよ商品語の〈場〉に入っていこう。

### (iii) 価値表現において諸商品は何をどんな風に語るか

形態Ⅰとしての「相対的な価値の第一の、または単純な形態」、「それが単純であるがゆえに、分析するのが困難なもの<sup>70)</sup>」とマルクスの言う第一の形態をこそ見ていくことが重要である。

価値表現: 20 エレのリンネル = 1 着の上着 (a 量の商品 A = b 量の商品 B) が取り上げられる。この等式は、労働生産物である 20 エレのリンネルが、自分が商品であることを示すために形成されたものである。だからこの等式は数学における等式とは異なっている。等式の両項を入れ換えると意味が違って来るからである。この点については既に〈Ⅲ〉における註 47) で述べておいたが、再度確認のため触れると、初版第 1 章の「(1) 商品」冒頭、それに対応する第二版第 1 章第 1 節における等置式〈1 クォーターの小麦 = a ツェントナーの鉄〉と上記の価値形態Ⅰの等置式〈20 エレのリンネル = 1 着の上着〉との相違として理解される。前者、すなわち冒頭商品論の出だしにおける等置式は、単に相異なる任意の二商品が相互に交換される、ということを示したものであり、左右両辺を入れ換えてもその意義に変化はない。その限りでこの等置式は数学における等式と同じである。あくまで異なる任意の二商品が等置されているだけなのである。これに対して価値形態論における形態Ⅰの等置式は、任意でかまわないが、何らかの商品が自らを現実的に商品として示すためのものであって、その目的のために自分と異なる任意の商品を自分に等置しているのである。それゆえこの目的を前提とする限り、左右両辺を入れ換えることはできない。左右両辺の二商品はそれぞれ異なった役割を担っているからである。かくしてこの等置式は数学の等式と異なるわけである<sup>71)</sup>。

この点に注意して先に進もう。20 エレのリンネルは自分に 1 着の上着を等置する。この関係において「リンネルは、ひとたたきでいくつもの蠅を打つ」<sup>72)</sup>とマルクスは言う。これがまさしく商品語の〈場〉の特有の在り様だ。商品語の〈場〉は線形時空をなしてはいないということだ。一挙に多くのことが語られ実現される。人間語の世界ではこうはいかない。人間語の世界においては話し言葉もまた書き言葉もあくまで線形 = 線状であり、線的な時間順序に従って言語空間が形成・展開される。商品語の〈場〉はこれを超出している。



更に言えば、商品語の〈場〉においては分節化が行なわれないうことである。価値関係という関係そのものが、一挙に多くのことを、また人間語の世界では線形な論理的時間順序に関わるところを、いわば無時間的もしくは多層時間的に商品語で語るわけであって、人間語の世界のように対象世界を線形時空の内に分節化して語るのではないということである。

このように考えてくると、商品語そのものではなく商品語の〈場〉を対象とする以外にはないということ、商品語の〈場〉という特有の〈場〉の運動を捉える必要があるということになる。

では、「ひとたたきで、いくつもの蠅を打つ」というリンネルの語るところをマルクスはどのように聴き取り註釈しているか。

リンネルは、他の商品<sub>を</sub>自分<sub>に</sub>価値<sub>として</sub>等置<sub>することによって</sub>、自分<sub>を</sub>価値<sub>としての</sub>自分自身<sub>に関係させる</sub>。リンネルは、自分<sub>を</sub>価値<sub>としての</sub>自分自身<sub>に関係させる</sub>ことによって、同時に自分<sub>を</sub>使用<sub>価値としての</sub>自分自身<sub>から</sub>区別<sub>する</sub>。リンネルは自分の価値<sub>の</sub>大きさ——そして価値<sub>の</sub>大きさは価値<sub>一般と</sub>量的<sub>に</sub>計<sub>られた</sub>価値<sub>との</sub>両方<sub>である</sub>——を<sub>上着で</sub>表現<sub>することによって</sub>、自分の価値<sub>存在に</sub>自分の直接<sub>的な</sub>定在<sub>とは</sub>区別<sub>される</sub>価値<sub>形態を</sub>与<sub>える</sub>。リンネルは、こうして自分<sub>を</sub>一つのそれ自身<sub>において</sub>分化<sub>した</sub>もの<sub>として</sub>示<sub>す</sub>こと<sub>によって</sub>、自分<sub>を</sub>はじめ<sub>て</sub>現実<sub>に</sub>商品<sub>——同時に</sub>価値<sub>でもある</sub>有用<sub>な</sub>物〔Ding〕<sub>——として</sub>示<sub>す</sub>のである。<sup>73)</sup>

これが初版本文の回り道の議論であるが、きわめて難解である。これを更に敷衍してマルクスは次のように言う。

ある商品の、たとえばリンネルの、現物形態は、その商品の価値形態の正反対物であるから、その商品は、ある別の現物形態を、ある別の商品の現物形態を、自分の価値形態にしなければならない。その商品は、自分自身にたいして直接にすることができないことを、直接に他の商品にたいして、したがってまた回り道をして自分自身にたいして、することができるのである。その商品は自分の価値を自分自身の身体において、または自分自身の使用価値において、表現することはできないのであるが、しかし、直接的価値定在としての他の使用価値または商品体に関係することはできるのである。その商品は、それ自身のなかに含まれている具体的な労働にたいしては、それを抽象的な人間労働の単なる実現形態として関係することはできないが、しかし、他の商品種類に含まれている具体的な労働にたいしては、それを抽象的な人間労働の単なる実現形態として関係することができるのである。そうするためにその商品が必要とするのは、ただ、他の商品<sub>を</sub>自分<sub>に</sub>等価<sub>物として</sub>等置<sub>する</sub>、ということだけである。<sup>74)</sup>

初版では価値が前提され、もしくは仮言的に措かれて論じられていることが、上の二つの引用にもはっきりと現われている。価値関係・等置関係が価値におけるものである点にそくして回り道の議論がなされており、その後で、補足的に労働に関して述べている。つまり、商品リンネルは自分が価値であることを示すために他の商品を価値物として自分に等置し、その商品自体を自分の価値の形態にし、これに等しいものとしてはじめて自分もまた価値であることが示されるという点に回り道を見ている。その上で労働に関して述べるわけだが、論理的な連関・文脈が鮮明ではない。労働生産物が価値をもち商品になるのは、抽象的な人間労働がそれに対象化・表わされるかぎりでのこ

とであるが、この論理関係が曖昧になっているのである。これに対して第二版では次のようにマルクスは言っている。

上着が価値物としてリンネルに等置されることによって、上着に含まれている労働は、リンネルに含まれている労働に等置される。ところで、たしかに、上着をつくる裁縫は、リンネルをつくる織布とは種類の違った具体的労働である。しかし、織布との等置は、裁縫を、事実上、両方の労働のうちの現実に等しいものに、人間労働という両方に共通な性格に、還元するのである。このような回り道をして、次には、織布もまた、それが価値を織るかぎりでは、それを裁縫から区別する特徴をもってはいないということ、つまり抽象的人間労働であるということが、言われているのである。ただ異種の諸商品の等価表現だけが価値形成労働の独自の性格を顕わにするのである。というのは、この等価表現は、異種の諸商品のうちにひそんでいる異種の諸労働を、実際に、それらに共通なものに、人間労働一般に、還元するのだからである。／しかし、リンネルの価値をなしている労働の独自の性格を表現するだけでは、十分ではない。流動状態にある人間の労働力、すなわち人間労働は、価値を形成するが、しかし価値ではない。それは、凝固状態において、对象的形態において、価値になるのである。リンネル価値を人間労働の凝固として表現するためには、それを、リンネルそのものとは物的に違っていると同時にリンネルと他の商品とに共通な「対象性」として表現しなければならない。[リンネルと交換され得るものとしての等価物たる上着が「価値の存在形態として、価値物として、認められている」、すなわち、抽象的人間労働の単なる凝固物として認められていることによって、そしてそれと等しいものとしてリンネルが存在していることによって、その] 課題はすでに解決されている。<sup>75)</sup>

このように第二版では、異種の労働生産物の等置がまず何よりも、異種の諸労働の結実の等置であり、これら双方の諸労働の等置であることから議論が始められている、つまり、抽象的人間労働に関して回り道ということが語られている。先の人間語による分析的抽象において、異種の二商品の等置から、それらの二商品に表わされた双方の諸労働が抽象的人間労働に還元され、その抽象的人間労働の凝固体として二商品が価値であること、かくして価値において等置がなされていることが示されていたわけだが、この議論に照応した形で商品語の〈場〉における事態を註釈しているわけであり、こちらの議論の方が解り易いし、論理的にも——これは言うまでもなく人間語の世界のことであり、商品語の〈場〉にこの“論理的”であるかどうかをそのまま当てはめることはできないのだが——緻密で正確である。ただし、相対的価値形態にあるリンネルこそが自らを商品として示す価値関係である点が少しぼやけるように思われる。つまり、具体的有用的労働から具体性有用性を抽象化して抽象的人間労働を析出する過程と、異種の二商品の等置が価値におけるものであることをどのように叙述するのかの困難がここにも現われ出ているわけである。商品語の〈場〉と人間語の世界との絶対的な区別がここにも顔を出しているようである。人間語による翻訳・註釈がいかにも困難であるのかが解る。

また、等置関係における量の規定性について、初本文ではそれを含み込んだままで議論がなされている。商品語についての註釈で、「価値の大きさ——そして価値の大きさは価値一般と量的に計られた価値との両方である」と述べていたことにこのことがはっきり示されている。商品語の〈場〉にそくして言えば当然こうならざるを得ない。しかし、人間語の世界では価値形態・価値表現それ

自体に注目することがきわめて困難で、古典派経済学の学者たちはすべからくこの形態そのものに着目することなくただちにその量的関係に目を奪われていた。この点を考慮してマルクスは第二版ではまずは量的規定性を捨象して考えるべきだと言う。

一商品の単純な価値表現が二つの商品の価値関係のうちどのようひそんでいるかを見つけたすためには、この価値関係をさしあたりまずその量的な面からはまったく離れて考察しなければならない。人々はたいていこれとは正反対のことをやるのであって、価値関係のうち、ただ、二つの商品種類のそれぞれの一定量が互いに等しいとされる割合だけを見ているのである。人々は、いろいろな物の大きさはそれらが同じ単位に還元されてからはじめて量的に比較されるようになるということを見落としているのである。ただ同じ単位の諸表現としてのみ、これらの物の大きさは、同名の、したがって通約可能な大きさなのである。<sup>76)</sup>

この点でも第二版の方が論理的に緻密であり（再度述べるが、このこと自体、人間語の世界に固有に要求されることだが）、理解を容易にするものとなっていると言える。だが、ここでは敢えて初版本文に立ち戻り、自らを商品として示したいリンネルの「ひとたたきでいくつもの蠅を打つ」振る舞いについて詳しく跡付けておこう。一労働生産物は一体どのようにして現実的に商品になるのか、またそのためになぜ価値関係・等置関係に入らなければならないのかを明確にするためである。

出発は一労働生産物であるリンネルが、自らを商品として示そうとするところにある。マルクスはリンネルの語る商品語を聴き取り、その言わんとするところを解説して言う。

価値としては、リンネルはただ労働だけから成っており、透明に結晶した労働の凝固をなしている。しかし、現実にはこの結晶体は非常に濁っている。この結晶体のなかに労働が発見されるかぎりでは〔…〕その労働は無差別な人間労働ではなく、織布や紡績などであって、これらの労働もけっして商品体の唯一の実体をなしているのではなく、むしろいろいろな自然素材と混和されているのである。リンネルを人間労働の単に物的な〔dinglich〕表現として把握するためには、それを現実に物〔Ding〕としているところのすべてのものを無視しなければならない。それ自身抽象的であってそれ以外の質も内容もない人間労働の対象性は、必然的に抽象的な対象性であり、一つの思考産物である。こうして亜麻織物は頭脳織物となる。<sup>77)</sup>

この「思考産物」＝「頭脳織物」なるものは、人間語による分析的抽象の一結果であり、その理路の結実である。それはあくまで抽象的な観念像である。

ところが、諸商品は諸物象〔Sachen〕である。諸商品がそれであるところのもの、諸商品は物象的に〔sachlich〕そういうものでなければならない。言い換えれば、諸商品自身の物象的な〔sachlichen〕諸関係のなかでそういうものであることを示さなければならない。リンネルの生産においては一定量の人間労働力が支出されている。リンネルの価値は、こうして支出されている労働の単に対象的な反射なのであるが、しかし、その価値はリンネルの物体において反射されているのではない。<sup>78)</sup>



リンネルは単なる「思考産物」＝「頭脳織物」であることはできない。純粹に社会的な抽象性である価値は、単に思惟のうちにある抽象的観念像のままではいかなない。それは対象的な形態、物象的な姿をとって現出しなければならない。しかし、リンネル価値が当のリンネル物体において反射されるなどということはある得ない。なぜなら価値は純粹に社会的であり、リンネル物体はどこまでいってもリンネル物体でありつづけるしかないからである。社会性は社会関係においてあるのであり、だから社会関係においてしか現われない。

かくして労働生産物リンネルは、自らが価値物、すなわち商品であることを示すために、自らと異なる何らかの商品を自分に等置することが必要であったのである。ここでの例では上着を自分に等置していた。

[リンネルの] 価値は、上着にたいするリンネルの価値関係によって、顕現するのであり、感覚的な表現を得るのである。リンネルが上着を価値としては自分に等置していながら、他方同時に使用対象としては上着とは区別されているということによって、上着は、リンネル・物体に對立するリンネル・価値の現象形態となり、リンネルの現物形態とは違ったリンネルの価値形態となるのである。[…] / […] [この価値関係においては] 上着はただ価値または労働凝固体としてのみ認められているのではあるが、しかし、それだからこそ、労働凝固体は上着として認められ、上着はそのなかに人間労働が凝固しているところの形態として認められているのである。<sup>79)</sup>

このようにリンネルは他の異種の商品（ここでは上着）を自分に等置することによってはじめて現実的に商品になる。かの回り道について言えば、位相の異なる二つの回り道が相互に関係しつづけば同時に辿られるわけである。ただ、論理的に言えば、商品に表わされた抽象的人間労働が価値の物的根拠であり、だからこそ、この抽象的人間労働に関する回り道を根拠にして価値としての回り道があるのではあるが。ともあれこの構造を人間語によって論理的時間順序に従い叙述するにはそもそも無理がある。

では次に、以上のマルクスによる商品語の聴き取り・註釈を踏まえて、価値と価値実体の概念がまさしくこの価値形態論で確定すること、つまり商品に表わされた抽象的人間労働の社会性が〈自然的—社会的〉関係におけるものだけでなく、〈私的—社会的〉関係におけるものでもあることがどのようにして商品たち自身の関係のうちで実現されるのかについてより詳細に見ていこう。人間語の世界ではこういう手続きを経ないと事態を正確に把握できないから。

#### (iv) 〈自然的規定性の抽象化〉過程に関して

商品 A (リンネル) が商品 B (上着) を自分に等置することによって、商品 B に表わされている労働が商品 A に表わされている労働に等置される。商品 B を作る労働は当然ながら商品 A を作る労働とは異なっている。しかし商品 B をつくる具体的労働がそれと質的に異なる商品 A をつくる具体的労働と等置されることになるがゆえに、まず B を作る労働の、その具体性有用性・自然的規定性が抽象化されて、双方の労働に共通な質である人間労働に還元される（この過程を〈自然的規定性の抽象化〉過程と呼ぼう）。論理的に言えばこのことの上で、商品 A をつくる具体的労働もまた人間労働に還元された商品 B をつくる労働と等しいとされる限りで抽象化され、人間労働に還元される。こう

して、商品 B を作る具体的労働がこの抽象化された人間労働として意義をもち、商品 B に表わされた具体的有用労働はそのままで対象化された・凝固としての抽象的人間労働の実現形態になる。かくして商品 B は、そのあるがままの姿で、すなわち現物形態のままで、かかる抽象的人間労働の対象化された物・凝固物として意義を持つものとして存在していることになり、商品 A と直接に交換され得るものたる商品 B はその現物形態のままで、端的に価値物であることが示されている。つまり商品 B は価値の現象形態になる。その上で、商品 A は、商品 B と異なる現物形態にありながら、端的に価値物として・ただそれだけの意義を持つ存在物である商品 B と等しい物であることにおいてやはり価値物であること、つまり、その価値を形成する限りで、商品 A を作る労働も抽象化された人間労働であり、その凝固物として商品 A が存在することが示されている。こうして商品 A は、使用価値（現物形態）としては商品 B と異なるものでありながら、商品 B と等しい限りで抽象的人間労働の凝固物であり価値であること、つまり商品であることが示されている。だが実は、ここでは〈私的労働の社会的労働への転化〉がどのようになされたかが説明されていない。現実にはいま述べてきた過程のうちにそれは果たされているのであるが、人間語による解説としてはこれを一体的に明示的に述べることは不可能である。したがってこれについては項を改めて解説する。

さて、この価値関係の中では、商品 B はそのあるがままの姿で・現物形態で、価値を表わすもの・価値形態になっている。価値体・人間労働の物質化として現われているこの商品 B と等しいものとして、商品 A は自分の価値を自分の使用価値と異なる商品 B の体・使用価値で表す。ここまでくれば、この価値関係に量的規定を入れて捉えることも困難ではなくなる。

以上見てきた〈自然的—社会的〉関係における社会性について考えてみよう。人間語による分析、思惟抽象とはまったく位相の違った過程がここにある。

思惟抽象・論理的抽象と、二商品の価値関係における現実的抽象とはいかに異なっているか。先に見たように、マルクスはまず人間語の世界において、二商品の交換関係を表わす等式を分析し、それが一体何を表わしているのかを探り、両商品を抽象的人間労働にまで抽象化した。その上でマルクスは、そのような抽象的人間労働の凝固物として両商品は価値であると指摘した。等式が表わしている内実を分析的に抽象化し別括していく過程があったわけである。現実の価値関係における抽象化はこれとはまったく違っている。商品 A が商品 B を自分に等値するというその現実そのものが、一挙に自然的規定性の抽象化を成し遂げ、その結実を表現する。商品 A が商品 B を自分に等置するというその事実そのものが、商品 B を生み出す具体的労働の具体的有用性・自然的規定性を抽象するのであり、その具体的労働を抽象化された人間労働の実現形態にし、かくしてこの等置関係そのものが、商品 B に表わされた具体的有用労働そのものを抽象的人間労働の現象形態とし商品 B をその凝固態とする。かくして商品 B を現物形態のままでその抽象化された人間労働の凝固物として意義をもつものとし、商品 B をかかる抽象的人間労働の凝固物として、現物形態（使用価値形態）のままで価値体とする。つまり商品 B は価値の実現形態・現象形態になる。要するにここでは商品 B を作る具体的労働、その具体的労働の凝固形態、商品 B の使用価値形態＝現物形態という一連の具体的形態が抽象的なものの実現形態になるという抽象化が起こるわけである。これを抽象化という概念で語って良いものかどうか躊躇せざるを得ない。思惟抽象ならば、思惟によって抽象化されたある観念が抽出されるだけなのであるが、現実的抽象の場合、抽象物が現実に抽象物として存在するわけにはいかないので、抽象物もまた対象的な形態で、すなわち現実の存在物として自己を表現しなくてはならない。ここでは、厳として存在しつづける現物形態、つまり現実の物質あるいは事柄

そのものが、そのままの姿態が、抽象化されたものとして意義を持つのであるから（ここで注意！現物形態の内的属性の一つとして抽象化されたものがあるわけではない）、現実のあるがままの存在が、抽象的なものの実現形態にならざるを得ないのである。

以上が商品 B の側に起こった抽象化である。これに対して商品 A ではどうなるか。商品 A は商品 B と異なる物＝異なる使用価値でありながら、商品 B が現物形態のままに抽象的人間労働の体化物・凝固物であり、かくして価値である、その商品 B と等しいことによって、同じく価値であり、また自分に対象化されている労働が抽象的人間労働であり、価値を生み出すものである限りで商品 A を作る労働もまた単なる人間労働であることとなる。つまりここでは、商品 B の側の現物形態への反射・顕現という形で抽象化が行なわれているのである。ここにもまた、抽象化という概念の適用に躊躇させるものがあるが、しかし現実的抽象のこれまた一方のあり方なのである。

価値関係における現実の抽象化過程、すなわち現実の価値関係における〈自然的規定性の抽象化〉過程は、今見てきたものであるが、具体的なものが抽象的なものの実現形態になるということ、しかもそれが実際に生起するということは、分析的思惟には非常に捉え難い。具体的なものを抽象化していくのが分析的思惟の自然な理路なのだから。もちろんヘーゲルに典型的なように、具体的なものを抽象的なものの実現形態であると観念の中で私念することはできるが、しかしあくまで現実の過程においてそれを理解することは大変難しい。だからマルクスは初版本文において言う。

われわれは、ここにおいて、価値形態の理解を妨げるあらゆる困難の噴出点に立っているのである。商品の価値を商品の使用価値から区別するという、または、使用価値を形成する労働を、単に人間労働力の支出として商品価値に計算されるかぎりでのその同じ労働から区別するという、比較的容易である。商品または労働を一方の形態において考察する場合には、他方の形態においては考察しないのであるし、また逆の場合には逆である。これらの抽象的な対立物はおのずから互いに分かれるのであって、したがってまた容易に識別されるものである。商品にたいする商品の関係においてのみ存在する価値形態の場合はそうではない。使用価値または商品体はここでは一つの新しい役割を演ずるのである。それは商品価値の現象形態に、したがってそれ自身の反対物に、なるのである。それと同様に、使用価値のなかに含まれている具体的な有用労働が、それ自身の反対物に、抽象的人間労働の単なる実現形態に、なる。ここでは、商品の対立的な諸規定が別々に分かれて現われるのではなくて、互いに相手のなかに反射し合っている。<sup>80)</sup>

このようにして商品 B の側、すなわち等価形態においては、具体的なものが抽象的なものの実現形態・現象形態になるわけであるが、論理的には、これは明らかに奇妙であり転倒している。抽象化された人間労働なるものが、商品 B を作る具体的労働において自らを定立し、人間労働の抽象的な凝固態なるものが商品 B に対象化された具体的有用労働において自らを定立するというわけであり、また価値という抽象的なものが、商品 B の現物形態＝使用価値において自らを定立するというわけであるから。マルクスは初版付録の価値形態論でこれについて次のように述べている。

価値関係およびそれに含まれている価値表現のなかでは、抽象的一般的なものが具体的なものの、感覚的現実的なものの、属性として認められるのではなくて、逆に、感覚的具体的なもの



が抽象的一般的なものの単なる現象形態または特定の実現形態として認められるのである。たとえば等価物たる上着のなかに含まれている裁縫労働は、リンネルの価値表現のなかで、人間労働でもあるという一般的な属性をもっているのではない。逆である。人間労働であるということが裁縫労働の本質として認められるのであり、裁縫労働であるということは、ただ、裁縫労働のこの本質の現象形態または特定の実現形態として認められるだけなのである。[...] / この転倒によってはただ感覚的具体的なものが抽象的一般的なもの現象形態として認められるだけであって、逆に抽象的一般的なもの具体的なものの属性として認められるのではないのであるが、この転倒こそは価値表現を特徴づけているのである。それは同時に価値表現の理解を困難にする。もし私が、ローマ法とドイツ法とは両方とも法である、と言うならば、それは自明なことである。これに反して、もし私が、法というこの抽象物がローマ法においてとドイツ法においてと、すなわち、これらの具体的な法において実現される、と言うならば、その関連は不可解になるのである。<sup>81)</sup>

このようなまったく奇妙な論理的転倒が現実には生じているのだ。等価形態の、この不可解さはどうして生じるのかと言えば、等価形態が形成されるからである。ではなぜ等価形態が形成されるのかと言えば、商品の価値関係があるからである。そして商品の価値関係がなぜあるのかと言えば、商品生産社会では人間の社会的関係が商品の価値関係としてしかありえない、つまりこの社会では、類としての人間の社会性が、商品－商品関係に現われる転倒した社会性としてしかないからである。

こうした奇妙なこと・転倒は、自然物としての労働生産物 A や B に生じていることではない。人間の社会的関係、すなわち商品 A と商品 B の価値関係において生じていることである。人々の社会的関係がこうした転倒として存在しているのである。資本制生産社会における転倒性はこのようなまでに徹底的である。だが、繰り返しになるが、具体的なものを抽象化していくのが人間の分析的思惟の自然な理路であるので、普通はこの転倒を人々は理解できない。せいぜい錯視を云々するぐらいである。だが、人々は現実の日々の社会的行為においてこの転倒を生きているのである。

#### (v) 〈私的労働の社会化〉過程に関して

では次に、〈私的—社会的〉関係における社会性（これを〈私的労働の社会化〉過程と呼ぼう）が現実の価値関係でどのように遂行されるのかを見ておこう。

〈商品 A = 商品 B〉（商品リンネル=商品上着）という価値関係においては、商品 B は商品 A と直接に交換され得るものとして存在している。つまり商品 B はそのあるがままの姿で直接的交換可能性 (unmittelbare (n) Austauschbarkeit) の形態にある。このように、商品 B があるがままの姿で直接的交換可能性の形態にあるということは、商品 B がそのあるがままの姿で社会的存在であると認められているということである。こうして、商品 B に対象化された私的労働は私的労働のままで社会的労働として認められていることになる。このように、まず、等価形態にある商品 B に表わされた私的労働がそのまま社会的労働として認められる。そしてその上で、つまりここでもまた〈回り道〉を経た上で、これと等置されている限りで、相対的価値形態にある商品 A に表わされた私的労働もまた社会的労働として認められることになる。人間語による認識と叙述はこのように線形な時間順序にしたがう以外にはない。だが、商品語の〈場〉で起きていることはこうした人間語の世界を超えて出ている。まさしく価値表現そのもののうちに、〈私的労働の社会化〉過程が含みこまれているの

であり、線形な時空を超えて、いわば一挙的に私的労働の社会化が実現されるのである。ただここ、すなわち「相対的価値の第一の、または単純な形態」における社会性は、未だ低いレベルの社会性でしかない。しかし、ここでも等価形態にある商品に対象化された私的労働である具体的労働が、そのまま社会的労働として認められているということは厳然として生じているのである。価値表現を問題にしない限りこのことはわからない。人間語による分析的抽象化を遂行していく世界ではあくまで価値表現を問題にはしていないので、この過程を捉えることはできなかったわけである。

ところで、〈自然的規定性の抽象化〉過程だけでなく、いま述べた〈私的労働の社会化〉過程をも踏まえた〈回り道〉の議論に関連して、久留間鮫造が指摘した『資本論』初版の誤訳問題も絡めて少し触れておく。等価形態にある商品が直接的交換可能性の形態にあるという点を掘り下げて確認しておく必要があるからである。価値関係〈商品 A = 商品 B〉について、「商品 A は自分に商品 B を等置する」と捉えるべきであるにもかかわらず、「商品 A は自分を商品 B に等置する」と宮川実、長谷部文雄が誤訳し、宇野弘蔵もまた彼の自著でそのように書いていることを久留間は指摘し、このように捉えるといわゆる回り道が理解できなくなると指摘した(註 68)を参照のこと。この久留間の指摘はまったく正しく価値形態の理解の核心に触れている。自分を現実的に商品として示そうとする商品 A はあくまで自分自身ではその目的を果たすことができず、したがって相対的価値形態の位置に座し、何らかの異種の商品 B を自分に等置し、それを自分の等価物とする。かくして商品 B は相対的価値形態に対する等価形態になり、商品 A と直接に交換可能なものになる。この等置が価値関係である以上、つまり等置が価値におけるものである以上、この価値関係の内部では、商品 B をつくる具体的労働がそれ自体で価値形成労働に、そして商品 B に表わされた具体的労働そのものが価値実体たる抽象的人間労働の実現形態・現象形態となり、かくして、商品 B はそのあるがままの姿 = 現物形態のままで価値物となる(つまり、価値体として意義をもつ)。こうした迂回路を経た上で、商品 A は商品 B と等しいとされている限りにおいてそれもまた価値物、すなわち商品であることが示される。以上のことは既に述べてきたことであるが、この一連の事態は「商品 A は自分を商品 B に等置する」と捉えることから決して描き出すことができず、把握できず、かくして価値関係を理解することができない。なぜか。商品 A であれ商品 B であれ、その他どんな商品であれ、商品はそれ自体では決して商品としての属性すなわち価値という属性を表わすことができず、ただ価値関係に入ることを通じてのみ、価値関係に入った上でだけ、価値という属性をもったものとして現実的に現われ得るからである。いかなる商品も、自分をあらかじめ価値だとして価値関係に入るのではない。この点の理解は等価形態にある商品から見ると容易になる。何らかの商品に等置されることによって、つまり等価形態に置かれることによって、その商品は相手の商品と直接に交換されうるものという性格をもつのであり、それゆえそれは価値とみなされているのであり、それ自体で価値物としてあるわけである。等価物にされるや否や、その商品は相手との直接的交換可能性をもつものとなり、価値であることが示されているわけである。だからこそ、自らを現実的に商品として実現しようとする商品は、何らかの異種の商品を自分に等置し、この等置によってその異種の商品をまず直接的・非媒介的交換可能性の形態にし、つまり価値物とし、その上でそれと等しい限りで自分もまた価値であること、その異種の商品と交換可能であることを間接的・媒介的に示すということになるのであり、それ以外にないのである。これと逆に、商品 A が自分を商品 B に等置する、ということは、既に自分が相手との直接的な交換可能性をもつものであること、価値であることを前提とすることであり、それを前提として商品 B を価値物にすることになってしまうのであ

る。もしそれが可能なら、労働生産物は商品形態をとる必要がないということになる。直接的な生産物同士の交換、あくまで一定の価値規定を必要とするではあろうが、商品交換ではない直接的な労働生産物の交換が実現されることになる。これに対して商品交換では、あくまで等置される方が、等置されるというその受動性によって、相手との直接的・非媒介的な交換可能性をもつ、ということの理解がポイントなのである。

ここで、一言注意しておきたい。この直接的交換可能性に関して、相対的価値形態にある商品（ここでは商品 A）が等価形態にある商品（ここでは商品 B）に直接的交換可能性を与える、という表現をしている論者がいるが、これは間違った言い方である。商品 A が商品 B に直接的交換可能性を与えるのではなく、等置関係ができるや否や、商品 B は直接的交換可能性をもつ、すなわち、直接的交換可能性の形態にあるのであって、直接的な交換可能性は、決して与えたり与えられたりするものではないのである。与えるのであればあらかじめそれをもっていなければならないであろう。商品 A は決して直接的・非媒介的な交換可能性をもっていない。商品 B と等しいとされるかぎりでは間接的・媒介的に交換可能性をもつのである。この等置における双方の意義の相違を理解することはきわめて重要である。等価物が等価物である限りでもつこの直接的・非媒介的交換可能性という特質によって、完成された価値形態、すなわち貨幣形態においては、貨幣以外のすべての商品は貨幣との等置によってはじめて、間接的・媒介的に交換可能性をもつのであり、貨幣は貨幣であることによってつねに直接的交換可能性をもつことになるのである。ここに貨幣の秘密があり神秘性がある。だからいま述べたことは単なる表現上の差異の問題に解消できないものなのである。直接的交換可能性について、それを与えたり、与えられたりするものと考える典型例が岩井克人である。彼はそのことによって、彼独自の「貨幣形態 Z」なる荒唐無稽のものを案出したのである<sup>82)</sup>。岩井は、マルクスが示した直接的・非媒介的な交換可能性の形態とそうではない形態、すなわち間接的・媒介的な交換可能性の形態との区別をまったく無視し、前者だけで考えているのである。「直接的」という概念規定を岩井はどのように捉えたのだろうか。岩井がどのように考えたのかは別として、マルクスは次のようにはっきり述べている。これは初版本文の形態Ⅲのところであり、先取りになるが引いておく。

〔一般的価値形態における一般的等価形態にある〕ある一つの商品がすべての他の商品との直接的な交換可能性の形態をとっており、したがってまた直接的に社会的な形態をとっているのは、ただ、すべての他の商品がそのような形態をとっていないからであり、またそのかぎりにおいてのみのことなのである。言い換えれば、商品一般が、その直接的な形態はその使用価値の形態であって、その価値の形態ではないために、もともと、直接に交換されうる、すなわち社会的な、形態をとっていないからなのである。<sup>83)</sup>

かくして一般的等価物に表わされた私的諸労働が直接に社会的労働として認められることになり、一般的等価物でない、その他すべての商品に表わされた私的諸労働は一般的等価物との等置によって間接的・媒介的に社会的労働として認められることになるのである。

商品は、生来、一般的な交換可能性の直接的な形態を排除しているのであって、したがってまた一般的な等価形態をただ対立的にのみ発展させることができるのであるが、これと同じこと



は諸商品のなかに含まれている諸私的労働にも当てはまるのである。これらの私的労働は直接的には社会的ではない労働なのだから、第一に、社会的な形態は、現実の有用な諸労働の諸現象形態とは違った、それらには無縁な、抽象的な形態であり、また第二に、すべての種類の私的労働はその社会的な性格をただ対立的にのみ、すなわち、それらがすべて一つの除外的な種類の私的労働に、ここではリンネル織りに、等置されることによって、得るのである。これによってこの除外的な労働は抽象的な人間労働の直接的で一般的な現象形態となり、したがって直接的に社会的な形態における労働となるのである。したがってまた、その労働は、やはり直接的に、社会的に認められて一般的に交換されうる生産物となって現われもするのである<sup>84)</sup>。

#### (vi) 価値の実体と等価形態の謎性

以上二重の社会化の過程、すなわち、〈自然的規定性の抽象化〉過程と〈私的労働の社会化〉過程を経て商品 A は現実的に商品になる、と同時に、等価形態にある商品 B は貨幣の原 - 形態になる。この等価形態については更に次のことを述べておかななくてはならない。

商品 B がとっている形態である等価形態においては、具体的な形態、そのあるがままの姿態が、抽象的なものの実現形態・現象形態に、また私的なものがそのまま社会的なものを表現する。このことはただ商品の価値関係の内部でだけそうなのであるが、しかし、商品 B にあっては、具体的なもの・私的なものそのものが、そのままの姿態で抽象的なもの・社会的なものを表現するので、商品 B がそのあるがままの姿で、そもそも初めから、価値関係に入る前から、抽象性・社会性を内的属性として持っているかのように人々の眼に映る。このような不可解さ、等価形態に生じる謎的性格が、貨幣の持つ神秘的性格の基礎にあるのである<sup>85)</sup>。

等価形態にある商品 B (上着) に生じていることは、商品 A が自らが価値であること、すなわち商品であることを示すために、自分に商品 B を等置したことから生じたことである。商品 A が自分の価値を表現するために商品 B を自分に等置したのである。だから、この価値関係においては商品 A が主導的に振る舞い、商品 B はあくまで受動的である。つまり、商品 A (リンネル) が自らの価値を表現すべく、つまり自らを現実の商品として示すために主導的に振る舞っているのだ。

上着は受動的にふるまっている。それはけっしてイニシアチブを取ってはいない。上着が関係のなかにあるのは、それが関係させられるからである。<sup>86)</sup>

この〈主導—受動〉関係は商品語をしゃべるのが相対的価値形態にあるリンネルであるという点にも現われる。リンネルが一方的にしゃべるのだ。商品語について〈はじめに〉に引用したもの、その註 1) の中に引用したもの、そして (iii) の冒頭に引いた「リンネルは、ひとたきでいくつもの蠅を打つ」というマルクスの註釈にそのことが示されている。では、「関係させられ」ただけの商品 B (上着) は、黙っているだけなのだろうか、頷くぐらいはしているのだろうか。もちろん、人間語の世界のことをあまり当てはめても仕方がない。ただ、等価形態にある商品のこの寡黙さがクセモノなのだ。価値関係の中での商品 B の被規定性は、主導的な商品 A (リンネル) の反射規定である。にもかかわらず、それが人々の眼には逆に見える。

上着の等価物存在は、いわば、ただリンネルの反射規定なのである。ところが、それがまった

く逆に見えるのである。一方では、上着は自分自身では、関係する労をとってはいない。他方では、リンネルが上着に関係するのは、上着をなにかあるものにするためではなくて、上着はリンネルがなくてもなにかあるものであるからなのである。それだから、上着にたいするリンネルの関係の完成した所産、上着の等価形態、すなわち直接に交換されうる使用価値としての上着の被規定性は、たとえば保温するという上着の属性などとまったく同じように、リンネルにたいする関係の外にあって上着には物的に属しているように見えるのである。<sup>87)</sup>

社会的であることの、等価形態に生じたこの不可解さ・謎的性質は、相対的価値形態にある商品に現われる社会性との比較から、よりはっきりする。今度は第二版から引く。

ある一つの商品、たとえばリンネルの相対的価値形態は、リンネルの価値存在を、リンネルの身体やその諸属性とはまったく違ったものとして、たとえば上着に等しいものとして表現するのだから、この表現そのものは、それが社会的関係を包蔵していることを暗示している。等価形態については逆である。等価形態は、ある商品体、たとえば上着が、このあるがままの姿の物が、価値を表現しており、したがって生まれながらに価値形態をもっているということ、まさにこのことによって成り立っている。いかにも、このことは、ただリンネル商品が等価物としての上着商品に関係している価値関係のなかで認められているだけである。しかし、ある物の諸属性は、その物の他の諸物にたいする関係から生ずるのではなく、むしろこのような関係のなかではただ実証されるだけなのだから、上着もまた、その等価形態を、直接的交換可能性というその属性を、重さがあるとか保温に役だつとかいう属性と同様に、生まれながらにもっているように見える。それだからこそ、等価形態の不可解さが感ぜられるのであるが、この不可解さは、この形態が完成されて貨幣となって経済学者の前に現われるとき、はじめて彼のブルジョア的に粗雑な目を驚かせるのである。<sup>88)</sup>

社会的であるということは、何よりも第一に自然的であるということに対する概念であるのだから、それは人々の社会的関係において現われるのであり、決して自然的属性、すなわち自然物の一属性のようにあるわけではない。商品 A (リンネル) の相対的価値形態は、商品 A の価値存在を、商品 A の体・使用価値・現物形態とは異なる商品 B (上着) と等しいというその関係において表わすので、そこに社会性が示されている。ところが等価形態ではこれとはまったく別のことが生じている。商品 B ではその現物形態そのものが価値を表現し、この限りで価値は商品 B という姿をもって現われているので、商品 B が自然形態のままで内的属性として価値という属性をもつかのように人々の眼には映るのである。社会的であることがあたかも自然的属性のように、自然物の内にある属性のように現われるのだ。ある自然物の自然的属性の場合は、例えば、その質量、体積、熱容量等のように、それと他の自然物との関係において顕現し表現されるので (ある何かを基準・単位・ものさしとして)、このことと同じように価値という純粋に社会的なものさえも、等価形態にある商品 B の生まれながらにもつ自然的な性質であるかのように人々の眼に映るわけである。こうして商品という社会的な物、社会関係を体現した物象 (Sache) は人々の眼には社会性が自然的属性のように捉えられて単なる物 (Ding) に見える。商品として現われてはいない単なる労働生産物はあくまで物 (Ding) である。これが商品になると人々の社会関係を含みこみ・背負った物象 (Sache) になる。だが人々

の眼にはこの社会関係がそれとしては捉えられず、社会性をも自然的属性のように捉えられて商品という物象 (Sache) は自然物・物 (Ding) に見えるわけである。これを最初の〈物〉と区別するために〈もの〉と書くことにする。ついでに言う、商品は〈商品 - 貨幣 - 資本〉というトリアーデを成し、これらのものは諸物象 (Sachen) である。だが、先に引用したが、商品は次のように商品語で語るなのであった。

もし諸商品がものを言うことができるとすれば、彼らはこう言うであろう。われわれの使用価値は人間の関心をひくかもしれない。使用価値は物 [Dingen] としてのわれわれにそなわっているものではない。だが、物としての [dinglich] われわれにそなわっているものは、われわれの価値である。われわれ自身の商品物としての交わりがそのことを証明している。われわれはただ交換価値として互いに関係し合うだけだ、と。<sup>89)</sup>

商品は自分の〈体〉を〈忘れてしまう〉、ということであった。この行き着く究極の在り様が、商品化した資本、すなわち利子生み資本形態をとる資本、種々の架空資本等である。これらの形態では物としての使用価値はまったく存在しない。自分の〈体〉を〈忘れてしまう〉どころではなく、そもそも自分の〈体〉が存在しない。こうしてこれらのものは究極的に抽象的な〈もの〉をさえ通り越してしまう。まったく〈体〉を欠落させた架空のもの、ただ〈未来〉に抽象的な〈もの〉に転化することを当て込んだ架空の運動でしかない。こうしたところにまで突き進む端緒が、単純な価値形態においてもその等価形態にはっきりと現われ出ているわけである。

ここで、価値実体が文字通り実体としてどのように現実的な形で現われ出てくるのかを確認しておきたい。商品 B (上着) は、商品 A (リンネル) に等置されることによって、商品 B に表わされた労働が商品 A に表わされた労働に等置されることとなり、この等置によって商品 B を作る労働が単なる人間労働に還元され、商品 B に表わされた個別的な・具体的有用な労働が、そのままの形で、自然的規定性を抽象化された・人間労働の実現形態になり、また、あくまで相互に独立して営まれた私的労働の凝固であるそれが、そのままの形で、直接的交換可能性という社会性を表わす労働になる。こうして商品 B に対象化された私的で具体的労働は、現実的に価値の実体と言うしかないものとなる。商品 B の使用価値・現物形態そのものが価値物として現われ、商品 B に凝固した私的で具体的な労働そのものが、純粹に抽象的で社会的なこの価値を量化するものとして、実体なるもの、しかも社会的な実体なるものを表わすことになるのである。人々の社会関係が、日々、膨大な価値関係においてこのことを現出させているのであり、現出させざるを得ないのである。価値関係のなかで、商品 B に対象化された私的で具体的な労働がはじめて、現実的に価値実体を表わすことになるのである。単純な価値形態においては、そのことは未だはっきりと固定してはいないが、しかし、社会的実体としてはっきりとこの現実世界に現われ出ているのである。

#### (vii) 初版本文価値形態論の形態 II に関して

単純な価値形態においては、相対的価値形態にある商品 (この例ではリンネル) は未だただ一つの商品 (この例では上着) と価値関係にあるだけであり、商品リンネルの価値はただ一つの商品上着で表わされているだけである。それはきわめて不安定な状態にある。出発は商品リンネルが自分の価値を表現しようとするところにあった。リンネルの価値がより客観的に、より社会的なもの



して表わされる形態として、形態Ⅱ、すなわち、展開された価値形態がある。

20 エレのリンネル = 1 着の上着 または =  $u$  量のコーヒー または =  $v$  量の茶 または =  $x$  量の鉄  
または =  $y$  量の小麦 または = 等々。

第二の形態においては、〔…〕リンネルの価値は、上着やコーヒーや鉄などで示されていても、つまりまったく違った所有者たちの手にある無数に違った商品で示されていても、つねに同じ大きさのままである。〔…〕交換が商品の価値の大きさを規定するのではなくて、逆に商品の価値の大きさが商品のいろいろな交換の割合を規定するのだ、ということが明白になるのである。／〔…〕第一の形態はリンネルのなかに含まれている労働をただ裁縫労働にたいしてのみ直接に等置している。第二の形態はこれとは違っている。リンネルは、その相対的な諸価値表現の無限な、いくらでも延長されうる列において、リンネル自身のなかに含まれている労働の単なる諸現象形態としてのありとあらゆる商品体に関係している。それだから、ここではリンネルの価値がはじめて真に価値として、すなわち人間労働一般の結晶として、示されているのである。<sup>90)</sup>

リンネルに表わされた具体的労働はいまやきわめて多種多様な具体的労働を現象形態とする抽象的人間労働と等しいものと認められ、かくしてそれは文字通り人間労働一般として認められ、リンネル価値はその人間労働一般の凝固体として価値として十全に認められていることになる。しかもリンネルは他の種々様々の労働生産物たる商品と、間接的・媒介的であるとはいえ交換可能であるという社会性をもっており、リンネルに表わされた私的労働は他の種々様々の労働との同等性 = 交換可能性という社会性をもつものとなっている。社会性の水準が飛躍した。

ところで、形態Ⅰでは相対的価値形態にあるリンネルだけが商品語でしゃべっていた。等価形態にある上着は沈黙していた。そのことからすれば、この第二の価値形態では、喋っているのはただ一つの商品リンネルだけであり、他のすべての商品たちは沈黙している。唯独り饒舌な商品リンネルと、ひたすら沈黙している他のすべての商品たち。これはなかなか異様な光景である。だが黙していることが直接的社会性を体現し一般性を表わしていた。相異なる、膨大な数の個々の商品に体現された直接的な社会性と一般性、それらに対する唯一つの間接的でしかない社会性、という対立構図は少なくとも人間語の世界では矛盾と言って良いであろう。この形態の不安定性は明らかである。社会性の水準が今一段高められなければならない。

(viii) 初版本文価値形態論の形態Ⅲに関して

「相対的な価値の第三の、転倒された、または逆の関係にされた第二の形態」 = 一般的価値形態に移ろう。次のようなものである。

|            |              |
|------------|--------------|
| 1 着の上着     | = 20 エレのリンネル |
| $u$ 量のコーヒー | = 20 エレのリンネル |
| $v$ 量の茶    | = 20 エレのリンネル |
| $x$ 量の鉄    | = 20 エレのリンネル |
| $y$ 量の小麦   | = 20 エレのリンネル |

:            :  
 :            :  
 :            :

ここでは直接的な交換可能性の形態である等価形態には、ただ一つの商品リンネルが座っている。リンネルだけが等価形態になり、その他の商品はすべて等価形態から排除されている。ただ一つリンネルだけが直接的交換可能性の形態・直接に社会的な形態にあり、等価形態にある商品の特殊な被規定性から、商品リンネルの使用価値・現物形態それ自体が直接に社会的なもの、すなわち価値の実現形態・現象形態に、また商品リンネルに対象化された具体的有用労働がそのまま抽象的人間労働の実現形態・現象形態になり、その特殊な私的労働が直接に一般的社会的労働になる。この形態にあるのはただ商品リンネルだけなのだから、これが一般的な等価物、一般的価値肉体、抽象的人間労働の一般的な物質化となる。商品リンネルに対象化された特殊な具体的有用労働が、人間労働の一般的な実現形態として、一般的労働、すなわち価値実体そのものになる。こうして商品リンネルでない他のすべての商品は、等価形態から排除され、それゆえに、直接的交換可能性の形態・直接に社会的形態を持たない商品、つまり商品リンネルとの交換関係に入るという媒介を通じてだけ交換可能性・社会性を得る商品となる。そしてまた商品リンネルと異なるあらゆる商品に対象化された労働は、商品リンネルに対象化された労働との等置によってのみ、人間労働として認められるのであり、それらの商品は価値として、すなわち商品として認められるのである。純粹に社会的なものたる価値は商品リンネルとして現われ、価値の量化を実現する価値実体は商品リンネルに対象化された特殊な・私的な具体的労働として現われる。この異様な形態、形態Ⅲにおける等価形態(=一般的等価形態)に関してマルクスはきわめて印象的な特徴付けを行なった。

形態Ⅲにおいては、リンネルはすべての他の商品にとっての等価物の類形態として現われる。それは、ちょうど、群れをなして動物界のいろいろな類、種、亜種、科、等々を形成している獅子や虎や兎やその他のすべての現実の動物たちと相並んで、かつそれらのほかに、まだなお動物というもの、すなわち動物界全体の個体的化身が存在しているようなものである。このような、同じ物のすべての現実存在する種をそれ自身のうちに包括している個体は、動物、神、等々のように、一つの一般的なものである。それゆえ、リンネルが、一つの他の商品が価値の現象形態としてのリンネルに関係したということによって、個別的な等価物となったのと同じように、それは、すべての商品に共通な、価値の現象形態としては、一般的な等価物、一般的な価値肉体、抽象的な人間労働の一般的な物質化となるのである。それだからリンネルにおいて物質化されている特殊な労働が、いまでは、人間労働の一般的な実現形態として、一般的な労働として、認められるのである。<sup>91)</sup>

形態Ⅰに既に現われ出ている奇妙な転倒について、先に初版付録から引用をしておいたが、ここでその転倒はまったきものとなる。商品に表わされている抽象的人間労働を価値の実体というこれまでの長い哲学史上の用語を用いて概念規定したことの意義がここにはっきりと示されており、まさしく価値とその実体への根源的な批判として概念が措定・定立されたことが示されている<sup>92)</sup>。

マルクスがこのように、長い哲学史上の概念規定をめぐる議論を踏まえ、〈価値－価値実体－商品〉

への批判を遂行するためにこそ、〈実体－社会的実体〉という用語によって価値実体概念を措定したことに対してまったくの無自覚・無理解に陥っているのが、一方では社会的実体である価値実体を自然実体のように捉えてしまうスターリン主義派の人々であり、他方が実体というものに拒否感を抱え、価値実体を否定・拒否して価値を単なる関係概念に回収しようとする人々である<sup>93)</sup>。商品に表わされた抽象的人間労働を実体、社会的実体として人々が日々無意識裡に定立しつづけていること、その社会的実体を価値の実体としその凝固物として価値（商品価値）があること、かかる価値の頹落状況に人々が物神崇拜によって安らっていること、つまり人々が社会的実体の目に見える化身である貨幣の〈力〉に宗教的に隷属していること、——こうした事態に対する根源的批判を遂行するためにこそ〈実体〉という哲学用語をマルクスが用いたことが理解されていないのである。だから双方の人々のいずれも、他でもなく労働価値説への批判として、商品に表わされた労働、抽象的人間労働とその凝固、価値の実体と価値等々が措定されていることを把握できないのである。『資本論』を取り上げる論者はほぼ必ずと言って良いほど、サブ・タイトルが「経済学批判」であることに触れるが、その意義を精確に把握している論者は皆無である。

ともあれこのようにして、一般的等価物たる商品リンネルは、形態Ⅱにおける饒舌を含み込んだ沈黙せるものになる。沈黙というものはいかに恐ろしいものであることか。

ただし、一般的等価形態がリンネルに未だ固定化したわけではない。だから次の形態Ⅳでマルクスはリンネルのみならずあらゆる商品が一般的等価形態を取り得ることを示すことになる。そこへの橋渡しとしてマルクスは言う。

一商品の等価形態が、他の諸商品の諸関係の反射であるのではなくて、その商品自身の物的な性質から生ずるかのような外観は、個別的な等価物の一般的な等価物への発展につれて固まってくる。[...] /とはいえ、われわれの現在の立場においては一般的な等価物はまだけっして骨化されてはいない。<sup>94)</sup>

#### (ix) 初版本文価値形態論の形態Ⅳに関して

初版本文価値形態論の形態Ⅳはそれまでの形態Ⅰから形態Ⅲまでのものとは位相が異なる。形態Ⅲおよび形態Ⅱに一例としてとられたリンネルの位置に任意の商品が座り得るということを示すものが形態Ⅳである。もともと例として取られたリンネルは単なる一例であり代表であり任意の一つである。それゆえ形態Ⅱの相対的価値形態の位置に、そして形態Ⅲの等価形態の位置に任意の（あらゆる）商品が位置し得ることは明らかである。

マルクスは、価値形態Ⅲ（一般的価値形態）に関する部分の最終パラグラフで、「リンネルに当てはまることは、どの商品にも当てはまる」<sup>95)</sup> と言い、それを踏まえて、形態Ⅳの最終パラグラフで次のように総括する。

要するに、商品の分析が明らかにするものは、価値形態のすべての本質的な規定、およびその対立的な諸契機における価値形態そのもの、一般的な相対的な価値形態、一般的な等価形態であり、最後に、単純な相対的な諸価値表現のけっして終結することのない列であって、この列は、最初は価値形態の発展における一つの過渡段階をなすのであるが、結局は一般的な等価物の独自に相対的な価値形態に一変するのである。しかし、商品の分析が明らかにしたところで



は、これらの形態は商品形態一般なのであり、したがってどの商品のものにもなるのであるが、ただ対立的にのみそうなるのであって、もし商品 A が一方の形態規定にあるならば、商品 B、C、等々はこれに対立して他方の形態をとる、というようになるのである。<sup>96)</sup>

こうして真の意味で「すべての商品の貨幣存在」が示されたことになり、貨幣の秘密は完全に暴露された。

## 註

68) ここでは初本文を主テキストとすべき点に関する註記と共に、この論点と密接に絡む、価値形態論についての議論・論争の歴史的な一定の総括も行なっておきたい。この総括は本稿著者のひとりである崎山による『思考のフロンティア 資本』(岩波書店、2004年)での価値形態論読解の不十分性を補うものでもある。前掲『マルクスの物象化論』で佐々木は、「『商品語』の比喩は、『資本論』第1巻第2版において初めて登場する」(p.152)、「商品語の論理は、『資本論』第1巻第2版においてはじめて確立されたものである」(p.182)とし、まさしく商品語を問題とすることによって、初版ではなく第二版を主テキストとすべきだと判断している。だがこれは、読み間違えによる誤った判断である。本稿の〈はじめに〉に引用した初版付録の一文は、人間である「私」=マルクスの下す判断と「リンネルそのものが〔…〕語っている」こととがきわめて鮮明に対比されていた。商品語という言葉そのものは使われてはいないが、商品語を問題にしていることは明らかである。また初本文価値形態論も、普通の人間の言葉、その論理の世界では処しきれない世界のことを扱っているという点をはっきりと示されている。「リンネルは、ひとたたきでいくつもの蠅を打つ」というのだから。商品語そのものはわれわれには感覚的に捉えられない。取り敢えず商品語の〈場〉というものを措く以外にないのである。この点では初本文の方が第二版よりも商品語の〈場〉の特質が強く現われているのであり、だから前者の方に弁証法がより鋭く現われ出ていると言い得るのである。また佐々木は第二版で商品語の概念が確立されたと捉えることによって、第二版において相対的価値形態にあるリンネルが過程の主体であって商品所有者が過程の主体ではないことがより明確になったと言う(pp.181-187)。だが、これも外的を外した議論である。初本文が相対的価値形態の方から見ているという点で第二版より商品語の〈場〉にそくしたものになっており、過程の主体が相対的価値形態にあるリンネルであることがより明確に語られているのである。佐々木の判断とは逆に、テキストとしては初本文の方が第二版よりも論理的に優位にあるのである。このように佐々木は、商品語の重要性を強調しながらも結局はそれを比喩としてしか捉えるところから自由ではなかったがゆえに、初本文価値形態論と第二版のそれとを詳細に比較検討したにもかかわらず誤った判断に至ったわけである。だがそもそも、初本文、初版付録、第二版の各価値形態論、更には、エンゲルスの手による第三版、第四版の各価値形態論を厳密に比較検討すること自体、従来ほぼまったくと言って良い程なされてはこなかったものであり、宇野弘蔵が価値形態論の重要性を主張し、しかし誤ったその理解に陥っていたところから生じたいわゆる〈宇野-久留間〉論争が行なわれた日本においてさえそうなのである。当論争における久留間鮫造の圧倒的優位にもかかわらず、テキスト批判を一切行なわず価値形態論の意義をまったく掴みそこなった宇野の主張の方がむしろ受け入れられてきた理論水準の低さがあったのである。この点では日本でさえこうなのだから、日本以外では価値形態論に関する研究はほぼまったくと言って良いほどなされてはいない。前掲のD. ローゼンベルクなどのスターリン主義派の価値形態論は単なる歴史的発展記述に墮しており、他方の異端派、例えばI・I・ルービンは価値形態論自体を完全に無視しているという状態である。こうした経緯からすれば、前掲モイシェ・ポストン『時間・労働・支配』が「マルクスの経済学批判の核心にあるカテゴリーの根本的な再解釈」(邦訳版、p.7)を目指すとしながらも、価値形態論を完全に無視しているのは何も例外ではないのである。またデイヴィッド・ハーヴェイは、前掲『〈資本論〉入門』において、当然にも各テキスト批判をまったく行なわず、もっぱら現行版(第四版=エンゲルス版)に拠って議論しているのだが、価値形態論についてどう理解しているのかと言えば、「私見では、この節には退屈な材料がたくさん含まれており、議論の重要性があまりに容易に覆い隠されてしまう」(Harvey, David, *A Companion to Marx's Capital*, London and New York, Verso, 2010, p.30.: 邦訳版、p.59)などと、価値

形態論の重要性を把握しているならば決してあり得ないであろう発言をしてしまう体たらくである。そして案の定、誤読につぐ誤読を重ねる。例えば「彼〔マルクス〕は〔…〕まずは単純な物々交換の状況から出発する」(ibid.: 邦訳版、p.60)などと、価値形態の形態Ⅰ(単純な価値形態)を物々交換だと理解する始末なのである！これは余りにも初歩的な誤読である(本稿〈Ⅰ〉の(iv)、連載第一回下段番号p.98、および註31)を参照のこと)。価値形態論に対するこうした無理解から有意義な〈学び〉を期待することなどまったくの論外である。さて、次いで少し時間を遡って、ルイ・アルチュセールの議論を取り上げてみよう。彼は言う。「たしかに、われわれは皆『資本論』を読んできたし、いまも読んでいる。〔…中略…〕われわれはたえず、毎日、誠実に『資本論』を読んできた。〔…中略…〕／けれども、いつかはきっと、『資本論』を文字通りに読まなくてはならない。テキストそのものを、四巻全体を、一行一行読むこと、〔…中略…〕いやそれどころか、『資本論』をフランス語版で読むのですませるのではなくて〔…中略…〕、少なくとも基本的な理論的諸章や、マルクスの鍵概念があふれているすべての文章は、ドイツ語版のテキストで読まなければならない」(Althusser, L., et al., *Lire le Capital*, tome 1, Paris, Maspero, 1965, p. 4.: L. アルチュセール／J. ランシエール／ピエール・マシュレー／E. バリバル／R. エスタブレ、今村仁司訳『資本論を読む(上)』ちくま学芸文庫、1996年、pp.17-19。引用文中の／は改行箇所、以下同様。なお、アルチュセールが『資本論』について全四巻と言っているのは、いわゆる『剰余価値学説史』も含めてのことである)、と。アルチュセールはこのように述べているが、当時入手可能であったMEWをはじめとしたドイツ語版テキストを厳密に「一行一行」読むことは結局なかったようである。彼は『資本論を読む』で、冒頭の商品論および貨幣論を素通りして、古典派経済学の「労働の価値」概念に対する批判としてのマルクスの〈労働力の価値〉の概念を取り上げるのであるが、そこから必要とされる価値の概念そのもの、その実体と形態、つまり商品そのものの概念に立ち戻って議論することをしない。価値が問われない以上価値形態は問われず、かくして商品は問われることはない。彼が高唱する〈構造〉概念は、『資本論』のもっとも重要で根本的・基礎概念である商品の概念をまったく対象とし得ない、否、そもそも対象として措定すべきであるという問題意識すら生まないものでしかない。彼の〈構造〉は少なくとも資本主義批判のための概念ではなく、資本主義の現状を追認する単なる〈ことば〉にすぎない。

ここで再び日本における議論・論争に立ち戻ることにする。〈久留間-宇野〉論争、とりわけそこにおける久留間鮫造の議論について簡単に触れておきたい。まさしくこの論争とそこにおける久留間の議論によって、価値形態論に関する『資本論』解釈の地平は一挙に飛躍したからである。では、〈宇野-久留間〉論争の中心テーマは何であったか。価値形態論は、商品所有者とその欲望を不可欠とするかどうか、これであった。宇野はそれを不可欠とし、久留間は不要とした。この論点について言えば、完全に久留間が正しい。宇野はまったく不要な疑問を『資本論』に対して抱き、不必要に立論し無駄な議論を展開しているのであって、この点に関する彼の議論全体は、無意味・無価値である。その議論はただもっぱら宇野派の中でだけ通用するものであり、『資本論』を前にして宇野、久留間両者の議論を読み比べれば、直ちに久留間の優位が解かる体のものである。だからこの論点については、論争に関する主文献を挙げるにとどめる(向坂逸郎／宇野弘蔵編『資本論研究』上、河出書房、1948年、久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』岩波書店、1957年、同『貨幣論——貨幣の成立とその第一の機能(価値の尺度)——』大月書店、1979年、宇野弘蔵『価値論』河出書房、1947年、同編『資本論研究Ⅰ商品・貨幣・資本』筑摩書房、1967年)。ここではこの主テーマに関連して生じた論点、しかし、価値形態論にとってはこちらの方が決定的に重要であり価値形態理解の核心に触れるものを取り上げておきたい。次の問題である。労働生産物Aが現実的に商品になるために異種の商品Bとの間に形成される等置関係=価値関係、すなわち、商品A=商品Bについて、久留間が、Aが自分にBを等置する、と捉えたのに対して、宇野は、Aが自分にBを等置すると言おうと、Aが自分をBに等置すると言おうとどちらでもかまわない、とした対立点である。この論点はいわゆる回り道の理解とも直結した価値形態論の核心をなすものである。ここでも久留間がまったく正しく、宇野が価値形態を全然理解していないことがあらわになった。久留間の以下の基本的に正しい主張を参照せよ。「ここでわれわれが何よりもまず注意しなければならないことは、20エルレのリンネル=1枚の上衣あるいは、20エルレのリンネルは一枚の上衣に値する、という価値方程式において、リンネルはいきなり自分を上衣に等置することによって価値形態を得ているのではなくて、まずもって上衣を自分に等置することによって上衣に価値物としての、すなわち抽象的人間的労働の直接的な体化物として

の、形態規定性をあたえ、そうした上ではじめて、この価値物としての定在における上衣の自然形態で、自分の価値を表現しているのだということである。こういう廻り道をしないでは、商品は価値形態をもつことができないのである。リンネルは、いきなり自分を上衣に等置することによって、すなわち自分は上衣に等しいのだと自称することによって、自分を価値物にすることはできない。それでは単なる独りよがりになってしまう。他面において、リンネルが上衣の自然形態でその価値を表わしうるためには、すなわち上衣の自然形態そのものを自らの価値の形態にしうるためには、あらかじめ上衣が価値物としての定在をあたえられていなければならぬ。言葉をかえていえば、上衣の自然形態がそのまま抽象的人間的労働の体化物を意味するものとされていなければならぬ。そしてそれは、リンネルが上衣を自らに等置することによって行われるのである。リンネルは、自分は上衣に等しいのだと自称することによって自分を価値物にすることはできないが、上衣は自分に等しいのだと宣言することによって上衣を価値物〔…〕にすることはできる。そこでリンネルは、かようにして上衣を価値物にした上で、自分は価値としては上衣と同じなのだ、ということによって、上衣の形態において、自分自身の価値性格を表現するのである。すなわち、その使用価値の形態であるところの自然形態から〔…〕区別された、価値形態をもつことになるのである」(前掲『価値形態論と交換過程論』pp.56-57)。ところでこの論点は『資本論』の翻訳問題とも絡んでいる。例えば、初版の次の文章：*Qualitativ setzt sie sich den Rock gleich, indem sie sich auf ihn bezieht als Vergegenständlichung gleichartiger menschlicher Arbeit,〔…〕*(MEGA, II/5, S.29)において、*sich*と*Rock*のいずれを3格としいずれを4格として訳出するののかという問題があり、長谷部文雄、宮川実の訳が3格と4格とをひっくり返して間違っして訳出していることを久留間は指摘する。そしてそれと共に、前掲宇野弘蔵『価値論』の文章で同様の間違っした表現があることをも指摘したのである(前掲宇野『価値論』pp.142-144、同『価値論』再版、青木書店、pp.136-137、前掲久留間『価値形態論と交換過程論』pp.60-62)。この指摘は宇野には相当堪えたに違いない。だがしかし、宇野は先述したように、この論点ではどちらでも良いとなおも居直ったのである。この居直りについては、宇野の回想録『資本論五十年』下(法政大学出版局、1973年、pp.713-716)に当学派外から見ればまことに滑稽で歪な師弟のやりとりが臆面もなく示されている。一方久留間は、宇野の居直りにたいしてまっとうな皮肉をあげせかけ、宇野たちが自讃する「学的」価値を暴いている(前掲久留間『貨幣論』、pp.107-114)。

以下、価値形態論の歴史的経緯と総括に関して必要な諸点を簡条書的に付加しておく。

- ① スターリン主義派のD. ローゼンベルグによるいわゆる正統派の見解は、第四版(現行版)に拠って価値形態の形態Ⅰから形態Ⅳの貨幣形態までを完全な歴史的発展過程として捉えるものであり、本来の価値形態論の課題、すなわち、労働生産物はどういうにして現実的に商品になるのか、そしてすべての商品はどのように貨幣性をもっているのかについてまったく触れもしない(前掲『資本論註解』第1巻参照)。またスターリン派に対する異端派Ⅰ・Ⅰ・ルービンはどうかと言うと、彼の主著である前掲『マルクス価値論概説』では価値形態についてまったく無視している。こうした価値形態論理解の水準の低さが今日までつづいているのである。
- ② 廣松渉は前述したように(本稿註2)を見よ)、宇野とは別の角度から、すなわち彼の認識論の根幹たる「四肢の構造論」を価値形態論に適用するというまったく場違いな・誤った目的から商品所有者を不可欠なもの、しかも単なる所有者ではなく過程の当事主体としてそれを価値形態論に導き入れている。そこには彼の哲学的思惟として現われた観念の肥大化が露骨である。商品語の〈場〉に人間語によって接近しなければならないという価値形態論の対象への配慮がまったく欠落している。つまり、人間語への無批判的妄信があり、商品語の〈場〉という対象にあまりにも無自覚である。
- ③ 価値関係・等置関係〈商品A = 商品B〉においては、Bの使用価値 = 現物形態そのものが価値の現象形態になるのであるが、このことはBの使用価値そのものの固有性はいつでも良いもの、何らかの使用価値 = 現物形態をもっていれば良いということが示されている。それゆえ、宇野が執拗に主張した価値関係における商品Aの所有者による商品Bへの特殊な欲望なるもの的重要性はまったく意味がないことが明白となる。商品Aにとって自分に等置される商品は、自分と異なるという条件のみが付された任意の商品で良いのであり、そこに商品Aの所有者の特殊な欲望などはまったく不要であり、久留間が主張したように捨象されるし、捨象されなければならないのである。
- ④ 久留間が指摘した3格と4格についての誤訳であるが、久留間の指摘以降もまったく訂正されていな



い。理由はまったく不明だが、その後の岡崎次郎訳（国民文庫、1976年）、江夏美千穂訳（幻燈社書店、1983年）、今村仁司訳（筑摩書房、2005年）もまた同じ誤訳を平然と継承している。なにゆえに敢えて誤りを犯すのか？ 各訳者は少なくともこの問題に関して明確な自己の見解を明らかにしなければならなかったはずである。

69) 初版付録は〈平易化〉というきわめてはっきりした目的があり、しかも本文を前提とするあくまで付録であるので、弁証法が損なわれ論理的な弱さや欠陥があったとしてもそれは納得し得るものであった。だがなぜマルクスは、第二版の価値形態論に貨幣形態を入れたのであろうか。この点についての詳細な検討は〈V〉の(ii)で行なう。

70) MEGA, II/5, S.28.

71) 『資本論』冒頭商品論の出だし（第二版以降では第1章第1節）の二商品の等置式ではもちろん、価値形態論（同第3節）における等置式もまた一定の条件、つまり、左辺にある商品が現実的に商品であることを示すための等置式という限定が付くが、任意の商品におけるものであることが意外と理解されていないようである。商品所有者がここでの議論に不可欠だと考えるのは、等置された商品の任意性について考えないことに大きな要因があろう。任意性についてきちんと踏まえていれば、等置された商品の使用価値の個々の特定の在り方・個性はなんら問題にならず、ともかく使用価値を持ってさえすれば良いことがわかるはずだからである。相対する商品所有者が自己の所有下にある商品の使用価値に関心をもち、相手の商品所有者が所有する商品の使用価値に関心を抱くといった、交換過程論での問題が価値形態Iにおいてもまったく論外であることは、等置される商品の任意性から明らかなのである。更に言えば、商品所有者を導入しようとする志向性は次のことによってもまた加速されている。すなわち、『資本論』の価値形態論を現行版にしたがって歴史的な貨幣生成論として理解し、価値形態Iを物々交換と重ね合わせて捉え、したがってそこでの商品交換が極めて狭く限定されたものであると誤解し、個別の使用価値の具体性に特別な意味を見出そうとすることによってである。商品所有者を価値形態論に不可欠と考える宇野弘蔵と宇野派の人々、および廣松渉については先に述べたが、ここではミシェル・アグリエッタ／アンドレ・オルレアン、井上泰夫／齊藤日出治訳『貨幣の暴力——金融危機のレギュレーション・アプローチ』（法政大学出版局、1991年）について少し述べておく。ただ彼らの議論は、『資本論』第二版で言えば第1章第1節の等置式と同じく第3節の等置式の区別も、更に価値形態論と交換過程論との区別もつけていない、はなはだ乱暴なものであり、『資本論』の価値形態論とはまったく無縁な、言うなれば、彼ら固有の交換過程論、すなわち貨幣生成過程論なのであるが、しかし彼らは「マルクスの価値形態論という人間精神の貴重な逸品」（p.35）などと『資本論』の価値形態論を高く評価し、価値形態論の形態IからⅢに沿った議論をしており、しかも、「マルクスは、交換そのものを理解するのに科学的に正当な唯一の視点に、すなわち交換者の視点に、身を置く」（p.33）などと言っているのだから、ひとこと苦言を呈さざるを得ない。彼らは言う。「本書の試論の目的は、貨幣を真正面から取り上げることであり、そうするためには、一八世紀の後半に経済学が構築されて以降、経済学的前提をなしてきたものを放棄しなければならない。価値の実体概念がそれである。価値の実体が効用であるか、それとも労働であるかは、貨幣の規定に関して何の変化も与えない」（p.8）と。ここで彼らは、価値実体概念を拒否すべきだと言っているのだが、しかし、それに関して効用概念を持ち出していることから解るように、古典派経済学の労働価値説も、マルクスの経済学批判—労働価値説批判も、近代経済学の効用学説—一般均衡論も、すべて一緒くたにして、これらが皆、価値論を基礎とするものとされて投げ捨てられているのである。これらの理論ではおしなべて「経済的事物に共通する質が当然のごとく自明のものとされ、社会の首尾一貫性があらかじめ前提されている」（p.8）のであり、これがけしからんというわけだ。彼らによれば、交換の場は、そもそも同一性を前提としない根本的に不均衡な場であり、商品所有者相互の欲望を介した根源的暴力の場であり、この根源的暴力の拡散と現実化を回避するためにそれを一点に集中する外的な社会制度、すなわち貨幣が要請され、第三項の排除という形でそれが実現される、というのである。ルネ・ジラルの理論を援用したこうした議論に現実性はまったくないが、問題なのは、彼らの言う欲望が価値論を否定した上でのものである以上、使用価値に対するものであり、したがって根源的暴力とされるものが使用価値をめぐるものである点である。彼らは「欲望 (desir; desire)」と言っているが、使用価値に対する、それをめぐるものでありかぎり、それはむしろ「欲求 (besoin; need)」であらう。商品生産の社会、資本主義的生産様式が支配する社会で

は使用価値ではなく価値、すなわち抽象化された普遍性でしかないが、その価値に表わされる普遍的な富、富一般に対するものこそが欲求と区別されるかぎりでの欲望ではないのか。彼らの考える社会の社会性の水準が、マルクスが『資本論』で押さえた社会性よりはるかに低いことがわかる。だがそもそも欲望は価値形態論では問題にならない。価値形態論に商品所有者は不要であり捨象されているからである。彼らが言うのとは逆に、「交換者の視点に、身を置く」ことなく、徹底して商品を主体として冒頭の商品論を展開したがゆえに、マルクスは偉大な成果をあげたのである。彼らの価値形態論－『資本論』理解はあまりにも低い水準にあり、価値形態論を問題にする以上は、せめて、宇野－久留間論争における久留間鮫造の議論ぐらゐは踏まえてほしいものである。ところで、ルネ・ジラルの理論を同じく参照して、第三項排除論を振り回したのが今村仁司である（『暴力のオントロジー』勁草書房、1982年；『排除の構造』青土社、1989年）。彼の場合、表面上は価値論を拒否していないので、その点がアグリエッタ／オルレアンとは違っているが、しかし議論の内容は、商品所有者を導入してマルクスの価値形態論をなぞる等、ほぼ同一である。しかも今村の立場は、価値論を否定していないとはいえ、価値実体を拒否するのである。そして彼の〈価値＝関係〉説を、マルクス的に聞こえる「非対象化的労働」なる用語で粉飾する。だが、この巨大な専門用語のダム湖のなかには、根源的な価値批判は一滴たりとも見られない。ここで、今村の「非対象化的労働」について一言しておきたい。いわゆる『経済学批判要綱』でマルクスは、生きた労働に対して根源的な概念規定を、非対象化労働（Nicht-vergegenständlichte Arbeit）という用語を用いて、「否定的に把握されたそれ」と「肯定的に把握されたそれ」という二重性において行なった（MEGA, II/1-1, S.216、前掲『マルクス 資本論草稿集1』大月書店、1981年、pp.353-354）。このマルクスの生きた労働に対する概念は議論が必要ではあるが、魅力的である。それを今村は用語だけ横取りし、無概念的無規定的で、ただロマン主義的雰囲気漂わせたものとして用いている（前掲『排除の構造』ちくま学芸文庫版、1992年 pp.143-151）。例えば今村は次のように言う。排除された第三項たる貨幣が資本形式という第四項に展開・発展するためには「地下的労働」なるものが必要だとし、かかる「地下的労働」は「具体的な生産的・対象化的労働ではなくて、私のいわゆる非対象化的労働」（p.144、傍点は引用者）だと言う。そして言う、「非対象化的労働が地下的という形容をうけとるゆえんは、それが経済形式の下方に排除されるばかりでなく、具体的生産的労働の蔭にすらくさされているからである」（同上）。錯視による排除の湿った「蔭」に重ね書きされる、地下の人間活動！ そしてこの究極の排除対象が「地下的」に存在しているという「真理」の発見者たる今村は、次のように、ロマンを吐露する。曰く。「非対象化的な地下的労働は、過剰の労働、余剰労働に他ならない。それははちきれんばかりの充溢せる身体であり、充溢し爆発をまっピュシスである。それは、突破可能な地表面があればいつでも、地上へと噴出する可能性をもつ潜勢力である。それが弱い地表をぶち破り地表に流れ出る暁には、地表面は流れ出る灼熱のマグマでおおわれ、すべての存在者はこの灼熱のマグマ流にひたされ溶解されるであろう。それはひとつのカオス的な状態となるだろう」（同上）、「全般化したスケープゴートとしての、全般化した第三項としての資本の存在性格は、非対象化労働をもってはじめて可能となる」（p.148）。こうした説話を今村は自らの「価値論」ととらえていたのだろうが、いかなる意味でも“論”と呼び得ないものである。それは煽情のラディカリズムの衣をまとった、貧弱な説話でしかありえない。

72) MEGA, II/5, S.29.

73) ibid., S.29.

74) ibid., S.32.

75) MEGA, II/6, S.83-84.

76) ibid., S.82.

77) MEGA, II/5, S.30.

78) ibid., S.30.

79) ibid., S.30.

80) ibid., S.31-32.

81) ibid., S.634.

82) 例えば岩井は次のように言っている。「[等価形態にある]上着が[相対的価値形態にある]リンネルと直接に交換可能なのは、リンネルがじぶんと直接的な交換可能性を上着にあたえているという社会的関

係の結果にすぎない。」(『貨幣論』ちくま学芸文庫、1998年、p.044)。このように岩井は直接的交換可能性なるものを与えたり・与えられたりするものと考えているのであり、マルクスが強調した〈直接的・非媒介的-間接的・媒介的〉の区分を捉えないので、次のように言うことになる。「結局、リンネルがほかのすべての商品に直接的な交換可能性をあたえているならば、逆にほかのすべての商品はリンネルに直接的な交換可能性をあたえることができ、ほかのすべての商品がリンネルに直接的な交換可能性をあたえているならば、逆にリンネルがほかのすべての商品に直接的な交換可能性をあたえることができるのである。[…] / […] 貨幣とは、全体的な相対的価値形態と一般的な等価形態というふたつの役割を商品世界のなかで同時に演じている、いや演じさせられている存在なのである」(同、pp.59-60)。このように、直接的交換可能性を与えたり与えられたりする双方向的関係があると考えることによって、彼固有の循環形式をとる価値形態Zが生み出されることになるというわけである。この議論がまやかしであることは明らかである。貨幣によって商品は買えるが、商品によって貨幣は決して買えはしないのである。彼が、商品の貨幣に対する優位性が現われ出ると考えるスーパーインフレーションの事態にあっても、商品によって貨幣を買うわけでは決してないのであって、ただそこでは貨幣が貨幣としての機能を喪失し、ほとんど物々交換の状況に回帰しているだけのことなのである。ところで岩井は、先に述べた久留間が指摘した誤訳問題について「笑うに笑えぬ喜劇」(同、p.38、同、p.44)とこきおろしているが、この「直接的交換可能性」についての理解を見れば、彼自身もまたその「喜劇」の一役者であることがわかるというものだ。

83) MEGA, II/5, S.40.

84) *ibid.*, S.42.

85) 等価形態の謎性に関して一定の理解を示しながらも、イスラームに対するロマン主義的思い入れによってそれを台無しにしてしまっているのが中沢新一の『緑の資本論』(初出は集英社、2002年)である。中沢は同書ちくま学芸文庫版(2009年)の「まえがき」に次のように書いている。『『資本論』の核心は、その第一巻に展開された価値形態論の部分にある。私はこの本で、その価値形態論をイスラム教の『タウヒード』という存在論の考え方にしながら書き換えてみるとこうなる、という試みをおこなった』(p.5)と。ここで中沢が言う「イスラム教の『タウヒード』という存在論」がどのようなものであり、それを中沢がいか理解しているのかについては後に検討するとして、先ず、『資本論』の価値形態論を中沢がいか書き換えたのかについて見てみよう。

中沢は『資本論』を当然のことだが現行版で読み、価値形態論を貨幣生成論として捉えている。だから彼が言う価値形態論の書き換えとは貨幣論としての書き換えである。その貨幣について中沢は、「カトリック的貨幣論とイスラーム的貨幣論が存在」(p.78)するとし、マルクスは前者を根本的に批判することを目指しながら結局その枠内での議論にとどまったと言うのである。だが問題なのは、中沢の貨幣理解の基底である。中沢は貨幣について、本来商品ではないものであるのだが、それが商品になると自己増殖の能力を獲得し、剰余価値と利子を生み出すものになるというきわめて特異な考えをもっている(例えば次のような言明を見よ。「貨幣はそのままでは資本にならない。つまり貨幣は不妊なのである。ところが、貨幣がいったん商品に姿を変えるや、そこには不思議な産出力が宿ようになる」(p.107)、「貨幣が貨幣であるうちは、自己増殖はできない。商品という『キリスト教徒』にならなければ、身に産出性を帯びることなどはできないのである」(p.108))。その上で、マルクスもこれを支持していたと信じ込んでいる。だが彼がその根拠としてあげている(pp.106-107)『資本論』現行版第2編の「第4章 貨幣の資本への転化」の「第1節 資本の一般的定式」の一節(MEW, Band 23, S.169-170. 前掲資本論翻訳委員会訳 p.264)は、彼の考えを支持するものとはまったくならず完全な誤読である。というのは、彼は、資本が貨幣資本・生産資本・商品資本という三つの形態転化をとげつつ運動するものだという理解ができず、資本はまさしく運動する価値、すなわち形態転化——貨幣形態から商品形態へ、そして更に商品形態から貨幣形態へ——の過程を進行する価値、しかも、増殖する価値である、とマルクスが述べた上記の箇所を、商品でない貨幣が商品に転化する過程を述べたものと捉えているからである。ともあれ、中沢は、商品ではない貨幣と商品である貨幣とが存在し、後者が問題なのだとするきわめて特異な貨幣理解に基づいて議論するのであり、本来商品でない貨幣が商品化し自己増殖能力を獲得し、それを現実化する様態をマルクスは描き出したと捉えているわけである。このような『資本論』とはまったく縁のない議論に基づいて価値形態論に向かうのであるが、等価形態の謎性については一定の正しい直観的理解を示している。彼は言う。「貨



幣の萌芽は、この『相対的価値形態』と『等価形態』の不均衡な出会いのうちに発生するのである。このとき、上着のような『等価形態』をとる商品は、『相対的価値形態』であるリンネルの価値を『表現する』地位、つまりシニフィアン<sup>1</sup>の地位に立つのに対して、『相対的価値形態』をとる商品は、『等価形態』をとる商品によって『表現される』地位、すなわちシニフィエ<sup>2</sup>の地位に立つ。そして、いつでも相手の価値を『表現する』地位にある商品が、貨幣と同じ立場に立つことになるわけだ。／この貨幣の萌芽があらわれる原初的な場面において重要なのは、貨幣に結晶していくシニフィアン商品が、シニフィエ商品に対して流動的なアウラを帯びているという点である。〔…〕貨幣の発生<sup>3</sup>の現場を取り押さえようとする、このマルクスの分析によって際だつのは、貨幣に結晶することになる『等価形態』における商品には、アウラ、流動性、愛（しかもこの愛は不確定性をはらんだ愛である）、意志、欲望などの性質が、あい伴って発生することをあきらかにしていることである」（pp.116-117）。ソシユール言語学から構造主義、そしてポスト構造主義の論者たちに広まった〈シニフィアン-シニフィエ〉といった用語や、「愛、意志、欲望」などの言葉が価値形態の概念的把握を阻害していることは明らかであるが、しかし等価形態の謎性に一定程度正しく接近していることは確かである。まさしくそうであるがゆえに中沢は、ここから、先に示した貨幣に関する特異な理解を無効にする次の言明に行きつく。「貨幣は商品の出会いのうちから発生する『特殊な商品』である。しかも、『二〇ヤールのリンネル=一着の上着』に象徴される商品同士の出会いとおたがいの値踏み<sup>4</sup>の過程には、すでにしてシニフィアンとシニフィエの不均衡がおり、流動性や浮遊性をはらんだシニフィアン商品はそれ自体のなかに、すでにして価値増殖ということがおこるために必要な能力がそなわっている。したがって、貨幣が商品形態をとったとき、はじめて価値増殖への運動が可能になるという最初の言い方は、半分しか正しくないことになる。貨幣は特殊な商品として、すでにして自らのうちに増殖性への秘められた意志を潜在させており、その意志はシニフィアンとしての商品に内在する流動性、浮遊性によって、すでに準備されてあったと言える」（pp.117-118）。中沢はここで實際上、商品でない貨幣が商品になるのではなく、商品世界が商品の一形態である貨幣を生み出すのであるという正しい理解に至っている。「半分しか正しくない」ではなく「全部正しくない」ことを中沢自身が自らの行論によって明らかにしてしまったのである。だが中沢は、この論理的な不整合を正す方向に向かうことなく、イスラームへの思い入れから、ロマン主義的・情緒的議論に身を委ねることになる。例えば次のように。「イスラームなら、冷静にこう言うだろう。商品に内在する『聖霊』の働きを除去することは、人類に可能である。イスラームの実験が、それを歴史的に証明してきたではないか。タウヒードによって、貨幣から発生する毒は消すことも可能なのだ」（p.112）、「イスラームは一神教の原理に忠実に、貨幣や商品の中にセットされたシニフィアンの部分を『魔術的』に操作して、そこから不平等な利潤を獲得することを、厳に禁じてきた。とりわけそれは、『二〇ヤールのリンネル=一着の上着』という、商品交換のもっとも原初的な場面において何気なく作動をはじめ、商品としての貨幣を生み出すばかりか、その貨幣が貨幣を生むようにして、価値増殖の過程がはじまってしまうという、深淵微妙な経済学的分析を深く理解していたかのように、この原初的な場面においてまず、資本主義への道を固く閉ざそうとしてきたのである」（p.130）、「イスラームとは、その存在自体が、一つの『経済学批判』なのだ。原理としてのイスラームは、巨大な一冊の生きた『緑の資本論』である」（p.133）、「タウヒードの論理は、『資本論』が立脚している『価値』の考え方よりも、はるかに奥行きのある拡張された価値の考え方を生み出してきた。マルクスの考えでは、人間が自然に働きかけをおこなったときに、価値は発生する。それを労働と呼ぶことにすれば、モノに込められた人間労働が価値をつくりだすのである。商品社会では、そういうモノが同じ価値をもつほかのモノと交換され、そこに交換価値が発生する。／〔…〕／イスラーム経済の基礎をなすタウヒードの論理からは、キリスト教の西欧で発達した労働観、価値論、交換論などを総合した（止揚した）ところにつくられたマルクスの価値形態論とは、根本的に異質な価値論が育ってきた。〔…〕タウヒードの論理にしたがえば、絶対者の表現であることが『価値』であり、その価値にははじめてから贈与の論理が組み込まれているために、モノ同士の等価交換も厳密なことをいえば、なりたたないのである」（pp.6-7）。このように、きわめて通俗的で不正確で誤った『資本論』理解の上にこうした情緒的なイスラームへの思い入れが積み重ねられ、他方で、マルクスへのグチが語られる。「古典派経済学の根底的な批判をめざしたのが、マルクスの『資本論』だったはずである。それを徹底的に遂行するためには、マルクスは古典派の経済論に内在する『三位一体』的な思考様式を完全に相対化した、まったく新しい『外部』の思考様式で、経済現

象の分析に臨まなくてはならなかったはずである（たとえば、タウヒード経済論のような仕方）。ところが、マルクスはそうしないのである」（p.105）。まさしくマルクスは、中沢が望むような仕方でも考えず、資本主義に真向ったがゆえに、〈価値－商品〉への根源的批判を遂行し、労働価値説批判－経済学批判をなしとげたのである。以上から、中沢は『資本論』の価値形態論の書き換えを行なったなどとはとても言えず、ただ単に『資本論』に対してイスラームへの我流の解釈にもとづくロマン主義的・情緒主義的思い入れを外的に対置しただけであることがわかる。

では、中沢が思い入れているイスラームのタウヒードの理論、またそれに基づくとされるイスラームの経済・金融理論について検討しておこう。まず、タウヒードについては、黒田壽郎『イスラームの構造——タウヒード・シャリーア・ウンマ』（書肆心水、2004年）によれば、次の通りである。

「〔…〕タウヒードとはさまざまな事象を〈一〉を介して理解する原則であり、〈一化の原理〉と訳されるものである。〔…中略…〕／タウヒード論の徹底化は、〈一化の原理〉が、神の唯一性にのみ適用されるのではなく、それが存在界の分析にも活用される契機となっている。万物は同じ神の手になっているため同根であり、それゆえすべて等位にある。そしてそれらは同時にすべて差異的であり、さらに互いに密接に関連しあっている。タウヒードの論理は、万象の等位性、差異性、関係性という三原則を徹底させ、それに基づいて特徴あるイスラームの現世観を作り上げているのである」（同書、序章、pp.22-23）。「ゲゼルシャフトは確かに国民国家、資本主義等を媒介にして社会関係を合理化する側面を持っていた。しかしそれが無視し、軽視してきたのはとりわけ私生活の側面に収斂する無償のものの重要性、役割である。例えば夫婦、家族という単位の内側では、あらゆる行為は無償である。そこではすべての成員が、互いに行為を贈与し合うことによってチームワークを創り上げるが、その根拠はまさにこの無償性に他ならない。親密なもの、親しい間柄を創り上げる基礎は、もっぱら報酬を超えたものであり、人間はこれを欠いては存在すること自体が無意味である。しかし現在の商品化、有償化という同一律の横行は、この親密さの根拠を犯し、存在そのものの瑞々しさを干涸びさせてはいないであろうか。／ところでこのような無償性とは、決して価値の欠如と向かい合っているものではない。事態はむしろ正反対で、向かい合う対象に計算の可能性を超えた価値、意味を認めることを基礎としており、その掛け替えのなさはもっぱら対象の差異性に由来するものなのである。〔…中略…〕ところでこの世に存在するものみなは、タウヒードの世界観が示唆するようにすべて差異的であり、その本性を窮め尽くすことができないほどの深み、秘密を湛えてはいないであろうか。差異性を一義的なものと捉える者にとって、この世には基本的に等価交換されうるものなど何一つ存在しない。そしてあらゆるものは、その差異性のゆえに観察者の予想を上回る秘密を開示するのである」（同上、終章、pp.346-348）。黒田の示すところでは、それが「イスラームの根幹をなす」にしても、あくまで「タウヒードの原理」は理念にほかならない（序章）。その理念からある種の間人主義が展開され、資本主義的な意味での社会性を有する価値と、倫理的なそれとが弁別されぬまま、差異性による等価交換への純粹素朴な「批判」がなされている。この論の運びは、中沢の『緑の資本論』での「タウヒード」賞賛ときわめて似通っており、平易なうえに人間主義的な熱に満ちているので、つい賛同する者もいるかもしれない。しかし、本来的な差異を「分かち合う」諸物が等価交換される転倒状況そのものは、「タウヒード」を外挿することで解消されるはずもなく、さらにここで述べられる等価交換（翻せば差異性）は時間性を持たない静的・実体論的な取引でしかない。そのため残念ながら、空間を時間で絶滅させながら自ら増殖する価値＝資本の圧倒的な等価の強制力には決して対抗しえないのである。そして言うまでもなく、架空資本のグローバルな暴力性は、ここでの「批判」の枠外に厳然と存在している。次いで、「イスラーム金融」について述べる。なぜなら、「イスラーム金融」「イスラーム銀行」についての現実と議論とを踏まえなければ、「タウヒードの原理」は〈いま・ここ〉での現実性をもちえないからである。イスラームにおける〈一化の原理〉は、価値増殖すなわち利子を生み出すマネーを、西欧の利子（interest）・高利（usury）という法理的には元本債権から派生するものとして捉えられるものよりも理念的に広義に考えている。取引における対価の等価性を逸脱するものを「リバー」と呼び、包括的に禁じられるべきものと措く（両角吉章『イスラーム法における信用と「利息」禁止』羽鳥書店、2011年、pp.55-69）。この事態を現代世界での問題として考えると、「イスラームは宗教というよりもむしろ、史上初の巨大コンツェルンの定款である」（H. G. ベーア）という端的な指摘が正鵠を射ているように、理念と現実との乖離にイスラーム金融システムがどのように対応しているかが「タウヒードの原理」との整合性におい

て審問にかけられている。小杉泰がいみじくも述べるように、イスラームの教義体系に経済行為が主要なメタファーとして用いられている、すなわち経済が宗教（普遍宗教であり生活戒律でもある）に入れ子構造のように組み込まれている（小杉泰『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会、2006年、p.99）。

じっさい、理念と現実の衝突として、イスラーム金融機関会計監査機構（AAOIFI）やシャリーア諮問評議会などのイスラーム金融諸制度においては、現実主義的リバー限定容認論と理念主義的利子＝リバー否定論が相半ばしていると、気鋭のイスラーム研究者・長岡慎介は述べる（長岡慎介『現代イスラーム金融論』名古屋大学出版会、2011年、第2章・第3章）。さらに長岡はカール・ポランニーの言葉を転用して、イスラーム金融を「現物経済に埋め込まれた金融システム」と表現し、現代においては金融手法の「序列化」と「重層化」によって、信用創造をリバー禁止に出来る限り抵触せずに可能にしているとする（同上書、pp.200-204.）。だがこれは資本主義の現実の力が理念に変更を迫った結果にほかならず、長岡の主張はポランニーの指摘と同様に、価値増殖（とりわけ利子生み資本形態におけるそれ）の解明をまったく欠いている。長岡とその師である小杉泰は、イスラーム金融システムあるいはイスラーム銀行を、西欧金融システムを相対化し、より望ましいオルタナティヴを提示するものと評するが（小杉・長岡『イスラーム銀行』山川出版社、2010年、pp.107-114）、その「根拠」はサブプライム・ローン危機－リーマン・ショックが与えた悪影響の規模が欧米などの金融機関と比較して相対的に小さかったという結果論にすぎず、悪影響が同じく相対的に小さかった南アフリカや中国などとの比較なしの賛美は、グローバル金融システムにおけるトランスナショナルなイスラーム金融システムの位置づけを曖昧化させる以外の結果につながりはしない。さらに、欧米ほどとは言えないにしてもやはり相当の金融危機の影響を被ったことや、コモディティ・ファイナンスのイスラーム版ともいえる「コモディティ・ムラーバハ」の登場、金融商品のシャリーア適合性と格付けを行う「株式会社」がイスラーム世界の只中に無数に設立されてきていることを考えると、イスラーム金融は、グローバル・システムの単一性を同質なものではないように機能する点で、みごとに欧米型システムとの間に相補性を構築してきているといえる。つまり総括的に見るに、中沢の主張は独自のものでないだけでなく、イスラーム金融の現実をも無視したロマンティックな観念論にすぎない。彼がいみじくも自著につけた象徴の色である「緑」は、イスラームの緑ではなく、増殖の果てに過剰な富栄養化をとげた有毒渦鞭毛藻（*Pfiesteria piscicida*）の、あるいはアメリカ合衆国紙幣の色とするのがせいぜいだろう。

86) MEGA, II/5, S.33-34.

87) *ibid.*, S.34.

88) MEGA, II/6, S.89-90.

89) MEGA, II/5, S.50.

90) *ibid.*, S.35-36. ここで、マルクスは商品所有者に言及しているが、それに特別の意味を与えているわけではない。商品を価値関係に置くのは当然ながら商品所有者であるが、価値形態論の議論の前提としてそれが語られているだけである。

91) *ibid.*, S.37.

92) ここで、エンゲルスとの共著『聖家族 別名 批判的批判の批判 ブルーノ・パウアーとその伴侶を駁す』におけるマルクスのヘーゲル批判、すなわちヘーゲルの実体たる“果実なるもの”に関する一連の言明が思い起こされる（MEW.2, S.59-63. 前掲『マルクス＝エンゲルス全集』第2巻、大月書店、1960年、pp.56-60、『聖家族 別名 批判的批判の批判 ブルーノ・パウアーとその伴侶を駁す』「第5章 秘密を売る小商人としての『批判的批判』あるいはセリガ氏としての『批判的批判』」（当章はマルクス執筆）の「2 思弁的構成の秘密」の部分を参照のこと）。このマルクスのヘーゲル批判は根源的かつ辛辣きわまりないが、しかしそれはあくまでヘーゲルの理念に対する批判である。この批判を現実に対する批判として措定したのが、〈社会的実体－価値実体〉という概念である。

93) 一方のスターリン主義派の見解の特徴は、価値を価値実体、すなわち労働の方に重ね合わせて捉えるという点にある。しかもマルクスが生きた労働（商品に表わされた・対象化された労働についてではなく）の一方の側面について与えた規定、すなわち、「すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間の労働力の支出であって、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性においてそれは商品－価値を形成するのである」（MEGA, II/6, S. 79-80）という規定を商品に対象化・表わされた抽象的人間労働に重



ね合わせ（生きた労働と対象化された労働との混同）、かくして価値実体としての抽象的人間労働を超歴史化し、価値を労働一般、人間の労働一般に重ね合わせるることとなる。ここでは実体は社会的実体ではなく徹底して自然的実体として捉えられている。文字通りの・徹底した労働価値説であり、更に〈労働＝価値〉を革命の主体＝プロレタリアートに重ね合わせ、実現すべき価値を労働者階級が担っていると考えるのである。マルクスが労働価値説批判としてスミス、リカードゥ等の労働価値説を批判したことが完全に捨て去られている（前掲 D. ローゼンベルク『資本論註解』第一巻、前掲ソヴェト同盟科学院経済学研究所『経済学教科書』等を参照のこと）。

他方の人々としては、廣松渉、柄谷行人、岩井克人等がいる。論者によって、実体の否定と価値の関係概念化の手法や程度に相違があるが、いずれも社会的実体と規定されている点が理解されておらず、その批判的意義がまったく捉えられていない。例えば廣松は次のように述べている。「そもそも『抽象的人間的労働』とは何であるのか？果してそういうものが実在するのか？実在すると強弁するとき、それは形而上学的・超自然的な実在を持出すことにならぬか？そういう“わけのわからぬしろもの”の『凝結』とはいよいよ珍奇であろう。『抽象的人間的労働』の何たるかが明確に規定されない限り、そもそもマルクスの価値論全体が“誤魔化”しになってしまう。それは、かの第三者、つまり、交換される二商品がそれに還元される共通者なるものを要請し、労働の生産物に論点を“移動”し、この場面であらためて要請した『第三者』『共通者』たるにとどまる。抽象的人間的労働の何たるかを積極的に規定しえなければ、“正体不明の第三者”の存在場面を他の場面に移動させただけに終る。あらためて設問しよう。一体抽象的人間的労働とは何か？／〔…〕抽象的人間的労働なるものはどこにも実在しない。況んや、それが『凝結』するなどということは現実的な過程としてはありえない」（『マルクス主義の地平』勁草書房、1969年、pp.226-227）。われわれが本稿〈Ⅲ〉で検討した「共通なもの」と「第三のもの」との区分がなされておらず、だから価値と価値実体とが混同されているのみならず、そもそも過程の主体が商品であることが押さえられていない。こうした無意味な疑問が出される背景として、社会的実体という点が捉えられておらず、マルクスの価値実体への批判の意義が理解されていないということがある。こうした社会的実体への拒否・否定から廣松は「抽象的人間的労働なるものが在って、それが文字通りの意味で凝結して、価値なるものに転成するわけではない。普遍的抽象的な主体＝実体として、それが自己外在態に転変して価値実体と成る或るもの、そのような etwas として表象されているところのものは、いかなる関係規定の屈折した投影であるか。従ってまた、価値実体ということで私念されているところのものの真実態は何であるか」（前掲『資本論の哲学』p.191）と問題を設定し、「人々は、価値実体なるものが先ず在って、それが第二次的に諸関係をとり結ぶかのように表象しがちである。また価値現象体のうちに普遍的な価値本質、ないし、価値実体が潜んでいるかのように思念する。しかし、人々が価値実体として思念しているところのものは、実は、かの間主体的な機能的諸関係の結節を自存化したものにほかならない。〔…〕人々が普遍の本質として私念しているところのものは、実は、間主観的に一致して gleichsetzen されている機能的関係（これは多岐多様であり、それぞれしかるべき歴史的・社会的、そしてまた自然的な根拠をもつ）を物性化して事物に凝縮的に帰属させたものにほかならない」（同前、p.195）と結論付けるわけだが、この難解な表現で言われていることは、きわめて単純化して言えば、資本主義的な商品生産社会の中での、人々の社会的分業体制における位置・役割・機能等々を廣松特有の「間主体的」とか「間主観的」とかで表現した、廣松の学的意識過程への反射でしかない。社会的分業体制は明らかに社会的実体としてとらえられるであろうし、だからその社会的実体の社会的意識過程への何らかの反射として、抽象的人間労働と、その凝結ということを廣松は考えていることになる。

94) MEGA, II/5, S.42.

95) *ibid.*, S.42. この一句の前には次の文章がある。「われわれの現在の立場においては一般的な等価物はただけって骨化されてはいない。どのようにして実際にリンネルは一般的な等価物に転化させられたのであろうか？それは、リンネルが自分の価値をまず第一に一つの個別的商品において示し（形態Ⅰ）、次にはすべての他の商品において順次に相対的に示し（形態Ⅱ）、こうして逆関係的にすべての他の商品がリンネルにおいて自分たちの価値を相対的に示した（形態Ⅲ）、ということによってである。単純な相対的な価値表現は、リンネルの一般的な等価形態がそこから発展してきた萌芽だった。この発展のなかでリンネルは役割を変える。リンネルは、その価値の大きさを一つの他の商品で示すことをもって始め、そし

て、すべての他の商品の価値表現のための材料として役だつことをもって終わる」と述べ、これに続けて、「リンネルに当てはまることは、どの商品にも当てはまる」と述べられるのである。これを見ると、初版本文の価値形態論における形態ⅠからⅢへの過程が決して歴史的な発展過程ではなく、論理的な展開過程であることが、このうえなく明瞭になる。リンネルを例とした形態ⅠからⅢへの過程がどの商品にも当てはまる、と言われているのだから。この点で、第二版（第三版、そして現行版）の価値形態論は明らかに貨幣生成の歴史的発展過程として述べたものになってしまっており。論理的に問題があることがよくわかる。この点に関する初版本価値形態論と第二版の価値形態論との詳細な比較分析は〈Ⅴ〉の(ii)で行なう。

96) *ibid.*, S.43.

井上 康（京都精華大学 非常勤講師）

崎山 政毅（本学国際文化学域文化芸術専攻教授）

# 商品語の〈場〉は人間語の世界とどのように異なっているか(4)

——『資本論』冒頭商品論の構造と内容——

井 上 康  
崎 山 政 毅

はじめに

- 〈Ⅰ〉人間語の世界に対する限りでの商品語の〈場〉
- 〈Ⅱ〉『資本論』初版と第二版の位相（以上、632号）
- 〈Ⅲ〉人間語による分析世界としての『資本論』第二版第1章第1節および初版・フランス語版当該部分の比較対照による解説
  - (i) 〈富—価値—商品〉というトリアーデ
  - (ii) 『資本論』初版、第二版、およびフランス語版の対照
  - (iii) パラグラフ①および②の検討
  - (iv) パラグラフ③の検討
  - (v) パラグラフ④の検討
  - (vi) パラグラフ⑤の検討
  - (vii) 「共通なもの」= 価値、「第三のもの」= 商品に表わされた抽象の人間労働
  - (viii) 初版のパラグラフ⑥～⑨の検討
  - (ix) 第二版・フランス語版のパラグラフ⑥、⑦の検討
  - (x) 第二版・フランス語版のパラグラフ⑧、⑨の検討
  - (xi) 価値および価値実体の概念の一応の定立（以

上、633号)

- 〈Ⅳ〉商品語の〈場〉——価値形態
  - (i) 商品をつくる労働の特殊歴史的規定性について
  - (ii) 初版本文、初版付録、および第二版のそれぞれの価値形態論
  - (iii) 価値表現において諸商品は何をどんな風に語るか
  - (iv) 〈自然的規定性の抽象化〉過程に関して
  - (v) 〈私的労働の社会化〉過程に関して
  - (vi) 価値の実体と等価形態の謎性
  - (vii) 初版本文価値形態論の形態Ⅱに関して
  - (viii) 初版本文価値形態論の形態Ⅲに関して
  - (ix) 初版本文価値形態論の形態Ⅳに関して（以上、635号）
- 〈Ⅴ〉価値形態論と交換過程論との関係について（本号）
  - (i) 価値形態論に対する交換過程論
  - (ii) なぜ、第二版は初版本文の形態Ⅳを捨て貨幣形態を形態Ⅳとしたのか
- 〈Ⅵ〉〈富—価値—商品〉への根源的批判について  
おわりに

(承前)

## 〈Ⅴ〉価値形態論と交換過程論との関係について

(i) 価値形態論に対する交換過程論

初版本文「第1章 商品と貨幣」の「(一) 商品」から「(二) 諸商品の交換過程」に移るところに次のような一文がある。



商品は、使用価値と交換価値との、したがって二つの対立物の、直接的な統一体である。それゆえ、商品の一つの直接的な矛盾である。この矛盾は、商品がこれまでのように分析的に、あるときは使用価値の観点のもとで、あるときは交換価値の観点のもとで、考察されるのではなくて、一つの全体として現実に他の諸商品に関係させられるやいなや、発展せざるをえない。そして、諸商品の相互の現実の関係は、諸商品の交換過程なのである<sup>97)</sup>。(下線は引用者)

この文章は、第二版には存在しない。だがこの短い文章、とりわけわれわれが下線を引いた部分にはっきりと示されているように、初版本価値形態論においては、歴史的現実的諸条件を捨象した上で純論理的に詰められる限りの議論がなされていること、さらにその議論を受けて、交換過程論に入って初めて歴史的現実的諸条件を考慮した議論がなされていることが解る。

純論理的世界から歴史的現実的世界への移行、——これについてマルクスは次のようにより詳細に述べている。

商品の交換が商品価値として互いに関係させ、商品価値として実現するのである。それゆえ、諸商品は、それらが使用価値として実現されるまえに、価値として実現されなければならないのである。／他方では、諸商品は、それらが価値として実現されるまえに、使用価値として実証されなければならない。[…]／どの商品所有者も自分の商品を、ただ、自分の欲望を満足させる使用価値をもっている他の商品と引き換えにのみ、手放したいと思う。そのかぎりでは、交換は彼にとってただ個人的な過程であるにすぎない。他方では、彼は自分の商品価値として実現したいと思う。[…] そのかぎりでは、交換は彼にとって一般的な社会的過程である。しかし、同じ過程が、すべての商品所有者にとって同時にただ個人的でのみあると同時にまたただ一般的社会的でのみある、ということはいえないのである。／[…] どの商品所有者にとっても、他人の商品はどれでも自分の商品の特殊な等価物とみなされ、したがってまた自分の商品はすべての他の商品の一般的な等価物とみなされる。ところが、すべての商品所有者が同じことをするのだから、どの商品も一般的な等価物ではなくて、したがってまた諸商品は、それらが互いに価値として等置され価値の大きさとして比較されるための一般的な相対的価値形態をもっていない。したがってまた、諸商品は、けっして諸商品として相対するのではなくて、ただ諸生産物または諸使用価値として相対するだけである。／われわれの商品所有者たちは、当惑のあまり、ファウストのように考え込む。太初<sup>はじめ</sup>に行<sup>おこない</sup>行為ありき。だから、彼らは、考えるよりまえに、すでに行なっていたのである。[…] ただ社会的行為だけが、ある特定の商品を一<sup>一</sup>般的な等価物にすることができるのである。それだから、すべての他の商品の社会的な行為が、ある特定の商品を除<sup>除</sup>外して、この商品においてすべての他の商品が自分たちの価値を全面的に表わすのである。このことによって、この商品の現物形態は、社会的に認められた等価形態になる。一般的な等価物であるということは、社会的な過程によって、この除外された商品の独自の社会的機能になる。こうして、この商品は——貨幣になるのである<sup>98)</sup>。

人々の無意識的な歴史上の社会的行為、「考えるよりまえに行なわれる」社会的行為、したがって、諸商品の膨大な現実の交換過程としてある諸商品自体の社会的運動が、現実的に貨幣を生成していくのである。

貨幣結晶は、諸商品の交換過程の必然的な産物である。使用価値と交換価値との直接的な統一としての、すなわち、諸有用労働の一つの自然発生的な総体系すなわち分業のただ個別的な一分枝であるにすぎない有用な私的労働の生産物としての、そしてまた抽象的な人間労働の直接的に社会的な物質化としての、商品の内在的な矛盾——この矛盾は、それが商品と貨幣とへの商品の二重化という形をとるまでは、休みも止まりもしない。それゆえ、諸労働生産物の諸商品への転化が行なわれるのと同じ度合いで、商品の貨幣への転化が行なわれるのである<sup>99)</sup>。

純論理的に捉えられた一般的等価物は、自然的諸条件を必要条件としかつそれぞれの社会の社会的歴史的現実的諸条件に基づいて貨幣形態へと転成する。その場合の貨幣形態は「一般的な等価物の完成した姿<sup>100)</sup>」である。一般的価値形態から貨幣形態への転成のためには、諸々の価値形態相互の「移行」とは異なる現実的諸条件が必要となる。マルクスは、共同体が他の別の共同体あるいはその成員と接触するところで商品交換が発生すると指摘し、商品交換の発展過程—貨幣の生成過程を以下のように歴史的具体的に述べていく。

この形態〔価値形態のこと〕の必然性は、交換過程にはいつてくる商品の数と多様性とが増大するにつれて発展する。課題は、その解決の手段と同時に生まれる。商品所有者たちに彼ら自身の物品をいろいろな他の物品と交換させ、したがってまた比較させる交易は、いろいろな商品がいろいろな商品所有者たちによってそれらの商品の交易のなかで一つの同じ第三の商品種類と交換され価値として比較されることなしには、けっして行なわれないのである。このような第三の商品は、それがいろいろな他の商品にたいする等価物となることによって、直接に、たとえ狭い限界のなかにおいてであるにせよ、一般的または社会的な等価形態を得る。この一般的な等価形態は、それを生み出した一時的な社会的接触とともに発生し消滅する。かわるがわる、そして一時的に、一般的な等価形態はあれやこれやの商品に付着する。しかし、商品交換の発展につれて、それは排他的に特別な商品種類だけに固着する。言い換えれば、貨幣形態に結晶する。それがどんな商品種類に引き続き付着しているかは、さしあたりは偶然的である。とはいえ、だいたいにおいて二つの事情が事柄を決定する。貨幣形態は、事実上域内諸生産物の交換価値の自然発生的な現象形態であるもっとも重要な外来の諸交換物品に付着するか、または域内の譲渡可能な財産の主要な要素をなしている使用対象、たとえば家畜のようなものに付着する。〔…〕／商品交換がその単に局地的な限界を打ち破り、したがってまた商品価値が人間労働一般の物質化にまで広がって行くにつれて、貨幣形態は、生まれながらに一般的な等価物の社会的な機能に適している諸商品のうえに、すなわち貴金属のうえに、移って行くのである<sup>101)</sup>。

このように貨幣形態自身の発展があり、貨幣は次第に銀と金に、そして最終的には金に固定化されていく。この移行が現実には生じた後では、一般的等価物は貨幣として骨化する。かくして全商品世界は、貨幣商品とそれ以外の全商品とへ二重化し分裂し、それが固定化する。貨幣商品が生み出されれば、先に見た等価形態に纏わりついた謎、その神秘的な性質は貨幣に固着する。貨幣は生まれながらに・そのあるがままの姿で、一般的な価値存在であり、一般的な社会的富の存在形態なのである<sup>102)</sup>。

商品は価値と使用価値との二重物であると同時に、その直接的統一物であった。だが今ではこの対

立は、一方の貨幣と他方の貨幣ではない他のすべての商品とへの分裂・対立へと発展し、固定化する。貨幣は抽象的人間労働—価値実体の直接の体化物、個体的化身、純粋な価値肉体である。したがって貨幣形態は直接的な一般的社会的形態＝直接的な一般的交換可能性の形態となる。貨幣形態は社会的富の一般的な実在形態である。これに対して貨幣でないすべての商品は、直接に社会的ではない労働（あくまで私的諸労働）の体化物であり、直接的な交換可能性の形態にない諸物である。それらはそれぞれ、諸使用価値形態にある諸物として、価値の一般的化身たる貨幣に対立する。それらはそのままでは——つまり交換関係に入らない限り・最終的には貨幣との交換関係に入らない限り——、それらに表わされた私的労働は社会的労働として認められることはなく、それゆえ価値—商品として認められない。

x 量の商品 A = y 量の商品 B という交換価値の最も単純な表現にあっても、他の一つの物〔Ding〕の価値の大きさがそれで表わされるところ物〔Ding〕は、その等価形態をこの関係にはかかわりなく社会的な自然属性として持っているかのように見える。われわれはこのまじがった外観の固定化を追跡した。この外観は、一般的な等価形態が一つの特別な商品種類の現物形態と合生すれば、または貨幣形態に結晶すれば、すでに完成している。一商品は、他の諸商品が全面的に自分たちの価値をこの一商品で表わすのではじめて貨幣になるとは見えないで、逆に、この一商品が貨幣であるから、他の諸商品が一般的に自分たちの価値をこの一商品で表わすように見える。媒介する運動は、運動そのものの結果では消えてしまって、なんの痕跡も残してはいない。諸商品は、なにもすることなしに、自分たち自身の完成した価値姿態を、自分たちのそとに自分たちと並んで存在する一つの商品体として、眼前に見いだすのである。これらのもの〔diese Dinge〕、金銀は、地の底から出てきたままで、同時にいっさいの人間労働の直接的な化身である。ここに貨幣の魔術がある。人間たちの社会的生産過程における彼らの単なる原子的な行為は、したがってまた彼ら自身の諸生産関係の、彼らの制御や彼らの意識的個人的行為にはかかわりのない、物象的な姿〔sachliche Gestalt〕は、まず第一に、彼らの労働生産物が一般的に商品形態をとるということに現われるのである。それゆえ、貨幣物神の謎は、ただ、商品物神そのものの謎が人目に見えるようになり人目をくらすようになったものでしかないのである<sup>103)</sup>。

先に価値形態Ⅲのところ、実体という哲学史上の用語を用いて価値実体の概念をなぜマルクスが措定したのかについて触れておいたが、まさしく貨幣において実体というものが現実世界に立ち現われ、人々の思考と行為を規制・束縛・制御するものとなるのである。マルクスは『聖家族 別名批判的批判の批判 ブルーノ・バウアーとその伴侶を駁す』において、ヘーゲルの実体＝主体概念を批判していた。ヘーゲルの議論は、種々様々な具体的果実とは別に「果実なるもの」が存在し、それが「死んだ、区別のない、静止したものでなく、生きた、みずからのうちにみずからを区別する、動く本質<sup>104)</sup>」であるまさしく実体＝主体として、具体的な種々の果実において自らを定立するというようなまったく転倒したものである、と。26歳の時、このようにヘーゲルの実体をマルクスは批判したのだが、41歳では〈交換価値の実体〉（『経済学批判』第一分冊（1859年刊））、49歳では『資本論』（初版）において〈価値の実体〉という概念を措定した。なぜなら、哲学者たちの頭の中に生え育った実体というものが、商品生産社会においては、貨幣という形で現実に現われ出ており、人々のい



わば社会的「本能」に基づく社会的行為によって、社会的実体たる価値実体が日々定立されているからであった。

思弁的哲学者の頭の中でだけ生え育った「果実なるもの」のような「実体なるもの」が、商品生産社会においては、社会的実体たる価値実体という純粋に社会的なものとして産み出され、存在するのであり、それは貨幣形態の姿でわれわれの目に実際に捉えられるものになるのである。商品に表わされた労働の二重性は、発展して、貨幣と、貨幣ではないその他すべての商品とへの商品世界の二重化にいたる。貨幣は〈抽象的人間労働 - 価値〉の個体的化身となり、貨幣以外の全商品はそのままでは、つまり交換関係のうちに入らなければ、貨幣との等置関係に入らなければ、単に〈具体的有用労働—使用価値〉を表わすことになる。思弁的哲学者の頭の中で生え育った実体よりもはるかに実体らしい実体、その力を現実にもった実体として貨幣は現われ出ている。思惟の中での転倒ではない、現実の社会における完全な転倒が貨幣に表出しているのである。マルクスはまさしく〈実体〉という用語を使うことによって〈商品 - 価値 - 価値実体〉への根源的批判を遂行しようとしたのである。

ところで、貨幣形態には歴史的現実的な諸条件が必要であるとすれば、そこで語られる商品語は価値形態論でのそれとはその点で異なったものであるだろう。だがこの点について本稿で詳しく追究することはできない。ただ次のことだけ述べておく。

商品は〈体〉を〈忘れてしまう〉、と先に述べた。この点からすると、貨幣が特有の使用価値 = 金に固着・固定化することは、〈体〉を〈忘れてしまう〉という状態からの逆転であるかに思われる。こうして商品語も特有の肉体性を帯びるかに思われる。だが実は、貨幣が唯一金を自らの固有の〈体〉とすることによって、〈体〉を〈忘れてしまう〉度合いはある点ではむしろ飛躍するのである。というのはこうである。一般的等価物は「一般的な価値肉体、抽象的な人間労働の一般的な物質化<sup>105)</sup>」であり、他のすべての商品との直接的交換可能性の形態、一般的社会的形態にある。それは富の一般的形態であり、人間の社会性を一身に体现するものである。だから一定の社会において一般的等価物として骨化した貨幣は、このような形態にある唯一のものとして当該社会に君臨し、他の一切の商品に対して頭で立つ<sup>106)</sup>、つまり、抽象性の極限にまで抽象化された純粋に社会的なものとして肉体性を剥がれいわば単に頭だけになったものとして一社会に君臨するからである。その身体は単に〈王の身体〉でしかない。

先ず、流通手段としては、金はむしろまったく後景に退き観念化が著しく進展する。木片や紙などの種々の代替物や単なる帳簿上の記載や今日の電子マネー（ビットコインが端的な例である）のようなありとあらゆる簡便な代替物が立ち現われ、〈体〉の必要性が限りなく逡減する。他方、支払・決済手段としては、価値の現実の移転が必要であり、貨幣金肉体が要求される（この肉体性も今日社会について考えれば解るように、一定の抽象化と観念化を可能とする。これは高度に発展した信用制度・機構を必要条件とするが、これについてはここでは触れない<sup>107)</sup>）。だがここでは、支払は可能な限り相殺され最終的に残った支払だけが決済としてなされる。純粋な価値移転だけが行なわれる。それはもはや特定の商品を手とした関係のうちにあるのではなく、歴大な支払関係の総括であり、そこでの富一般 = 普遍的な富の存在形態たる貨幣の言葉はもはや対話的な言葉ではなく、商品世界の絶対的な王としての一方的な詔であろう。饒舌を含みこんだ沈黙は眩きにも似た詔になる。「価値として朕は〈渡御〉をおこなう」と。

以上見てきたように、価値形態論と交換過程論とはまったく論理的位相が異なっている。初版本

文価値形態論と交換過程論とを接続させることによってこそ、そのことがはっきりと理解されるのであり、初版附録価値形態論あるいは第二版価値形態論と交換過程論とを接続させることによって、この位相差が不分明になるのであり、論理上の無理が生じることになるのである<sup>108)</sup>。

(ii) なぜ、第二版は初本文の形態Ⅳを捨て貨幣形態を形態Ⅳとしたのか

前節でわれわれは、初本文の価値形態論に初版の交換過程論が論理的に無理なく見事に接続していることを確認した。だが第二版では、価値形態論に貨幣形態を入れ、しかも交換過程論の書き換えを本質的にはやっていないために、両者の接続に論理的無理が生じていた。こうした難点が生じるにもかかわらず、なぜ、第二版では初版付録の形を踏襲し、価値形態論において形態Ⅳを貨幣形態としたのであろうか。これをきちんと見極めるためには、まず初版付録の意義とそれについてのマルクスの処理について詳しく見ておく必要がある。

初版付録を付すことになった経緯については先に引用した第二版の後記に記されていた。『資本論』初版の校正作業をするために、ハノーファーのクーゲルマン宅に滞在することになったマルクスをクーゲルマンが説得したというのである。「彼〔クーゲルマン〕は、大多数の読者にとっては価値形態の補足的な、もっと教師的な説明が必要だということを、私に納得させたのである」とマルクスは記している。これと並行してエンゲルスとの間でのやりとりがあった。クーゲルマンからの要請を受けたからであろう、マルクスはエンゲルスに、1867年6月3日付の手紙で「価値形態の説明のなかのどんな点を、とくに俗人のために付録のなかで一般向きにすればよいか」、「君の意見も精確にしらせてほしい」と述べていたが<sup>109)</sup>、これに対してエンゲルスは、次のように回答した。決定的な意見であったと思われる。同年6月16日付のマルクス宛の手紙である。

第二ボーゲンはことにヨウ、Karbunkel癱に悩まされた痕跡を帯びている。だが、もはや改める必要はない。また、付録でこれ以上それについて書くこともないと思う。というのは、俗人たちはなんといってもこの種の抽象的な思考には慣れていないのだし、おそらく価値形態のために苦勞してはくれないだろうからだ。せいぜい、ここで弁証法的に得られた結果がもう少し詳しく歴史的に論証され、いわば歴史によってそれが検証されるだけでよいだろう。といっても、そのためにもっとも必要なことはすでに述べられてもいるのだが。しかし、君はこれについてはたくさん材料をもっているのだから、おそらくそれについても一つまったく適切な余論を書くことができるだろう。つまり、それによって、俗人のために歴史的な方法で貨幣形成の必然性やそのさいに現われる過程を示すわけだ。／君のやった大きな失策は、これらの比較的抽象的な諸展開の思考過程をもっと細かい区分や別々の見出しで見やすくしなかった、ということだ。君はこの部分を、ヘーゲルのエンツィクロペディのようなやり方で短い段落で取り扱ったり、それぞれの弁証法的な移行を別々の見出しで目だたせたり、できれば余論や単なる例解はすべて特別な字体で印刷したりすればよかつたろう。そうすれば、この本はいくらか学校教師風に見えたかもしれないが、非常に大きな部類の読者にとって理解が根本的に容易にされたことだろう。民衆は、学識者でさえも、ちょうどこのような考え方にはもはやまったく慣れていないので、彼らにはできるだけわかりやすくしてやらなければならないのだ<sup>110)</sup>。(下線は引用者)

下線を付したところが問題である。価値形態論を歴史的過程の叙述として整理すべきであると述

べているからである。歴史的過程としての叙述は必ずしも〈平易化〉と一致するものではない。〈平易化〉は「ヘーゲルのエンツィクロペディのようなやり方」とはたしかに完全に一致するだろう。しかし、歴史的過程としての叙述と〈平易化〉とはそもそも別の事柄である。われわれが考えるに、おそらくエンゲルスは価値形態論の形態Ⅰ～Ⅳを歴史過程的に理解していたのだと思われる。だからこそ、歴史過程的に叙述されていない初版本文の価値形態論に「<sup>ヨウ、Karbunkel</sup>癰に悩まされた痕跡」をみてとったのではないだろうか。

エンゲルスのこの歴史過程的な価値形態論への理解は、多分に『資本論』の前書と言うべき『経済学批判』第一分冊(1859年)の叙述とエンゲルス自身のそれへの評価に基づいていると考えられる。というのも、同書では交換過程論の章が商品の章から区分されておらず、「第一章 商品」で交換過程論も商品論と渾然一体に論じられており、歴史的な事柄が補説としての「A. 商品分析のための史的考察」において、特別に取りあげられているからである。しかもエンゲルス自身の傾向性があるのであろうが、いま引用した同じ手紙の中で、初版本文の叙述より『経済学批判』での叙述の方が好ましい、と述べているからである<sup>111)</sup>。

ここであらためて初版付録を付すことになる経緯で押さえておくべき点を整理すれば、①クーゲルマンは本文の価値形態論の易しい解説となるべき付録を作成すべきだとしたこと、エンゲルスはそれを受けて、②内容として、価値形態の議論を歴史的な過程・歴史的発展の過程として描き出す(「歴史的な方法で貨幣形成の必然性 […]」を示す)ように要請していること、③形式として、ヘーゲルの『エンツィクロペディ』にならったものとすべきである、という点である。この中でもっとも重要な論点となるのは、先に述べたように②である。つまり問題なのは、価値形態論における形態ⅠからⅣは歴史的な発展の過程として叙述されるべきものなのかという点である。

では、クーゲルマンの要請やエンゲルスの評価とそれに基づく忠告に、マルクスはどのように対応したか。同年6月22日のエンゲルスへの返書でマルクスは、「価値形態の展開について言えば、君の忠告に従ったり従わなかったりした。この点でもまた弁証法的にふるまうためにだ<sup>112)</sup>」と書いた。この「弁証法的にふるまう」とは一体どういうことだったのか。

まず〈平易化〉を目的とした叙述形式という点では、ほぼ完全にエンゲルスの忠告と要請にしたがったとあってよい。6月27日付のエンゲルス宛の手紙でマルクスは、「付録の取扱いではどんなによく君の忠告を守ったかを見てもらうために、この付録の区分や項目や表題などをここに書き写しておこう<sup>113)</sup>」として、付録の目次一覧を掲げている。言葉遣いの点でわずかな異同があるものの、ほぼ完全に実際の付録と一致している。エンゲルスが述べた「エンツィクロペディのようなやり方」である。だが内容上の点では、きわめて微妙ではあるが、エンゲルスの要請に完全にしたがったとは言えないものとなっている。すなわち、歴史過程的な叙述という点に「躊躇」があるように見える。詳しく見ていこう。

- ① 各形態から次の形態に移る際に「x 形態から y 形態への移行」という小項目が必ず立てられている。
- ② 最後の形態である形態Ⅳが貨幣形態である。
- ③ しかも貨幣として金が措かれている。

このように付録の特徴を示せば、内容上もエンゲルスの要請に忠実にしたがったように見える。すなわち、金はその形態をとっている貨幣形態へと向かって歴史的に発展していく過程を解くものとしての価値形態論、「貨幣形成の必然性」を歴史的に解く価値形態論である。この点で②、③は決定



的である。マルクスがエンゲルスの要請に内容上もかなりの程度までしたがったことは事実である。だがしかし、より細部に目を向けると、マルクスのある種の「躊躇」が見えてくる。まず、上記の①であるが、これらは当然ながら移行を解いているのだが、必ずしも歴史的発展過程としての移行を解いているのではない。とりわけ形態ⅠからⅡへの移行については、リンネルの単純な相対的価値表現（つまり形態Ⅰ）の算術和として形態Ⅱが導かれているだけである。そうした叙述が移行であると言われてもいささか困惑するものであり、ましてや歴史過程的な発展の叙述とは言えない。これに対して第二版では、形態Ⅰの「欠陥」が述べられた上で、それを否定的契機とした移行が解かれている。まず、次のように欠陥が指摘される。

単純な価値形態、すなわち一連の諸変態を経てはじめて価格形態にまで成熟するこの萌芽形態の不十分さは、一見して明らかである<sup>114)</sup>。

貨幣形態、さらには価格形態に向かって前進していく過程として、形態ⅠからⅡへの移行があるとされているわけである。しかも第二版ではこの「欠陥」を踏まえて、「単一の価値形態はおのずからもっと完全な形態に移行する<sup>115)</sup>」とされ、単純な価値形態の算術的総和ではなく、単純な価値形態の「どこまでも引き伸ばされる系列<sup>116)</sup>」という過程的なものとして導かれる。発展という観点からはっきりと見て取れるわけである<sup>117)</sup>。

この「欠陥」ということと言えば、付録においても形態ⅡからⅢへの移行に関して「(4) 展開された、または全体的な価値形態の欠陥」という項目が措かれ、「(5) 全体的な価値形態から一般的な価値形態への移行」とつながっていく。だが、形態ⅠからⅡへの移行が上記のようなものであり、すぐ後で詳しく述べるが、形態ⅢからⅣへは本質的な変化はないとされているため、この「欠陥」なるものは形態Ⅱのみに固有なものとして理解するしかない。

これに対して第二版では、付録の上記の二項目（「(4) 展開された、または全体的な価値形態の欠陥」と「(5) 全体的な価値形態から一般的な価値形態への移行」）が「(3) 全体的な、または展開された価値形態の欠陥」としてまとめられ、ほぼ同じ文章が綴られる。だから第二版では形態ⅠからⅢへの移行が一貫したものとなっているわけである。

さらに、付録には形態Ⅰの第7番目の項目として「商品形態と貨幣形態との関係」という注目すべき項目が措かれ、単純な価値形態：「20 エレのリンネル = 1 着の上着」と貨幣形態：「20 エレのリンネル = 2 ポンド・スターリング」とが比較され、その相似性・同一性が示されて、「貨幣形態は商品の単純な価値形態のいっそう発展した姿、したがって労働生産物の単純な商品形態のいっそう発展した姿にまったくほかならない、ということは一見して明らかである」と述べられ、「貨幣形態は明らかに単純な商品形態から源を発しているのである」と規定される<sup>118)</sup>。第二版と対照的に、貨幣形態さらには価格形態へと向かう形態Ⅰではなく、逆に、貨幣形態を形態Ⅰへと手練り寄せているのである。価値形態論の本来の目的、「すべての商品の貨幣存在」を解くという究明すべき課題が明確に出ているのである。しかしこの項目(7)は第二版では採用されていない。

貨幣形態を価値形態論で解くことへの「躊躇」は、よりはっきりと次のマルクスのコメントに示されている。先の6月27日付の手紙にある「付録目次一覧」において貨幣形態に関して付されたコメントである。

この貨幣形態についてはただ関連上書くだけで、おそらく半ページにもならない<sup>119)</sup>。

「ただ関連上書くだけ」ということが一体どういうことを意味しているのかが問題となるが、この言明からすれば、価値形態論で「貨幣形態」は敢えて書く必要はない、との含意を読み取ることができる。このコメントに依るのであろう、マルクスは、「Ⅳ 貨幣形態」の冒頭の項目を「(一) 一般的な価値形態から貨幣形態への移行とそれ以前の諸発展移行との相違」と題して次のように書いた。

形態Ⅰから形態Ⅱへの、形態Ⅱから形態Ⅲへの移行にさいしては、本質的な諸変化が生ずる。これに反して、形態Ⅳは、いまではリンネルにかわって金が一般的な等価形態をもっているといふことのほかには、形態Ⅲと少しも区別されるところはない<sup>120)</sup>。

形態Ⅰから形態Ⅱ、形態Ⅱから形態Ⅲへは本質的な変化があるが、形態Ⅲから形態Ⅳへは本質的な変化はないと、形態Ⅳの論理的な位置付けをマルクスは行なっている。すなわち、移行はあるが論理上の発展はないということが示されている。この叙述の文脈から考えると、先の貨幣形態にかかわるコメントでの「関連上」という表現は、移行との「関連上」ということであろう。このあたりに貨幣形態を価値形態論で扱うことの精妙な論理的配慮が見て取れる。

またコメントにある「半ページにもならない」という点で言えば、初版のファクシミリ復刻版によれば付録全体で約20ページ中、貨幣形態は1ページ半(約7%)でしかなく、もっとも重要な形態Ⅰの約12.6ページ(約64%)と扱いの差は歴然としている。

こう見てくると、やはりマルクスは、価値形態論に貨幣形態を入れることの問題性について意識していたということがわかる。「弁証法的にふるまうために」「君の忠告に従ったり従わなかったりした」とマルクスが述べたことが、いま詳細に検討したところに出ているということであろう。

だがにもかかわらず、貨幣形態を付録では取り入れたのだ。もちろん、価値形態の完成した姿として貨幣が厳然として存在しているという現実が、より解り易い叙述という要請と結び付いたといふことがあるだろう。だが、貨幣形態を価値形態論に取り入れたことは決定的なことであった。しかも金においてそれを解いたのであるから余計にそうであった。貨幣について語るためには、歴史的現実的な諸々の事柄について語る必要がある。しかし、それは交換過程論の課題である。にもかかわらず、それに歴史的過程に関することとして触れる以上、その過程を中途半端なところで打ち切りにするわけにはいかない。貨幣形態の完成形態である金にまで話が及ばざるを得ない。にもかかわらずマルクスには「躊躇」があった。叙述が〈平易化〉を目的とするものでありながらぎくしゃくしたものにならざるをえない。再びだが、それはあくまで付録である。本文ではないのだ。〈平易化〉のための付録ということであった。

それゆえここであらためて、マルクスの〈平易化〉に対する対応について考えておく必要がある。先の1867年6月22日のエンゲルス宛の手紙で〈平易化〉の必要性を認めて、「ここで相手にするのは、単に俗人だけではなく、知識欲に燃えた若者などでもある<sup>121)</sup>」として次のように述べた。

そのうえ、この問題はこの本全体にとってあまりにも決定的だ。経済学者諸氏はこれまで次のようなきわめて簡単なことを見落としてきた。すなわち、20 エレのリンネル = 1 枚の上着、という形態は、ただ、20 エレのリンネル = 2 ポンド・スターリングという形態の未発展の基礎で

しかないということ、したがって、商品の価値をまだ他のすべての商品にたいする関係としては表わしてはいないでただその商品自身の現物形態とは違うものとして表わしているだけの、もっとも簡単な商品形態が、貨幣形態の全秘密を含んでおり、したがってまた、労働生産物のすべてのブルジョア的な形態の全秘密を縮約して含んでいる、ということがそれだ<sup>122)</sup>。

マルクス本人が難解だと初版序文で述べた価値形態論の、その核心すなわち、「単純であるがゆえに、分析するのが困難」だとした形態Ⅰを、先進的な労働者や活動家、また「知識欲に燃えた若者」などになんとか理解して欲しいと、マルクスは語っているのだ。だからこそ、この手紙で触れた内容を、初版付録では形態Ⅰのまとめに当たる「(7) 商品形態と貨幣形態との関係」(この項目については先に触れた)でいわば「結論の先取り」のような形で述べたのである。この項目によって価値形態論の難解さが緩和され(あるいはなくなり)、平易になったかどうかはまた別の問題ではあるが、とにかく価値形態に関する部分はどうしても先進的な労働者・活動家などには理解して欲しかったということだ。

このために〈平易化〉はマルクスには絶対に必要だった。本文に対する付録という形式はその目的にとって適切な形式であったろう。本文は本文としてあくまで存在するわけであるのだから。「『弁証法的でない』読者に対して、x-y ページをとばしてそのかわりに付録を読むように<sup>123)</sup>」と序文に書くつもりであると、同じ手紙の中でマルクスは言っている。エンゲルスが言う『エンツィクロペディ』式の叙述は〈平易化〉を図る付録にはうってつけであったに違いない。その叙述は弁証法を損ない形式論的な叙述の道を敷くことになるであろうが、しかし本文は(いかに難解であろうとも)弁証法を徹底して踏まえながら別個に存在しているのだ。叙述をどのようなものとするのかという判断は、『エンツィクロペディ』的な形式を歴史的発展の論理でうめるのかどうかという点に存したであろう。歴史的発展の形相のもとで叙述する必然性はなかったはずだからである。だが、この点でマルクスは「躊躇」しつつも基本的にはエンゲルスに譲歩した。あくまで付録であるという事情と判断とが、この譲歩のもとにあるのではないか。

ではなぜ第二版に初版付録を踏襲して貨幣形態を入れたのだろうか。しかも第二版のそれは付録ではなく本文である。価値形態論と交換過程論とを結ぶ、精確な弁証法の論理的接続が損なわれるという現実が確定してしまうにもかかわらず、なぜそうしたのだろうか。おそらく、マルクスを取り巻く状況の変化とそれへの対応に何らかの〈変化〉をもたらすものがあったということであろうが、しかし、確たる証拠抜きにあれこれと想像だけで言うことはできない。確かめられうる現実にそくして見ておこう。

第二版ではあきらかに、初版付録に見られるある種の「躊躇」が喪失しており、むしろ積極的に貨幣形態を価値形態論に取り入れており、しかも価値形態論全体を形態ⅠからⅣとしての貨幣形態に至る歴史的発展の過程として描き出している。付録との対比で既に見たものにそのことが現われているが、決定的であるのは次の一節だ。第二版価値形態論の冒頭三つ目のパラグラフである。

誰でも、たとえ他のことは何も知らなくてもよく知っているように、諸商品は、それらの使用価値の雑多な現物形態とは著しい対照をなしている一つの共通な価値形態——貨幣形態をもっている。しかし、いまここでなされなければならないことは、ブルジョア経済学がかつて試みようとしなかったこと、すなわち、貨幣形態の発生を示すことであり、それゆえ、諸商品



の価値関係に含まれている価値表現の発展を、そのもっとも単純でもっとも目立たない姿態から光まばゆい貨幣形態にいたるまで追跡することである。これによって同時に、貨幣の謎も消え去ることになる<sup>124)</sup>。

この一節は、価値形態論がその完成形態である貨幣形態へと発展していく論理的・歴史的移行・発展を述べるものであるということを宣言するものである。ここで述べられたことからすると、初版本の価値形態論と第二版のそれとはそもそも目的が異なるということになる。初版本の価値形態論は、労働生産物はどのようにして現実的に商品になるのかを解くこと、それゆえ「すべての商品の貨幣存在」を解くこと、それを商品語の〈場〉に真向かい、諸商品の〈ことば〉を聴き取り、それを人間語に翻訳・註釈する形で遂行すること、であった。われわれはこれをこそ価値形態論の本来の目的であると考えているが、第二版の価値形態論の目的は、上の一節によるかぎり、「貨幣形態の発生を示すこと〔…〕価値表現の発展を、そのもっとも単純でもっとも目立たない姿態から光まばゆい貨幣形態にいたるまで追跡すること」となる。つまりエンゲルスがマルクスに要請した「歴史的な方法で貨幣形成の必然性やそのさいに現われる過程を示す」ことである。こうである以上、価値形態論全体が歴史過程の、その発展過程の叙述にならざるを得ないことはあきらかである<sup>125)</sup>。

かくして、形態ⅠからⅡ、また形態ⅡからⅢへはそれぞれある「内在的欠陥」を克服する移行・発展となる。そして形態ⅢからⅣへの移行については、形態Ⅳの冒頭で、先に引用した付録の文章とまったく同一の文章で、形態ⅢからⅣへは本質的な変化はないと述べることとなるにもかかわらず、それは初版付録における意味とは異なり、より一層歴史的叙述の枠組みに組み込まれたものとしてしかありえないものとなってしまう。そして、形態Ⅳの貨幣形態はもはや「関連上書くだけ」のものではなく、価値形態論が到達すべき究極目標としての位置を与えられることになった。次の文章は<sup>126)</sup>、初版付録の貨幣形態のところであり、そのまま第二版に引き継がれたものだが、これは、歴史的に種々の貨幣が金へと集約されていく過程に関して述べられたものである。

Gold tritt den andren Waaren nur als Geld gegenüber, weil es ihnen bereits zuvor als Waare gegenüberstand. Gleich allen andren Waaren funktionirte es auch als Aequivalent, sei es als einzelnes Aequivalent in vereinzeltten Austauschakten, sei es als besondres Aequivalent neben andren Waarenäquivalenten. Nach und nach funktionirte es in engeren oder weiteren Kreisen als allgemeines Aequivalent.

金が他の諸商品に貨幣として相対するのは、金が他の諸商品に対してすでに以前から商品として相対していたからにはほかならない。他のすべての商品と等しく、金もまた、個別的な交換行為における個々の等価物としてであれ、他のいろいろな商品等価物とならぶ特殊的等価物としてであれ、等価物として機能した。しだいに、金は、より狭い範囲かより広い範囲かの違いはあっても、一般的等価物として機能するようになった。

これは初版付録に書かれているものと同一の文章ではあるが、第二版では直前に引用した価値形態論冒頭の一節（この文章は初版付録にはない）と対応することによって、貨幣形態の歴史的発展過程を叙述するというをより一層鮮明にしている。かくして第二版にあっては、初版本の論理性とはまったく異なる歴史・論理的な位相をもつ価値形態論が生み出されたのである。

このような価値形態論の改変に対応して、いわゆる商品の物神性のところで、次の重大な書き換えが行なわれた<sup>127)</sup>。

初版本文：Was nun endlich die *Werthform* betrifft, so ist es ja grade diese Form, welche die gesellschaftlichen Beziehungen der Privatarbeiter und daher die gesellschaftlichen Bestimmtheiten der Privatarbeiten *sachlich verschleiert*, statt sie zu offenbaren.

そこで、最後に価値形態について言えば、この形態こそは、まさに、私的労働者たちの社会的な諸連関を、したがってまた私的諸労働の社会的な被規定性を、顕示するのではなくて、それらを物象的におおい隠すのである。

第二版：Es ist aber eben diese fertige Form – die Geldform – der Waarenwelt, welche den gesellschaftlichen Charakter der Privatarbeiten und daher die gesellschaftlichen Verhältnisse der Privatarbeiter, *sachlich verschleiert*, statt sie zu offenbaren.

ところが、まさに商品世界のこの完成形態－貨幣形態－こそは、私的諸労働の社会的性格、したがってまた私的諸労働者の社会的諸関係をあらわに示さないで、かえってそれを物象的におおい隠すのである。

初版での「価値形態」が第二版では「貨幣形態」に変えられている。これはきわめて本質的なところでの論理の後退であり、平易化ならぬ通俗化の弊を犯すものである。「私的労働者たちの社会的な諸連関を、したがってまた私的諸労働の社会的な被規定性を、顕示するのではなくて、それらを物象的におおい隠す」ものは決して単に貨幣形態それ自体ではなくて、それを内的な一形態とする価値形態そのもの、まさしく労働生産物が歴史的社会的にとる形態たる商品形態そのものだからである。

貨幣が不思議な社会的な力をもっているというのは人々の日常的な意識である。しかも人々は、まさしく貨幣であるからこそその力が貨幣に本来そなわっているのだと思っている。これに対してマルクスは、貨幣において完成するこの力が、諸商品の社会的関係、すなわち価値形態においてこそ、等価形態にある商品がもつものであることを解き明かした。この価値形態論の議論の上にマルクスは、交換過程論において貨幣形態を論じ、貨幣が一社会の中で確立されるや、しかも資本主義的生産様式が社会の経済過程を支配するや、結局のところ、〈商品－貨幣〉が社会の経済過程を規定する限り、かの社会的力は貨幣に本来そなわったものとして現実的にも現われるのだということを明らかにした。

この点から言えば、上記の初版から第二版への書き換えは、商品形態－価値形態の秘密を二重に隠蔽することになる——すなわち、第一に価値形態を貨幣形態に切り縮めることによって、しかも第二に、貨幣形態への即自的意識に結び付いてしまうことによって。

この書き換えは価値形態論を貨幣形態へと向かう歴史的発展過程として理解することを決定的に強めることになる。

更に、上に引用した初版、第二版の文章のそれぞれに直接につづく一節を見ると、それらがほぼ同一の文章なので、第二版では書き換えたことによって論理的なつながりが弱く、スムーズではな

いことがわかる。以下のように<sup>128)</sup>。

初 版：Wenn ich sage, Rock, Stiefel u.s.w.bezieh'n sich auf Leinwand als allgemeine Materiat'ur abstrakter menschlicher Arbeit, so springt die Verrücktheit dieses Ausdrucks ins Auge.Aber wenn die Produzenten von Rock, Stiefel u.s.w.diese Waaren auf die Leinwand als *allgemeines Aequivalent* bezieh'n, erscheint ihnen die gesellschaftliche Beziehung ihrer Privatarbeiten genau in dieser verrückten *Form*.  
もし私が、上着や長靴などが抽象的人間労働の一般的な物質化としてのリンネルに関係するのだ、と言うならば、この表現の奇異なことはすぐに感じとられる。ところが、上着や長靴などの生産者たちがこれらの商品を一般的な等価物としてのリンネルに関係させるならば、彼らにとっては自分たちの私的労働の社会的な関係がまさにこのような奇異な形態をもって現われるのである。

第二版：Wenn ich sage, Rock, Stiefel u.s.w.bezieh'n sich auf Leinwand als die allgemeine Verkörperung abstrakter menschlicher Arbeit, so springt die Verrücktheit dieses Ausdrucks in's Auge. Aber wenn die Producenten von Rock, Stiefel u.s.w.diese Waaren auf Leinwand – oder auf Gold und Silber, was nichts an der Sache ändert – als allgemeines Aequivalent bezieh'n, erscheint ihnen die Beziehung ihrer Privatarbeiten zu der gesellshaftlichen Gesamtarbeit genau in dieser verrückten *Form*.  
もし私が、上着や長靴などが抽象的人間労働の一般的な具体化としてのリンネルに関係するのだ、と言うならば、この表現の奇異なことはすぐに感じとられる。ところが、上着や長靴などの生産者たちがこれらの商品を一般的な等価物としてのリンネルに——または金銀に、としても事柄に変わりはない——関係させるならば、彼らにとっては自分たちの私的労働の社会的総労働にたいする関係がまさにこのような奇異な形態をもって現われるのである。

これは商品の物神性論の部分にあるが、一般的価値形態に関する叙述である。初版では本文の価値形態論では貨幣形態について解いていないので、先に引用したところからここへと自然な論理的流れでつながっている。ところが第二版では形態Ⅳとして貨幣形態を解いており、その上でこの議論がなされているので、形態Ⅲの一般的価値形態への議論の後戻りが生じることになっている。しかもその不自然さを埋め合わせるために「一般的等価物としてのリンネル」という言葉の後に「または金銀に、としても事柄に変わりはない」という註釈が挿入されている。だがこの註釈の挿入でかえって不自然さが目立つことになっている。

いま検討している箇所は先に述べたように、物神性論の部分にある。第二版で言えば、第1章第3節である。実は当節は大幅に変更・加筆されており、議論が緻密化され深化させられているのであって、解かり易くなったとは決して言えないが、難解さの度合は初版よりは明らかに減じている。だがにもかかわらず、いま述べてきたような問題が生じてしまっているのである。

結局、初版付録自体が〈平易化〉ということだけでは捉えきれない面をもつものではあったが、初



版から第二版への価値形態論の書き換えについては〈平易化〉はむしろ後景に退き、歴史的な移行と発展の論理に基づく価値形態論、初版本の価値形態論とは内容上異なった価値形態論が生み出されたということである。

だがこれは、いま見たような例でもわかるように、論理的・理論的には後退以外の何物でもない。第二版の方が商品語をより精確に、より深く聴き取り、それゆえ叙述がより論理的に緻密・精確であるところが確かにあるのではあるが（その一端をいわゆる「回り道」の議論において先に見た）、総体としてはやはり論理的な後退が第二版にはあるのである。

## 〈Ⅶ〉〈富 - 価値 - 商品〉への根源的批判

先に、〈Ⅲ〉の（i）で〈富 - 価値 - 商品〉に対する根源的批判が『資本論』冒頭商品論、ひいては『資本論』全体を貫く主脈であると述べておいたが、冒頭商品論の検討を踏まえてこの批判を総括しておこう。

マルクスは『資本論』冒頭で、「資本主義的生産様式が支配する諸社会の富は膨大な商品集積として現われる」と規定した。富が、この社会では商品集積となってしまっており、またそうである他ないとマルクスは喝破したのだ。類としての人間が歴史上実現し得た社会性の水準が、商品という形態において現われていると押さえたわけである。だからこの冒頭の一句がそもそも商品生産 - 資本主義的生産様式に対する根本的な批判なのである。これを出発点とし冒頭商品論を批判の基底として、商品、すなわち〈商品 - 貨幣 - 資本〉という三つの形態を取り相互転化しつつ運動するこの商品に対する批判を、マルクスは『資本論』全体を通して深め豊富化し鋭くしていく。富は類としての人間の、歴史的にそのつど規定された普遍的力能の発現であり、ある一社会の富の総体のうちにその社会が実現した社会性の水準が表わされるのであり、人間の類としての水準もまたそこに表わされるのである。かくしてマルクスは、富が商品という形態として現われていることを止揚するための諸条件を商品世界の内在的批判を通して、つまり、商品世界の内に分け入り、そこで諸商品自体が語る商品語を聴き取り、それらを翻訳し註釈することを通じて探っていくわけである。かかる批判の基底に〈価値 - 価値実体〉批判が据えられている。

商品は使用価値と価値との統一物であったが、使用価値は単に価値の「素材的担い手」でしかなく、商品は何よりも価値であり、自らの使用価値 = 〈体〉を〈忘れてしまう〉。先に引用したように、諸商品は商品語で「われわれの使用価値は人間の関心をひくかもしれない。使用価値は物〔Ding〕としてのわれわれにそなわっているものではない。だが、物〔dinglich〕としてのわれわれにそなわっているものは、われわれの価値である。われわれ自身の商品物〔Waarendinge〕としての交わりがそのことを証明している」と語るのである。このところをどのように理解 = 批判するのが〈価値 - 価値実体〉批判の核心である。マルクスは『資本論』のための最初の本格的草稿（『経済学批判要綱』と呼ばれている「1857 - 1858年草稿」）で次のように述べていた。

富は一面では物象〔Sache〕であって、人間が主体として相対するもろもろの物象〔Sachen〕、物質的諸生産物〔materiellen Produkten〕のかたちで現実化されている。他面で価値としては、富は、支配を目的とするのではなくて私的享楽等々を目的とする、他人の労働にたいするたん

なる指揮権〔Commando〕である。あらゆる〔社会〕形態において、富は、物象〔Sache〕であれ、物象〔Sache〕によって媒介された関係であれ、個人の外部に、また偶然的に個人と並んで、存在する物的な姿態〔dinglicher Gestalt〕をとって現われる。そこで、いかに偏狭な民族的、宗教的、政治的規定をうけていようとも、人間がつねに生産の目的として現われている古代の考え方は、生産が人間の目的として現われ、富が生産の目的として現われている近代世界に対比すれば、はるかに高尚なものであるように思われるのである。しかし実際には、偏狭なブルジョア的形態が剥ぎ取られれば、富は、普遍的な交換によって作りだされる、諸個人の諸欲求、諸能力、諸享楽、生産諸力、等々の普遍性でなくてなんであろう？ 富は、自然諸力にたいする、すなわち、いわゆる自然がもつ諸力、ならびに、人間自身の自然がもつ諸力にたいする、人間の支配の十全な発展でなくてなんであろう？ 富は、先行の歴史的発展以外にはなにも前提しないで、人間の創造的諸素質を絶対的に産出すること〔Herausarbeiten〕でなくてなんであろう？ そしてこの歴史的発展は、発展のこのような総体性を、すなわち、既存の尺度では測れないような、あらゆる人間的諸力そのものの発展の総体性を、その自己目的にしているのではないのか？ そこでは人間は、自分をなんらかの規定性において再生産するのではなく、自分の総体性を生産するのではないのか？ そこでは人間は、なにか既成のものに留まろうとするのではなく、生成の絶対的運動の渦中にあるのではないのか？ ブルジョアの経済学では——またそれが対応する生産の時代には——、人間の内奥のこうした完全な表出〔Herausarbeitung〕は完全な空疎化として現われ、こうした普遍的对象化は総体的疎外として現われ、そして既定の一面的目的のいっさいを破棄することが、まったく外的な目的のために自己目的を犠牲に供することとして現われている。だからこそ、一方では、幼稚な古代世界がより高いものとして現われるのである<sup>129)</sup>。

富は一方では物象 (Sache) であり、他方では価値 (Werth) であると、マルクスは言う。富がこのように二重の規定性において捉えられていることにまず注意が必要である。後者がとりわけ問題なのだが、まず前者、すなわち、富が物象 (Sache) としてあるという点について検討しよう。この規定については理解するのに困難はないかのように思われるかもしれないが、実はそうではない。諸物 (Dinge; material things)、諸使用対象、諸使用価値の集積等々として規定されているわけではないからである。物象をどのように理解するかが問題であり、丁寧に考える必要がある。富は物象であり、「物質的諸生産物〔materiellen Produkten〕のかたちで現実化されている」とマルクスは言う。この規定は「富は物象〔Sache〕であれ、物象〔Sache〕によって媒介された関係であれ、〔…〕物的な姿態〔dinglicher Gestalt〕をとって現われる」という規定と同一の内容をもっている。つまり富は、物的 (dinglich) な形で現われてはいるが、しかし富はそうした物的なものそのものではなく物象なのだ、というのがマルクスの主張である。物象 (Sache) と物 (Ding) とは決して同一ではないからである。物象は単なる物ではなく、社会の生産諸関係、人々の社会的諸関係をその内に集約し宿している。人々の社会的諸関係、生産諸関係が照り込んだものとして、諸物 (Dingen) は諸物象 (Sachen) である。とはいえ、その社会性は、単に人々が織り成す社会的協業や分業の産物であることに現われるような社会性ではない。そうした社会性を基底としてその上に生み出される社会性、一つの社会をそれとして特徴づける、固有の歴史的規定・限定としての社会性である。

例えば江戸時代の米を考えてみよう。それは一定の社会的協業・分業の産物であり、その社会的

協業・分業体制、とりわけ生産に直接かかわる技術的編制等は同じ江戸時代にあっても変化していたのであり、また逆に、江戸時代から明治時代に入っても変わらないものもあったのである。だが、江戸時代の年貢としての米は、江戸時代を通じてその社会を固有に成り立たせる社会性を背負っており、人々はそうしたものとして米を扱い対処していたのであり、それゆえ米は江戸時代にあってももっとも基本的・中心的な物象であり、米を中心として人々の諸活動の結実の総体が諸物象としての富を形づくっていたのである（人々がそのような言葉・概念を一切持ち合わせてはいなかったとしても）。

このように一つの社会の固有の在り様を現わす社会性を宿したのものとして、物象というものである。だから、一つの社会・共同体にとっての富は、その社会・共同体が生み出す剰余生産物の在り様と密接に関係している。共同体の成員を再生産することがもっぱら生産の目的であるような共同体においても、剰余生産物を中心に、往々にして宗教的な営みと結び付いて、物象としての富の体系が形成されるのである。この富の体系、それは前資本主義的生産の社会にあってはある質的なヒエラルヒーとして現われ、これが価値の質的な序列と照応する。「他人の労働に対するたんなる指揮権 (Commando)」、その最高の「指揮権」は、〈神〉に預けられた「指揮権」、宗教的営みに結び付いて社会的に確定されるものであろう。ところで、この「他人の労働にたいするたんなる指揮権」という価値にたいする規定は理解するのが困難である。質的にヒエラルキー化された物象としての富の体系に照応する価値の質的な序列化された系を考えることは容易である。だが、この「他人の労働にたいするたんなる指揮権」とはいったい何なのか。物象としての富が、ある社会の人々の諸行為・諸活動の結実の総体からみた規定であるのに対して、価値としての富の規定は、そうした個々の人々からみた規定である。だがもちろん、それは富という対象の規定であり、個々人の主観・観念による規定ではない。社会的である限りでの諸個人の社会的な欲求・欲望<sup>130)</sup>を基底としながらも、それを乗り越えていく、あくまで対象的な希求・志向性そのものを「他人の労働にたいするたんなる指揮権」とマルクスは言ったのだ。だからこそ、前資本制社会における質的に序列化された価値体系においては、その頂点はいわば〈神〉の志向性であり、かの「指揮権」は〈神〉に托されているのである。だが、こうした前資本制生産社会の〈富 - 価値〉の体系を資本主義的生産様式は打ち破る。「生まれながらの平等派で犬儒派である商品<sup>131)</sup>」、その集積が富になったということは、物象としての富の質的なヒエラルキー的体系、そしてそれに照応した価値の質的序列体系もまた崩壊したということである。ただし、商品社会においては全商品は、貨幣と貨幣以外の他のすべての一般の商品とに二分されている。富の一般的・個体的化身は貨幣であり、この貨幣と交換される限りで、そのような媒介的形態で、貨幣ではない他のすべての商品は社会的なもの、富の一要素として、それこそまったく平等に認められるのである。そこでは、個々の商品の質を規定する千差万別の諸使用価値は完全に無視される。諸商品が自らの〈体〉を〈忘れてしまう〉ことは不可避なのだ。そして貨幣もまた抽象的普遍としての富の個体的化身であるがゆえに、その〈体〉もまた抽象化され、「他のすべての商品に対して頭でたつ」という、単に〈頭〉だけになったものとなる。こうした抽象化を基底として、貨幣の下でのある意味で質的差異を超越した完全なる平等が実現されるのである。これに照応して価値の従来の個別性が完全に止揚される。従来の〈真・善・美〉のような諸々の価値に纏わりついていた、個人的な観念・主観に価値が規定されるかのような外観はきれいさっぱり投げ捨てられる。価値もまた一般化され、個性・個別性から解き放たれ、価値の社会性がもっとも純粋な・抽象的な形で現われ出ることになったのである。そこでは価値は、質とし



ては究極にまで抽象化されたものとなっており、そもそも量の契機をもたないにもかかわらず、商品に表わされた抽象の人間労働が価値実体となることによって量へと頹落し、ただ量として区別されるだけのものとなる。従来のヒエラルキーは完全に解体し、ただ量的に区別された、それゆえにまったく明瞭・透明な抽象化された価値の体系ができあがる。

商品の価値はそれまでの歴史上のあらゆる価値の集約・総括としてある。それは、それまでの諸価値に纏わりついていた一切の人格的依存関係や共同体の諸関係の刻印を徹底して剥がれ、質の究極にまで抽象化され純粋に社会的なものとなっており、個別性・個性性を完全に払拭し、一般的・普遍的である。資本主義的生産様式が支配する社会の価値は商品価値以外にはない。それは、諸価値のうちの単なる一つの価値なのでは決してない。これまでの諸々の価値、例えば従来の〈真・善・美〉<sup>132)</sup>等々は商品価値に結び付けられる限りで価値として認められるものとなる<sup>133)</sup>。巷間に言われる「価値の多様性」とは従来の諸価値が商品価値に凝縮され従属する様態を言い表わしたもの以外ではない。商品価値が、それこそがそしてただそれだけが、人々の生活行動・経済活動・社会的行為の全般にわたって貫く普遍としての価値としてあり、個人から引き剥がされた抽象的普遍性としてあるがゆえに、もはや価値としては人々に意識されることもないものとして人々の〈生〉に血肉化されることになる。

だがしかし、これまで何度も述べてきたように、人々は決して価値(商品価値)を自らの〈生〉における価値として意識化しているわけではない。人々はただ、諸労働生産物を商品として互いに交換している、つまり諸労働生産物を直ちに交換価値にし、そのように行動しており、それを日常意識としているのである。決して価値として諸商品を等置していると意識しているわけではない。こうした無意識的行為を通じて、その現実において、人々は商品価値を自らの〈生〉における価値としているのである。それゆえ、諸商品の等置が、交換価値におけるものではなく他でもなく価値、その究極的に抽象的で純粋に社会的な価値におけるものであることは、まさしくマルクスによってまったく新たに〈発見〉されたことなのである。

そもそも商品を労働生産物として把握することは容易であり、更に商品を一方では具体的有用労働の結実として、他方では抽象的な人間労働一般の結実として捉えることも決して困難なことではない(もちろん、商品に表わされた労働をこの二重の労働に還元することは初めてマルクスによってなされたことであり、古典派経済学によっては成し遂げられなかったことではあるが、しかし一旦マルクスによる成果が得られた以上、それを再確認することは分析的思惟にとっては容易である)。ある程度の抽象化が必要であるとはいえ、諸商品が労働生産物という属性をもつということはあくまで感性的に捉えられうる範囲内のことである。だが、にもかかわらず、人々は諸商品を共通な属性である労働生産物という属性において互いに等置するのではない。人々は、労働生産物という属性においてではなく、価値というまったく抽象的で純粋に社会的な属性において、つまり決して五感では捉えられない属性において、諸商品を互いに等置するのであり、しかもそれをまったく意識せず無自覚なままに行なうのである。それが日々膨大に遂行されているのである。なぜなのか。なぜ人々は労働生産物という感性的に捉えられうる属性において諸商品を等置しないのであろうか。なぜ人々はそれを意識して行ない得ないのだろうか。だがこの現実こそ、人々の到達した社会性の水準が現われているのである。つまりそこに、人々の社会的労働の在り様が、だから富の産出の在り様が示されているのである。社会的富の産出が、相互に独立して営まれる私的諸労働という在り方に規定されているかぎり、ここを超出することは可能ではないのである。だからこそ、人々は相互に独立して営まれる私

的諸労働の諸生産物を、互いに商品として等置し、直ちに交換価値にするのである。人々はこのことを余儀なくされているのである。

そうであればこそ、交換価値ではなく、価値という決して感性的には捉えられない、極度に抽象的で純粹に社会的な価値において諸商品は等置されている、と喝破したことこそが、マルクスにとっての根源的価値批判であったわけである。こうしてはじめて、類としての人間が遂行する「創造的素質を絶対的に産出すること」、「生成の絶対的運動」という〈富—価値〉生成の運動を、資本主義的生産様式が支配する社会の生産の現実のうちに、完全に転倒され絶対的に否定されたものとして、マルクスは別扱することができたのである。これこそがマルクスによる全批判の基底である。

### おわりに

資本主義的生産様式が支配する社会は単なる商品生産の社会ではない。そこでは、諸商品も貨幣も資本の存在形態である、と共に資本もまた広い意味での商品の一形態である。そして資本は何よりも「増殖しつつある価値」である。もはや特定の〈体〉に固定されない運動しつつある価値、しかも増殖しつつある価値、——これが資本なのだ。

[資本の一般的定式  $G - W - G$  においては] 商品も貨幣も、ただ価値そのものの別々の存在様式としてのみ、[...] 機能する。価値は、この運動のなかで消えてしまわないで絶えず一方の形態から他方の形態に移って行き、そのようにして、一つの自動的な主体に転化する。[...] 価値はここでは一つの過程の主体になるのであって、この過程のなかで絶えず貨幣と商品とに形態を変換しながらその大きさそのものを変え、原価値としての自分自身から剰余価値としての自分を突き放し、自分自身を増殖するのである。なぜならば、価値が剰余価値を付け加える運動は、価値自身の運動であり、価値の増殖であり、したがって自己増殖であるからである。価値は、それが価値だから価値を生む、という隠秘的な性質を受け取った。<sup>134)</sup>

等価形態の謎性に基づいて貨幣の神秘性が生まれるのであったが、貨幣を一般的な・独立した形態とする資本においては、この神秘性ははるかに拡大し深化する。資本は自己増殖する力を保持するもの、「価値だから価値を生む」価値という神秘的・隠秘的なものとして現われる。しかも資本主義的生産様式の発展に伴って次のような事態が進行する。

相対的剰余価値と本来の独自の資本主義的生産様式の発展につれて、労働の社会的生産力も発展するのであるが、この発展につれて、これらの生産諸力も、直接的労働過程での労働の社会的な連関も、労働から資本に移される。それだけでも資本はすでに非常に神秘的なものになる。というのは、労働のすべての社会的生産力が、労働としての労働に対立して資本に属する力として、資本自身の胎内から生れてくる力として、現われるからである。<sup>135)</sup>

ここでは、「他人の労働にたいする指揮権」は、価値としての資本による直接的労働に対する指揮権の発動、直接的労働に対する支配の確立とその拡大・深化として現われる（ここでは価値は、支

配そのものを目的とはしないにもかかわらず、支配を不可欠な・絶対的な条件とするのである)。資本は何よりも価値、蓄積され増殖していく価値であるが、それは価値を創造する労働から捉え返せば、蓄積された過去の労働でありさらなる蓄積の運動主体であって、それゆえ、「他人の労働にたいする指揮権」の発動は、過去の労働による、生きた労働に対する指揮権の発動であり、過去の労働の下への生きた労働の吸収である。過去の労働に基づく価値としての資本の下への、価値の源泉としての労働の隷属、しかもますます拡大し深化していく隷属の進行である。

こうして、個々の具体的在り様から完全に解き放たれ、資本の運動に集約された価値の運動は、過程の唯一の主体として、直接的労働に対する指揮権を際限なく発動しつづけることになる。つまり蓄積された価値による、価値の源泉に対する指揮権の際限なき発動である。しかもこの露骨きわまりない運動が、資本のもつ神秘的な力によって隠蔽され、より一層神秘的なヴェールで覆われるのである。

まず、流通過程の存在がある。流通過程は生産過程からはまったく切り離された部面であり、しかもまさしくそこにおいて価値が実際に実現される部面であるので、剰余価値も含めて価値がそこにおいて実現されるだけではなく、実際に生み出されるかのような外観が生まれる。しかも流通過程は激しい競争の現場であって、ちょっとでも他人を出し抜こうとする言動、詐欺や瞞着の溢れかえった場面であり、それゆえかの誤った外観がより一層強まる。

また、剰余価値が利潤に転化し、さらには利潤が平均利潤へと転化することによって、資本の増殖はますます直接の労働の場面から切り離され、資本しかも今では個別資本の生み出す利潤もそれが直接生み出す剰余価値から切り離され、総資本の運動に関係させられる限りでもたらされるものということになる。利潤が、直接的労働から切り離され、それと無関係に資本自体が生み出すものという外観がより一層強まる。そして更に、利潤の企業利得と利子とへの分割とその固定化が起こる。これは決定的な飛躍である。

[企業利得という] 利潤の一部分は、他の部分に対立して、資本関係からまったく切り離され、賃労働の搾取という機能（賃労働の管理に不可分で自然な）からではなく、資本家自身の賃労働から発生するものとして現われる。そしてこの部分に対立して、利子が、賃労働にも資本家の労働にもかかわりなしに、自らの固有な・独立した源泉としての資本から発生するかのように見える。資本は、元々は、流通の表面では、価値を生む価値という資本物神として現われたとすれば、それが今では利子生み資本という姿で、その最も疎外された、最も特殊な形態にあるものとして現われるのである。<sup>136)</sup>

いわゆる経営と所有の分離、というわけだ。ここでは利潤の一部が企業利得として、すなわち、経営（現実資本の）という厄介で複雑きわまりない、高級な労働に対する支払として現われる。資本家階級の一員たる経営者たちは、賃労働者階級に対立する者としてではなく、それと相並んで、その一員として（そのもっとも高級なそれとしてではあるが）現われる。他方で、利潤の他の部分が利子、本来の資本の果実として現われる。利子生み資本としての資本が、文字通り本来の資本として現われ、利子は、資本自体に本来そなわった自己増殖力の発現の結実として現われる。資本はまさしく資本であるがゆえに自動的に利子という果実を生むわけである。ここでは、資本は直接的労働とはまったくかわりのない、自動的に利子を生み出すものとなる。資本は労働と対立しているのでもなく、



ましてや労働を自己の下に隷属させているのでもなく、ひとえに創造的力を固有の属性とするもの、富の唯一の源泉であり、こうして利子生み資本が資本の本来の定在様式となる<sup>137)</sup>。

ところで、利子生み資本形態の発展は、架空資本の発展と軌を一にしている。種々の国債・公共債・私債などの債権、これまた株式などの様々な証券、更には諸々のデリヴァティブなどのいわゆる金融商品、等々の架空資本が、信用諸機構・諸制度の発展を前提として形成され、利子生み資本形態をとって運動し、それこそ全世界を徘徊する<sup>138)</sup>。

これらの債権・証券等は基本的に債務証券であり、未だ実在していない、将来の生産に対する価値請求権である。それゆえ、それらはそれ自体としては決して価値でないばかりか、何らの物的な〈体〉、使用価値をもっていない。価値という属性をもたないばかりでなく〈体〉を完全に欠落させたこれらの諸価値請求権が、一定の発展を遂げた信用機構・制度の下で架空資本に転化するのであって、それゆえ、これらの架空資本の蓄積は、諸々の債務証券の蓄積、すなわち負債の蓄積なのであるが、しかしこれが富の蓄積とみなされるようになるのである。

架空資本の蓄積は、何らかの物(Ding)としてはまったくの〈無〉である。ただ、純然たる観念(例えば記憶など)だけであったならば絶対的な無に帰することになるので、これを避けるためにせいぜい紙、また今日では多くは電子的データが、単なる記録としてこの世にその痕跡をとどめることになるのである。だがにもかかわらず、架空資本はあくまで資本として現われる。つまり、人々に対する強制力・支配力をもった物象(Sache)である資本として現われるのである。物(Ding)としてはまったくの〈無〉であるにもかかわらず、物象(Sache)としては厳然として存在し、かかる物象である資本として社会的力・強制力・支配力をもって全世界を徘徊・運動しているのである。

また「他人の労働に対する指揮権」としては未だ実在していない〈未来〉の労働への指揮権の蓄積でしかないにもかかわらず、それを確実に現実化するために〈いま・ここ〉の人々を社会的に束縛・拘束しているのである。架空資本の蓄積は、〈未来〉の世代、〈未来〉の人間が行なう直接的労働に対する指図証・指揮権の蓄積であり、子どもたちに対して、さらには未だ生まれてもいない人々に対してさえも隷属を命令する指揮権の蓄積なのであり、これを実現するためへの〈いま・ここ〉の人々に対する束縛と拘束なのである。これが富とみなされるのであるから、こんなにおぞましいことはない。これほどまでに〈富 - 価値〉の転倒が進行する<sup>139)</sup>。

だが、再度先の「1857 - 1858年草稿」からの引用に立ち戻るが、「偏狭なブルジョア的形態が剥ぎ取られれば」としてマルクスは〈富 - 価値〉の根源的再措定を行なっている。「富は、普遍的な交換によって作りだされる、諸個人の諸欲求、諸能力、諸享楽、生産諸力、等々の普遍性」であり、「自然諸力にたいする、すなわち、いわゆる自然がもつ諸力、ならびに、人間自身の自然がもつ諸力にたいする、人間の支配の十全な発展」、つまり、「先行の歴史的発展以外にはなにも前提しないで、人間の創造的諸素質を絶対的に産出すること」とマルクスは明言する。そしてこの類としての人間の産出の「歴史的発展は、発展のこのような総体性を、すなわち、既存の尺度では測れないような、あらゆる人間的諸力そのものの発展の総体性を、その自己目的にしている」のであり、「そこでは人間は、自分をなんらかの規定性において再生産するのではなく、自分の総体性を生産」し、また、「そこでは人間は、なにか既成のものに留まろうとするのではなく、生成の絶対的運動の渦中にある」のだ、と言うのである。

このマルクスの言明はきわめて抽象的であり精確に理解するのが困難だが、「1857 - 1858年草稿」から『資本論』へといたる過程を踏まえれば、次のように理解することができる。資本主義的生産

様式が支配する社会では、富は商品集積として現われ、また価値は量に類落し価値実体 (= 商品に表わされた抽象的人間労働) によってその量が規定される商品価値として現われざるをえないということ、この転倒した〈富 - 価値〉の姿をマルクスは捉えた。そして更に、その転倒の進展・深化の過程を〈利子生み資本 - 架空資本〉の姿にまで追究した。

それと共にマルクスは、そうした完全に転倒したものでありながら、その完全に転倒した姿を通して、富は人間の類としての生きた活動・実践、人間の創造的諸素質の絶対的産出、その生成の絶対的運動としてあり、価値はそこにおける歴史の前方への志向性とその力のベクトルとしてあることを掴んだ。かくしてマルクスは〈富 - 価値〉を他でもなく根源的に自然の一部をなすとともに自然に支えられた類としての人間の絶対的社会性、その力・運動として把握したのであり、まさしくそこに〈商品 - 商品語〉世界の超出の条件を見、現実の〈富 - 価値〉に対する根源的批判を遂行したのである。

今日、われわれは更に、次のようにそれを捉え返すことができる。資本主義的生産様式が支配する社会の富は、商品の集積として現われていたが、その生産様式の発展の不可避な弁証法によって、今日では、商品の集積から架空資本の集積、つまり種々様々の債権・証券・いわゆる金融商品等の集積、端的に言って負債の集積へと転化するまでにいたっている。〈富 - 価値〉の転倒はかようなまでに徹底しており、究極の姿をもって立ち現われているが、しかしにもかかわらず、その「ブルジョア的外被」をいったん剥ぎ取ってしまえば、なお、その転倒の歴史、究極の姿にまで進行し深刻化した転倒の過程を貫いて、やはりマルクスが捉えたように、類としての人間の「生成の絶対的運動」、  
「創造的素質の絶対的産出」をきわめて抽象的な形でではあるが厳然として捉えることができる。

だから問われているのは、その抽象性が具体的形態をどのようにして獲得することができるか、そのための条件は何か、ということを実際の資本主義の運動に対する根源的な批判的分析によって追究することである。これこそが、マルクスの〈富 - 価値〉の根源的批判を今日に継承することであり、そしてそれこそが、商品語の〈場〉によって人間語の世界が、包囲され侵食され包摂され食い破られ断片化され、言葉としての〈力〉を殺がれ、「つぶやき」や独り言にされ、更には沈黙を強いられ、いたるところで無効化されている現実<sup>140)</sup>を止揚する条件、すなわち、人間語の世界をラディカルな批判力をもったものとして、まったく新しく創り出す条件を根元から探ることなのである。

## 註

97) MEGA, II/5, S.51.

98) *ibid.*, S.52-53.

99) *ibid.*, S.54. このパラグラフは第二版ではかなり書き換えられているが、初版の方が論理的にすぐれた記述になっていると思われる。というのは、商品は価値と使用価値の統一という矛盾として存在し、その矛盾が貨幣とそれ以外の商品との分離・対立にまで発展するというを明確に述べているからである。

100) *ibid.*, S.44.

101) *ibid.*, S.55-56.

102) 一社会内において金が貨幣の位置に座るや、少なくともその社会内では金以外の商品が一般的等価物になることはもはやない。また、世界貨幣として金が唯一のものとして認められるや、地域的歴史的に種々存在してきた金以外のあれこれの貨幣は金に統一される。地域や国によってその名目・名称・形態がいかに異なっていようと。こうして、貨幣はただ一つ金に固定され骨化する。もちろん、歴史上、巨大な世界恐慌や世界戦争の折には、貨幣そのものの喪失があり、それゆえ商品交換ならぬ物々交換が復活するということがあり得る。第一次および第二次世界戦争時とその終結直後のあれこれの地域や国々で、また

1929年からの世界大恐慌時にそうした事態が生じた。だがこれは、あくまで貨幣存在を許さない・必要としない経済諸過程の極度の縮退状況のゆえにあり得たことであって、商品生産－資本主義的生産様式の復活は当然ながらそれ自体が直接に貨幣の再生であったのであり、しかもその貨幣は代替物としてではなく本来の貨幣であるかぎり金でしかなかったのである。ところで、金貨幣に対して不換中央銀行券や種々の電子マネーや地域通過等々を持ち出すような混乱し誤った議論に関して一言注意しておきたい。理論としてはまず本来の貨幣について概念を正確に定立しておくことが求められるのであり、ここでは信用貨幣に関する議論を混入させてはならない。中央銀行券などの信用貨幣の概念は価値形態論および交換過程論からは導くことはできないのであって、高度な発展段階に達した信用諸制度・諸機構を前提するのである。それゆえ、われわれは本稿では信用貨幣は本格的には取り上げない（なお、近い別の機会にわれわれの見解を明らかにする予定である）。中央銀行券などはそれが兌換紙幣であろうが不換紙幣であろうが基本的に本稿の考察の範囲外にある。これに関しては註107)を参照のこと。

103) *ibid.*, S.58-59.

104) MEW, Bd.2, S.61. 前掲『マルクス＝エンゲルス全集』第2巻 大月書店、p.57。

105) MEGA, II/5, S.37.

106) 同上の物神性論の箇所<sup>1)</sup>に次の一句がある（これはそのまま、第二版の第1章第4節にある）。「机が商品として現われるやいなや、それは一つの感覚的であると同時に超感覚的な物〔Ding〕に変わるのである。机は、その脚で地上に立っているだけではなくて、すべての他の商品に対立して頭で立っているのであって、その木頭から、机が自分かつてに踊りだすときよりもはるかに奇怪な妄想を繰り広げるのである。」(*ibid.*, S.44, MEGA, II/6, S.102.)。ここでマルクスはあらゆる商品の代表として机を取り出してそれが他のすべての商品に対して頭で立つと述べているわけだが、これはまさしく諸商品の価値対象性について言われていることであり、純粹に抽象的な社会性に関して述べられたことである。この社会性は人間－人間社会の社会性の完全な転倒＝疎外としての社会性である。だからそれは、一社会の唯一の一般的等価物として骨化された貨幣形態にこそ集約して現われるのであり、単に頭だけになるのである。

107) 本稿では中央銀行券などの信用貨幣に関しては考察の対象外としているが、行論の関係上必要な限りで少し述べておく。信用貨幣は支払い手段としての貨幣の機能から発生するのであって、それは単なる紙幣、すなわち貨幣章標・象徴貨幣が流通手段としての貨幣の機能から発生することと著しい対照をなしている。両者を混同することは許されず、概念として明確に区分しなければならない。もちろん貨幣はそれがどのようなものであれ貨幣として存在し機能している限り、流通手段であり、かつ支払手段でもあるのであって、とりわけ今日の貨幣制度・機構においては、不換中央銀行券として両者はまったく概念としても現実としても厳然と区別されながらも渾然一体・同時一体的となって運動している。だがあくまで、流通手段と支払・決済手段とを混同することは、議論をただ無闇に混乱させるだけである。今日、電子マネーによる取引や電子的な帳簿上の管理や記帳等々<sup>2)</sup>がきわめて大規模に行なわれているが、それらにおいて、いかに支払・決済の遂行が一見なされているかに見えるものがあるとしても、それは決して最終的な支払・決済にいたってはいないものであって、それとは別に、あくまで電子的データ等以外の実際の支払・決済の場面があるのである。だから、こうした電子マネーや電子的処理の大々的な登場に幻惑された金廢貨論や現金貨幣の無用論・廢止論等々の一切は、資本主義の現実を知らない夢幻境に彷徨うものでしかないのである。流通手段としての貨幣は徹底して観念化され縮減され、電子的処理に代替され得るが、支払・決済手段としては決してそのようなことはなされ得ず、最終的には必ず現実の貨幣・現金による支払・決済が行なわれなければならないのである。もちろんそれを、可能な限り「合理化」し、節約するために種々様々の技術的手段等<sup>3)</sup>が涙ぐましいまでに試みられるのであるが、しかしそれを〈ゼロ〉にすることは決して可能ではないのである。今日、アメリカのドル、信用貨幣の一つでありそれでしかないアメリカ・ドルが基軸通貨として君臨し、それを中心として全世界の諸決済システムが構築されているが、その現実もまた一歴史時代の一過的刻印を押されているのであって、それが世界資本主義の運動のなかでどのようになっていくのかは未だ確定的なことは誰も言えないのである。だがしかし、アメリカ・ドルといえどもそれはあくまで信用貨幣であり、それが全世界的な支払・決済手段として存在する歴史的現実的な諸条件があるというだけのことなのである。

108) 初版第1章の「(二) 諸商品の交換過程」の最後から二つ目のパラグラフに次のくだりがある（これは



そのまま第二版に引き継がれており、ここにも第二版価値形態論から交換過程論への論理的接続に関する無理が現われ出ている。これについては後に見る)。「すでに十七世紀の最後の数十年間に貨幣分析の端緒はかなり進んでいて、貨幣は商品である、ということが知られていたとしても、それはやはりただ端緒でしかなかった。困難は、貨幣が商品であるということを理解することにあるのではなくて、どのようにして〔wie〕、なぜ〔warum〕、何によって〔wodurch〕、商品は貨幣であるのか、ということを理解することにあるのである」(MEGA, II/5, S.58、MEGA, II/6, S.120)。価値形態論の課題、すなわち、労働生産物がどのようにして現実的に商品になるのかを解く、したがって「すべての商品の貨幣存在」を解き明かすという価値形態論の課題の困難さを、あらためてマルクスは述べていることになる。すでに存在している貨幣を対象として分析し、それもまた商品の一つであることを見出す課題への対比として、この困難が語られている。しかもマルクスの場合、貨幣もまた商品であることを明らかにするという課題でさえも、それまでの経済学者たちに比して徹底して根元から解決した。すなわちマルクスは、交換過程論において、単にすでに存在している貨幣を分析するのではなく、より根本にまで掘り下げ、諸商品自体の歴史的現実的な運動がある特定の商品を貨幣として析出することを明らかにし、より根源的に貨幣もまた商品であることを明らかにしたのである。そしてこれが可能であったのは、より困難な課題である、「どのようにして、なぜ、何によって、商品は貨幣であるのか」ということを交換過程論より以前に、価値形態論で十全に解き明かしていたからである。初版本価値形態論で、「どのようにして、なぜ、何によって、商品は貨幣であるのか」ということ、すなわち「すべての商品の貨幣存在」を見事に十全に解明し、これを踏まえて交換過程論において、貨幣もまた商品であることを根底から解いたわけである。こうして、交換過程論のほぼ最後のところで、あらためて価値形態論と交換過程論との関係について押さえたわけである。

ところが、この「どのようにして、なぜ、何によって、商品は貨幣であるのか」ということについて、久留間鮫造は、有名なテーゼを提出していた。曰く、「わたくしは、この『如何にして』と『何故に』と『何によって』とが、それぞれ、[第二版～現行版の]第一章の第三節〔価値形態論〕と第四節〔商品の物本性論〕と第二章〔交換過程論〕とで答えられているものと解するわけである」(前掲『価値形態論と交換過程論』p.41)と。だがこれは、久留間の完全な誤読である。久留間は初版と現行版との違いを把握していたにもかかわらず、結局は現行版を対象テキストとして採用してしまった。それゆえ彼は、「どのようにして、なぜ、何によって、商品は貨幣であるのか」というマルクスの交換過程論での言明がそもそも初版でなされ、それが初版本価値形態論をうけたもの、つまり、貨幣形態を論じていない初本文の価値形態論をうけてのものであることを過小に評価し、また、価値形態論で貨幣形態を論じてしまった第二版(～現行版)の交換過程論にその言明がそのまま引き継がれたことによって、第二版(～現行版)では価値形態論と交換過程論との間に論理上の無理が生じていることをきちんと追究しなかったのである。このことの上に、かのテーゼが出されているわけである。彼は第二版(～現行版)に依拠することによって価値形態論をあくまで貨幣生成論として読んでいるのであり、しかも久留間はこれを徹底しようとする。だから、かの「どのようにして、なぜ、何によって、商品は貨幣であるのか」という言明を、商品から貨幣が「どのようにして、なぜ、何によって」生成してくるのかという課題として、しかもそれを突き詰めて捉えようとしたのである。だが、かの課題はこれまで強調してきたように、商品というものが内在的にも貨幣性についての課題、すなわち「すべての商品の貨幣存在」の解明を求めるものであって、商品からの貨幣生成を解くものではない。これは、第一に初本文の価値形態論では貨幣形態を論じていないこと、第二にこれをうけて交換過程論ではじめて貨幣生成を、歴史的現実的諸条件を考慮して解いていることを踏まえて、かの言明をすなおに読めば明らかである。「商品は貨幣である (Waare ist Geld)」と端的に述べているのだから。

久留間は、初版と現行版とのいわば一対一的対照比較における相違については正確に把握していることはもちろん、その内容や相互関係についても他の誰よりも深く追求したと言って良い。にもかかわらず、かのような誤読を犯したのはなぜなのか。その理由は、第一に現行版をテキストとすることによって価値形態論を貨幣生成論として捉えたこと、第二に、第二版(～現行版)の第1章第3節「価値形態または交換価値」から「第2章 交換過程」への議論全体をもって貨幣生成過程論として捉えたこと、第三に、その立場を徹底して論理的首尾一貫性を無理を犯してまでも追求したこと、これであろう。第一の点は、マルクス自身が第二版の価値形態論を貨幣生成論として叙述したことに基づいている。われわれは本〈V〉の

(ii) で詳しく論じたが、初版本文の価値形態論と第二版（～現行版）の価値形態論はその目的を異にしているのであって、初版本文価値形態論の目的が、労働生産物はどのようにして現実的に商品になるのか、したがって「すべての商品の貨幣存在」を解き明かすことにあるのに対して、第二版（～現行版）価値形態論の目的は、「貨幣形態の発生を示すこと」（MEGA II/6, S.81）にあるのである。後者に依拠するかぎり、価値形態論を貨幣生成論として読むことは不可避である。だがそうすると、初版からの書き換えを本質的に行っていない交換過程論との論理的接続に関する問題が当然出てくる。この難点を克服しようとして久留間は第二、第三の点に進まざるをえなくなり、かの誤読が生み出されることになったのである。初版本文にせよ、第二版にせよ、いわゆる物神性論のところまでは「商品」をタイトルとして括られているのであり、主体はあくまで商品である。この内の価値形態論と物神性論、および交換過程論を一括して貨幣生成過程論として捉えることはできない。だが久留間は、「貨幣の成立という観点から第一、第二章でのマルクスの叙述を見る」（前掲『貨幣論』p.13）という立場を明確にとっている。この点は、彼が編纂した『マルクス経済学レキシコン』（全15分冊、大月書店、1968年～1985年）の内、冒頭商品論から貨幣論までを主対象とする部分が「貨幣」をタイトルとした全5冊となっており、その編纂方針について「全体を二つに分けて、第一篇ではマルクスが『資本論』第一部第一篇「商品と貨幣」の第一章「商品」の第三節「価値形態または交換価値」と、第四節「商品の物神的性格とその秘密」と、第二章「交換過程」とで論じていることを、貨幣の成立という見地から独自の表題を設けて採録し、第二篇では、第三章「貨幣または商品流通」の基本的な内容を、いろいろな下位項目を設けて紹介することにし、それらの項目の適宜な個所に、[...] 第二部および第三部（ときには『資本論』以外のもの）からの引用を付け加えることにした」（同前、p.7）と述べているところに良く現われている。そしてこの立場の上で第三の点になるが、久留間はそれをより徹底し、「どのようにして、なぜ、何によって、商品は貨幣であるのか」の解明は、「商品の価格形態を分析」すること（前掲『貨幣論』、p.21）、つまり、商品が「どのようにして、なぜ、何によって」価格形態をとるのかを解明することだと捉えたのである。これについては久留間の弟子である大谷禎之介が「ドイツ語原文での『商品は貨幣である』という部分の意味が、先生のおっしゃるように、商品が価格形態をもつということ」であるとは「どうにも納得できない」（同前、p.59）と異議を唱えているが、久留間はそれに同意してはいない（同、p.63）。だが、ここまでくると誤読はあまりにもはっきりしている。そもそも初版本文では交換過程論までのところでは価格という用語は一切出てはこないのであって、だからその概念が規定されているわけではない。第二版では、形態Ⅰから形態Ⅱへの移行を論じた個所に、「単純な価値形態、すなわち一連の諸変態を経てはじめて価格形態にまで成熟するこの萌芽形態の不十分さは、一見して明らかである」（MEGA, II/6, S.93）なる一文があって、価格という用語が出てくるが、これは明らかに第三章「貨幣または商品流通」における議論の先取りとして述べているのであり（この先取りによって第二版の価値形態論が貨幣生成論として叙述されていることがより一層鮮明になっている）、ここでも価格—価格形態の概念規定がなされているわけではない。そもそも貨幣形態と価格形態とは概念として同一ではない。貨幣形態においては本質的には量的規定が量一般に抽象されたものとして捉えて良いものであって、つまり〈商品=貨幣〉という形態であるが、価格形態は一定の具体的量規定を絶対に要請するのであって、つまり、〈a 量の商品 A = x 量の貨幣商品〉である。第二版（～現行版）においても、交換過程論までで貨幣形態の方は概念として規定されているが、価格形態は概念規定されていないのである。それは次の「貨幣または商品流通」のところでなされるのである。久留間はこの違いを無視している。久留間が「商品が価格の形態をもつのは、つまり、商品=貨幣という形態をもつのは、ある一商品が貨幣になった結果ですね」（前掲『貨幣論』p.58）と述べているところにこの点が良く出ている。ともあれ、このような概念規定上の無理を犯してまでも貨幣生成過程論を一貫して押し通すことが、かの有名なテーゼを押し出すことと結び付いているのである。

ところで、久留間の前掲『貨幣論』には、かの「どのようにして、なぜ、何によって、商品は貨幣であるのか」のフランス語版での表現をめぐる林直道との論争が収められている（同上、pp.41-63。「四『資本論』第一部フランス語版はなにを教えるか——林直道氏の所説に関連して（二）——」）。ドイツ語版（初版、第二版）では、「wie, warum, wodurch Waare Geld ist」であるが、フランス語版では、「comment et pourquoi une marchandise devient monnaie」となっている議論である。問題点は三つ。一つは、ドイツ語版では「wie, warum, wodurch」と三つの疑問副詞があるのに対して、フランス語版では「comment et

pourquoi」と二つになっている点。二つ目は、無冠詞の Waare に対して、フランス語版では、une という不定冠詞または数詞が付されている点。そして最後は、ドイツ語版の ist に対するフランス語版の devient という動詞の点。まず第一の点は、wie, warum, wodurch を『資本論』の三箇所に振り分けて議論する久留間にとっては大変悩ましいものであったに違いないが、林はまさしくこの点を突いたのである。この批判に対して大谷禎之介はフランス語 comment のうちにドイツ語 wodurch の意味が含み込まれており、それを敢えて別に、wodurch に対応する例えば、par quoi を用いた文章にするとフランス語の文章としては異様なものになるので対応を犠牲にした表現にしたのではないかと述べ、久留間もそれに同意している。この大谷の主張それ自体は正しいと思われる。だが、これによって久留間／大谷が林の批判に応えたことにはならない。久留間の主張がそもそも間違っているから問題がおこるのであって、かの「どのようにして、なぜ、何によって、商品は貨幣であるのか」というマルクスの言明は、価値形態論の課題について述べたものであり、初版本文価値形態論でその課題に十全に解決を与えている以上、そのあとの交換過程論で「wie, warum, wodurch」を「comment et pourquoi」にすることになんの問題もないのである。だが、第二、第三の問題は大きな問題を孕んでいると考えられる。ドイツ語版の「商品は貨幣である Waare ist Geld」(下線は引用者)がフランス語版では「ある商品が貨幣になる une merchandise deviant monnaie」(下線は引用者)とされたことは翻訳の限界を越え、別の表現になっていると思われるも当然だからである。なぜなら、フランス語版のこの一文は、価値形態論の課題が、諸商品からあるなんらかの商品が貨幣としてどのような過程をへて生成してくるのかを明らかにするものだ、とはっきりと明言するものになっているからである。これは単なる平易化とはまったく位相を異にする改変である。だが、ドイツ語版第二版と同時並行的に刊行作業が遂行されていたフランス語版のこの決定的な改変は、ひるがえって、フランス語版のみならずドイツ語版第二版もドイツ語版初版と決定的にその目的を異にする価値形態論をもつことになったことを鮮明に示すものである。ドイツ語版第二版ではこの言明は初版とまったく同一なのではあるが、にもかかわらず、貨幣生成論として叙述された価値形態論をうけてのその文章は、初版とは違った内容を伝えていると言っても良いと思われる。きわめて微妙な問題ではあるが、久留間のようにこの決定的改変を改変とは捉えず、「wie, warum, wodurch Waare ist Geld (どのようにして、なぜ、何によって、商品は貨幣であるのか)」を「どのようにして、なぜ、何によって、商品から貨幣が生成されるか」として理解する論者が少なからずいるからである。というよりはむしろ、第二版(～現行版)をテキストとするかぎり、このような解釈の方が論理的には筋が通ったものとみなされても仕方がないからである。また次のこともある。マルクスの死の直後に出されたドイツ語版第三版でもこの部分の叙述に変更はないし、マルクス自身による第三版のための草稿「『資本論』第一巻のための補足と改訂」および第二版自用本、フランス語版自用本への書き込みにもこの部分の改訂の指示はない。この事実は、フランス語版と第二版(～現行版)との相違ではなくてむしろその同一性、したがって逆にまったく同じ文章でありながら初版と第二版(～現行版)との意味内容の相違を示し、それをマルクス自身が積極的に容認していたのではないかと判断させるものである。

以上、久留間の主張への批判を通してかのマルクスの言明を見当してきたが、それは、あくまで初版本文価値形態論から交換過程論へと読むことによってこそ、その意義が捉えられるものなのである。

- 109) MEW, Bd.31, S.301. 前掲『マルクス＝エンゲルス全集』第31巻、大月書店、1973年、p.252.  
 110) MEW, Bd.31, S.303. 同上、pp.253-254. 「第二ボーゲン」とあるのは、『資本論』初版の価値形態論の部分のことである。  
 111) エンゲルスはこう言っている。「以前の叙述(ドゥンカー)[ドゥンカー社から刊行された『経済学批判』第一分冊のこと]に比べれば、弁証法的展開の鋭さという点での進歩は非常に大きい、叙述そのものには僕には最初の姿でのそのほうがよいと思われる点もかなりある」と(ibid., S.303-304. 同上、p.254)。  
 112) ibid., S.306. 同上、p.256.  
 113) ibid., S.314. 同上、p.264.  
 114) MEGA, II/6, S.93.  
 115)、116) ibid., S.94.  
 117) I から IV の各価値形態の名称が、初本文から第三版にかけてどのように変遷したのかを見ることに



よっても、この歴史的発展過程論的傾向がいかに強められたのかが判然とする。

〈形態Ⅰ〉：初版本文「*Erste oder einfache Form des relativen Werths*（相対的価値の、第一のまたは単純な形態）」、初版付録「*Einfache Werthform*（単純な価値形態）」、第二版「*Einfache oder einzelne Werthform*（単純なまたは単一の価値形態）」、フランス語版「*Forme simple ou accidentelle de la valeur*（単純なまたは偶然的な価値の形態）」、第三版「*Einfache, einzelne oder zufällige Werthform*（単純な、単一のまたは偶然的な価値形態）」。

〈形態Ⅱ〉：初版本文「*Zweite oder entfaltete Form des relativen Werths*（相対的価値の、第二のまたは展開された形態）」、初版付録「*Totale oder entfaltete Werthform*（総体的または展開された価値形態）」、第二版「*Totale oder entfaltete Werthform*（総体的または展開された価値形態）」、フランス語版「*Forme valeur totale ou développée*（総体的または発展した価値形態）」、第三版「*Totale oder entfaltete Werthform*（総体的または展開された価値形態）」。

〈形態Ⅲ〉：初版本文「*Dritte, umgekehrte oder rückbezogene zweite Form des relativen Werths*（相対的価値の、第三の、倒置された、または逆の関係にされた第二の形態）」、初版付録「*Allgemeine Werthform*（一般的価値形態）」、第二版「*Allgemeine Werthform*（一般的価値形態）」、フランス語版「*Forme valeur générale*（一般的価値形態）」、第三版「*Allgemeine Werthform*（一般的価値形態）」。

〈形態Ⅳ〉：初版本文〔名称なし〕、初版付録「*Geldform*（貨幣形態）」、第二版「*Geldform*（貨幣形態）」、フランス語版「*Forme monnaie ou argent*（マネーまたは貨幣の形態）」、第三版「*Geldform*（貨幣形態）」。

ドイツ語およびフランス語の単語の意味内容と対応関係、またそれらの日本語訳の問題で微妙な点があり、今後の研究課題として残るが、この変遷において注目すべきものは、第一に、フランス語版で初めて用いられ、第三版以降引き継がれた形態Ⅰの「偶然的な〔*accidentelle; zufällige*〕」という用語であり、第二に、形態Ⅱに初版付録以降に用いられた「全体的な〔*totale; totale*〕」という用語である。形態Ⅰは「偶然的な」ものであり、これが形態Ⅱで「全体的な〔*totale; totale*〕」ものに発展するという具合に規定されたことになる。とくに「偶然的な」という形態Ⅰへの規定は、価値形態のⅠからⅢへの展開を歴史的発展として叙述することへの明らかな指標になっているように思われる。ところで、「偶然的な」という用語に関して初版本文の価値形態論には、次のような件がある。「第一の形態 20 エレのリンネル = 1 着の上着においては、これらの二つの商品がこのような特定の量的な割合で交換されうるとことは、偶然的な事実に見えることがありうる。これに反して、第二の形態においては、この偶然的な現象とは本質的に区別されていてこの現象を規定している背景がすぐさま明らかに見えてくる」(MEGA, II/5, S.35.)。ここでは、形態Ⅰと形態Ⅱとが比較されその本質的な区別が述べられているが、しかし、形態Ⅰが偶然的なものであると規定されているのではなく、むしろ偶然的なものと同視されるかもしれないが、本質的にはそうではないということが押し出されていると言って良い。こう見てくると、初版本文とフランス語版以降の叙述には文字通り本質的な違いが見られることが解かる。ところで、「偶然的な」という用語のフランス語版から第三版への継承が、マルクス自身による指示に基づくものなのかどうかという問題がある。第三版はマルクスの死の直後にエンゲルスによって刊行されたものであるからだが、MEGA, II/6. に収録されている『『資本論』第一巻のための補足と改訂』にも MEGA, II/8. に収録された第二版のマルクス自用本への書き込みにも、またフランス語版の自用本への書き込み (MEGA, II/7, S.732.) にも、その指示は見られない。フランス語版についてマルクスは「たとえときには、たしかに——主として第一章では——フランス語的な言い方で叙述を『平らにならす』ことを余儀なくされた」(ニコライ・フランツェヴィチ・ダニエリソン宛の 1878 年 11 月 15 日付手紙。MEW, Bd. 34, S.358) というようなことを述べており、フランス語版に、ある種の論理的展開上の問題点を意識していたことは事実である。だが、一方では「フランス語版では僕はかなり多くの新しいことを追加し、また多くの箇所を本質的に書き直した」(フリードリヒ・アドルフ・ゾルゲ宛の 1877 年 9 月 27 日付手紙。ibid., S.295.) という具合にも述べ、フランス語版特有の意義も強調しており (その多くは蓄積論に関する部分ではあるが)、フランス語版において「偶然的な」という用語がマルクス自身によって用いられたという厳然たる事実があり、第二版以降の価値形態論を歴史的発展過程的に叙述するという明白な傾向の自然ななりゆきとしてその用語の継承はあったと捉えるべきではないだろうか。ただこの点に関しては、マルクスによるロシアのミール共同体に関する研究およびいわゆるアジア的生産様式に関する研究の進展についても考慮する必要があるように思われる。そ

れは前掲モスト『資本と労働』の改訂作業（とくに価値形態に関する部分）とも考え合わせてなされるべき今後の研究課題である。

118) MEGA, II/5, S.639-640.

119) MEW, Bd.31, S.316. 前掲『マルクス=エンゲルス全集』第31巻、p.265.

120) MEGA, II/5, S.647.

121) MEW, Bd.31, S.306. 前掲『マルクス=エンゲルス全集』第31巻、p.256.

122) *ibid.*, S.306, 前掲『マルクス=エンゲルス全集』第31巻、p.256-257.

123) *ibid.*, S.306. 前掲『マルクス=エンゲルス全集』第31巻、p.256.

124) MEGA, II/6, S.80-81.

125) こうした歴史過程の叙述の究極的なものが前掲モスト『資本と労働』に対するマルクスによる改訂のうちにある。易しい入門書である当書で、価値形態論をどのようにするのは悩ましいことであつたに違いないが、マルクスはこれを完全な歴史叙述に変えている。そこでは次のように叙述されている。労働生産物の交換の発生がまず歴史的に述べられ（いわゆる物々交換の発生）、その頻度の高まり=恒常化による交換比率の確定とそれらの労働生産物の価値物=商品への転化（これは突如、説明抜きに言われる）として価値形態の形態Ⅰが示される。次いで形態Ⅱ、すなわち全体的な、あるいは展開された価値形態が、「シベリアの狩猟種族」を例として取り上げられ、毛皮が他の様々な商品と交換される「ほとんどただ一つの財貨」となっているとされ、こうして「毛皮の価値を毛皮の使用価値から分離」することが習慣化し確定し、「この価値の大きさの表現が確定するように」なると述べられる。この上で一般的価値形態、貨幣形態が次のように語られる。「こんどは、この取引を、異郷の商品所持者の側から観察してみましょう」として視点の逆転を要請し、「彼らの各人はシベリアの狩人たちにたいして、自分の財貨の価値を毛皮で表現しなければなりません」として毛皮が一般的等価物になっているという。こうして、「毛皮は生産物交換のこの範囲のなかで貨幣となるのです」と毛皮が貨幣形態になることを言うのである（前掲邦訳書、pp.39-40）。この叙述は価値形態論の核心をすっかり洗い流した議論である。ここで例として取り上げられている毛皮は次第に貨幣になっていくのではなく、既に立派に貨幣であり、だからここでマルクスは貨幣から貨幣を解いていることになる。この議論はもちろん『経済学批判』の価値形態論、「本来の困難を避けた」とマルクス自身が述べたそれよりも後退している。

ところで、初版本文価値形態論から第二版価値形態論への書き換えに関するハンス・ゲオルク・バックハウス、ヴィンフリート・シュヴァルツ、そして佐藤金三郎らの議論について、ここで一言述べておく（Backhaus, Hans-Georg, »Materialien zur Rekonstruktion der Marxschen Werttheorie«, in *idem.*, *Dialektik der Wertform. Untersuchungen zur marxischen Ökonomiekritik*, Freiburg, Ça ira, 1997., S. 65-298. [初出は、*Gesellschaft. Beiträge zur Marxschen Theorie*, Nr. 1, S. 52-77., 1974.; Nr. 3, S. 122-159., 1975.; Nr. 11, S. 16-117., 1978.; Frankfurt am Mein, Suhrkamp Verlag. 上記3回に分載論文をそのまま統合して所収してある。そのため同論文ではMEGAの成果がほとんど活用されていない].; Schwarz, Winfried, »Die Geldform in der 1. und 2. Auflage des "Kapital". Zur Diskussion um die "Historisierung" der Wertformanalyse«, in *Marxistische Studien. Jahrbuch des IMSF*, Nr. 12., Frankfurt am Mein, Institut für Marxistische Studien und Forschungen, 1987, S. 200-213.; Hecker, Rolf, »Zur Entwicklung der Werttheorie von der 1. zur 3. Auflage des ersten Bandes des "Kapitals" von Karl Marx (1867-1883)«, in *Marx-Engels-Jahrbuch*, Nr. 10., Berlin, Dietz, 1987., S. 147-196.; 佐藤金三郎『『資本論』研究序説』、岩波書店、1992年等。われわれと同じ広い射程で対象をみついているのは、ヘッカーの論文のみだが、そのタイトルからすぐ判るように、ヘッカーは彼の言う「史的唯物論」のドグマに忠実に、『資本論』第1巻の価値論が版を重ねるごとに歴史的契機を組み入れて進化/深化したという「前提」によって結論を先取りしており、叙述の内容の詳細な検討は後景に退いてしまっている）。初版本文価値形態論の〈論理〉説から第二版の〈論理=歴史〉説への移行、それに伴う諸問題に関する議論である。そうした議論から言えば、われわれの立場はより徹底した〈論理〉説ということになるだろうが、しかし問題は、単に論理か歴史か、ということではなく、価値形態論の課題は一体何であつたのかという点にある。われわれは何度も強調してきたように、価値形態論の課題はひとえに、労働生産物は一体どのようにして現実的に商品になるのかを解くこと、それゆえ「すべての商品の貨幣存在」を解くことにあると

考えている。だが、Backhaus たちもまた結局のところ、その課題は貨幣生成を解くところにあると捉えているのである。たとえば佐藤は次のように述べている。「『資本論』第二版における、とくに問題になっている価値形態論における書き換えですが、そこでは初版に比べて価値形態分析の『歴史化』が生じていると見ている点では、彼〔シュヴァルツ〕の解釈もバックハウスの解釈とまったく同じなのです。同じなのですが、しかし、結論が違う。バックハウスはそれを後退または『俗流化』と見ているのに対して、シュヴァルツはそれを『改善』またはいっそうの発展と見ている〔…〕。／しかし、この結論が正反対だというのは見かけだけのものだと思います。〔…〕価値形態論解釈という点では、シュヴァルツはむしろバックハウスとほとんど同じなのです。つまり、シュヴァルツの場合には、第二版の価値形態論に見られる『歴史化』は『資本論』の影響力を強めるという方向での叙述の『改善』であって、商品から貨幣の発生の概念的＝論理的分析が依然としてそこでの主要な契機をなしているという点では、第二版も初版となんら変わりがない、その意味ではバックハウスの解釈とは違って、初版と第二版とのあいだには方法論または理論のうえでの変化はないというわけです。／私がシュヴァルツの議論に対して疑問を感じるのは、その点なんです。〔…〕むしろ、バックハウスのように、マルクスは論理説から論理＝歴史説へ移行したと解釈するほうが自然なんじゃないかと思うのです」（前掲『『資本論』研究序説』、pp.364-365。／は原文改行箇所）。結局、Backhaus も Schwarz（さらには Hecker らも）価値形態論を貨幣生成論として捉えているという点では同じであり、ただそれを、前者は論理的に、後者は歴史過程的に解くという点で異なっている、ということである。そして佐藤が Backhaus に与していることになる。Backhaus たちは、第二版～第四版（現行版）に引きずられ、初版本価値形態論の形態Ⅳが貨幣形態ではない、つまり初版本価値形態論では貨幣形態を論じていないのに対して、初版付録以降、形態Ⅳが貨幣形態になっているというもっとも重要な相違について突っ込んで探究せず、それゆえその相違を軽視あるいは過小評価し、ここから価値形態論の本来の課題を捉えそなかったのである。こうした根本的な欠陥があるが、彼らのテキスト分析・批判は歴史的に大きな意義をもつと、われわれは考えている。

126) MEGA, II/5, S.648, MEGA, II/6, S.101.

127) MEGA, II/5, S.47, MEGA, II/6, S.106.

128) MEGA, II/5, S.47, MEGA, II/6, S.106.

129) MEGA, II/1-2, S.392. 「1857-1858年草稿」より。カール・マルクス著資本論草稿集翻訳委員会訳『マルクス 資本論草稿集2 1857-1858年の経済学草稿Ⅱ』大月書店、1993年、pp.137-138.

130) 「欲求 *besoin*; *need*」と「欲望 *désir*; *desire*」とを区別する周知の議論を踏まえて言えば、ある事物・事象を価値だとすることは当然欲望に根ざすものと考えられるが、しかしここで指摘しておきたいことは、価値というものはそうした欲求と欲望の差異や同一性の範疇を超え出た〈あるもの〉である、という点である。この点から言えば、通俗的・常識的資本主義批判を展開するテル・ケル派のボードリーやゲー等を、欲求 (*besoin*; *need*) と欲望 (*désir*; *desire*) の概念区分に基づいて批判するジャン・ボードリヤールの議論＝「記号の政治経済学批判」なるものは、せいぜい気の効いた、しかし無力な文明批評でしかない。ボードリヤールは欲望 (*désir*) を、使用価値に対する価値（ただし彼は価値ではなく交換価値と言っている）に重ね合わせる形で考えようとし、交換価値に対して使用価値を対抗的に価値化しようとするテル・ケル派のボードリーとかゲー等を批判する（今村仁司／宇波彰／桜井哲夫訳『記号の経済学批判』法政大学出版局、1982年）。テル・ケル派のボードリーなどが、使用価値にシニフィアンを、交換価値にシニフィエを対応させたのに対して、ボードリヤールは逆に、交換価値にシニフィアンを、使用価値にシニフィエを対応させ、「使用価値のフェティシズムは、交換価値のフェティシズムよりももっと深く、もっと《神秘的》である」（同上、p.172）という具合に、価値よりも使用価値の方が神秘的でイデオロギッシュなものだと主張する。こうして彼は、「物を欲求 [*besoin*] の観点からみる素朴な見方や使用価値優先の仮設をのりこえ」（p.1）の必要があると強調し、彼独自の「記号の政治経済学批判」を主張するのである。こうしたボードリヤールの議論は、商品が自らの〈体〉を〈忘れてしまう〉ものであることをある意味で反射したものであり、とともに、今日の資本主義においては利子生み資本形態をとる架空資本が全世界的に全面化する段階に達することによってあらゆる商品が、〈体〉そのものの完全な欠落と〈未来〉に対する指揮・命令権の発令＝〈未来〉に対する収奪の宣言とを反映していることを、微妙に反射したものであることを示している。だがしかし、その「記号の政治経済学批判」は、なぜ商品が彼の言う記号と化して



しまうのか、また使用価値でさえ自然から剥離して観念化し抽象化してしまうのか、という現実を探究することができず、かくしてその現実には拝跪し、今日の資本主義の現実を隠蔽するものになる。

131) MEGA, II/5, S.52. MEGA, II/6, S.114.

132) 「従来の〈真・善・美〉」と述べたのは、いうまでもなくI・カントが成した哲学的成果についての論点である。カントについては柄谷行人が『トランスクリティーク』(批評空間、2001年；ただし柄谷が底本とするように指示している『定本 柄谷行人集3 トランスクリティーク』(岩波書店、2004年)を用いた)において、「『物自体』とは『他者』のことである」と、カント哲学のもっとも重要な概念のひとつである「物自体」について重要な指摘をしている(同書第1部第1章、p.70.)。「他者として」という問題を柄谷が設定したことは、マルクスの思想を見通そうとする試みの「前提」におかれたカント解釈としては、大きな意味をもつていよう。だが、カントが『純粹理性批判』第二版の序文で自らの立場を「コペルニクス的転回」と呼んだことが適正だとすれば、柄谷の指摘は従来の主流派解釈を踏襲し現代風に敷衍したものととらえて差支えないだろう。そのうえでわれわれが指摘しておきたいのは、柄谷が三批判のみを科学認識・道徳・芸術、すなわち〈真・善・美〉を取り扱った体系とみなしている、という点である。『トランスクリティーク』では、その解釈にさまざまな知見が修飾されているが、軸となっているのはあくまでも〈真・善・美〉＝三批判という考えであり、カント研究が到達した地平から一歩たりとも踏み出しをしないどころか遥か手前で床屋政談をするような、じつに「穏当」なものである。しかしながら、マルクスとの遠近法あるいは接合においてわれわれが重視すべきは、三批判への「閉じ籠もり」を超えることである。具体的に言えば、その「全面的発掘」(1936～1938年)がなされている過程でH.-J. de ヴレーショヴェールが三批判の体系をさらに包みこむ「方法」の可能性を看取し(Vleeschauer, H. -J. de, *La Déduction transcendentale dans l'Œuvre de Kant*, Tome III, Anvers-Paris-La Haya, Librairie Félix Alcan, 1937.)、ヴィットーリオ・マチウが『判断力批判』の有機的展開を可能とする読みを提起した(Mathiu, Vittorio, *Kant Opus postumum*, Roma, Zanichelli, 1963.)、カントの『遺稿 *Opus postumum*』(1796? - 1803?)である。この新たな探求は、ジョヴァンニ・ピエトロ・バジーレがカント哲学とくに三批判の「体系性」と『遺稿』との関係に関する問題設定を総括して研究史上での『遺稿』の位置づけを緻密に跡付けているように(Basile, Giovanni Pietro, *Kants »Opus postumum« und Seine Rezeption*, Berlin u. Boston, Walter de Gruyter GmbH, 2013.)、たとえば『遺稿』英語版監訳者のエッカート・フェルスター<sup>ジンターゼ</sup>が長年にわたる緻密な分析・考察のすえに達した、カント哲学(倫理・神学)総体の「開かれた総合」としての『遺稿』とする視点のごとく(Förster, Eckart, *Kant's Final Synthesis: An Essay on the Opus postumum*, Cambridge, Mass., Harvard University Press, 2000.)、見事な学的成果を生み出しているからである。パスカルの『パンセ』にも似た位置にあるカントの『遺稿』において表現され、マルクスへの道を切り拓いているのは、「開かれた総合」においてようやく、類としての人間の「生成の絶対的運動」、<sup>ジンターゼ</sup>「創造的素質の絶対的産出」を発現させる場を獲得した集団的・知的・政治的格闘が有する力能(Potenz)なのである。

133) 商品価値とそれ以外の諸価値との関係について少々述べておく。商品価値は、それに先行する諸価値を集約し総括し、それまでのどんな価値よりも人間の類性格をその抽象的な在り方において表出している。しかもそれは、商品価値でしかないことにおいて、つまり人々の生の在り様に外的に対立する商品価値でしかないことにおいて、完全に転倒した価値である。価値はいま、商品価値として、徹底して対象的な・外的な形態にある。商品価値は社会性を抽象的普遍としての純粋な社会性として表わし、個人的なものを単に私的なものとして自らに対立させる。しかし、価値がこのように完璧に否定的な形態において定立されたということこそが、偉大な歴史的な実現なのである。類としての人間の普遍性が、まったく抽象的普遍として、究極にまで質が抽象化された商品価値として現われ出たのだ。言うなれば、広く社会的に交換され売買される〈場〉の水準にまで価値が社会化され普遍化されたのだ。こうした点で言えば、商品価値以前の諸々の価値——〈真・善・美〉等々——の社会性・普遍性は商品価値に比べれば決定的に低い水準にあるのであり、個別的なあるいは特殊な衣を纏って立ち現われていたのである。商品価値はこの狭い枠を完全に突破する。ただし徹底した抽象的普遍性として・完全に転倒された価値としてではあるが。この商品価値に対して、〈真・善・美〉等々としてある諸々の価値は、価値の社会性を一身に体現している商品価値に対して、単なる偶然的・個人的・私的なものとして商品価値に対立するか、むしろほとんど

の場合、商品世界の内に取り込まれ、価値としては商品価値に包摂されるものとなるのである。今日では、〈真・善・美〉等々は基本的に商品価値と結び付かない限り、普遍性をもたず、社会的に承認されるものではないのである。つまりそれらはもはや言葉の本来の意味通りの〈真・善・美〉とは言えないものとなっている。人々は現実には、商品関係の中に、それらを通じ、それらの媒介を通して、諸々の価値—〈真・善・美〉等々を追求しているのである。それを意識しているか否かにかかわらず、人々はそのように行動しているのである。だから「もし商品がものが言えるとすれば、商品はこう言うであろう」、すなわち商品語で次のように語るであろう。「人間は、価値について哲学的・倫理的・美学的な〈物語り〉を飽くことなく繰り返しているが、それらは実際のところ価値ではない。価値はわれわれにそなわった価値—商品価値のことであり、それ以外に価値はない。人々の語る場所はそれとは違っているが、実際の人々の行動がそれを示している」と。

だが、にもかかわらず、人々は例えば古代ギリシアにまでさかのぼって人間にとっての〈真・善・美〉等々を探る試みをやめることがない。例えばプラトンにとっての〈真・善・美〉はやはり誰かれの心を動かすであろう。つまりそれはなお、彼らにとって価値であるだろう。ここでわれわれは、古代ギリシアの芸術について語ったマルクスを思い起こすことができる（MEGA, II/1-1, S.44-45. カール・マルクス「経済学批判序説」より。前掲『マルクス 資本論草稿集①』大月書店、1981年、pp.64-66.を参照のこと）。マルクスはここで、「〔…〕困難は、ギリシアの芸術や叙事詩が、ある社会的な発展諸形態と結びついていることを理解する点にあるのではない。困難は、それらがわれわれにいまなお芸術上の楽しみをあたえ、またある点では規範として、そして到達できない模範としてその意義をもっているということにある」として、「おとなは二度と子どもになることはできないし、でなければ子どもっぽくなるだけである。しかし子どもの無邪気さはおとなを喜ばせはしないだろうか？ そしておとなが子どもの真実を再生産するために、より高い段階でふたたび自分で努力してはならないだろうか？ 〔…〕彼らの芸術のわれわれにとっての魅力は、それが成長した地盤である未発達な社会段階と矛盾するものではない。魅力はむしろ、そのような社会段階の結果であって、むしろかの芸術がそのもとで成立し、またそのもとでだけ成立することのできた未成熟な社会的諸条件が、けっして帰ってくることはありえないということと不可分に関連しているのである」と言っている。マルクスが語ったギリシア時代の諸々の芸術、そしてプラトンの語ったところのものもまた、類存在としての人間の普遍性の発現、生きた人間活動として一瞬垣間見せた、その絶対的普遍性の残光であろう。今日のわれわれもそれを感じることができ。なぜなら、限定された諸条件の下において、またそうした限界付けられた在り様としてではあるが、自然としての人間の、類としての人間の〈生〉のもっとも根源的な〈閃光〉がそれらに強く鮮やかに露出しているからである。

ところで、〈正義〉という概念が〈真・善・美〉に結び付けられて問題とされることがある。それは〈法・国家〉における〈真・善・美〉の問題として論じられるのであり、〈真・善・美〉の政治的領域における問題であるが、本稿ではそれについて本格的に問題にすることはできない。ただ、原則的な点に限って言い得ることは、根源的な〈価値〉批判が求められたように、根源的な〈正義〉批判が問われるということである。というのは、そこでの〈国家・法〉は、資本主義的生産様式が支配する社会を所与のものとするかぎりでは、ブルジョアの市民社会とそこにおける独立した人格としての近代的個人なる観念類型に照応する〈ブルジョア的的政治的国家体系・ブルジョア法体系〉であるよりほかはなく、〈正義〉それ自体が問題とされ、その内実が探究され、その何らかの実現が希求されるかぎり、それがいかにブルジョア的・帝国主義的正義への批判や抵抗や闘争等々を通じてなされるものであれ、またそれが、真の正義なるものを対置しそれを実現しようとするものだとしても、それは〈ブルジョア的的政治的国家体系・ブルジョア法体系〉に包摂され集約されざるを得ないからである。そもそも正義なるものはあくまで〈国家・法〉（ブルジョア的なものにおけるそれらのみではなく）における〈真・善・美〉の在り様であり、類としての人間の疎外された観念形態であり、さらに、《〈ブルジョア的的政治的国家体系・ブルジョア法体系〉・〈市民社会・近代的個人〉》にあっては、その構造を基底的に規定する商品（〈商品・貨幣・資本〉形態をとって運動するそれ）の価値にあらゆる価値が集約されるからである。社会の共同性が政治へ、また政治的国家へと疎外され、それに照応して価値が正義へと疎外されるのであり、〈ブルジョア的的政治的国家体系・ブルジョア法体系〉においては、社会は資本主義的生産様式に支配され、社会の、市民社会と政治的国家との分離・二重化が徹底して成し遂げられ、一切の諸価値が商品の価値へと集約され、正義はその純然たる

疎外態として現われるからである。それゆえ、求められるべきものはその根源的批判、その止揚であって、何らかのその実現ではない。さらに言えば、マルクスがいわゆる「ゴータ綱領批判」で鋭く指摘したように、「資本主義社会から生れたばかりの共産主義社会」はブルジョアの制約から自由ではなく、それに対応して国家＝過渡期の国家もまたブルジョアの性格をまぬかれない。そもそもいかに革命的な国家であれ、国家が必要であるかぎり、その国家はブルジョアの性質を契機とする。それゆえ、革命的国家においても、そこにおける正義は、商品の価値を止揚する価値の運動を基底にもつ場合でさえも、その疎外態であるほかはないのである。正義の戦争というものは確かにありうる（かつてのアメリカ帝国主義に対するヴェトナムの党・国家・人民による民族解放の革命戦争がそうであった）。だが、正義の戦争であると認められるというまさにその点に、その限界もまた刻印されているのだ。以上から言えば、アダム・スミスの『道徳感情論』、ジャン・ジャック・ルソーの思想、カントの哲学をあらためて批判的に総括し、その上で、今日の諸々の正義論（ロールズその他）への批判が根源的に遂行されなければならないということになる。

134) MEGA, II/5, S.108-109.

135) MEGA, II/4-2, S.849.

136) MEGA, II/4-2, S.851.

137) 『資本論』第三部草稿（1863-1865年）第5章から利子生み資本の根本的概念規定についていくつか引いておく（MEGA, II/4-2より）。

「利子生み資本において、資本関係はそのもつとも外面的でもつとも物神的な形態に達する。ここでは、われわれは、 $G-G'$ 、より多くの貨幣を生む貨幣、自己自身を増殖する価値を、これらの極を媒介する過程なしにもつのである。」（S.461.）

「資本および利子では、資本が、利子の、自分自身の増加の、神秘的かつ自己創造的な源泉として現われている。物〔Ding〕（貨幣、商品、価値）がいまでは物〔Ding〕として資本であり、また資本はたんなる物〔Ding〕として現われ、生産過程および流通過程の総結果が、物〔Ding〕に内在する属性として現われる。〔…〕利子生み資本では、この自動的な物神、自分自身を増殖する価値、貨幣をもたらす（生む）貨幣が完成されているのであって、それはこの形態ではもはやその発生の痕跡を少しも帯びてはいないのである。社会的関係が、物の〔Ding〕（貨幣の）それ自身にたいする関係として完成されているのである。／貨幣の資本への現実の転化に代って、ここではただ、この転化の無内容な形態だけが現われている。」（S.461-462.）

「ここ〔利子生み資本形態〕では、資本の物神的な姿態と資本物神の観念とが完成している。われわれが $G-G'$ でもつのは、資本の無概念的な形態であり、最高の力能〔Potenz〕における、生産諸関係の転倒および物象化〔Versachlichung〕である。」（S.462.）

ところで、利子生み資本は、一定額の貨幣資本（Geldkapital）は機能資本に転化すれば利潤を生み出しうるということをまったく新たな使用価値として擬似商品化し（資本の商品化）、その価格が利子として観念されたものであって、それゆえ、この「商品」の使用価値、すなわち「利潤を生むことができる」という商品の〈体〉は本来の商品の使用価値、あくまで物的な、自然に支えられたものからは完全に切り離された〈体〉ならぬ〈体〉である。つまり、価値自体のもつ利潤を生むという性質、そのまったく抽象的で純粋に社会的な属性を使用価値とするのだから、〈体〉がありうるはずがないのである。

138) 今日の資本主義を分析する際に、架空資本の発展を二つの段階に分けて捉えることが重要である。第一は19世紀末から20世紀初頭にかけての資本主義の帝国主義段階への移行と並行した株式証券や国債などの第一次的証券化「商品」の登場とその一般化であり、第二は1970年代以降のデリヴァティブ等の第二次証券化（証券の再証券化）の進展である。前者があくまで架空資本でありながら、現実資本との関連を観念させているのに対して、後者は架空資本の上に作り出された架空資本であり、それゆえ現実資本との関連を完全に喪失した、累乗化された架空資本である。だが、これに関する分析については、その端緒となる次の論文を見られたい。崎山「物象化と知識〔運用〕資本主義下におけるわれわれの課題」、『環境思想・教育研究』第6号、pp.101-109., 2013年。しかし問題の根幹に関する追究と分析とは本稿の範囲外にあり、先に述べた如く、別稿で取り組みたい。

139) 利子生み資本の形態をとって運動する架空資本の概念は、今日の資本主義的生産様式を理解する上で



もっとも重要な概念であるが、これについては本稿では本格的な議論をすることはできない。これについてはこれにつづく論稿で取り上げたい。ただここでは次の一点だけを指摘しておきたい。『資本論』第三部の草稿の第5章でマルクスは、〈利子生み資本 - 架空資本〉について突っ込んだ議論を展開し、当時の歴史段階にあって最大限の分析を行ない、最高の業績を残したが、そこで鍵概念となるのは〈monied Capital (moneyed Capital)〉という概念である。これは当時イギリスの金融関係者が自らの業務に関して用いていたいわゆる業界用語を、経済学批判体系の中の重要な概念として練り上げたもので、資本形態の一形態である貨幣資本（生産資本、商品資本に対するものとしての）と区別して、利子生み資本形態をとる貨幣資本を指すものとしてこの用語を措定したのである。だが、エンゲルスが『資本論』第3巻を編集したとき、これをほとんどすべて Geldkapital に変えてしまったのであり、そのためにマルクスの批判が大きく損なわれることになった。1980年代前半に、この事実をマルクスの草稿自体にあたって詳細に分析・検証したのが大谷禎之介である。われわれは大谷のこの先駆的業績を高く評価するとともに、大谷が明らかにした成果をふまえて、より深化し進展した究明をおこなうつもりである。

- 140) 劇作家別役実が今日の〈ことば〉の世界が抱える種々の問題を指摘し考察を加えてきたその営為に学ぶべきことは多い。以下、取り上げるのは『日本経済新聞』2013年8月18日付「台詞と科白」と題する文章である。別役は、「『台詞』は言葉だけのものを言い、『科白』はそれに仕草が加わったものを言う」として、俳優が舞台上「せりふ」を自らの身振り・仕草とうまく一体化してしゃべることができたとき、「せりふは、一度身体をくぐらせてきたもののように、手触りのあるものに変質している。つまり『台詞』は『科白』に変わったのだ」とし、「何故今ごろ、演劇においては古くからある、こうした教訓を持ち出さなければならぬかと言うと、ほかでもない、今日我々の周辺を飛び交う言葉が、次第に『科白』のニュアンスを失い、『台詞』でしかないものになりつつある気がするからである」と指摘したうえで、次のような〈警告〉を発している。「言うまでもなく要は、言葉を単なる意味のある記号として、相手に発信するのではなく、質感のある物として、相手と共有し、共鳴しようとする感覚を持つことである」、と。ここで別役は、今日の言葉が「科白」ならぬ「台詞」になりつつある現実を言葉が記号化することとして捉えている。つまり、言葉に対する個人的な姿勢といった問題としてではなく、今日、言葉が全体的に単なる記号として浮遊している現実を指摘しているわけだ。別役が取り出し批評したこの問題は、われわれにとってはまさしく、商品語の〈場〉による人間語の世界に対する侵食・包摂ということであり、それに人間語の世界はどのように対抗するのかという問題である。この課題に応えるために、今日の言葉に現われた現実を分析し批判することに、本稿に引き続いて取り組みたいと考えているが、一時期大いに流行した記号論との関係で、一言しておきたい。

言語を記号と見る考え方はそれ程古くからある訳ではない。ジョン・ロックの先駆的な仕事（『人間知性論』1689年）についてはここでおくとして、今日的な〈言語＝記号〉論に繋がる議論は、およそ19世紀後半～19世紀末に始まると見て良い。この場合、二つの流れを区分し得る。一つは、数学という独特な一つの言語体系の成熟に根ざすもので、記号——この場合ほとんどすべてが数学の言葉である数、文字、式等々である——を実体的な単なる操作対象、もしくははそのための手段・道具とみなす立場の記号論であって、この意味で、客観主義的記号論と言うべきものである。記号論理学や情報理論、計算機科学をはじめ、数理経済学、数理科学としての生物学、今日の脳諸科学に至る種々様々の数理諸科学に広がっている潮流である。ここでは、G・ブールを先駆者として、G・フレーゲ、B・ラッセル、J・L・フォン・ノイマン、A・チューリング、C・シャノンといった名前を挙げることができる。いま一つの流れは、学としての言語学の発展に根ざすものであって、言語そのものを記号、しかも言語を記号の中心だと考える記号論である。ここでは、〈言語＝記号〉は価値や心的・精神的なものに結び付けて捉えられる。その意味で、先の客観主義的記号論に対して主観主義的記号論と呼ぶべきものであり、F・d・ソシュールに始まり、R・ヤコブソン、そしてC・レヴィ＝ストロース、ジャック・ラカン、ミシェル・フーコー等の広義の構造主義者たち、更にいわれるポスト構造主義者たち——ロラン・バルト、ジャック・デリダ、ジャン・ボードリヤール、ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ等々——へと繋がる流れである。もちろん、これら二つの流れに分類し難いものも当然ながら存在する。例えば、C・S・パース、そしてパースを継承したと言って良いウンベルト・エーコがその例として挙げられよう。しかし、エーコの独特な位置を考えると、記号論状況に合流するものとしては、先述した二つに学的潮流を括ることができるだろう。

このような状況の現出を支える物質的基盤には、20世紀中頃からの世界資本主義の新しい発展過程があり、それを背景とした記号論の隆盛があった。記号に関する膨大な研究・言説が積み重ねられ、記号論を用いた社会分析、社会批評、また様々な文化批評等がきわめて精力的に試みられてきた。これと同時並行的に、記号を操作主義的に扱う“数学化”が、コンピュータに関する技術の急速な発展とコンピュータ自体の著しい普及、その大々的な活用に支えられて、数理諸科学にとどまらないで社会のあらゆる分野・場面に急速に浸透した。つまり、文化思想状況的には第二の潮流の下への第一の潮流の統合・併呑が、また内実としては、数学化・形式化が、にわかに、広範囲にわたって進行したのである。こうした事態は、個々の・あれこれの特定の言葉だけでなく、言語が総体として記号化することによってもたらされたものであり、〈言語・概念〉系の世界が〈記号・意味〉系の世界へと転変したことを示している。本来、言語の記号化はある限定された〈場〉、特定の諸条件の下で生じる。言語によって表わされた概念が、限定された〈場〉の諸条件によって特定の意味に〈縮退〉し、そこでは言葉は記号となり、その意味は鮮明化・先鋭化する。それゆえ、個々の記号が表わす意味は、その特定の〈場〉の運動によって明確に規定されている。しかし、個々の言葉だけでなく、言語総体が概念から剥がれ記号化するという事は、諸々の言葉が特定の〈場〉なしに、意味の茫漠たる空間へと放り出され、彷徨うことである。概念の特定の意味への〈縮退〉ではなく茫漠たる意味への〈拡散〉が生じる。諸々の意味の束は単なる差異の束となり、〈差異の戯れ〉となる。つまりより突っ込んで言えば次のことだ。言語の記号化が個々の・特定の場面に依拠して生じている限り、特定の意味〈場〉が形成されるだけであり、その限定された意味〈場〉における意味行為の主体——誰・何にとつての意味であるか——は特定され、またその〈場〉で働く意味作用も限定される。ところで、言語世界の生きた運動は概念のうちにあり、概念の運動の一定の反射が、かの特定の意味〈場〉を支えたとともにそれを捉え、意味・意味作用等にもある幅と揺らぎをもたらす。しかしそうした幅と揺らぎはつねに概念の運動に支えられており、特定の意味・意味作用では済まない事態になれば、つまり特定の言語の記号化によって生じた特定の意味〈場〉、そして意味行為の主体が危機に陥れば、言語世界の運動は概念へと立ち戻ることになる。しかし、言語が総体として記号化すると、こうした言語世界の自律的運動は阻害され、成り立たなくなる。特定の意味〈場〉は形成されず、したがって意味行為の主体——誰・何にとつての意味か——は特定されず、意味・意味作用もまた限定されない。言語世界は概念から剥がれ、対象世界（・自然・社会）との絆は切断され、いわば宙に浮く。ここであらためて意味にまつわる諸問題がそのものとして、一般的な形で、しかも切実な形で問われることになる。言語が総体として記号化することによって、個々の言葉、言葉群は種々様々の意味の単なる算術的総和体と化す。つまり言語世界はいわば「辞書」的世界と化す。だが明らかなことだが、生きた言語世界は決して「辞書」的世界には還元されない。言語が総体として記号化していない限り、言語は概念をもち、それらの概念は種々の意味の算術的な総和では断じてない。それは過去の歴史の総体を総括し、かつ〈未来〉を孕む。概念はあらゆる意味の算術和ではなく積分体である。しかも概念は運動するものであるから、その積分もきわめて独特な積分でなければならぬ。比喩に比喩を重ねることになるが、非可算無限世界に直接に立脚したルベーグ積分の如きものである。ところが今や、言語はこの概念から剥離し、言葉は諸々の意味の単なる算術的総和体と成り果てている。〈意味〉への問いはもはや概念によって支えられ、保障されることがない。浮遊し、漂流する〈意味〉への、果てることの無い、いささか強迫神経症的な希求、探索、追求が生じる。何事も意味を問うことなしには済まない。こうして、諸々の意味の〈差異の戯れ〉が生じる。様々の病理現象は不可避である。そして、同時並行的に急速に進行したいわゆる〈数学化〉は不可避にこうした事態を加速した。

この現実こそ、商品語の〈場〉による人間語の世界への包圍・侵食・包摂・食い破りであるが、《商品〈場〉・商品語の〈場〉》の運動に無自覚である限り、〈敵〉を見定めることのできない・困難で往々にして空しい抵抗が行なわれることになった。〈意味〉に回収されない〈私〉や〈意味〉への抗い等が高唱され、身振りや身体言語への過剰な思い入れがなされることになったのである。ジュリア・クリステヴァの、意味・意味作用を超えた意味生成（意味産出）という実践、すなわち“詩的言語の革命”（『セメイオチケ』1969年、『詩的言語の革命』1974年）、フェリックス・ガタリの、構造主義・ラカン派構造主義への批判としての、やはり意味作用に対する意味実践としての“分子革命”（『分子革命』1977年）、意味に囚われぬように「シラケつつノリ、ノリつつシラケる」という浅田彰の“逃走論”（浅田彰『構造と力——記号

論を超えて』勁草書房、1983年)、「意味の壁」にせめて穴を穿とうという大澤真幸の意味実践(大澤真幸『意味と他者性』勁草書房、1994年)、「〈意味〉への抗い」と称して具体的身体性—〈香具師的なるもの〉への回帰を提唱する北田暁大の議論(『広告都市・東京——その誕生と死』廣濟堂出版、2002年、『〈意味〉への抗い——メディアーションの文化政治学』せりか書房、2004年)、等々をわれわれは目にすることになった。こうしたカッコ付きの「抵抗」や「闘い」とは別に、いわゆるポストモダン状況それ自体を見究めようとする試みがなされなかったわけではない。だがそれらも、《商品〈場〉-商品語の〈場〉》の運動に自覚的でないことによってそれに包摂されざるを得ない。ところでだが、20世紀末から事態は今一層の転変の過程を辿っているように思われる。記号論は凋落し、意味への「闘い」は無効化した。《商品〈場〉—商品語の〈場〉》と人間語の世界との新たな関係・緊張・闘いの〈場〉がみ出されているのである。こうした〈場〉の新たな在り様が一体何であるのかを探り分析することが、今日の理論における緊要の課題である。

(いのうえ・やすし 京都精華大学非常勤講師)  
(さきやま・まさき 本学文学部国際文化学域教授)



